THE KAIZO

改造

二月号

1925


健康上から
衛生上から
経済上から
優良第一の
クラブ歯磨


萬年筆用
プラトンインキ
ペンと紙を腐蝕せぬ……色の褪せないプラトンインキ
プラトンインキ



改造二月號目次



風味よく！
値も安く！
お米の味まで
おいしくする
評判の福麥を
是非御使用下さい!!
健康増進
食糧問題解決のために!!!



福麥の特長

白米食の弊害 白米のみを食する時は便秘、筋肉力衰退、頭腦殊に中樞經にも異狀を來し理解力、性慾の減退となることは周知のことであります。

福麥は 最近發明の穀類の組成分解法に依りまして白米にないビタミン、及び成長に必要な燐鐵の吸收を完全にし、藥物的効果は勿論、榮養を著敷增進せしめたものであります。

福麥は 含有成分を分解してありますから消化のよいのは勿論お米の味までよくするのでありますからどんな麥嫌ひのお方も必ず福麥でなくてはならぬ樣になられます。値段は御米の半額以下です。

東京市内は各所にて販賣しつゝありますけれども、本社へ直接御申込ありてもお差支へありません、直ちに配達致させます、尙全國各地には目下普及に勉めつゝあります

東京市日本橋區平松町
加島ビルディング
食糧研究株式會社
電話大手二八二七番
振替東京六九〇八〇番

（說明書申込次第送呈致します）

本誌に依る御照會の方は其の旨御申添へを乞ふ

佐藤春夫譯

（四六判 上製）

定價壹圓八十錢 書留送料拾五錢

ピノチオ

新刊

子供たちによい習慣とよい文學とを同時に與へようとする人々のためにこの書物がある。全く、これほど快活で上品でその上に人間的で、生々とした興味を呼ぶ童話がさうざらにあらうとは思へない。又、おとなはこれを讀んでむかしの自分に會ふやうな氣がするだらう。ピノチオはそれほどよく子供の性質をつかんでゐるからである。掛引なしにそれは少年文學中の名著である。これを讀んだ子供たちにとつてはこの話はいい思ひ出になつて一生涯殘ることを私は疑はない。この廣告に責任を持つために私は署名する　―佐藤春夫―

新年の讀物として何れの家庭にも熱狂歡迎を受くべき近來類稀なる少年文學の好讀物です。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

文學博士 新村出著（新刊）

南蠻更紗

定價貳圓五拾錢
送料十七錢

趣味の著名出づ！

美文家として、南蠻研究の第一人者として知らるる新村博士の近業である。博士が珠玉の如き麗文、斷想にて幾多面白き題材を捉へ來りて明治以前の奇しき文化の跡を訪ねた近來類稀な文献にて、讀み去り讀み來りて身は其の時代にあるが如く、卷を掩ふ能はざるのものである。近來の好史家のみならず家庭、學校の必ず一本を備ふべき參考書であり、趣味の讀み物である。

◆雪のサンタマリヤ◆切利支丹文學斷片◆主型聖範の舊譯本◆切支丹宗の遺物◆日本最古の銅版畫◆南蠻趣味と和歌其他（三百年前の回顧）◆南蠻に關する俚諺その他◆眞宗と切支丹◆煙草と煙管◆時計傳來の歷史◆加留多の將來と流行◆近世輸入服飾品と其名稱◆ちやるめる◆日本美術史上の新研究◆日本文學の海洋趣味◆海賊の話◆大西洋上より◆長崎再遊◆日本人の眼に映じたる星◆星に關する二三の傳說◆昴星讚仰◆星夜讚美の女性歌人◆花の名三つ四つ◆「ふれぶれ粉雪」◆徒然草とその口譯◆圖書館の一隅より◆地獄小話◆鷹狩◆勧縫物語◆語原雜話◆エスペラントの好望◆ベクーニン來航の事など◆去來一家の事

東京芝愛宕下町　振替東京八四〇二
改造社
電話高輪　四九九三



(二月號)

政治的再生の必要に對する國民の無感覺とその機會の不使用

昨、政友會の覇をくつがへす策としての意味を帶んで、普選は野黨の旗幟とされた。その後、政友の分裂が憲政會に機會を與へた。憲政會主位の現內閣が普選を製產することは自殺を選ばないことだ。現政府の貴院改革熱は政友系の體面意識からの發生物としての意義を帶んでゐる。義務敎育費國庫負擔增額は本黨の存在理由空乏の不安意識に衝激されて舞臺面に名乘りでた。

國民の公的必要が各黨の私的必要によつて食ひ物にされたり、賣り物にされたりする圖は慘憺だが、なほ且つその間に、幾らかづつその公的必要が機會を拾つて行く景色は面白い。

しかし、底智慧を缺いたその時限り、その場限りの遣り繰り主義が、政治としても、安心と信賴を許さないものであることはいふまでもないが、わが現代の政治は要するにそれだ。

本質と原則に意識が最も支配的に關係してゐれば、たとひ漸進、妥協、權變を常に多少、時あつてか代表的に選擇しても、その政治は、方法に於ておのづから別觀を呈する。そこにはおのづから理想が目立つ。現代の日本にはこのかたちの政治がいちじるしく缺けてゐる。

普選を轉期として、理想に生きる政治の、必然的にも必要的にも單數では主としてありえないが、複數が、わが政界の一見顯著なほどの特色を自然形成するやうなれかしとこひねがふ。革命的改正または進化が、實に、日本の現代の政治的眞必要の第一的、支配的性質だ。

日本は、政治的に再生しないでは、經濟的にも、敎育的にも、文化一般的に、立ち行かない事情にある。その政治的には、第一に政治原則的即ち政治組織的にだ。政策や施設はこの第一要件が滿たされないあひだ、これを滿たす誠意を缺くあひだ、深憂にむかつて無感覺な、かなしむべくつまらない、或ひは飽き足らないものであるほかない。

普選は、これを賢明に、善良に使用すれば、政治的日本の進化的再生への出發點たりうる。それを充分にこの出發點として採用することは現代日本人の根本的一實務だ。



勞働組合法論

末弘嚴太郎

一　はしがき

勞働組合法制定の問題が再び世上論議の題目となりつゝある。新聞紙は昨秋以來しきりに政府當局者の間に於ける原

案審議の模樣を報道した。さうして最近には、政府も愈々今期の議會に法案を提出するであらうと云ふことさへも報道して居る。而して世上の議論も亦此の報道しきりなるにつれて漸次に動きつゝある。雜誌新聞紙の紙上に於て、勞働組合其他勞働運動者の間に於て、又資本家の間に於て、議論が漸次に動きつゝある。

嘗て大正九年此同じ題目が朝野論議の對象となつたときに比すれば、當局者も、直接の利害關係者たる勞資兩方面の人々も、乃至は又一般の輿論も、今や此問題に關して遙に能く事柄の實質を捉へ問題の價値を理解するに至つて居る。恐らくは、具體的に立法を論議し得べき時機今正に到來せりと云ふことが出來るのであらう。

成程勞働問題が天下の視聽をあつめたと云ふ點より云へば、大正八九年は遙かに今日よりも優れて居た。勞働組合立法の問題が一般の注目を惹いたと云ふ點から考へても、當時は遙かに今日よりも優れて居た。各政黨は競つて勞働組合法案なるものを作成した。政府部内に於ても、或は農商務省案と云ひ或は內務省案と唱へて、色々の法律原案が作成された。さうして世間も亦そのそれ〴〵に付いて色々の議論を戰はした。しかし、當時の議論には縱令一般に表面上の熱は十分に之を備へて居たとしても何となく腹の奧底にこたへる確さが缺けて居た。花々しかつた。しかし、何となく上すべりがして居た。議論は多く空理的であり直譯的であつた。現實的な具體的な色彩が何となく一般に缺けて居た。それは果して何故であらうか？

勞働問題が「知識」として吾國に入り來つた歷史は最早既に相當古い。けれども、資本主義經濟組織發展の自然的經過として眞に近代的意義に於ける勞働問題が現實的に顯著に吾國の社會に現はれ、さうして具體的に吾國朝野の視聽に曝れたのは、實に大正七八年世界大戰の影響として吾國經濟界が突如其資本主義的發展の最高潮に達した當時であつた。實に當時は吾國の社會が眞に近代的意義に於ける勞働問題の爲めに惱まされた第一回の機會である。又初て近代的

義に於ける勞働組合が各地に發生し、資本主義經濟組織の下に於ける必然的現象としての勞働運動が初て吾々の社會を存した年である。けれども、當時初めて此問題に直面した資本家は勿論、政府當局者も未だ到底此問題についての正しい理解を持つことが出來なかつた。彼等の或る者は徒に周章狼狽して只管其の勢を恐るゝに過ぎなかつた。又彼等の或る者は自ら問題を理解し得たりと自負しつゝ各種の對策を說いた。けれども、彼等の所說は毫も彼等自らの具體的なる體驗と思索とに基くのではなく、多くは單に其のきゝ又は讀みて得たる智識を基礎とする燒切刄の議論であるか若しくは單なる感情論に過ぎなかつた。又勞働者の側に於ても、彼等は當時彼等が吾國の經濟社會に於て占めてゐた實際的地位を正當に理解して居なかつた。彼等の具體的勢力と其の現になしつゝある勞働運動の實際的價値を正しく理解して居なかつた。彼等の多數は、過去百年の苦鬪によつて僅に築きあげられた歐米先進諸國に於ける勞働階級の地位と勢力とをひき來つて、直に之を自らの立場に援用し、其結果或は彼が現に爲す所のものは我も亦すべて其まゝに之を爲し得べく又爲さゞるべからざるものなりと考へ或は又彼の勞働運動者乃至社會運動者が今日彼國の事情の下に於て說く所は直にすべて――發達過程上甚しく遲れたる――吾國にもあてはめ得べしと考へた。それが爲め彼等の爲す所說く所、其に稍ともすれば現實を離れ易く、氣濫りにおごり志徒に高く、要するに其の足は兎角地を離れ勝ちであつた。私は當時吾國の勞働運動が斯の如き傾向を追ふたことを今から顧つて茲に批評せむとするのではない。當時の勞働運動が斯る傾向を追ひかゝる色彩を帶びなければならなかつたことについては、それ相當の理由と事情とがあつたに違ひない。又かゝる傾向を追つたことと夫れ自身は必ずしもすべて失敗の結果に陷たと云ふことは出來ないであらう。それにはそれだけの功績があり結果があつた。私は今茲にそれを否認せむとするものではない。けれども、當時勞働運動者の所爲と主張とが稍ともすれば現實を離れ勝ちであり、空論に走り勝ちであつた事實は何人も之れを否認することが出來ない。

所か、今日では最早すべてが皆其の當然に位すべき所に歸り來つたやうに思はれる。政府當局者も資本家も吾國勞働運動の實勢と功過とについて正しき具體的の理解をもち初めたやうに思はれる。勞働運動者も亦現實の體驗と思辨とによつて戻るべき所まで戻つて來たやうに思はれる。又勞働組合は其の本質上及び實力上吾國現代の社會に於て必然に占め得べき地位に落着き初めたやうに思はれる。漸くすべてが具體的となり現實的となつた。其足は確實に大地に觸れ大地の上に立ち初めたやうに思はれる。

成程、今日でも勞働組合の中には尙依然として色々の色彩と傾向とがある。けれども、其の混沌たる裡に、吾々は今日最早既に否定すべからざる主潮の存在を見出すことが出來る。而して其主潮に棹す人々は今や、勞働組合の本質と職能とを自覺しつゝ、吾國現在の實情の下に於て彼等は其仲間の地位の向上を計るが爲め何を爲し得べきか又何を爲さゞるべからざるかを具體的に考へ又其考を實現すべく着實に其の步みを進めつゝある。彼等は決して理想を棄てたのではない。しかし、今や彼等の運動は決して單なる勞働者教育乃至覺醒を目的とする運動にあらずして、勞働者自らが自力によつて活きんとする運動、より良く活きんとする運動であることを自覺したのである。而して、今日も活き明日も活き、さうして明日は今日よりも又明後日は明日よりも更に良く活きんが爲めに、着々具體的の方策を實行すべく企つるに至つたのである。窮極の理想として今日でも尙彼等はすべて資本主義經濟組織の倒壞を希望して居るに違ひない、又賃銀勞働制の廢除を期待して居るに違ひない。乍併、今日賃銀によつて活きて居る人々はともかくも一先づ此制度の下に於て更によりよく活きる爲めの努力を、自らの力共同の力によつて、爲しつゞけねばならぬ。それが爲めには、同盟罷業、怠業其他團體交涉の諸戰術を用ひるもよからう。示威運動其他の宣傳的行動をとるもよからう、乃至は又勞働者相互の共助共濟を計るべき組織施設を設くるもよからう。けれども同時に、議會の中に其力を伸ばしこれによつて彼等

の希望を立法の上に實現せしめむとする戰術亦必ずしも之を棄つる必要はあるまい。今や吾國勞働組合の主潮は此點に目醒め、さうして此の方向に向つて流れ初めたのである。

此故に、勞働組合立法之を議すべくんば、今や之を議し得べき時期は熟したりと云ふことが出來やう。政府當局者も資本家も乃至又は勞働者も今では最早すべて現實に目醒て居る。さうして一般輿論も亦吾國勞働組合の現實について其體的の知識をもち又現實的の考慮をめぐらし得べき狀態に立ち至て居る。吾々は今やすべて此の現實の上に立脚しつゝ現在の吾國は果して勞働組合に關して何等かの立法を爲すの必要ありや、又其必要ありとせば如何なる立法を爲すを以つて適當とすべきか、の問題を討議し得べき時期に立ち至つて居る。

此の意味に於て、私は昨秋此方内務省社會局を中心として組合法制定の議が進みつゝあり、さうして近く原案の作成なつて議會に提出せらるゝであらうと云ふ噂を心から喜び迎へる。さうして、私も亦皆人と共に此問題の研究をし討議をして見たいと考へる。

二

私は今茲に勞働組合立法の問題を論じたいと思ふ。併し私の主として論じたいと思ふのは何所までも立法の問題である、法律の問題である。

現在の吾國は勞働組合に關して何等かの立法をなすの必要ありや？又其必要ありとせば如何なる立法を爲すを適當とすべきか？此問題に答ふるが爲には、吾國現在の實狀に鑑みつゝ、或は經濟產業の方面より之を考察することも必要であらう、又或は社會問題思想の問題として之を思辨することも必要であらう。けれども、かくして考慮せられ思辨せら

れたる結果を法律の上に現はし立法の力法律の形式をかりて社會に實施せむとするのが勞働組合立法當面の問題である。さうして玆に吾々法律家の研究すべき仕事があり、働き得べき場面が存在する。

抑も立法の問題は決して單なる章句法條の問題ではない。勿論章句を正し法條を整ふること亦必ずしも容易の業ではない、又必ずしも輕々視すべき事柄ではない、けれども、それは畢竟技術と熟鍊との問題であり「立法技師」の仕事たるに過ぎない。眞に法律學者が立法學の見地から働き得べき場面は全然別個の方面に存在する。

立法者は常に、立法それ自身の本質及び職能並に其の極限に關して正しき理解をもたねばならぬ。又立法によつて働きかけらるゝ對象としての社會、各種の社會關係生活關係について精密なる智識を有せねばならぬ。さうして又かくして働きかけるに付いて用ふべき個々の法律的手段の本質及び效用について明確なる智識をもち、以て個々の具體的立法に關して一々其の選擇を誤らざるの用意あることを必要とする。今日多數の人々が考へて居るやうに、國家は必ずしも何事をも爲し得るのではない。法律を以てし國權を以てすればすべて何事をも爲し遂げ得るのではない。法律を以て爲し遂げ得るもの、法律を以て爲すを妥當とするもの、それには自ら種類があり極限がある。それを知るが爲めには、立法夫れ自身及び對象たる個々の社會關係について正しき智識を必要とする。又立法に際して用ふべき個々の法律的手段を適當に選擇することは立法の目的を達するに付いて極めて重要である。然るに、今日傳統的なる正統法律學に膠着せる人々殊に今日諸法令の立案に干與せる政府官僚の間には、嘗て十數年の昔一時吾國法律學界を風靡した所の「誤られたる概念法學」のドグマが依然として其の頑迷なる支配をつゞけつゝある。此故に、彼等は自ら論理の精緻を誇り概念の精確を爭ふことを知つて居る。而かも其の法律學の如何に貧弱であり又偏狹であるかを悟らず、其の自ら誇る論理と概念とにはそれが社會的に妥當なる所以の範圍と極限とが存在すると云ふ事實にさへ氣付かずして、すべてを唯自己

の狹量なる鑄型に當てはめて判斷し又處置せむとして居る。立法の社會的作用を知らず、又立法の對象たるべき個々の社會關係を理解せざるもの、、立法者たる資格なきは云ふまでもない。けれども、それにも增して正しき立法を妨ぐるものは「誤られたる概念法學」と之に膠着せる「立法技師」とである。何故ならば、彼等は自らの持ち合はせて居る「法律的技術」の貧弱不足なるを悟らずして、反つて之に適合せざる社會の現實を否定し、事實を曲げて反つて法律の中に押込まむとするの傾向をもつからである。立法學は此等のものに向つて其の抱持せる「法律論理」と「法律概念」との妥當に通用し得べき範圍を指示せねばならぬ。さうして新しき社會新しき生活關係の爲めには、之を規律し之に適用すべき新なる法律的手段を案出し得べき自由自在なる法律精神を吹きこむことが必要である。立法の問題として勞働組合のことを論ぜむとするものは必ず先づ此意味に於ての思想的用意を必要とする。

抑も、國家が立法によつて社會に働きかける各種の場合を觀察するに、或る場合には社會的に未だ存在せざるものを新に創造せむと努力して居る、又或る場合には既に社會的に存在せるものを變更し又は消滅せしめむと努力して居る。而して其の努力の目的を達するが爲め、或る場合には刑罰其他の制裁方法を規定して行爲を强制し又は禁止する、又或る場合には賞恤其他各種の奬勵方法を規定して行爲の助成を計る。けれども、立法が之れに依つて直接必然に形成し得べきものは、官廳其他政治的乃至行政的諸機關を創設し又は其運用すべき規則を制定するが如き、國家的の機關乃至機能夫れ自身にのみ限られて居る。此等の場合には、法律を制定して之を實施すれば直接必然に其の所期する國家的實在が實現される。之に反して、其以外の場合には、國家が如何に重き刑罰を規定し厚き恩賞を規定しやうとも、それが社會に及ぼす效果は畢竟間接たるに過ぎない。國家は一定の行爲を爲したる者は之を一定の刑に處すべしと規定することが出來る。さうして若しも其行爲を爲した者があるならば其實力によつて强制的に之に所定の刑罰を課することが出來

ろであらう。けれども、それは畢竟國家自らの行爲なるが故に自ら定むる所に從ひ自らの力によつて之を爲し得たのである。所が、法律の社會に對する關係は全くそれと異なる。成程、一定の法律が制定された場合、世の中の人々は——何と云ふことなしに植つけられて居る——「遵法心」によつて之を遵奉するかもしれない。さうして其結果法の所期する目的は社會的に實現されるかもしれぬ。又世の中の或る者は、內心必ずしも遵法心を抱懷せず又會々規定せられたる當該の法律に對しては寧ろ反對の意見を抱いて居らうとも、單に規定せられたる刑罰の嚴酷を恐れて外形上法律の命ずる所に從ふかもしれぬ。何れにせよ、かくして法律の所期する目的は社會的に實現せられ得る。けれども、これは法律の制定せられたることによつて直接必然に生ずる結果ではない。立法は唯間接の原因である。事はすべて社會自らが——或は自らの遵法心により或は刑罰に對する恐怖に基いて——自ら之を決し自ら之を行つたのである。法律に於てかくあるべしと規定することは、其の必然の結果として、單にかくあるべしと云ふ法則が國家的に成立すると云ふ事實を形成し得るに過ぎない。其のかくあるべきことが事實社會的にも亦實現するや否やは全然別箇の問題である。

此故に、例へば勞働組合法に於て、組合の目的は云々のものに限ると規定し、其以外の目的を以て組合を組織した者には云々の刑罰を課し又かゝる組合に向つては解散を命ずべきことを規定したとする。此場合、若しも何人かゞその規定に違反してかゝる違法の組合を組織したとすれば、國家は之に向つて刑罰を課したり又解散を命ずることが出來るであらう。けれども、其結果かゝる違法の組合が社會上全く絶滅し終るべきや否やは全然別問題であつて、それは畢竟、一方に於てはかゝる——違法なる——組合の成立を促すべき社會的要求の強弱と他方に於ては人々の遵法心及び規定せられたる刑罰の實際的效力との相互的關係によつて定まる事柄である。次に又、國家は甲の弊風を亡ぼし乙の良俗を興さむと欲して、云々の法律を制定するであらう。さうして其目的を達するが爲め、或は刑罰を規定し或は恩賞を規定す

ることが出來るであらう。しかしながら、社會上事實に於てかゝる慣習が亡び又其俗が異なる場合には、單にかくの如き一法律が制定せられ又施行せられたること夫れ自身のみを以て足るのではない。其の社會的實現は實にかくの如き風俗の共礎たるべき社會關係と當該法令との相互的關係夫れ自身によつて社會的に定まるのである。

それは今更說明するまでもなく明白の事柄なるに拘らず、國家萬能の思想に溺ぼれた人々は稍ともすれば此點を忘れ易い。さうして、立法の本來立ち入るべからざる事柄、干渉するを適當とせざる事柄にまで立ち入つてすべてを法律的に規定せむと企て、又立法の企圖する所が事實社會的に實現せらるゝ爲めには其所に複雜なる諸種の社會的條件の存在を必要とすることを忘れて、濫りにすべての事柄について自己の思ふがまゝの立法を試みむとする。けれども、立法者はよろしく國家と其の立法との本質及び職能を考へ、さうして其の社會的作用の極限を明にすることが必要である。私は今吾國の立法者が資本主義經濟組織必至の產物であり又無產勞働者のよりよく活きむとする本能の必然的所產として社會に生まれ出た勞働組合に關して其の立法作用を働かせやうとして居るのを見る。私は此際特に立法者に對して此點についての注意を促して置きたい。

次に又私は、國家が立法によつて社會旣存のあるものを助成するに際して使用する各種の國家的助成手段の問題を考へたい。

社會の需要が或るものを生み出して居る。其の生み出されたものはともかくも現に社會に存在する各種の便宜を利用しつゝ又各種の妨害と戰ひつゝ、其の生存をつゞけるであらう。そして社會の實勢關係は或は其の生存をして益々成長せしめ、又或は之をして萎縮せしめ又消滅せしむるであらう。

かくの如く社會的に生み出されたる者に向つて、國家の執る態度は、或る場合には抑壓的抹剎的なることがあるであ

らう、或る場合には放任的なることがあるであらう、又或る場合には奬勵的助成的たることがあり得るであらう。さうして事實其何れの態度をとるかは具體的なる政策的考慮が之を決するのである。けれども、愈々助成的態度を採るべきことに決定したるとき、國家の助成手段として實施すべき事項は極めて種々雜多である。

先づ第一に、其の社會的に生み出されたものは、事實其の社會に生存し又成長するに付いて、幾多の障害を見出すであらう。此場合助成を志せる國家はよろしく適當なる手段を以て其障害を除去せねばならぬ。然るに、其障害には法律的のものと事實的のものとがある。而て前者は主としてかくの如き社會的産出物の本質的行動を妨げる所の現行法令に存在し、後者は主としてかくの如き社會的産出物の自由なる行動によつて利益を阻害せらるべき人々の側から現はれ來る。今例を吾國現在の勞働組合にとるならば、勞働組合の本質的行動たる團體交渉の諸行動を禁止し又は制限しつゝある治安警察法其他各種の現行刑罰法令は最も顯著なる前者の例である。又今日吾國の資本家は原則として勞働組合を認めず又其團體交渉を回避しつゝある。さうして自己の使用する勞働者の組合に加入することを禁じ又組合に加入せる勞働者の雇入を拒絶しつゝある。而してかくの如きは實に今日吾國の勞働組合が受けて居る事實的障害の最も顯著なる實例である。國家が勞働組合を助成し其の健全なる育成を期せむとするならば、以上の如き法律的並に事實的障害を彼等の爲めに除去することを計らねばならぬ。けれども、此等の障害中前者は國家其の障害的法律を廢止するによつて直接當然に排除せらるゝものなるに反し、後者は――前段上記の說明に從へば――單に間接的にのみ除去を能し得べき事項である。茲に於てか立法者は、其の間接的方法として如何なるものが最も適當であるかの問題を考慮せねばならぬことゝなる。

次に、社會の需要によつて社會的に生まれ出たるものゝ爲めに、國家の與へ得る第二の助成手段は各種の積極的方法であ

る。國家は、或る場合には補助金を與へ漁業權の特典を與ふる等各種の財政的援助を與ふることによつて、彼等の社會的育成を助けることが出來るであらう。けれども、それにも增して重要なる助成手段は、彼等に向つて其從來利用することを許されざりし各種の國家的手段の利用を許し與ふることでなければならぬ。今例を勞働組合にとるならば、現在吾國の勞働組合は法律上自らの名義に於て財産をもつことが出來ない。勿論事實上は會計係其他役員の名に於て之をもつことが出來る。けれども、其の役員の名に於てもつて居る財産の關係は法律上裁判所に訴へてまでも保護を受け得べき法律關係ではない。其結果、其財産關係は極めて不確實であつて組合の大を成す所以はそれが爲め甚しく妨げられて居る。從つて此場合組合に向つて國家的救濟を受け得べき財産關係の主體たる資格を作り與ふることは、組合にとつて極めて重要なる助成手段の一なること素より云ふを俟たない。所が此種の法律的助成手段を考案し實現するについては、立法者の頭腦を拘束して居る古き「論理」と「概念」とが屢々甚しき妨害物となつて現はれる、又彼等の法律思想の偏狹と貧弱とが屢々必要なる助成手段の案出を阻害する。此點に於ても亦、立法者の常に心がけねばならない重要なる仕事が多く殘されて居ると云はねばならぬ。

要するに、「立法」それは言ふに易くして行ふに難き事柄である。世人の或る者は「立法」を以て白紙に物を畫くが如く自由自在なるものと考へて居る。しかし、彼等はかくして形式上法制を作り得るけれども、實質上寸毫も其法制の目的とする所を達成することが出來ない。又世の中の或る人々は、「立法」の仕事は結局實質的なる政策的考慮と形式的なる章句法條の整正とを以て盡くるもの〻如く考へ、實際政策家と立法技師との共力を以てすれば立法の業容易に之を爲し遂げ得べしと考へて居る。けれども、かくして立法を行ふことの如何に困難なるかは吾々屢々立法事業の委員會に於て其例證を發見する。實際政策家は能く政策を考へることが出來るであらう。けれども、之を如何にして立法の上に現は

し得べきかの途を知らない。又政策を達成するに適當する個々の法律的手段を見出すことが出來ない。又立法技師は能く章句法條の形式を整へることを知つて居る。又實際政策家の要求に應じて各種の法律的手段を提供することが出來るであらう。けれども、單なる立法技術者に過ぎない彼等は先づ第一に社會を知らない。又立法と社會との關係に關する社會學的思索を缺いて居る、而して更に又彼等の化石せる法律的「論理」並に「概念」は到底能く政策家の注文に應ずべき適當なる法律的手段の案出を許さない。其結果、政策家は技師を罵つて法律の窮屈不合理なるを難じ、技師は又政策家を嘲りて其の法律的無識を笑ふ。かくして彼等の共力能く何等適當なる立法をもなし得ざるの例は吾々の事實に於て屢々目擊する所である。

此意味に於て、私は今日勞働組合法制定のことが論議せらるゝに際し、吾々法律家も亦法律社會學的見地より又立法學的の見地よりして特に貢獻し得べき餘地の多大に存在することを信ずるものである。

三

勞働組合法は既に色々の人々、各方面の學者によつて花々しく論ぜられた。しかし、上述の如き考慮の結果は法律家たる私にも尚多少論議すべき問題の殘されて居ることを敎へてくれる。此故に私は以下主として法律的見地に立ちつゝ勞働組合法の制定に關聯して講究すべき各種の事柄を論じて見たいと考へる。

無論、純然たる法律論に入る前に、私は先づ第一に勞働組合の社會的意義を明かにして置く必要がある。勞働組合は何故如何にして吾々の社會に生まれ出たか？又勞働組合は如何なる目的を有し如何なる職能を有し又如何なる本質をもつて居るものであるか？此等の諸點を明かにすることは、立法の對象に關する智識を明確にする所以である、從つて、そ

れは勞働組合立法を論ずるに付いての必要的前提でなければならぬ。此故に、私は先づ第一章に於て「勞働組合發生の社會的必然性」を論じ、其中に於て現在の資本主義經濟組織と其法律とが其の基本的ドグマとして置いて居る「契約自由の原則」が一度勞働契約にまで適用せられたるとき如何に救ふべからざる破綻を暴露したかの事情を說き、さうして勞働組合の運動は實に此の破綻を償はんが爲めに社會が自ら生み出した必然の產物であることを說明したいと考へて居る。

次に第二章に於ては「勞働組合の法律上の地位」を說かねばならぬ。即ち上述の如く、勞働組合は資本主義經濟組織必然の產出物であるにも拘らず、從來法律は之に向つてあらゆる壓迫を加へ又之に向つて其行動に便ずべき何等の國家的手段を許し與へて居ない。現行法が此點に於て如何に不公正でありまた又不備であるかを明かにすることは、頓て新に立法の問題を論ずべき必要の前提でなければならぬ。此意味に於て私は第二章に於て「現行法は勞働組合を如何に取扱つて居るか」の問題に答へやうと思ふ。

さうして、最後に第三章に於て、勞働組合法の制定について起り得べき各種立法上の諸問題を論究し、併せて從來發表せられたる各種の組合法案を批評したいと考へて居る。

第一章　契約自由の原則と勞働契約

——勞働組合發生の社會的必然性——

一

他律的なる道德生活、他律的なる信仰生活、他律的なる經濟生活、中世的封建的なるあらゆる極度の他律的拘束の下に呻吟した人々は只管に自由の國を望み自律の世界へとあこがれた。

さうして、其の望み其のあこがれが現實の世に浮び上つたとき、其所に近代的な自律の道德が生まれ、自律の宗教が生まれ、自律に其礎を置く自由主義の經濟學と經濟組織とが生まれた。而して、國家と政治と法律と及び其の學問とも亦すべて其の同じ傾向の例外たるを得なかつた。世界はすべて自律の世界となつたのである。

近代人は問ふた「國權は何故に吾々國民を拘束するか？」と。昔の人々は之に答ふるに「國權は神の與へ給へる所なるが故に」と云ふ答を以てし、さうして滿足したのである。けれども、近代人は最早それに滿足することが出來なくなつた。自己を拘束するものは獨り自己のみでなければならぬことを信條とする彼等は、國權が自己を拘束する所以をも亦自己の中に發見せむと努力した。玆に於て生まれ出たものが社會契約說である。彼等は個人をのみ本位とし個人を以て至高のものと考ふるが故に、國民個人に向つて外部的拘束を加へ得べき國權の基礎をも亦之を國民個人に求めざるを得ない。此故に彼等は社會成立の基本として各個々人の自由意思に基く社會契約の存在を假設し、各人は自ら其の自由意思によつて服從を約したるが故に服從せざるべからざることを主張し、以て其の國權に服從せざるべからざる所以を說明した。

同樣に、飽くまでも個人を以て本位なりと考へ個人の自由を以て至高のものなりとする近代人は、刑事的責任及び民事的責任の基礎をも亦責任歸屬者本人の自由意志に求めて、其所に或は刑罰の倫理的基礎を求め、或は又過失主義賠償理論の根柢を發見した。彼等は、犯罪乃至不法行爲の結果法律によつて强制的に刑罰乃至損害賠償の責任を課せらるゝ所以をも亦犯罪者乃至不法行爲者本人の自由意志自由選擇に求めたのである。法律の禁ずる所爲を敢てする者は法律上

制せらるることにきまつて居る。自由意思を有する者は其禁止せられたる所爲を爲すと爲さゞるとに付いて自由をもつて居る。然るに、自ら好むで其所爲を敢てする者は即ち自ら其の自由を以て責任の負擔を撰ぶものと云はねばならぬ。近代人の責任理論は即ちかくの如きものであつた。

かくの如く、すべての拘束の基礎を被拘束者本人の自由意思自由選擇に求めむと欲する近代人は、法律以外にして各個人を拘束し得べきものは、獨り其個人の自由意志に發する「契約」あるのみなりと考ふるに至り、すべての「拘束」を説明するに付いて出來得る限り契約理論を當てはめんとした。

然らば、「契約は何故に吾々を拘束するのか?。」人々は之に答へて云ふ。「そは吾々が自己の自由意思によつて自由に選擇したる結果なるが故に」と。人々は、自己の自由意思によつて選びとりたるものなる以上、縱令後に至つて其の自己に不利益なることを發見しやうとも、又第三者が見て以て之を不利益なり不公正なりと考へやうとも、自ら選びとりたるものは自らの必然に甘受せねばならぬ所であり又第三者の濫に批評し干渉すべき限りでもないと考へた。

自由にして平等なる人々は、各々自己の利益を思ひ自己の最善の何たるかを熟知する。敢て國家其他第三者の干渉なしと雖も、人々は各々自己の利益の爲めに、自ら他人と交換し契約して有無相通じ長短相補ふであらう。又自ら自己の最も利益と信ずる契約條件を選ぶであらう。契約の締結を強制する必要もなければ、又契約條件に向つて干渉し制限を加へる必要もない。各人が各自己の最善を追ふことの爲めに自ら相補ひ相助くることによつて圓滿なる社會の成立し得べきことを夢想した樂觀者、又あらゆる他律的拘束を惡みて只管之が排除をのみ希ひ、縱令結局は不利益でも、自己の自ら選びたる運命は自ら又喜びて之を受け入れることに無上の幸福を感じた理想家は、かくして契約締結の自由、契約內容の自由を法制の根柢的原則として採用し樹立することを勵行し、其所に契約自由の社會的妥當性と倫理的基礎とを發

見したのである。

けれども、契約自由の原則は「各人はすべて平等にして自由である」と云ふことを前提としてのみ成立し得るものである。其の前提を是認するによつてのみ吾々は此原則の社會的妥當性を發見することが出來る。何故なれば、契約自由の倫理的根據は契約の自律性にある。法律は各人に向つて自由なる選擇を許す。法律は之に向つて何等の拘束を加へず又何等の干渉をも試みない。各人は各々自己の自由なる判斷によつて自己の最も善しとするものを選擇する。其の選擇したる結果は局外の第三者より之を見れば、寧ろ本人にとつて不利益と見ゆる場合もあり得るであらう。又本人と雖も後より省て自らの選擇したるものを見て不利益なりと考へることもあり得るであらう。けれども、自ら選びたる運命は自ら喜びてありのまゝに之を甘受せねばならぬ。他律の世界より自律の世界にあこがれた人々は、此の自ら選びたる運命は ― 結果の善惡に關係なく ― すべて喜びてありのまゝ之を甘受せねばならぬと云ふ男々しき性情の下に、契約自由の原則を喜び迎へたのである。しかしながら、契約自由の原則の下に眞に此の「自ら選びたる運命」をありのまゝに喜びて甘受することに善と美とを見出し得るものは、獨り眞に自己の運命を「自ら選び」得るもののみでなければならぬ。然らずして、契約自由なる空しき形式の下に、實は自ら何等選擇の自由を有することなく、契約條件の全部乃至大部分は專ら相手方によつて任意に定められ、さうしてかれの意のまゝに之を言渡（ディクテート）さるゝ者にとつては、實質上何等選擇の自由が與へられて居ない。契約自由なる美名の下に、實は強制があり他律があるに過ぎない。假設せられたる絶對の自由平等者相互間に於ては、當事者双方平等なる選擇の自由を有するが故に、契約の自由が初めて自律的倫理性をもつことが出來る。之に反し、當事者の一方が相手方に向つて其の我意をディクテートし、其の意志を強制し得るとき、其所には最早何等自律の善もなければ美も存在しない。其所には唯契約の自由なる美名によつて飾られた他律と強制と

がある。而かも何等の第三力によつて强制せられ抑制せられざる强者の力が弱者に向つてほしいまゝに我意をディクテートし得る自由があるに過ぎない。

かくの如く、契約自由の原則は平等者相互に於てのみ正しく成立し得る。當事者が双方が平等となること、其所に契約自由の倫理性と社會的妥當性との極限が存在するのである。フランス革命の自由平等論者又自由主義の經濟學法律學を信奉する人々は、自由平等にあこがるゝの餘り「平等なるべきもの」を化して直に「平等なるもの」となした。さうして實は不平等なるものを平等なりと假設して、之に依つて契約自由の原則を適用した。けれども、實にアントン・メンガーの言へるが如く「不平等なるものを平等に取扱ふよりも著しき不平等はない」のである、……'dass es Keine grössere Ungleichheit gibt, als das Ungleiche gleich zu behandeln

二

かくの如く、契約自由の原則にはそれに本質的な超ゆべからざる極限がある。而して一度其の極限を越ゆるとき、其の原則は直に社會的妥當性を失ひ又其の倫理的基礎を失はねばならないのである。

然るに、今日勞働者が其の勞働を金に換へて生活の資を得るが爲めには、必ず勞働契約に依つて其の勞働を資本家に賣らねばならぬ。而して、現代の個人主義的法制を樹立した人々は、彼等が無上の價値を認めて信條とする契約自由の原則を此の勞働契約にまでも當てはめて毫も其の不當を疑ふことなく、又從來親方、仲間組合等の傳統的なる不合理の拘束抑壓に苦しみつゝありし勞働者はかうして寧ろ其の傳統的なる束縛を逃るゝを得、かくして自ら自主的に振舞ひ得るに至つた其の「自由」を喜び迎へたのである。

けれども元來勞働契約は其の本質上之を契約自由の原則に一任すべからざるものである。さうして、產業革命以降發生したる新らしき生產組織又勞働關係の下に於ては益々其の然る所以が明かにされたのである。以下其の理由を說明せねばならぬ。

先づ第一に、「勞働」なる商品は其の本質上賣り止めをなし賣り控へをなすに適せざるものである。元來契約自由の原則の下に於ける賣買契約の當時者は各々契約條件が自己の意にみつるまで賣らず又買はざるの自由を有する。賣買取引に於ける最後の武器は賣らず又買はずと云ひ得るの自由である。然るに、「勞働」は元來賣り控へに適せざる商品である。「勞働」は性質上之を賣るによりてのみ價値を有するに至る。賣られざる「勞働」は有價物として之を保存するを得ない。從つて一日「勞働」を賣らざりし勞働者は單に其日賣つて得べかりし賃銀を得ざることゝなるのみであつて、賣らざりし「勞働」そのものは何等有價物として彼の手元に殘らない。從つて彼は今日賣らざりし勞働を貯へて明日一時に二日分の勞働を賣ることが出來ない。賣り得ざりし勞働は必然に彼の損害とならねばならないのである。而して元來勞働者は生活の資に乏しい。彼の生命は今日勞働を賣り明日亦之を賣るによつてのみ僅に支へられて居る。成程、勞働を買ひ得ざる相手方——資本家——も之が爲め生產の機會を失つて財產上の損失を蒙るであらう。けれども、彼の蒙るものは單なる財產上の損害に過ぎない。又彼は一の勞働者より買ひ得ざりし勞働を他の勞働者の手から買ひとり得べき廣き自由をもつて居る。然るに勞働者が其勞働を賣り得ざることの爲めに蒙る損害は直に彼の生命の問題である。之を對比して考ふるとき、二者の輕重は到底比較にもならないのである。此故に、法制上契約の自由を與へられて居る勞働者は事實に於て自己の利益の爲めに其の自由を行使すべき實力を與へられて居ない。彼は假令契約の條件が氣に入らなくとも、全く賣らざるが爲めに蒙る全損に比すれば多少の損失尚之を忍ばざるべからずと考へて其勞働を賣らねばなら

ぬ。のみならず饑えざらんが爲め生命を保持せむが爲めには、契約條件の如何を問ふ暇さへもなく其の勞働を賣るべく餘儀なくされるのである。彼が契約の自由を利用して之を自己の利益に導き得ざる蓋し當然なりと云はねばならぬ。

かくの如く「勞働」が其の本質上賣り止め賣り控へを行ふに適せざる商品であることは、賣主としての勞働者をして取引上自ら不利益の地位に立たしめて居る。所が、此の不利益なる地位は産業革命以來の資本主義的經濟組織の成立によつて益々不利益たらしめらるゝに至り、其結果契約の自由は唯空しき名のみとなつて實は徒らに勞働者を苦しめる道具となつて仕舞つた。以下項を分ちつゝ更に其事情を明かにせねばならぬ。

此點に於て吾々の先づ第一に注目せねばならぬ事柄は資本主義經濟組織の下に於ける「勞資分離の事實」である。生産の必然的要素たる勞働及び資本は、從來生産が主として自己の消費自己の需要滿足を目的とする自己生産であつた限り、同一人の集中にあるを原則としてゐた。然るに産業革命以後の大企業勃興と共に資本は漸次或る少數者の手中に收められ、而して其の少數者が企業經營の主體となり、自らその資本によつて生産の具を買ひ原料を買ふと同じく又勞働をも買ひ入れて、自己の計算に於て企業を營むに至つた。勞働者は唯だ勞働のみをもつて居る。中には又多少の資本を持つて居るものもあるであらう。けれども殆んど言ふに足らざる微小の資本を以てする小企業は終に大企業の敵ではない。今や勞働者は自ら――生産の必至的要素の一たる――勞働を擁して最早や自ら獨立して生産を行ふことは出來ない。資本は最早や或る少數者の手中に獨占された。成程彼等少數資本獨占者と雖勞働の協同なしには生産を行ふことは出來ないのである。然るに、彼等は勞働の協同を得んが爲めに全然對等なる態度を以つて之を擁ることをしない。彼等はその優越的地位を利用して勞働を買ふ、而かも自己の云ひ値を以て之を買ふ。それが實に勞資分離以來に於ける資本家の態度である。

然らば、資本家は何故に優越であるか？同じく互に協同するにあらざれば生産を為し得ざる勞働と資本とが分れて異別の人々に分屬したるとき、何故に資本の獨占者のみ優越にして勞働の獨占者は同じく之と對等の地位を占めることが出來ないか？其の理由は極めて簡單である。先づ第一に單に勞働のみを保有して何等の財産をも有せざる者は今日にでも又明日にでも急いで勞働を賣らなければ生活を維持することが出來ないと云ふ本質的弱味をもつて居ることは既に上述した通りであるが、其以外に尙資本と勞働とが分離した以上、資本が資本の獨占者であるが如く、勞働者を亦全體としては勞働の獨占者であるに拘らず、從來勞働者は自ら團結して獨占者たる所以を發揮し得ることに氣付かず、又氣付いたとしても或は目前の小利に眩惑せられ或は資本家によつて壓迫せられ又官憲によつて干渉を受ける結果として容易く其の獨占者たる所以を發揮することが出來ない。それが自ら獨占者たるに拘らず之を利用して資本家に對立することの出來ない最大の理由である。

次に又注目すべきは、機械の發明と工場組織の發達とに伴ふ「勞働の簡易化」、從つて之に伴ふ勞働者增加の事實である。生産が主として手工業によつて營まれて居た限り、「熟練」は尙勞働に於ける極めて重要なる分子であつた。然るに、機械の發明と共に勞働者は漸次單に其の附屬物としての働きを行ふに過ぎざることゝなり、又工場組織の發達に伴ふ極度なる分業組織は各個勞働者の受け持つべき仕事を甚しく簡易ならしむるに至つた。さうして其結果、熟練勞働者は漸次に其の熟練の利益を失ひ、從來は産業勞働界の外に在つた年少者女子までもが容易く彼等の競爭者たり得るに至つたのである。而してかくの如き事情は、資本家に向つて益々自由なる勞働者選擇の範圍を許すことゝなり、同時に勞働者をして益々廣き自由競爭の世界に立たしむることゝなり、勞働契約に於ける當事者相互の實力關係をして益々權衡を失はしむるに至つたのである。

尚又、資本家的生産方法の必然的産物たる工場組織の下に於ては、勞働者は其の「勞働」を賣却し、さうして其義務を履行するが爲めに、原則としてすべて工場に於て働かねばならぬ。所が工場は一定の統制の下に規律的に動かねばならぬ生産組織である。勞働時間も、就業乃至退出の時間も、又工場に於ける衛生設備安全施設等もすべて一律に定められねばならぬ。個々の勞働者は、假りに勞銀に關しては個別的の協定契約を許されるとしても、その以外の勞働條件に關しては事物の性質上必然に個別的の取引を許されない。夫等はすべて工場の經營者たる資本家により、能率の見地よりして自由に定められるのである。勞働者は雇はるゝか又は雇はれざるかを決するに付いて尚選擇自由を與へられて居ると云ふことが出來やう。けれども、尚も雇はるゝことを希望して雇傭關係に入り込んだ以上、其の勞働に從事せねばならない條件と狀況とはすべて既定の與へられたるものに外ならない。彼等は之を決するに付いて何等の自由をもたないのである。

かくの如き諸種の事情は、資本主義經濟組織の下に於ける勞働者から漸次に契約自由の利益を奪ひつゝある。彼等は契約自由の名目の下に實は強制的に既定の與へられたる環境の中に押し込められつゝある。又形式上自由の契約と稱しつゝ實は資本家によつて一方的に賃銀其他勞働條件を言渡され、さうして默々としてこれを受け入るゝの外何等の自由をも與へられて居ないのである。

茲に於てか、契約の自由は最早唯單に名義とのみなり終つた。自由の名の下に唯強制のみがある。而かも當事者の一方は國家其他第三力によつて統御せらるゝことなき自由を有し、之によつて一方的に相手方を強制し得る自由をもつて居る。かくして學者の所謂「新しき封建制度」が吾々の世の中に成り立ち、「身分より契約へ」From status to contract **の社會變遷は更に化して「契約より身分へ」**の道行きをとらむとするに至つたのである。

三

かくの如き狀況は必然に勞働條件の低下を導き出す。少くとも相對的なる低下を導き出さねばならぬ。勞働者は單に其の生存を維持するに足るだけの賃銀を與へらるゝに過ぎずして、勞働條件のすべては只管產業の利益の爲めに又產業立國なる公益的名目の下に唯資本の利益をのみ目標として定められる。

けれども、一度自由平等に目醒めた近代人は長くかくの如き不公正なる狀態を默過することが出來なかつた。茲に於てか、此の狀態を是正せむが爲めに二の救濟運動が起つた。而して、其の一は局外に立てる第三者の手から、其の二は勞働者自らの手から起つたのである。

契約自由の下に呻吟する勞働者に向つて救濟の手を伸べた第一のものは社會立法乃至勞働立法の運動である。契約の自由が勞働者の爲めに何等の自由と利益とを齎すことなく、反つて彼等をして統制なき資本家の我意の下に立たしむることになつた以上、正義公平を念とすべき國家のとるべき態度は勞働者の爲め弱者の爲めにする契約自由の制限でなければならぬ。「不平等なるものを平等に取扱ふよりも甚しき不公平はない」のであるならば、不平等なるものにはそれぞれ不平等の取扱を與ふることによつて其の不平等をとり除かねばならぬ。

此思想に基いて、勞働者保護の爲め國家の力により法律によつて契約の自由を制限し、さうして勞働條件に干渉せむとしたものが即ち近世的社會立法の運動である。さうして此の運動は先づ工場法制定の運動に初まりたる後、頓つては勞働時間の制限其他各種の勞働立法を促進することへと移り行つた。此の思想此の運動は第十九世紀の中葉以降各國に於て相當の成功を收め、就中國家力の優越を信じ得る獨逸人の間に於て最も多くの信奉者を得又事實に於ても最も多く

成功を收めることが出來た。彼等の所謂「社會的政策」は即ちそれである。

所が、社會的立法の方法によつて勞資の關係を公正ならしめむが爲めには、兩者の間に立つて調停の勞をとるべき「國家」が眞の意味に於て「第三者」であり且つ「公平」であり、さうして當事者の何れに對しても其の專恣を壓服するに足るだけの實力を持つものでなければならぬ。かくの如き公平にして實力ある第三者としての國家が存在し得ることのみが社會的立法の成功し得べき唯一の條件である。けれども、近世的國家は決してフランス革命の人々が夢想したるが如く眞に民衆のものではない。それは專制君主に對する問題に於て確かに民衆のものである。けれども、實質的には民衆の名の下に實は民衆中の或る少數者が國家を自己の手中に收めたのである。此故に、國家は表面上常に公平なる第三者と稱して居る。而かも、主として資本家の力によつて支持されて居る國家は決して資本家に向つて充分なる抑制を加へ得べき何等の實力をも持たないのである。吾々は此事實を實證せむが爲めに、態々遠き外國の事例を援用するまでもない。今日資本家の實力が最も力强く國權を支持して居り、さうして無産民衆の力が毫も政權の上に代表されて居ない吾國は、世界の各國中資本主義的に相當成熟したるものゝ間に於て、最も不完全なる社會的立法をもつて居る。政治家も政黨も好むで「社會政策」の言葉を口にする。けれども、事實に於て資本家の支持にのみ依賴して居る彼等は到底其の政策を實現し實施し得るの力と勇氣とをもち得ないのである。

此故に、此種の思想系統に立ちつゝ、飽くまでも國家の力によつて勞働階級の地位を向上せしめむと希望する人々は、必然政權獲得の運動に向ふ。さうして普通選擧運動により又其他あらゆる方法によつて勞働階級の實力を政權の中に入り込ましむべく、あらゆる努力を試みるのである。

しかしながら、政權は事實容易に勞働階級の手中に移らない。又國家として眞に公平なる第三者たらしめ得べき程度

に勞働階級の實力を政權の中に入り込ましむることすら實は極めて困難である。玆に於てか、勞働者は彼等自らの地位を向上せしめ其狀態を改善せむが爲めに　自力により國家の力を賴らずして　自らを救ふべき自助行動を試みるに至るのであつて　勞働組合の運動は即ちそれである。

今日の資本主義經濟組織は畢竟契約自由の原則を必須の條件としてのみ成り立ち得る。勞働契約も亦もとより其の原則の適用を受けねばならぬ。勞働者其他彼等の利益を念ふ人々は從來屢々國力をかりて勞働契約を契約自由の支配から救ひ出さうと試みた。けれども　それは到底成功の見込みがない。それの完全に成功すべき時期は將來資本主義經濟組織の倒壞する時であり資本家的國家の滅亡するときでなければならぬ。此故に、今日此の組織制度の下に於て眞に勞働者の救はるべき途は國家に依賴することではない。國力により法律によつて契約の自由を制限して貰ふことではない。契約の自由はそのまゝでよろしい。それはそれより外に仕方がないのである。しかし、それを繼續せしめつゝも尙勞働者は自力によつて自らを救ふことが出來る。如何にして出來るか？勞働者の團結、勞働組合の組織、之によつて資本家に對立することが其の唯一の方法である。

契約自由の原則の下に於て、其の自由が獨り資本家をのみ利して勞働者の利益となることなきは何故なるか？それは彼等相互の實力に階段の差等があるからである。契約の自由は當事者双方の平等なることを前提としてのみ成立ち得る。不平等者間の契約自由は唯强者の爲めの自由であつて、弱者に對する壓迫に過ぎない。此故に契約自由の下に於ける勞働契約をして眞に公正のものたらしむる爲めには當事者双方の取引能力を平等ならしめ、兩者の間に實力の均衡を作ることが必要である。而してそれが爲には勞働者も亦資本家と同樣力强きものとならねばならぬ。相手方が資本の獨占者として、獨占者の力をふるふ以上、勞働者も亦勞働の獨占者として獨占者の力をふるはねばならぬ。かくして本來

互に結合するによりてのみ生産をなし遂げ得べき勞資の二要素が互に平等者として對等に協定するとき、其所に初めて眞の勞働契約があり契約の自由が存在する。勞働組合の組織と其の社會的職能とは實に此點に存在するのである。

四

勞働資本對立の關係に於て、兩者は本來互に結合するによりてのみ生産を爲し得べく、從つて相手方の共力なき限り自己のみを以つては到底何等の生産をも爲すことが出來ない。此の意味に於て兩者は明かに對等の立場にある。然るに、勞働の獨占者たる勞働者は彼等相互の間に於て競爭を行ふ。彼等は其の勞働を賣らむが爲めに互に競爭せざるを得ない。これが爲め、本來對資本家の關係に於て勞働の獨占者たる興味を有すべき彼等は全く其の興味を勞働賣買の取引上に利用することが出來ないのである。

所が、勞働者が眞に其の勞働の獨占者たる所以に目醒めるならば、さうして其獨占者たる所以を發揮すべく通常の手段を講ずるならば、彼等は正に對等者として資本に對立し、平等の關係に於て之と契約を締結することが出來ねばならない。しかし、其の目的を達するが爲めには、先づ第一に彼等は團結の力によつて勞働の賣り止め賣り控へを行ふことが出來ねばならぬ。從來、勞働者は其の相互間に於て小さき競爭を行つた。それが爲め、縦令甲の勞働者が勞働の賣り控へを行はむとしても、乙の勞働者が互に鬪つて生ずる空位を補充するが故に、對資本家の關係に於て毫も其の獨占者たる實力を發揮することが出來なかつた。今若し一勞働市場の勞働者全部が團結するならば、さうして資本家の提供する勞働條件能く彼等の希望を滿足せしめざる場合に於て、甲其の勞働の賣り止めを行ひ、而して乙若し甲の競爭者として甲の空位を補充するが如き行動をとることなくんば、資本家は直に勞働を買ふに付いて著しき困難に陷らねばなら

ぬ。彼は勞働者の代表者と協定し、勞働條件に關する自己の主張に關して勞働側の滿足を得るまで或る程度の讓歩を爲すにあらざれば、到底勞働を買ひとることが出來ない。かくして初めて勞働者は其の勞働の獨占者たる所以を發揮し、資本家と對立して平等の契約を締結することが出來るのである。

　元來資本主義生産組織の下に於ける勞働者は互に競爭者である。而して互に競爭者である限り一單位の勞働市場を形成するものである。勞働市場の單位は各種の事情によつて定まるものである。それは或は職業の種類を同じくすることから定まる。何故なれば、職業を同じくするものは容易く互に競爭者となり得るからである。又或は居住地を同じくすることから定まる。何故なれば、同一地方に居住するものは自ら同一勞働市場に於て互に競爭者となり得べき可能性をもつて居るからである。而して、資本主義經濟組織の發達と共に、勞働が單純化し標準化することは、一方に於ては年少者婦女の如き從來勞働市場の外に在りたる者までをも市場の内に引き込む結果として自ら市場の範圍を擴大せしめる。又勞働の單純化は他方に於て自ら職業の轉換を容易ならしむるが爲め、從來は互に競爭者の地位に立つことなかりし勞働者──即ち互に職業を異にする勞働者までをも自ら同一勞働市場の中に捲き込む傾向をもつ。而して法制上職業の自由從つて其の轉換が保障せられ、又居住從つて移轉の自由が保障されて居ることは、同時に交通機關の顯著なる發達と伴ひ又職業紹介制度の發達に因る勞働者移轉料支給制度職業補導勞働者再教育制度等の完備と相俟つて、益々勞働者の職業的及び地方的移動を容易ならしむる傾向を醸成し、其結果勞働市場の範圍は益々擴大して、遂には國際的市場の成立までをも可能ならしむるに至る。

　かくの如く、勞働市場は資本主義經濟組織の發達と共に漸次に擴大する傾向をもつけれども市場の擴大は決して市場の單一化を意味するのではない。市場が如何に擴大しやうとも、職業の異同及び居住地の遠近は自ら各種勞働者の間

に類を作り層を築く。さうして幾多勞働市場の段層を形作るのである。即ち、一勞働者は第一段に於ては、自己の居住する都市に於ける同職勞働者と共に一勞働市場を作る。けれども、第二段に於ては一方職業の種類について云へば職業轉換の難易如何に應じて類似職業の勞働者共他各種の勞働者と共に幾段層かの勞働市場を形成し、他方又地方的に云へば移住の便否如何に應じて各地方の各種勞働者と共に自ら幾段層かの勞働市場を形作る。而して、最後の段階に於ては、全國勞働者、否全世界の勞働者も亦自ら一單位の勞働市場を形成すべき可能性をもつのである。

而して、苟も一單位の勞働市場に屬する以上、勞働者は資本家に對する關係に於て必ず互に競爭者となるべき可能性を有する。其の互に競爭者となり得べき一單位の勞働市場に屬する勞働者の全部が結束し、以て勞働の賣り控へを行ふ場合、茲に勞働の獨占者としての彼等の力が最も明瞭に現はれるのである。

所が、勞働者がかくの如き勞働の賣り控へを行ふとき彼は必然に收入の停止を受けねばならぬ。而して收入の停止は無産者たる彼にとりて正に生命の問題である。此故に、勞働者團結して勞働の賣り控へを行はむとする場合に於て、彼等の必然に爲さゞるべからざる仕事は、かくして現に勞働を賣らず、從つて收入を停止せられつゝある勞働者の爲めに、其の生活を保障することである。而して勞働者此目的を達するが爲めには平時より固き團結を構成して互に出資を爲し、以て有事の際に備ふべき資金を蓄へねばならぬ。又は少くとも有事の際互に出資して相救ふべき連帶關係を平素より充分に固めて置くことが必要である。

かくの如く、一勞働市場の勞働者が團結して必要の場合直に勞働の賣り控へを爲し得べき精神的及び物質的の準備を整へ置くことは、彼等が勞働の獨占者として資本と對立し、之と平等の關係に於て相協定し相結合して、以て眞に公正なる勞働契約を締結し得べき必須の條件である。それは、契約自由の原則に依つて支配されて居る經濟組織法律制度の

下に於て、勞働者が眞に自力によつて自らを救ひ得る唯一の方法であつて、勞働組合は此の方策を完全に行はむが爲めに平素より組織せられたる勞働者共助の團體である。

此故に、勞働組合は資本主義經濟組織の必至的產物である。從つて此の經濟組織を認め、さうして此の組織の下に於ける社會的立法の必至的不完全を認むる者は、必然にすべて勞働組合を是認せねばならぬ。何故なれば、之あるによりてのみ契約自由の原則は之を勞働契約に適用しつゝも尙眞に其の正しき精神を發揮するを得、其の社會的妥當性と論理性とを保持することが出來るからである。

五

歐米諸國の發達した勞働組合を見るに——それは勿論國によつて多少傾向の差異を示しては居るけれども——其の行動は必ずしも單に對資本家の關係に於ける團體交涉的行動にのみ限られて居ない。其以外に於ても、組合員相互の共助によつて互に或は疾病老廢を助け又或は失業の困難を救ふ等各種の共濟的事業を營むの例は各國多數の勞働組合に付いて之を見ることが出來る。尙又請願により選擧により政黨的行動により乃至は又示威運動其他宣傳的行動によつて勞働者の地位を改善すべき法律の制定を促すことも亦勞働組合の重要なる仕事として各國共に之を見得る實例である。而して更に進みては或は單に勞働階級の威力を示さむが爲めに、或は或る個人乃至社會運動に向つて同情を表せむが爲めに、其他或は單に彼等の社會的變革にあこがるゝ意思と情感とを表白する目的を以て各種の團體的行動を行ふ事例も亦屢々之を見ることが出來る。

此等は何れも勞働者の解放其地位の向上を目的とする行動たるの點に於てすべて之を勞働組合當然の活動なりと認め

ねばならぬ。それが合理的なる範圍を守る限り、法律はその何れをも組合に向つて禁止することは出來ない。けれども、此等の中例へば共濟的作用の如きは性質上必ずしも勞働組合にあらずと雖も尙行ひ得べき事柄である。勞働組合は其の團體交涉的活動の外共濟的作用を行ふことによつて、或は多數の組合員を招致包容するの便宜を得るであらう。或は又資金融通の便宜を得るであらう。尙又例へば團體交涉的活動が稍ともすれば法律によつて壓迫を受け易き國の如きにあつては、共濟的作用の影に隱れながら組合を維持してゆく便宜もないではない。此故に、勞働組合が同時に共濟事業を行ふことは通例各國に於て見得る事例であつて、吾國將來の組合法に於ても之を禁止すべき理由は少しもない。けれども、共濟は——例へば共濟組合の如き——勞働組合にあらざるものも亦之を行ひ得る。加之、各國最近の傾向は漸次に共濟事業の國家的統一に進みつゝある。國家的社會保險制度の顯著なる發達は各個組合の小規模なる共濟制度をして漸次に其の重要さを失はしめつゝある。此故に、勞働組合自らが共濟事業を行ふことは寧も法律上之を禁止すべき理由はない。けれども、それは單に勞働組合が便宜上同時に行ひ得る仕事に過ぎずして、決して其本質ではない。組合の本質は何所までも團體交涉的作用に存するものと云はねばならない。

次に又勞働組合は政治的作用を行ひ、又社會運動的の作用をも行ふ。此等も亦合理的の範圍を守る限り、寧も勞働組合に向つて之を禁止すべき理由はない。けれども、團體的政治行動は一般の政黨政社も亦之を行ふ所であり、社會運動は又勞働組合にあらざる團體と雖も尙廣く之を行ふ。政治行動はそれが勞働組合によつて行はるゝと否とに關せず選擧法其他政治行動一般に關する法規を以て之を規律すれば足りる。社會運動も亦それが勞働組合によつて爲さるゝと否とに拘らず、すべて之を取締るべき一般法規を以て規律すれば充分である。若しも勞働組合法を論ぜむとする者が此等の行動に關する考慮を中心とし、獨り之にのみ拘泥して組合を觀察するならば、其の說く所必ずや勞働組合の本質を逸す

るであらう。

勞働組合の勞働組合たる所以は、實に其の團體取引に在る。團體の力によつて資本家に對立し、以て其の勞働の獨占者たる所以を發揮する。さうして對等の關係に於て資本家と平等の取引を行ふ。かくして當事者相互の間に協議調はざるとき、資本家或は買はずと云ひ、勞働者或は賣らずと稱して、玆に同盟罷業を生じ又工場閉鎖（ロツクアウト）を惹起すことがあるであらう。けれども、賣らず又買はざる畢竟夫れ自身が目的ではない。それは單に良く賣り安く買はむが爲めの戰術に過ぎない。又一度協議調ふとき、其所には眞に當事者双方の對等的交渉による勞働協約が成立するであらう。さうして以後個々の勞働者は從來彼の獨力によつて得ること能はざりしものを協約によつて與へられるであらう。かくして、契約自由の原則の下に於て個々の勞働者が其の單獨取引を以てしては到底得ることの出來ないものを團體の力により團體交渉によつて取得することが出來る。其所に勞働組合の本領が存在するのである。

勞働組合の法制を研究せむとする者は、組合の此の本領を捉へねばならぬ。さうして、其の資本主義經濟組織必然の所産なることを考へ、それによつて初めて契約自由の原則が勞資關係の上に正しき適用を現はし得る所以を理解しつゝ彼等をして其の處を得しめ又彼等をして其志を遂げしむべく力を致さねばならぬ。

（未完）

商工日本と農村日本

室伏高信

Der Ackerbau vernachlässigt, Dann geht zugleich auch jede andere Tätigkeit, auf dem Lande, wie auf den Meere, zugrunde.

Sokrates bei xenophon

一

農村問題は一つの流行問題と化したがごとくである。やがて忘れられ、やがて旧臭として捨て去られるであらう。今日行はれてゐるごとき農村問題の理論は、忘れられ、そして捨て去られることが一日早ければ早きほど農村にとつては一日の幸ひである。

試みに思へ、政治家の謂ふところの農村救濟なるものが選擧運動以上の何ものであるか。社會主義者の農村階級闘爭なるものが工業勞働者の覇權を確立する目的のほかの何ものであるか。そして滔々たる學者の諸君の農村論なるものが資本主義的經濟理論のほかの何ものであるか。

人々は農村問題を論ずるために資本主義的都會的經濟學をもつてし、新らしい時代のためなる新らしい原理を見出すことの代りに、依然として古るき社會の規範と價値觀念とをもつて來るべき時代を律せんとしてゐるのである。古るき革袋に新らしい酒を盛らんとしてゐるのである。農村のうちからきたるところの要求ではなくして農村のほかからきたるところの聲である。味方の陣營からきたるところの農村論ではなくして敵の陣營からきたるところのものである。農村論のいよ〱多くして農村のいよ〱飢ゆるのも亦た所以ある哉である。

二

農村問題が世界の全文明の問題にかゝつてゐるといふことは私がしばく繰返してきたところである。（改造一昨年四月號「都會文明から農村文化へ」參照）一つの國についていへばそれは一つの國の立て方の問題である。私は農業立國か商工立國かの問題であるといはんとするものである。

凡ての國が嘗つては農民國であつたやうに日本もまた嘗つては農民國であつた。國家なるものを意識せざる時代において最も純粹な農村社會であつた。その時代が何時の頃まで行はれたかを詳らかにすることはできないが封建政治の間において商業主義が次第に發達してきたことは今にしてその跡を尋ぬることが容易である。荻生徂徠が「工商盛んに成つて農業の衰ろ」といふたのに見ても、商業主義的傾向が獨り都會のみならず農村の間にも漸く侵潤の風ありしことを見るべきである。

明治維新は日本に於ける商業主義の勝利である。開國なるものは商業主義の宣言である。商業主義はまた同時に工業主義である。近代の商業主義はカルタゴ時代のそれのごとくにただなる商業主義ではない。商業主義であるとともに工業主義である。工業は寧ろ主人である。工業なき商業は最早や近代世界に於ける競爭に堪ゆることの不可能なること、和蘭や西班牙の實例がよくこれを語つてゐるのである。日本の商業主義もこゝに必然に工業主義を伴つてきた。商工業主義は世界の大勢に促されて默々として發展してきた。人々が尙ほ日本が農業國であると考へてゐる間に、農業の基礎は傾き、商工業がこの國に覇權を宣言したのである。豐葦原の瑞穗國が滅びて一つの猶太帝國が樹立されたのである。

明治維新の日本は商工化の日本である。歐化主義の日本は商工立國の日本である。憲法といひ、議會といひ、政黨といひ、普選といふ。その根本において商工立國である。商工日本の表徵である。普選に至つて商工日本の果實が既に熟したことを意味する。一切は都會民の制度である。十九世紀的唯物主義の勝利である。英國的商工主義が馬鞍に乘つてデモクラシー日本が生れたのである。デモクラシー日本は商工日本である。農村日本が滅びて商工日本が起つたのである。「商工盛んになつて農業衰ふ」のである。

デモクラシイは常に都會の産物である。それは獨逸の山林の中から生れたのでもなく、またクロムウェルの軍隊から醸造されたのでもない。遠く都會の歷史に遡航して、私たちはデモクラシイの歷史を尋ねることができるのである。希臘の都會政治

がそれなのである。近代的民主主義もまた勿論近代的都會政治とともに生れたのである。ニイチエが罵しつて Keine Philosophische Rasse といふたところの國民、近代的商工業の祖國から近代的民主主義は生れたのである。世界の民主化は世界の商工化である。商工化あり、民主化がある。商工化は原因である。民主化は象徴である。世界の民主化は世界の商工化の象徴である。日本の民主化は日本の商工化の象徴なのだ。

政黨があり、政黨政治があり、普選があり、商工日本の基礎は確立した。海にはドレツドノオトの群がある。陸にはナポレオンの軍隊にも勝るところの常備軍がある。キネマ、ホノ、小說、ラヂオ、スポオト、新聞、カフエ、ダンス、ボツブド・ヘエア、社會主義、ダダイズム、あらゆる文明の制度が完備して日本は押しも押されもしないところの文明日本である。都會日本である。商工日本である。

商工業は一歩々々進んできた。工業輸出國となつてからも既に十數年、一九一〇—二〇年の間に工業既製品の輸出は七倍以上の增加を示した。それの輸出超過は一年に六億である。商工日本は既に久しく續いてきたのである。

× × × × ×

商工日本が興隆しつゝある間に農村日本が沒落した。人々か商工日本の華やかなる興隆に眩惑されつゝある間に農村日本が一歩々々沒落したのである。

農村日本は何處にありや。豐葦原ノ瑞穗の國は何處にありや荻生徂徠はまことにわれ等を欺かず。商工盛んにして農業衰へたのである。商工興隆の一歩々々は農村沒落の一歩々々であつたのである。

或は商工興隆の何年かにおいて農業もまた多少の進步があつたといふのかも知れない。私は農產物が增大したことの統計を知らざらんとしてゐるのではない。十年間に一割なり、或は二割なりの增加があつたのかも知れない。農產物の統計なるものが或る點までは信賴することができるであらう。その間に農業生產物の經濟的價値と、農村生活の文化的價値とは急轉直下の勢をもつて下落した。マアクスの所謂「社會的地位」が下落したばかりではない。物質的生活さへも殆んど何等の加へるところはなかつたのである。

富は都會に集中された。農村が荒廢して都會は一個の贅澤場のごとき觀を呈した。農民の負擔がその收入に比べて苛酷であるといふことが農業代議士の例年の不平であるのに、農民が主として負擔するところの地租は日本の今日の財政ではこれを地

方に委譲することができるまでに無意味なる小額にと落ちてきた。地租の問題は政治問題としては年々重要さを加へてきながら、財政上の問題としては年々その重要さを減じてきたのである。正に經濟生活に於ける農民の地位が日一日と沒落してきたのだ。

農民離村が始まつてから既に久しい。文明日本、從ひて商工日本の始まつた時からして農民離村は始まつてきたのである。德川時代において農民離村のことは既に政治家の頭を惱ましたところであり、これがために種々なる政策が用ゐられたのであるが、機械文明の輸入とともにこの傾向が急激な勢をもつて進められたことはいふまでもない。全人口に對する農民の割合は一年々々と秩序を追ふて減少してきた。明治四十三年から大正十一年に至る十三年間においてその割合の減少してきたことはほゞ一割にも垂んとす。農民人口と商工人口とは今や相半ばせんとするの狀態にある。數年を出でずして商工人口が農民を超ゆるに至るであらうことは今日までの趨勢をもつてすれば一點の疑なきがごとくである。山片蟠桃の所謂「市井盛んなれば田舍衰ふ」の時代が正にきたのである。商工日本が生れて農村日本が滅びたのである。

商工日本か農村日本かといふの時代は既に遠くへと去つた。開國日本が決定した時に、農村日本の沒落は既に始まつたのである。西洋文明が日本の政治的、經濟的、若しくは文化的秩序となり始めた時に、農村日本の基礎は既に傾いたのである。西洋文明を輸入した半世紀の間に農村日本は商工日本によつて全く置き換へられてしまつたのである。

三

農民の負擔苛重であるといふことも農村疲弊の一つの原因であるであらう。孟子の謂ふところの汝の庭前にきたところの隣家の鷄が農民の手から奪はれつゝあることはたしかである。その限りにおいて農民負擔の輕減もまた全然無益なことだといふことはできないであらう。

地租が全廢されたと假定せよ。日本全國を通じて七千餘萬圓、その全部が農民によつて負擔されつゝあるものだとするも、日本の農家一戸當りの割合は十四圓である。一ケ年十四圓の負擔は新聞紙一ケ年講讀料に當るであらう。租稅のために十四圓を投ずるよりも新聞紙のために十四圓を投ずることが農民にとつてより利益であらうことを私は拒まんとするのではない。それによつてけれど農村は救はれ、農村は興り、田園に花咲き鳥歌ふの春が再び回復されることができるであらうか。

農村問題は十四圓の問題ではない。況んや地租を三厘減じ、三厘減じ、若しくは地方に委讓することの如何なる問題でもない。十四圓の問題が、若しくは十四圓の何分の一かの問題さへも、政治家の主要なる農民政策として尙ほ農民の利害に訴へることができるといふことは、それによつて偶々、今日の農民が如何に貧しきかを證據立てゝゐるにしかすぎないのである。

四

革命的農民運動は常に地主階級の廢止を目標として戰つてきた。When Adam delved and Eve span, Who Was then the gentleman ——英國の農民運動はジョン・ボオルの時において既に地主階級の廢止を目標として戰つたのである。農村における Villeinage の廢止のために、從ひてまた「地代掻き集め人」の廢止のために多くの戰ひが戰はれ、多くの血が流されたのだ。ロシヤのナロウドニイキ、從ひてまた社會革命黨がミイルの理想のもとに戰つてきたこともよく人の知るところである。

ロシヤ革命の勃發は革命的農民運動の理想を實現せしむべくよき機會であつた。多くの農民たちは、中央政府の力に俟つことなく、彼等自らの手によつて地代掻き集め人を全ロシヤにおいて驅逐した。土地は農民の間に分割されたのである。政府はこの事實をうけとつた。ボルシエヰキ政府はこの事實をありのまゝに承認するのほかはなかつたのである。

ロシヤの地震は、少くとも東方歐羅巴の全土を動かした。土地制度の革命的變動は到るところに行はれた。波蘭でも、リスアニアでも、ラトビアでも、チエツコ・スロバカイでも、ブルガリアでも、ロマニアでも、匈牙利でも、エソニアでも、ユウゴウスラビアでも、大地主は到るところに廢止されたのである。土地は何人にも屬せず、神に屬する——土地は耕作者に屬するといふの原則が東歐の諸國において實現の一歩を踏み出してきたのである。

地主階級の廢止、若しくは大地主の禁止によつて東歐農民は何ものを加へることができたであらうか。ロシヤの農民たちは農耕地の殆んど全部を彼等の手に收めた。三萬の大地主がもつてゐたところの七千萬デシアチイネの大部分が農民の手に移つたことは勿論である。ブハリンの計算によると農耕に適する土地のうちで農民が新らたに獲得したものは四千萬デシアチイネに達するといふことである。ある地方では農民一人當りの土地が二分の一デシアチイネから四分の三デシアチイネに增加し、他の地方では十分の一デシアチイネから五分の一デシアチイネ

に増加し、また他の地方では五分の一デシアチイネから五分の二デシアチイネに増加したといふことである。三十六縣の統計によると農民の所有地は九四、七二一、〇〇〇から一一六、一二八、〇〇〇デシアチイネにと増加したのである。

農民はたしかに得るところがあつたのである。久しく惱まされてきた「土地飢饉」はこれによつてある程度まで癒やされたことは事實である。農村における直接搾取者の階級が跡を絶ち、從ひてまた農村における直接被搾取者階級が跡を絶つたことは事實である。經濟的にも社會的にも、貧困農民のえたところのものは、決して鮮しとしないのである。ロシヤ革命は縱令他のあらゆる點において失敗であつたにしても、そしてまた農村問題においてマアクス主義的土地保産化の理想が遠くへと追ひやられたとしても、ロシア農民のえたところのものは世界の歴史を通じて最大收穫の一つであることを失はないのである。まことに農民解放運動の第一歩はこれによつて既に成しとげられたといはねばならぬ。

農村問題はこれによつて解決されたであらうか。

日本においても、ロシヤのそれのごとくに、地主階級が廢止されたものと假定せよ。田畑合せて二百八十萬町歩の土地が農民の手に加へられ、小作料として地主階級の手に收められてゐるところの千五六百萬石（川）と二千萬圓内外とが農民の手に歸するであらう。そのうち一町歩あたり百圓若しくは百五十圓内外の租税とその他の費用を除くとも、農民のうるところのものは決して少しとはしない。百五十萬の小作家計と二百二十萬の自作兼小作農家とがこれによつて彼等の生活に加へるところのものが決して少いとはいへないのである。

それは尚ほ農民の心を燃やすことができるであらう。無産農民の心を惹くことにおいてかくのごとき誘惑的な目標は他にこれを求めることができないであらう。そして農民運動の目標が小作人廢止に向つて不斷に發展するであらうといふこともまた一點疑ふべからざる事實であらう。

農民はけれどこれによつて復活することができるであらうか。農民の貧困はこれによつて救ふことができ、農村振興なるものはこれによつて實現され、そして農村問題がこれによつて解決されることができるであらうか。

五

自作農は何故に貧しきや。農村は何故に貧しきや。個々の農民ばかりでなしに[illegible]としての農民が何故に貧困であり、また何故にいよ〳〵貧困を加へつゝあるのであらうか。

「それは農民的危機を救ひはしなかつた」――ロシヤ革命の結果についてシェフラアはかくのごとき嘆聲を押えてゐることはできなかつたのである。ロシヤ農民は彼等が多年渇望してゐたところの土地の獲得によつて彼等の農民的危機を救ふことはできなかつたのである。

五十億金貨留に當るだけの廣大な土地が無償にて彼等の手に落ちた。農村の貧困はけれど依然として變るところはなかつた。ロシヤ農民の大部分は依然として貧しく、依然として無知である。「革命の四年間」に農民の九十五パアセントは、一枚の新聞紙をも購ふことはできなかつた。小學教師の多くは生活の資を求めるために彼等の職業を變へた。五十億金貨留の土地を新に獲得しながらロシヤの農民は舊のごとくにマホルカの一服に彼等の勞働を慰めるのほかはなかつたのである。「何ごとも變りはしなかつた！」失望の聲が再びムシイクの村を暗い影へと導かずに置かなかつたのである。

ロシヤ革命の經驗を俟つまでもない。日本における自作農の貧困であることは、農村問題の原因が、獨り農村階級問題であるものでないことを示してゐるのである。自作農は何故に貧しきや。農商務省の統計に從へば一町五段の田と六段の畑地とを自作し、そして更に六段の山林を所有するところの日本中産農民は一年間の努力によつて一千四百九十圓餘の收入があり、そしてこれを支へるのに一千六百七十圓餘の經費を要するとのことである。差引一年間に百八十一圓の損失である。素樸なる中産農民の生活において尚ほ且つ一年間百八十一圓の損失である。親も兒も、妻も良夫も田園に出でゝ營々勞働することの一年において彼等のうけとる報酬は百八十一圓の損失であるのだ。

農民貧困の唯一つの原因が階級的搾取にあると假定せよ。小作人貧困の唯一つの原因が地主の勞働搾取にあると假定せよ。自作農は何處に貧しきや。

自作農なるものは、資本家的搾取者でもなく、またプロレタリア的被搾取者でもない。彼は一個獨立の階級である。資本家でもなく、プロレタリアでもないところの一個獨立の階級である。この一個の獨立階級は何故に貧しきや。

農村の貧困はたゞなる小作人の貧困だけではない。農村全體としての貧困である。Class としての農村の貧困である。農民預金が大正九年に二億七千五百萬圓であるのに對して同年度における農民の負債は土地を擔保とするものだけで優に十億圓を超えてゐる。土地以外の擔保または無擔保負債を合算すると優に二十億圓に達するであらう。これを大正三年に比べると六年間にして三倍の激増なのである。農村が全體として如何に貧

困化の速度を加へつゝあるかはこの一事によつても知ることができるのである。農村は何故に全體として貧困化し、そしてまたその貧困化の速度を早めつゝありや。

六

農村貧困の原因はたゞなる租税の問題でもなく、またたゞなる地主の階級的搾取の結果でもない。

近代民主主義はあらゆる點において都會民の政治である。都會民によつて行はれるところの大社會制度の一つである。近代民主主義の幾世紀において都會は膨張し、農村は衰亡したのである。それはけれど最早やロオマの獨裁政治のごとくに諑擬的でもなく露骨でもなく、あらゆる點においてより賢明であり、狡猾であり、巧妙である。それは最早やロオマにおいてのごとくに、都會民の自由において農民に課税してゐるのではない。農民も都會民もともに租税の負擔者である。卻つて都會の負擔するところの租税が次第に增大しつゝあることが事實なのである。昔は農民が殆んど唯一の租税の負擔者であつたのに對し、一國財政のうへにおける農民の地位は今日は日一日と重要さを減じてきたのである。富が益々都會に集中しつゝあるからである。

地主の地位と雖も今日は改善されることの代りに卻つて次第に危險に瀕しつゝある。土地貴族が次第に沈んで都會的貴族が次第にその富と力とを高めたのである。昔はウオァヰックの伯爵が毎日三千人づゝの客に饗應したといはれたが、今日大倉喜八郎が一日百萬圓の賀宴を張るの時代となつた。中世紀においてはたゞなる行商人的なものであるにしかすぎなかつたところの町人階級が今や勃興して、大地主の經濟的權力は最早や無意味なる片隅へと落ちたのである。ギゾウに從へば十七世紀の初めにおいて英國下院議員の富は既に上院議員の三倍に當るといはれたのである。倫敦のプリマウスの、ブリストルの、若しくは大阪の町人階級がその富を膨張させて土地貴族が一歩々々その經濟的勢力を喪失したのである。

土地貴族が次第にその經濟的地位を落しつゝある一方に、農業下層階級の生活はいよ／＼窮乏を加へつゝある。小作人の生活が如何に慘憺たるものであるかはあまりに明らかである。農業勞働者のうけとるところの賃銀は商工業主義の諸國を通じて都會勞働者のそれよりは遙に以下である。英國では都會勞働者のうけとるところの賃銀が一週三磅であり、四磅であり、または五磅である時に農業勞働者のうけるところの賃銀は一磅八志（一九二二年）である。日本においては農業勞働者の賃銀は

最高時において一日一圓五十錢に達しないのである。勿論農業勞働者は賃銀のほかに一種の便宜をうけとることのあるのは事實である。例へば地主の家に住み、若しくは食物、被服のうへにおいて便宜をうけることもあるであらう。それはけれどたまく農業に於ける勞賃が商工業のそれのごとくならざることを證據立てゝゐるにしか過ぎないのである。

自作農が窮乏し、小作農が窮乏し、農業勞働者の賃銀が低く、そして地主の經濟的地位もまた次第に傾いてゐることが凡ての商工業主義の國家を通じての實勢である。misère としての農民の窮乏である。misère としての農村の衰頽なのである。アダム・スミスの時において既に最も不利益な企業であるといはれたところの農業が今日に至つていよく其の不利益の度を加へたことを意味するものでなくてなんであらう。

七

今日は農業は最も不利益な企業である。新大陸のごとき人口稀薄にして且つ未墾地の多きところにおいては農業は勿論決して不利益な企業ではない。商工立國の國家においてはけれど農業は常にそして必然的に最も不利益なる企業である。農民離村の傾向はこの事實を雄辯に語つてゐるものである。

農民離村の原因はたゞ農業的企業の不利益の事實にあるといふのではない。昔のロオマの農民は都會的贅澤を喜びて土地を棄つてロオマへと集まつたといふ。日本の徳川時代においても多くの遊民階級が經濟的原因によることなくして都會に集まつたとの事實を私は知らざらんとするのではない。今日においてもまたかくのごときハイカラな百姓がないといふのではない。東京に集まつてくる學生の多くが一種のかくのごときハイカラであり、遊民であることは拒むことのできない事實である。一方に小作人の汗と膏とを搾取する地主があり、それによつて法律を政治を文藝を——要するに寄生階級の知識と技術とを學ぶところの數萬の學生が東京に遊んでゐることはたしかである。小作人の汗と膏とは、けれどそれがたゞなる小作料の關係において存在する限り、九十余萬の「耕さざる土地所有者」——日本には九十余萬の耕さざる土地所有者がある——の子弟の都會的生活の慾望を滿たすにはあまりに寡少である。彼等の慾望は彼等が田舍地主から都會の町人となり、番頭となり、知的プロレタリヤにと落ちることによつて充足の可能性を帶びてくるのである。即ち田紳の階級から「紳士」の階級または知的奴隷の階級にと落つることによつてのみ滿たされることができるのである。

ウエストミンスタアは今日は最早ウヰリアム・リユウハスの食堂として存在してゐるのではなく、東京は最早や田舍大名の娛樂場として存在してゐるのではない。都會の贅澤は都會人によつて營まれ、都會の娛樂は都會人によつて享樂されるのである。人々は最早や農業的企業によつて獲得したところの利益によつて都會的贅澤を購ふことはできなくなつたのである。富が田舍を去つて都會へ集中したのである。企業が田舍において停滯、都會において膨張したのである。こゝに贅澤は今日は都會人の特權なのである。政治も、經濟も、科學も、藝術も、都會人の特權であるごとくに凡ての贅澤は今日は都會人の特權なのである。

八

農業は何故に不利益な企業であらうか。商工業主義の國家において農業は何故に不利益な企業であらうか。私は敢て商工業主義の國家をいふてゐるのである。人口稀薄な國家、例へば濠洲のごとき、加奈陀のごとき、若しくは南米の諸國のごときにおいては、農業は決して不利益な企業ではないからである。

日本の農村衰頽の原因をもつて、日本の農業經營が、尙ほ原始的狀態を脫することができないからであるとなすことが今日では學者の定說であるかに思はれる。日本の農業規模が過小であり、その經營法が幼稚であることは殆んど凡ての學者が口を揃へて批難するところである。こゝにおいて農業の資本主義化を說き、機械化を說き、農村電化を說くことは一つの流行である。彼等は口を開けばいふ農業の經營規模を大にせよ、農業を機械化し、電化し、資本主義化せよと。農村問題は今日は農村機械化、電化、資本主義化の問題によつて解決されるものであるかのごとくに思はれてきたのである。滔々たる學者の諸君の農村論なるものはかくして一つに農村の機械化、電化、資本主義化の理論であり、そしてそのほかの何ものでもないのである。然らば農業經營の幼稚であるといふことが我が國農村衰頽の唯一つの、若しくは最大の原因であらうか。

日本の農業規模が過小であるといふことは事實である。また日本の農業が尙ほ幼稚な狀態にあることも事實である。これ等の狀態が尙ほ改良さるべき何ものかをあまされてゐることは疑のない事實である。われ／＼は尙ほ諸國の農業から多くのことを學ばねばならぬであらう。農村衰亡の最大原因がこゝの點にあるや否やといふことは、けれどもそれとは別個の問題でなければならぬ。

日本の農業は今日に至つて初めて幼稚な經營をとるに至つた

のではない。農業の經營に於ける改善は、緩慢ではあるにしても、次第に進んで來たことが却つて事實なのである。農業生産物が年一年と增大してきたことは數字の欺かざる記録である。農業の改良が一方に行はれながら農業が次第に不利益な企業となり、人口が田舍を去つて都會に集つて來たのは如何なる理由に基づくのであるか。私の答はかうである、今日の日本の農業が不利益であり、そして人口が田舍を去つて都會に集中することの原因は、農業經營そのもののうちに內在するところのあるものだといふことはできないのである。原因は內にあるにあらず、外にあるのである。

農村衰頽の原因を農業經營方法のうちに求めんとするものは、何故に幼稚な昔の農業が田舍の衰頽をもちきたさなかつたかを說明することはできないのである。また歐羅巴の諸國のごとくに比較的進步した農業經營を行はるゝところに於て何故に農村衰頽の行はれてきたかを說明することは出來ないのである。農業經營の大規模なること亞米利加に及ぶものはないであらう。農村機械化の行はるゝ亞米利加のごときはないであらう。しかも亞米利加を通じて都會人口集中の傾向が益々甚だしく、また從つて富の都會集中が益々甚だしく、そして今日六十萬の農民がその農場を失ひ、または破産の危機に瀕しつゝあるは何故なるや、都會主義の行はるゝところ、そこに農村に「候補鬼」の群なることとの必然なるは何故ぞや。

九

日本の農民は彼等の田園收獲の減少若しくは比較的減少のために窮乏してゐるのでは勿論ない。況んや今日の農民の窮乏は德川時代のそれのごとくに「荒らし田」の結果であるのではない。彼等の收獲は絕對的にも相對的にも增加である。米の收獲からすれば、明治三十四——八年の五ケ年平均に比べて、大正五——九年の五ケ年平均は三割三分の增額である。栽培面積が八分を增加したに過ぎないのに對し米の產額は三割三分增加したのである。獨逸の農業生産が二十五年間に二倍したといはれるのに對し必ずしも大なる遜色あるとはいへないのであるしかもこの間において農家戶數は殆んど停滯の狀態であり、且つ副業は著しく發達し、就中養蠶業の發展は著しいものがあり、明治三十八年の生絲產額百九十四萬貫に對して大正九年には實に五百八十三萬貫に達してゐるのである。即ち三倍の增加を示してゐるのである。こゝにおいて農家一戶當りの農業生産物は優に四五割を增加したと見ることができるであらう。それにもかゝわらず農民の負擔が益々增加し　農村がいよ／＼疲弊するの

は何のためであるか。

農商務省の調査によると日本の中産農民は次のごとき生活をなしてゐる。

自作農（家族七人分）の生活

一、收入の部	
田米收獲高（所有耕作地一町四段九畝）	一、一三二、八〇圓
田麥收獲高（所有耕作地一町四段九畝）	八一、六五
畑麥收獲高（畑地　六段一畝）	八六、三九
園藝其他（養蠶、茶、野菜等）	一八五、七八
山林收入（六段七畝）	一五、一七
計	一、四九〇、八九
二、支出の部	
食糧（家族七人分）	五三九、〇五
被服費	一五七、八四
住宅費（修繕、電燈、石油、薪炭等）	一一四、二五
酒類	七四、五九
農業經營費	一三五、八七
公費及寄附	一八四、九二
兒童教育費	二九、一八
雇人給料	六五、三〇
雜費	二七一、四七
計	一、六七二、四二

かくして農民の負擔する公共費なるものが相當の額に達してゐることは事實である。十分一以上は奪はずといふた昔の王道から見れば租税その他の公費が農民のために減少されなければならないことも勿論である。農民生活費の大部分をなすところのものは、けれど農業經營費、酒類、被服費、石油、電燈、食糧費の類である。そして食糧費の可成りの部分が味噌、醤油、鹽、砂糖の類である。これ等の諸費用は嘗つては多くは自給自足されたところのものである。農業と工業とが今日のごとく分離しなかつた時代においてはこれ等のものは多くは農民が自給自足したところのものである。そして今日はみな金錢によつて購はなければならないところのものである。農民生活費の殆んど金部は嘗つては自給自足したところのものである。農民は殆んど一圓の金錢をも所持することなくしてこれがために生活の困難を訴へることはなかつたのである。今日の農民は生活必需品の一部を除くのほかは悉く金錢をもつて購はねばならぬ。即ち中產農民は少くとも一年に一千圓以上の金錢を所持することを

なくしては農業を經營することも不可能なのである。一千圓以上の金錢を所持してしかも尙ほ嘗つて見ざりしところの窮乏の境に立つてゐるのである。即ち農民窮乏の主要なる原因の少くとも一つが商工業の分立にあるといはねばならないのである。

昔の農民は農民であるとともに一種の手工業者であつた。彼は彼自らの家族のために紡織業者であり、靴製造人であり、酒造家であり、家根師であり、大工であり、下駄職であり、左官であり、醬油釀造業者であり、農具の製造者であつたのである。しかもそれ等のものゝ多くはその原料さへも自給し、良夫が田園に出でゝ働く間に妻が紡ぎ、農閑の時に大工となり、左官となりて、雨降れば家にあつて靴の、下駄の、草履の製造工業に從事したのである。從ひてこれ等のものゝ大部分は農民が殆んど何等の代償をも拂はず、且つ農工藝美術の創造的享樂のうちに成しとげたところのものである。商工業の分立、就中機械工業の發達とともにこれ等の田舍工業は悉く農民の手から奪はれ、一切のものが金錢によつて購はなければならないところのものとなつたのである。こゝに農民の收益が一方に相當に增加するとも農民は一方にえて一方に失ひ、恐らく一方に得るところのものが一方に失ふところのものと伴はなかつたのである。私はこゝに近代農民窮乏の一大原因を見なければならないと考へてゐるものである。

×　×　×　×

これとともにまた重大なる結果が起つてきた。農民は今日は一個の企業家である。農民は凡ての貨物について賣手であるとともに買手である。今日は彼のかゝわるところの一物と雖も商品でないものはないのである。多くの經濟學者は今日の農業經濟における缺陷の一つは事業經營と家計との混同されてゐることだとなしてゐる。資本主義の經濟學者が相競ふてかくのごとくに論んずる。カウツキイのごとき社會主義者もまたかくのごとくに論んじてゐるのである。Haushalt と Betrieb との混同が農業において尙ほ存在してゐることは事實である。農民の精神においてはけれど今日は最早や一切の貨物について買手であり、賣手である。米一升と雖も市場價格の意識なくしては最早や消費することができなくなつたのである。こゝにおいて昔の農民心理なるものは今日は商人心理によつて置き換へられてきたのである。素撲なる農民精神が滅びて狡猾なる商業的精神がとつて代つたのである。即ち農民と雖も今日は一個の純然たる唯物主義であり、拜金主義者なのである。この精神のあるあり、農民の滿足とするところのものが物質的獲得と享樂とに移

つてきたことは當然なのである。

しかも尙ほ農民の物質主義を鼓舞すべき他の一つの重大な原因がある。私は旣に農村における農工藝美術の滅亡を指摘した。それによつてまた農民が經濟的影響をうけつゝあることを指摘した。

農村における農工藝美術の滅亡はたゞに農民の生活に對して經濟的影響を與へたばかりではない。農工藝美術の滅亡とともに農民の創造的精神の死滅したことはあらゆる點において農民生活に重大な結果をもたらすことなくしては置かなかつたのである。創造的享樂の喪失は農民生活における享樂の喪失である。この享樂の喪失は他の何ものかによつて補はれなくてはならないところのものである。創造的享樂の喪失は官能的享樂によつてのみ置き換へられるところのものである。創造的享樂を失つた農民が物質的方法のうちにたゞ一つの滿足の道を求めてきたことは自然の成り行きでなくてはならない。少欲知足、これ古の農民である。金錢的慾望と物質的快樂とを追ふて走る、これ今日の農民である。不斷に擴大して止むことなきは物質的欲望である。昨日滿足したところのものは今日は不滿足である。今日足るところのものは明日は不充分である。一度物質の海に船出した農民は常に足ることを知らないところの農民である。無慾而天下足。これ古のことである。其民缺々、これ今日の農村である。

人々は農民の生活が贅澤になつたといふであらう。ある點において贅澤を加へたことは事實である。これはけれど如何なる意味においても農民の責任ではない。農民の自由なる撰擇によつて農民が贅澤となつたのではない。農民が欲すると欲せざるとにかゝわらず、可能の程度において贅澤とならざるをえなかつたのである。創造的精神が死滅し、そして創造的精神が死滅したがために物質的精神がこれにとつて代つたからである。文明に伴ひ、商業主義に伴ひ、そしてまた創造的精神の死滅に伴ひ、物質的欲望の增大をもちきたすことなくしては生活に堪ゆることができないからである。

こゝに農村生活は、その生産の增大とは逆比例して、不斷に窮乏の道を歩むできたものといはねばならぬ。

×　×　×　×

農村の窮乏をもちきたすべき更に重大なる一つの原因がある。都會によつて行はるゝところの農村搾取である。商工業によつて行はるゝところの農民搾取の事實がこれである。

私はこの點においてマアクス主義における餘剩價値說に滿足

することのできないものである。即ち餘剩價値の成立が生産行程においてのみ成立するものとなすところのマアクス經濟學に組することのできないものである。

マアクスに從へば資本家の利潤は、從ひて餘剩價値の成立は、凡て生産行程において生ずるところのものである。從ひてまたそは流通行程において成立するところのものではないのである。

マアクスの餘剩價値説は、資本家が何故に富み、勞働者が何故に貧しきかを説明するには充分である。また勿論私は勞働の搾取をもつて資本家の利潤の原因をなすものでないといふのではない。それは生産能率説のごときに比べて、若しくは資本家の利潤が資本家の勞賃なりとするごとき如何なる學説よりもより多く眞實に近づいてゐるといふことを拒むものではないのである。それはけれど何故に都會の資本家かより高率の利潤をいけとり、商工業が何故により利益ある企業であり、そして富が何故に「全體としての都會」に集中するやを説明することはできないのである。（この點については拙著「土に還る」の結論に述べてゐるからこゝに繰返しては述べない。）

× × × ×

都會は一つの搾取者である。都會は、全體として一個の搾取者である。商工業主義の行はるゝ限り都會は一個の搾取者である。

（一）都會は經濟的權力の集中と、並に生産における便宜を獨占する場合に、獨占價格を創定することが可能である。

（二）都會は經濟的權力を掌握するがために、また從ひて政治的權力を掌握するがために租税政策のうへにおいても物價政策のうへにおいても特種の利益を獨占することができる。

（三）經濟的機關、政治的機關、軍隊、教育機關等が都會に集中してゐる結果、上流寄生階級がまたこゝに集中し、たゞに都會勞働者のみならず田舍勞働者をも搾取することが可能でありまた必要である。

（四）流行その他の都會的價値を勞働によらずして創造し、人々の好奇心または虚榮心に訴へて眞實なる勞働の多量と交換することによつて田舍を搾取することができる。

（五）賣藥のごとき多くは欺僞廣告によつて、若しくは愛國婦人會、在郷軍人會等のすることき寄付金の募集によつて、都會にはしばしば寄付金の强制募集によつて、都會における遊民、即ち寄生階級を支持することができる。

かくのごとくにして都會は一個の搾取者である。「巴里の贅澤

は農民の汗と脊とである」とルソウのいふたところは凡ての大都會についていふことができるのである。

農業をして最も不利益なる企業たらしめるところの原因に、」けれど商工業主義そのものである。今日の商工業主義は勿論最早や昔のマアキャンチリズムそのものではない。彼は最早やコルベエルのしたごとくに穀物の輸出を禁止することによつて農業生産物の價格を引下げんとするがごとき露骨なるものでもなく、ロシヤ共産政府の獨裁政治のごとくに農民の餘剩生産物を暴力によつて奪取せんとするごとき武斷主義でもない。また日本の徳川時代におけるがごとくに「士工商遊民の國用不足となるゆへに農民を虐めんより外の事あるまじ」でもない。從ひてまた多くの農民は却つて都會の商工業者を崇拜し、愛慕し、決してロシヤの農民がボルシエヰキの官吏に對してするごとくに玉葱をポケツトに入れてこれに臨むがごときことはないのである。

都會の政治家は常に農民問題を口にすることを忘れないだけの智慧をもつてゐるのである。各種の政黨は、英國においても、獨佛においても、米國においても、若しくは日本においても、農村振興についての一項を用心深く彼等の決議のうちに加へることを決しく忘れはしないのである。この巧妙なる政治家、民主々義のデマゴオグこそ、けれど眞に農民の汗と脊との搾取者であると私はいふのである、

商工業主義の國家においては、都會人口は最早や自國農民の生産物にのみ依賴するところの愛國者であるのではない。彼はナショナリストではない。インタナショナリストである。工業原料においても、若しくは食糧品においても、彼等の受くるところの供給は世界の市場からである。世界の農民を供給者として彼等は立つてゐるのである。印度の農民から棉を輸入し、支那から米を輸入する。より低き勞賃において、また從ひてより低き生産費において生産されたところの農業生産物を輸入しきたつて內地の農業と競爭に入りこましめるのである。農業生産物の價格はこゝにおいて世界における最低生産費の國における農産物の價格標準にと引落とされなければならないのが當然である。この點である。私は敢ていふ。資本主義の諸國における農業衰頽の原因、農業が最も不利益なる企業にと落ちつゝあることの一大原因は正にこの點にあるのである。穀物條例廢止後における英國農業の衰頽、印度棉花輸入後における日本棉花の滅亡のごときは正にその最も顯著なる實例なのである。

十

農業を機械化するによつてこの狀態を救ふことが出來るであ

らうか。農業の機械化、電化、若しくは福田博士の所謂資本主義化によつてこの狀態を救ふことができるのであらうか。

農村機械化論は今日の農業經濟學者の定說である。獨り農業經濟學者ばかりではなく、今日の農業問題を論ずるものにして農村の機械化を說かざるものはないといつても差支へないのである。即ち今日の農村問題は福田博士の所謂「混沌たる農村問題」であるのではない。機械化に向つてオリエンチイレンされたところの問題である。農村問題についての論議が某々博士等に對する一個の揚足取りに非ずとせば何人も滔々たるこの傾向を認めなければならないのである。即ち福田博士が農村問題の資本主義化を說きつゝある前に、專門家の農業經濟學者の諸君が既にこのことを論じて餘すところはないのである。

問題は農村の機械化、資本主義化、または電化を說くものゝ乏しきにあるのではない。これ等の滔々たる學者諸君の主張する所の農業規模の擴大、農村電化、機械化、または資本主義化なるものが果して可能なりや若しくは農村に何ものをもたらすやといふの點になければならぬ。この點についての解答が與へられざる限り今日の農村問題は眞に「混沌たる農村問題」である。

農村を機械化することは日本においてもある程度までは可能であらう。特に水力電氣の點において最も恵まれたる自然を國有する日本において電力が農業のためにより多く利用されなければならないこともまた多く論ずる必要がないのである。

農業における機械の利用は、私の考では、工場工業のそれのごとくに慘憺たる結果を人間性の上にもちきたすものであると思はれない。そこは工場のごとくに汚穢なる空氣の場所でもなく、また機械の勞働節約が工場工業のごとく甚だしくもなく、從ひてまた機械における勞働が遙に少く分割されるであらう。アダムス・ミスのいふたごとくに工場は農業よりもより多くサブディバイドすることができるからである

農業における機械化は農場を一つの工場と化するものではない。農業機械は農場において日々に使用されるのでもなく、また農業機械は人間の機械に對する統制を破壞するごとき程度のものでもない。

水流に從つて建てられたところの工業工場（三三）が遂に自然を征服して人工的な世界——ハツクスリイ流にいへばマクロコスモスに對抗するところのミクロコスモスをこの地上に建てたのに對して農業における機械は眞に自然の水流に添ふて起り自然征服に向つて進む代りに自然に從つて自然を利用するに至るであらう。從つてミクロコスモスが必らずしもマクロコスモスに對立するのではなく、また從ひて人間の自然生活にかくの

ごとき機械の種類によつて甚しく傷害されるであらうとは思はれないのである。

それはけれど農業における機械の使用が偶々工業におけるがごとき有力なる効果を擧げることのできないことを示してゐるのである。

農業における勞働の分割は空間的ではなくて時間的である。農業における勞働の各々の種類は各々の季節における勞働である。從ひて農業における各々の機械は週期的にのみ効用をもつものである。例へば耕作機は耕作期においてのみ使用され、刈取機は刈取期においてのみ使用されるのである。しかもこれ等の機械需要は、甲の農場においても、乙の農場においても、殆んど時を同じうして存在するところのものである。こゝにおいて機械の使用は一年に一回若しくは數回であるに止まり、一年中の九割九分九厘九毛は使用されることなくして終るのである從ひて機械のなしとげるところの一年間の「勞働節約」は極めて微々たるものである。

微々たるものと雖もこれあるはこれなきに勝るとは直に考へられえられることである。それはけれど機械の製造が無勞無貸にに行はれることを條件としなければならぬ。機械の生産費從ひてまた費用の點を考へるならば、微々たる効用しかもたないところのものに多くの費用を投ずることは不可能であり、こゝに人々は農業經濟における機械の限度を見なければならないのである。

亞米利加は農業機械化の最も多く行はれてゐるところである農業における機械の費用はけれど極めて微々たるものである。一九一〇年の統計によれば一英町當りの機械の費用は合衆國を通じて僅に一弗四十四仙にしか過ぎないのである。建物に對する費用が七弗二十仙、家畜に對する費用が五弗六十仙である時に、機械の費用は一弗四十仙にしか過ぎないのである。これによつて見ても農業における機械の役割が米國においても極めて微々たるものであることを知るべきである。しかも一個につき百弗を超ゆる機械は少く、平均百〇三英町の農場において四百七弗の機械が使用されてゐるにしか過ぎないのである。そしてそは米國における機械農業の發達が不充分であることの如何なる事實をも物語つてゐるのではない。却つて多くの專門家は機械に對する過當の投資が農業經濟にとつて危險であることを警告しつゝあるのである。されば農業機械といふも農業道具のやや發達したものであるにしか過ぎない。多くの學者が聲を大にして農業の機械化と叫ぶところのものもその正體を見來れば工業におけるごとき大規模なる何ものでもなく、實に「機械化」

る　いといふほどのものではないのである。

農業の機械化を叫ぶものはまた同時に農業の大規模經營を說きつゝある。機械の使用される限り農業規模の擴大されなければならないことは勿論である。農業機械の限度はけれどまた農業規模の限度である。農業機械が工業のそれに比べていふに足りないほどの小規模なものであるごとくに、農業經營の規模もまた從ひて工業のそれに比べていふに足りないところのものでなくてはならない。徒に農業規模の擴大を叫ぶことは、農業經營における經濟的機械的自然的限度を忘れたものである。これ等の誇大忘想狂は亞米利加においては比々みな失敗である。Bonanza Farming なるものは到るところに失敗したのである。米國農務省の報告書において記されてゐるごとくに Bulletin, 178) カリフオルニヤにおいても、ダコタにおいても農場の規模は却つて次第に縮少されてきた。西部では一八五〇年に米國における農業平均面積二〇二六英町であつたものは一九〇〇年には一四六〇英町である。そして益々低下の傾向のあつたことは當時の政府報告書の記してゐるところである。西部諸州の實例を見るに一八五〇年に平均六九、九英町であつたものは一九〇〇年には三八六、一英町となり、同年より後の十年間において更に低下して一九一〇年に二九六、九英町にと落ちたのである。

事實は雄辯である。米國における[illegible]的大規模農業の經驗は日本の多くの學者が主張するところとは正に正反對である。それは機械の使用によつて規模を益々大きくする代りに却つて益々その規模を縮少しつゝある。擴大でなくて縮少なのである。今日において徒に大規模農業を唱へ、農業機械化の萬能を主張するは、例へば那須、石坂諸君のごとき專門家、稲田、大河內諸君等素人學者の主張のごときは南北戰爭以前の亞米利加通であり、正に半世紀以上の時代錯誤である。見よ亞米利加農業における近來の統計は機械におけるよりも家畜において增加率を加へつゝあるではないか。「數英町で充分である！」これ亞米利加農業における新らしい聲である。「最も重要なることは最少の土地から最大の利益を舉げることである。これ亞米利加における、大規模農業に對する反逆の聲である。intelligent use of “the little land”「小さき土地」を賢明に使用せよ。これ亞米利加農業に於おける新らしい要求であり、經驗であり、原理であるのだ。高橋農相が口を極めて日本に於ける集約農業の欠點を指摘しつゝある間に A new devlopment is deginning intensive agricultre ——米國における專門家は今やかくのごとくに叫びつゝある。リバアモオア氏のごとき多くの專門家は今や口を極めて「家族的農場」の最も有利であるこ

とを主張してゐるのである。

日本に於ける專門家非專門家の學者の諸君はこれ等の事實を如何に見やうとするのであるか。日本は亞米利加よりもより多く大規模農業、機械農業に適するや、日本の如き山間の多き農村に於て大規模經營は可能なりや。大規模機械は果して、日本において何の用をなすのであるか。徒に農村の機械化を說き、大規模農業の福音を說くことは世界農業の傾向について無知であるばかりではない。日本の狀態について更に甚だ無知である。

福田博士の如きは日本の農村を救ふの道は農業の資本主義化あるのみだとなしてゐる。農村における貧富の隔りをして益々甚しくし、貧困農民をして益々貧困ならしめ、農村に於ける商業主義をしていよ〳〵甚だしきに至らしめやうとするの意であるか。或は農村經濟の危機を救ふの道はこれを措いて他に道なしとするのであるか。然らば亞米利加に於ける資本主義的農業が次第に瓦解して農業資本主義から family farm へと向ひつつある傾向を博士は何と見るのであるか。

これを要するに滔々たる日本の學者博士教授の論ずるところは、たゞに日本の事情に適せざるのみならず正に歐米における十九世紀資本主義の殘肴冷酒である。十九世紀の殘肴冷酒を輸入しきたつて日本の農村を救はんとす。學者と稱せらるゝものゝまことに時勢に後れたる哉。

十一

農村疲弊の原因は商工立國の結果である。商工立國あり、農村疲弊は必然である。農村振興と商工立國とは二律背反である。一國社會の經濟制度にして商工業を本位とするに至れば農業は必然に衰頽し、農業本位となれば商工業は必然的に衰頽せざるをえないのである。

歷史の跡を見よ。商工業主義の行はるゝ國家においては農業は必然的に衰頽し、農村本位の國家においては商工業は必然的に幼稚である。世界的にいへばある時代は商工業の時代である。ある時代は農業の時代である。前者が文明の時代、後者が文化の時代である。前者が人工的生活の時代、後者が自然的生活の時代である。カアライルの言葉でいへば、前者が否定の時代、後者が肯定の時代なのである。

今日は商工立國の時代である。十九世紀の世界が滔々として商工立國に赴いたごとくに、日本もまた商工立國の途をたゞ一筋に走つた。資本主義はこゝに興り、商業的精神はこゝに鼓舞され、經濟學は最も重要な學問にと高められた。人々は彼等の祖先を祭ることの代りにアダム・スミスの二百年祭を紀念し、

日本魂の代りに猶太精神をもつて置き換へたのである。農村日本が滅びて商工業日本が興つたのである。然り、商工日本である。商工日本となつてからの日本農村が滅びつゝあるのだ。農村滅亡の法則が實現されてゐるのだ。荻生徂徠の所謂「商工盛んに成つて農業衰ふ」のである。山片蟠桃の所謂「市井盛ンナレバ田舍衰フ田舍サカンナレバ市井オトロフ」である。ケネイの所謂 la classe sterile が榮えて la classe productive が衰亡したのである。

商工日本を打破せよ。商工業主義を打破せよ。一方に商工立國の政策を維持しつゝ、他方に農村振興を說くことは一つの僞瞞である。最も見易き僞瞞である。政治家の選擧政策以外の如何なる價値をもつものではないのである。

商工業と農業との協調の保たれた記錄は歷史上の如何なる時代においてもこれを見ることは出來ない。金が最初に發明され、中間階級が最初に發生した時から數千年商工主義の歷史は常に農民の犠牲において存在したのである。近代の商工業主義に至つてその弊は極まる。今日は商工業主義の弊害極まれる時代なのである。

商工業主義を打破せよ。農村日本を滅したものは商工日本である、農村日本を滅ぼすことによつて眞實なる日本、眞日本の純眞なる精神、堅實なる信仰、鄕土的文化の一切を亡ぼしたところのものは商工日本である。歐羅巴的文明である。十九世紀的唯物主義である。猶太的拜金宗である、ブルジョア科學である。悪魔的機械である。功利主義的民主主義である。これ等の一切の舶來品を驅逐せよ。農村振興を說くものは、眞に日本を說くものは、これ等の一切の穢れたる舶來品を土と共に葬れ。

十二

私は重農主義が再び呼びもとめられるの時が來たのだと思ふ。マアキャンチリズムに對してヒヂオクラアトの一派が興つたごとくに、今日の商工主義に對して再び重農主義の精神が呼びもとめられるの時がきたのだと私には思はれる。

ヒヂオクラアトの學說に私は何等の欠點もないといふのではない。また從いて私はヒヂオクラアトの學說をそのまゝに輸入せんとするがごとき如何なる意味もないのである。重農主義の學說に如何なる欠點があるにしても重農主義の精神はけれどこれによつて破壞されるごときものではないといふのである。

ケネイのいふごとくに商業階級は不生產的階級である。工業階級は例へ全き不生產者ではないにしても、農業にとつては從たるべき階級である。眞に社會の produit net に貢献すると

ころのものは、農民である。自ら田園に出でゝ耕すところの農民である。農民こそ眞に、la lasse productive なのだ。So the labour of farmers and country labourers is certainly more procuctive than that of merchant artificiers, and manufacturers. ——アダム・スミスのごとき町人階級の哲學者でさへも、農業がより多く生産的であることを認めえなかつたのである。

農民は最も生産的な階級である。農業は社會の基礎である。農業なくば工業もなく、商業もありえない。工業なく、商業なくとも農業はありうるに對し、農業なくば商業もなく工業もありえない。ソクラテスのよくいふたごとくに農業起らずば爾餘の一切のものは沒落のほかはないのである。

農業によつて世界は立つことが可能であるが、商工業によつて世界は立つことはできない。世界は常に商工業によつて立つてゐるのではない。農業によつて立つてゐるのである。如何なる商工立國の國家の人民と雖も農業は彼等の生活の根本條件である。外國農業のうへに立つてゐる。外國農業のうへに寄生してゐるのである。外國における農業が開發されて商工業は今日のごとく隆盛となりえたのである wenn der Ackerbau gedeiht, doun stehen auch alle anderen gewerbe in Blüte ——ソクラテスのいふたごとくなのだ。農業はこゝにおいて人間生活の根本條件である。凡ての人類の生活における根本條件である。農業なく商工業なきばかりではない。農業なく人類なしである。

人類の生活において最も重んぜらるべき産業はいふまでもなく農業である。眞に世界の 1rotuit net に貢獻するところのものは農業である。如何なる國家においても農業が最も重要されなければならぬ。農業と工業とはチョサイア・チャイルドのいふごとく双生兒であるのではない。農業は基礎である。工業は從である。甞つては工業が農民の手によつて附屬的に行はれたごとくに、工業は常に農業に附屬して存在すべきである。工業のために農業が必要であるのではない。農業のために工業が必要なのである。商業階級に至つては言葉のあらゆる意味において la classe sterile なのである。

農業的工業がある程度まで進歩することが農業生産のために必要であることは事實である。工業の進歩があり、始めて農業の發達があつたとなすがごときはけれど全然誤謬である。ラベレエのいふごとくに白耳義の農業はその國の工業に先つて發達した。獨り白耳義だけではない。世界を通じて然りである。また然らざるをえないのである。機械工業の發達は農業の發達をもちきたしたものでないばかりでない。

近代的工業主義は農業の衰頽をもちきたしたのである。農村の墓のうへに近代工業主業の大伽藍が建てられたことを人々は忘れてはならないのである。

十三

農業によつて立つところの社會は最も健全なる社會である。農業の基礎のうへに立つところの社會は嘗つて滅亡することなき社會である。

商工立國は事物の最も不自然なる狀態である。商工業主義によつて立つところの社會は、その存在が彼自身のうへに立つことなき社會である。生産的社會でなくて la classe sterile の社會である。從ひてその存在の基礎が常に彼以外の條件にかゝわり決定することの代りに決定され、また從ひてその存立の基礎が常に脅やかされつゝあるところの社會である。足で立つことの代りに　頭にて立たゝんとするところの社會である。

農業の時代を未開の時代となし、商工業の時代を人々は文明の時代だといふてゐる文明とは頭にて立つところの時代である、microcosmos macrocosmos に背いて立つところの時代である。事物の永續すべからさる狀態なのである。こゝにおいてか凡ての文明は沒落の理法を内在せしめるところの存在である。眞に凡ての文明は起きてし亡び、盛んにし衰へてた。生者必滅である、歴史は生者必滅である、眞に文明は生者必滅である。運命がそこを支配する。進化の代りに運命がそこを支配するのである。

近代商工業主義は數世紀つゞいた。商工業主義は世界を支配した。商工業主義は眞に近代世界の頭であつた。世界は商工業主義によつて立てるものゝごとくに見えた。商工業主義の國家は眞に榮え、農業的國家の人民は世界の田舍者として片隅に佇ずんできた。各國は爭ふて商工立國の國家たらんとした。十九世紀において商工業主義は全盛に達したのである。

この時である。商工業主義の基礎の動搖しはじめたのは。十九世紀末においては、商工業主義は一つの不安に陷つたのである。二百年間世界の貿易市場として商工業の王者であり、從ひて世界の王者であつたところの英國の基礎は十九世紀末葉において既に動搖を始めたのである。輸出減退が既十九世紀の八十年代において始められたのである。爾來この形勢は漸々として進んできた。今日は一年間に三億磅の輸入超過である。毎年三億磅の輸入超過の繼續することは、まことに事物の永續すべからさる狀態である。一つの國家商工業を獨占し、外國農民のうへに寄生するといふがごときことは事物の永續すべからさる狀態である。

その破産の時がきた。英國商工業主義の破産の時は世界の商

工業主義の破産の時である。その時が來たのだ。學者が今日もなほ資本集積の無限なることを樂觀し、綿の時代の後に鋼鐵の時代がつぎマンチェスタアの後にバアミンガムがつゞくごとくに書きたてゝゐる間に、マンチェスタアもバアミンガムもまた沒落の時に近づきつゝあるのだ。la classe sterile の沒落の時がきたのだ。汎く文明の沒落の時がきたのだ。

工業主義が世界に分割されてきたのである。世界の各國に工業が興つてきたのである。各國に工業が勃興し、從ひて世界は商工業の國家に依つところが年一年と少くなつてきたのである。消費からきたるところの制限のためにある特種の國家商工業主義の國家を世界が需要することが年一年と少くなつてきたのである。工業主義が世界に分割されて商工立國の基礎が傾きはじめたのである。

工業主義の分割は最早や工業主義ではない。分割された工業主義は最早や工業主義ではない。農業は基礎である。工業は從である。商業は勿論從であり、或は無用である。重農的精神がこゝに再び呼びもとめられなければならなくなつたのである。

重農的傾向は世界の各國に起つて來た。商工業主義をもつて多年世界に覇を稱へてきたところの英國において農業復興の運動が勃然として起つてきた。百七十五萬町步の農耕地が新らたに耕作を復活してきたのである。

都會の塵介の中から力强くも「土に還れ」の聲が犯しがたき威嚴をもつて起つてきたのである。

十四

日本においては人々はしばしば農業立國は可能なりやと反問する。人々は尙ほ農業立國は可能なりやと反問しつゝある。私はけれど人々にいはねばならぬ。商工立國は可能なりやと。

日本において商工立國は可能なりや。世界が既に商工立國の破産期に立つてゐる時に日本における商工立國は可能なりや。

先づ私達は日本の貿易の狀態を一瞥しなくてはならぬ。

（百萬圓）	一九一〇年	一九一五年	一九二〇年
▲輸入			
食料及享樂手段	四五、	三八、	二二二、
原料	三三一、	三四〇、	一、二六〇、
半製品	八三、	九八、	五〇九、
既製品	一〇三、	五一、	三二八、
其他	二、半	五、	一六、
▲輸出			
食料及享樂手段	五一、	八〇、	一四三、
原料	四〇、	四五、	一四〇、
半製品	二二五、	三二三、	六七九、
既製品	一三七、	二四三、	九六三、
其他	四、	一六、	二四、

これによつてこれを觀る。日本の商工業は漸次に發達の道を進んできたもの丶ごとくに見えてゐる。日本の工業の發達のためにけれど如何なるものが費されてゐるかを熟視せよ。九億六千三百萬の既製品を六億七千九百萬の半製品が輸出されつ丶ある一方に一年間十二億六千萬圓の原料が輸入されてることに人々は深き注意を拂はねばならぬ。日本は工業原料の國ではない。日本の工業は日本の原料によつて立つてゐるのではない。外國原料のうへに立つてゐるのである。外國からの原料が輸入されることなくしては日本の工業は全く絶望なのだ。印度から棉花を輸入することなくしては日本の紡績業は不可能である。米國から棉花を輸入して英國において製造されることが事物の永續すべからざる狀態であるごとくに、印度から棉花を輸入し、それを製造して印度に支那にと輸出することは事物の永續すべからざる狀態である。英國の紡績業がその必然的法則に從つて衰亡したごとくに日本の紡績業もまた必然的に沒落すべき運命をもつてゐるのである。かくのごとき不自然なる狀態を人々は何時まで維持せんとするのであるか。かくのごとき不自然なる經濟組織に、かくのごとき危險なる經濟方法に一國の運命を托して、人々は尚ほ商工立國の可能を信じつ丶あるのであるか。英國の商工立國が破れずとも、日本の商工立國は沒落すべき必然の運命にある。即ち世界が尚ほ商工業主義の存在のために何ものかをあましてゐる時であつてさへ、日本の商工立國は不可能な狀態にあるのである。今日の世界を通じて商工立國が破産しつ丶ある時に、かくのごとき脆弱なる工業的基礎のうへに立つて、人々は尚ほ日本の商工立國が可能なりと信じてゐるのであるか。

十五

農村日本へと還れ。商工日本を打破して再び農村日本へと還れ。農業的日本のみ眞に安定的な日本である。農業日本は可能なりやと問ふこと勿れ。農業日本のみ可能である。農業を卑しみて黄金を貴び、勞働を嫌いて知略に走ることはたゞ人間の墮落を意味する。文明はルソウのいふたごとくに一つの墮落である。向上ではなくて墮落である。物質的享樂は向上ではなくて墮落である。傾女内閉女外。外においてうるところは内において失ふところである。外的生活において絶えず得るところのものは内的生活において絶えず失ふところのものである。文明は機械生活は外において絶えずえてきたところのものである。また從ひて内に不斷に失ふてきたところのものである。人々が物質を尊び、精神を蔑視し、機械を崇拜しつ丶ある文明の何世紀

において、人々は不斷に內に失つてきた。物質に富みて魂に飢へたのである。文明が勝ち誇つて眞に人間なるものが滅びたのである。文明の幾世紀がつゞいて人々が再び食母を戀ひ慕ふの時がきたのである。世界都市の砂漠のうちを放浪に疲れて再び故郷を戀ひ求めるの時がきたのである。不自然なる生活の夢が破れて自然的なるものが再び彼の心を打つの時がきたのである。

埃及の文化は農業のうへに建てられた。支那の文化も農業のうへに建てられた。凡ての本質的なる文化はみな等しく土のうへに立てられた。荻生徂徠が農村日本の精神を代表したごとくに、許行の全農主義は支那精神の最もよき代表である。許行の全農主義は再び新らしい支那に復活しつゝある。新人章行嚴は許行の精神を呼びもどしつゝある。恢復數千之舊觀。不必趨重工業。以免再踏歐美的覆轍。農民的理想が破棄されてきたのである。西洋文明の行詰りに當つて農民的理想が回復されてきたのである。然り歸眞返換である。歸眞返換が眞支那の精神であるごとくに、また眞日本の精神である。この眞日本の精神を呼びもどせ。そこに眞日本があり、眞東洋があり、またそして新らしい時代の目ざめがある。再びいふ。農村日本に還れ。日本はかくして、そしてかくしてのみ蘇生することができるであらう。その時がきたりつゝあるのだ。

鎖國經濟の危險我國に迫る

堀江歸一

一、ナポレオンの大陸制度——其英國に及ぼした影響——大陸制度に關する種々の結論——鎖國の强要恐るゝに足らないか——國家の自由意思に基く鎖國經濟——外國から來る閉國の要求——通商條約の締結、二、國際共通經濟に對する妨碍——經濟上の理由に基く貿易の制限——軍事上の理由に基く制限——保護關稅政策——戰爭に對する恐怖、三、保護政策と鎖國經濟——幼稚產業に對する保護——其不徹底なる事實——戰爭に對する準備と保護關稅——戰爭と鎖國經濟との關係を決定する四條件——戰爭の恐怖と國際金融——國際聯盟に對する不信用、四、日本の自發的鎖國——從來の關稅政策——我、鎖國經濟の發端——日本の鎖國經濟は徹底するか——日本の食料品原料品輸入——日本は先天的入超國である、五、英國と日本とを比較す——外觀的類似と實質的相違——我國輸出貿易の弱點——入超に對する決濟資金——米支兩國と日本との關係——支那經濟の將來——合衆國と生絲貿易——關鍵工業の存せざる缺陷——英國との比較、六、輸入抑制策の愚——明治三十年來の純入超額——入超增加の可能性——國際貸借の發展に於ける狀勢——我國の實際問題七、我國經濟の窮迫狀態を概括す——憂慮す可き七個の案件——我國を壓迫する鎖國經濟の狀勢——鎖國經濟の壓迫を脫するの急務——此急務に應ずる諸方策

（一）

ナポレオンが彼の大陸制度を布いて、英國物資の國外に輸出され、又外國並に殖民地產物の英國に輸入される勢を遮

斷し、英國民をして彼の面積の狹溢なる島國内に於て、息苦しき生活を送らしめ、國内に窒死閉息せしめることを期したのは、經濟上の關係から、英國を壓迫し、窘窮する方法として、最も適切のものであつたと云へるであらう。唯當時此政策が充分に奏效し、英國をしてナポレオンの脚下に屈伏せしめるを得なかつたのは、英國民に物資の缺乏に堪へて、一時の艱難をも物ともせぬ氣慨があり、英國自ら此大陸制度に對抗して、經濟的封鎖を打破する實力を備へて居り、一方にナポレオンの方に於て、大陸制度の勵行を謀る傍らから、之を裏切るが如き事件が續出して、破綻の收拾に困難を覺へた等、種々の事情に基いたことゝ考へられる。即ち大陸制度は其終局の目的を達するに遺漏なきを得なかつたが、其一時的效果から見れば、自ら議論が違つて來る。要するに大陸制度の勵行されるに隨つて、其英國の經濟的運命に對する一大打擊であつたことは論を俟たない。當時ナポレオンは熱心に英國と諸外國との爲替相場が如何に動くかと云ふことに注目し、漢堡や、ダンチツヒに對する英國の爲替相場が少しでも低落すると、之を以つて英國がマンチエスターの綿製品や、ヂヤメイカ殖民地の砂糖を外國に輸出するを得ず、貿易差額の不利と爲つて、英蘭銀行の正貨準備に對する取付の盛なるに至つた結果であると解釋し、大陸制度の奏效に滿足したと云ふことが傳へられて居る。一介の武辨に非ず、政治家として、財政家として、將た又立法者として、非凡なる才能を兼備したナポレオンの事であつて見れば、此位の經濟的眼孔を以つて、時事を批判したことも、亦當然であると考へられる。彼の大陸制度も一の事業であつたと云へる如く、英國が之に堪へ、更に進んで之を破つたことも、亦の一の事業であつたと認めなければならない。

後世國際間に於ける經濟上の關係を批判する人々はナポレオンの大陸制度に伴つて起つた事實を基礎として、種々の議論を案出しようとする。第一大陸制度の如きものゝ束縛に依つて、一國が他國に依つて、鎖國を强要されたならば、爲めに蒙る損害の頗る大なること、第二然しながら一國は假令ひ他國に依つて、封鎖を强要されたとしても、相當の武

力あり、又平生他の諸國に對して、密接なる經濟上の關係を繋いで居つたならば、斯く强要された封鎖の如きは、或る程度まで其影響を免かれるを得ることの如き其重なるものであり、而して國際間に於ける通商なり、經濟なりの關係の發展して、已まざる近代に於ては、第二の議論に依つて、第一の議論に現はれた疑惧は緩和され、次第に國際經濟上の關係は通商自由を趣旨とする經濟政策の下に、密接と爲る勢を加へて、止む所を知らなかつた。現に獨逸の如き歐洲戰爭前一部識者の間に於ては、一朝歐洲の强國外に封鎖を斷行する海軍力を擁する國と干戈を交へた場合に、原料品食料品の供給斷絶に依つて、鎖國の狀態に陷るの危險を顧念し、國內自給の經濟政策を主張する聲の稍や高かつたに拘はらず、實際は國際共通經濟の大勢に引摺られて、此勢に背くを得ず、遂に歐洲戰爭に臨んで、聯合諸國の爲めに、封鎖を强要され、國民生活も國民經濟も共に甚だしき擾亂を受け、請和降伏の機會を早めるに至つた實例の欺く可からざるものがある。ナポレオンの大陸制度と歐洲戰時に於ける聯合諸國の對獨封鎖との間には、種々の相違があり、同一樣に之を見るを許されざるは勿論であるが、尙ほ一國が他國に依つて、鎖國を强制されることの危險の如何に大であるか、殊に平生國際共通經濟の下に、他國に對する經濟的關係の深きを致した場合に、鎖國の一擊を蒙ることの堪へられざる損害であるかは、歐洲戰時に於ける獨逸の實例を以つて、之を知るに苦しまないのである。

鎖國經濟は一國が其自由なる意思に基いて、之を行ひ、又行はんとした場合が多々あつた。支那の如き、日本の如き將たまた他の東洋諸國の如き、歐米諸國に開國通商を求められるまで、自ら鎖國の狀態を株守したのであつて、要するに斯の如くして外國から幾多の刺戟を受けることを回避し、以つて國民をして平靜なる生活に安んぜしめる趣意に出でたのである。永く鎖國の狀態に慣れ、井底の廣きを知つて、他を知らない井蛙の如き國民の內には必ず此狀態を脫して、國際經濟の競爭場裡に進まうとすることに、反對する者のあるを見るであらう。我國幕末に於ける鎖國攘夷の議論

は勤王佐幕の主張に關聯して、頗る紛糾を極め、昨日の攘夷論者が倒幕の成就した日に於ては、極端なる開國主義者に化すると云ふが如き珍事に接したが、尙ほ純眞なる鎖國論者が鎖國狀態の繼續に依つて、桃源の安夢を貪る希望を懷いたことは、疑を容れない。此種の希望に幾何の價値あるやは今茲に論じない。假りに之に大なる價値があり、斯る生活を送ることが人生に取つて、眞の幸福であるとしても、他の諸國は決して一國を永く鎖國孤立の狀態に置いて、可なりとするものではない。蓋し世界に於て、人の棲息し得る領土には限りがあり其領土の內に於て、人の生活に必要なる資源を產出する場所に至つては、更に狹く制限されて居る。故に或る國にして從來鎖國孤立の狀態に居るとすれば、他の諸國は必ず此國に向つて、開國を勸請して、之を國際共通經濟の圈內に誘はざれば、已まざるの態度に出でる。我國が歐米諸國に依つて、開國通商を强要されたことの如き、要するに諸國が我國との貿易を通じて、供給過剩の產物を處分するの必要に出でたものであることは、論を俟たない。而して一國が一旦開國の方針を以つて進むや、他の諸國との間に、通商條約が締結され、其條約の規定する所に據つて、一國と他諸國との間に於ける關係なり、一國內に於ける他諸國間の關係なりが律されるに至る。通商條約の內容は當該締盟國の國情なり、條約締結の目的なりに依つて、異なる所のあるのは勿論であるが、尙ほ條約其もの丶根本的企圖は一に歸する。即ち締盟國の總てを通じて、通商の自由を發揚する、通商の自由を發揚する方法として、一國市場に於て、或る一國の獨占的勢力を有するに至ることを掣肘し、諸國をして同一様の地位に立たしめる、單に一國に於て、諸外國をして同一様の地位に居らしめるに止まらず、其國と諸外國とを同一様の地位に置くことが通商條約の眼目であり、所謂內外國の同等待遇、諸外國の同等待遇と云ふことが認められて、始めて國際間の經濟的關係が其進む所に進むを得るに至るのである。

（二）

斯の如くして端を發した國際共通經濟の關係は何處まで進行するであらうか。從來此關係の進行に對して、大なる妨害と爲つたものとしては、二つの事實が擧げられる。第一は經濟上の理由に基く貿易の制限であり、第二は軍事上の理由に根據を置く貿易并に國際金融に對する制限であつた。第一の理由から來る貿易の制限は國際共通經濟の下に、國際間の廣きを通じて、物資の移動の餘りに自由と爲つた場合に、生産上の條件の優秀ならざる一國の産業は其條件の優秀なる外國の同種産業に依つて、壓迫され、窘窮されて、其存立の地歩を失ひ、結局前者の地位に居る國は原始的産業を維持するに止まり、此以上に産業の種類を多様ならしめるを得ない。之を多様ならしめるには、自國の産業に對して、外國産業の加へんとする競爭を緩和し、回避することを必要とする議論を生ずるのであつて、而して其方便に充てられるものは即ち保護關税策である。保護關税策は固より鎖國經濟策に比較して、寛嚴の差の存することは勿論であるが、尚ほ其期する所は外國物資の排斥、自國産物に依る滿足であつて、其行はれることの大なるに隨ひ、國際共通經濟の效果を制限するに至る一事は吾人の閑却す可からざる所であり、歐洲戰時の久しきを通じて、諸國の間に、貿易の制限されて居つた際に、諸國が他國から供給の杜絶した缺陷を補ふ目的を以つて、計畫興起した新設の工業を永遠に存立せしめる必要から、今や此種の保護論に基礎を置く關税政策が歐洲諸國に於て、漸く重きを成さんとする勢の著明なるを認めるに至つたのである。自由貿易の祖國を以つて目される英吉利に於て、傳統的政策たる自由貿易が戰時數年間種々の形態を以つて、潤色され、或は新興工業保護の目的を以つて、或は外國の不當廉賣や、通貨價値低落を利用する廉賣に對抗する目的を以つて、關税政策に變更を加へるもの少なしとしなかつた。而して斯る方針を變改して、舊時の自由貿易政

策に復歸することを一の政綱とし、又實際此點に多少の施設を試みた勞働黨內閣は政權を掌握すること、七八個月にして、其地位を去り、之に代つて正反對の政策を支持する保守黨が政局に當り、次第に依つては、殖民地特惠關稅制度を濃厚なる程度に進めようとするに至つては、自由貿易の現狀頗る慘憺たるものありと云はざるを得ない。

若し其れ諸國が從來外國貿易を制限して、經濟上の自給生活を期する、少くとも原料品食料品若しくは軍需工藝品の供給に就て、外國から獨立することを計畫し、保護關稅に農業保護關稅を利用して、自國の原始的產業が外國殊に新開國から受ける劇烈なる競爭を遮斷し、緩和しやうとしたり、又製鐵製鋼事業の特に國內に起ることを奬勵したりするのは、何れも國家萬一の場合に際會して、是等の物資に關する外國の供給が削減し、爲めに自國民の生活上に、自國工業の經營上に、將た又軍事的行動の遂行上に蒙むる危險を除却するの意に出でたものである。一國が一方に原始的產業を維持し、多數の國民をして農業其他之に關聯し、附帶する事業に從事し、斯くて地方の農村に定住せしめることが高等の技術を必要とし、多數の職工勞働者の集中を條件とする製鐵製鋼事業の發達と能く兩立するを得るかどうか、兩者の要求に矛盾する所なきかどうかの問題は姑く措き、從來多くの國の貿易政策に禁遏制限の跡を存したのは、將來戰爭の勃發に依る危險を憂懼した結果に外ならないのである。現に我が國に於て、一方に原始的產業保護の說が行はれ、農業當時の如き、國民生活の極めて窮迫した場合の外、外國から輸入される米に、材木に、將た又其他の必需品に輸入稅を賦課して已まざる他の一方に製鐵製鋼事業の內國に於て發達し、其製品の內國自給の狀態に達することを必要とし、多年此點に就いて國費を投じ、又國民に負擔を加へつゝあるが如き、著明の事實であつて、我國亦實に原始的產業を維持することゝ、機械的工業を起すことゝの矛盾した要求の間に彷徨しつゝあるのである。

（三）

貿易の制限を惹起す保護關稅政策は其貿易を制限すると云ふ點に於て、經濟上の利益を傷けざるを得ない。貿易を以つて、國際間の廣きに亙つて、分業を實現する方便であるとし、而して分業の利益の極めて大なることが理論上に、實驗上に共に論證されて以來、國際的分業の行はれる範圍を制限する保護關稅政策を不可なりとする議論の旺盛と爲るは、敢て異とするに足らない。之に對する保護關稅論者の辯解は二つに分たれる。其一は保護關稅の賦課を以つて一時の方便とする幼稚産業保護論であつて、一國の産業が新に設立の緒に就かうとする、或は創設されて、日の尙ほ淺き場合には、經營方法に於て、勞働の熟練に於て共に幼稚であり、資本の放下されるもの、未だ富裕なりとするを得ない。斯る條件の下に生産された既製品の生産費は必ず不廉であつて、之に對して低廉なる生産費の下に、製造された外國同種の物資が輸入され來り、無遠慮なる競爭を試みたならば、前者は遂に後者の壓倒する所と爲り、事業漸く成立せんとして、挫折するの不幸に接せざるを得ない。斯くて國内新興の事業が其基礎を築き、優に外國の競爭に對抗するを得るに至るまで、關稅上の保護を施さうと云ふ議論が主張される。古來此種の理由に基いて、保護關稅を通じて、國際經濟上の關係の或る點を超へて、密接となるべき勢を遮斷した國は實際に少なしとしない、新開國が保護政策を襲用したり、殖民地が本國の羈絆を脱するや、直に内國産業に保護の障壁を設けやうとしたりするのは、何れも右の理由に據るものである。既に此理由に據つて採用された保護關稅である以上は、實施の時から何年かを經て、曩日の幼稚産業が老成産業となつた場合に、保護關稅は當然撤廢されて、内國の産業は外國同種産業の競爭に暴露される。而して斯る競爭を蒙つたとした所で、既に老成産業となつたからには、爲めに何等の痛痒を感ぜざる道理である。然るに之を實際の

事實に徵すれば、一旦保護の障壁が築かれて、此障壁内に一國産業の閉鎖されるに至るや、當業者は次第に此種の保護に慣れ、何時までも之より生ずる利益に浴することを欲し、進んで他國の競爭に當ることを望まない。外國の競爭を蒙らざるに乘じて、內國の當業者は互に團結聯合し、內國市場に於て、獨占の勢を成し、其間に利益を貪らうとする一方には、當業者の團體は政治上に勢力を伸張し、國家の立法權まで蠶食して、消費者の利害を念とする關稅の輕減又は其撤廢論を壓倒し去らうとする。斯くて幼稚産業に對する一時的施設として行はれる保護關稅が永き歲月に亙つて行はれ、其間常に一國をして或る程度まで、鎖國の狀態に居らしめるのである。

第二に保護關稅に關する主張は旣に述べた如く戰爭に對する恐怖若しくは戰爭に對する準備の完成を必要とする議論より來るのであつて、「國防は繁榮よりも肝要である」と云つたアダム・スミスの說にして動かす可からざるものである以上は、戰爭に對する準備を講じ、若しくは戰爭の齎す禍害を輕微にして、戰爭に從ふ何等の障害なからしめることは、國家の行動を自由ならしめる點から云つて、必要であると云へる。隨つて一國が他國に對して戰爭を開かなければならないとか、又は他國から戰爭を强いられるとか云ふが如き地位に居ることの明瞭なる場合には、此一事が一國をして國際共通經濟の圏內に入らんとするに當つて、自ら躊躇せしめる事情となるや論を俟たざる次第である。從來戰爭若しくは戰爭破裂の恐怖が妨害を爲して、一國を舉げて、深く他國に依賴する經濟生活を營ましめる能はざることゝなつた事實は多くの場合を通じて、指摘されるのであつて、國際共通經濟が平和の存續を基礎として、始めて行はれるに反し、戰爭の恐怖は必ず國を驅つて、鎖國孤立の狀態に陷らしめるの傾きを免れない。然しながら戰爭の恐怖が將來に存在するからと云つて、直に之に對する準備として、一國を舉げて、鎖國孤立の政策に出でしめるのは、甚だしき早計であつて、其處に至るに先だち、尙ほ戰爭の曉に臨んで、外國から原始的産業の産物の供給を受けることの望みなきに至

るものであるかどうかを考へることを要する。之に對する判斷は第一、一國に對する敵國の封鎖が如何なる程度まで、完全に行はれるものであるか、第二其國に向つて平生原始的產業の產物を供給する諸國は戰爭の開始と共に、如何なる態度を其國に對して、取るものであるか、敵國となれば供給不可能であるが、中立國であり、與國であり、更に聯合國と爲る場合には、供給を受けることの望み必ずしも絕へたりとしない、更に第三自國と原始的產物の供給國との間に於ける海上の交通が自國の海軍によつて、保護される場合には、其保護の確實なる程度如何は供給の安否を決定するに重大なる關係を持つ、第四假に如上の條件が總て現實に遠ざかり、戰爭の開始と共に、原始的產物の外國供給が總て杜絕するに至つたとしても、尙ほ國產の代用品を以つて、之に對する補給を爲すを得ないものであるかどうか、將た又國民に消費を節約せしめて、一時の過渡期に當るを得ないものであるかどうか、或は斯る事變の到來を見越して、平生から或る分量を蓄積し、以つて一時の急需に當るを得ないものであるかどうかと云ふ諸點を攻究して、始めて決定される可きものであつて、單に將來に戰爭の起る故を以つて、直に鎖國經濟を營む可しとするのは、頗る焦急の議論たる嫌を免れない。

更に軍事上の關係から、從來密接と爲る可き國際間の取引を妨害したものは實に金融の方面に現はれる。國際金融の關係をして其赴く可き所に赴かしめたならば、一國に存する資本の內、流動的性質を有するものは、自國に於ける金利步合と他國に行はれる金利步合とを比較して、後者の前者より高き場合には、其高き國に向つて、流動することを以つて、必然の勢とする。一方に資本放下の目的物たる有價證券亦同一の道理に基いて、國際間に移動し、斯くて國際間を通じて、金利步合をして平均率に近づかしめると共に、資本運用の效果を大ならしめるに至るのである。然るに之を實際に徵すれば、國境は單に國と國との地理的境界たるに止まらず、國際間の金融に於ても亦儼然たる障壁を爲し、若干

の利鞘の存在を以つてしては、一國の資本の他國に流動することを許さず、國際間に於ける金利步合の差違の大なる、人目を惹くに足るものがある。其斯の如く爲る原因に就ては、種々の事情を存するに相違ないが、就中重大なる原因としては、國際間に於ける戰爭破裂の危險が擧げられなければならない。蓋し國際間に戰爭が起り、國際金融上に於ける債權國たると、債務國たるとを問はず、其孰れか一が戰爭に干與したとしたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。債務國の方には急劇に資金の回收に接する危險があり、債權國の方には、資金の回收を試みて、容易に之を實現する能はざる困難が伴うのみならず、時に敵國の爲めに、海外に有する自國の債權を收用される危險すら生ずることとなきを保し難い。戰爭の開始を目前に控へて、如何なる國も國際金融に深く干與することを避けるに至る所以である。

如上の諸點に就て、重大なる關係を有すると考へられるのは、彼の國際聯盟である。此聯盟には今日其武力に於て、其財力に於て、世界の運命を左右する大勢力を擁する北米合衆國の加入して居らないと云ふ大なる缺陷の掩う可からざるものがあるが、其目的は加盟國間に於ける爭議の平和的解決に存し 既に或る方面に於て、着々效果を擧げたとさへ稱される。聯盟信奉者の聯盟に對して、望みを繫けることの極めて大なるものがある。既に斯く國際聯盟に大なる希望を繫ぎ、又其效果の少なからざるものあり、加盟國を打つて一丸とするが如き作用のあるものである以上は、何故に諸國は之に信賴して、經濟上の關係を從來以上に密接にし、諸國の間に相倚り、相助けるの事實を期しないのであるか。國際的分業の利益の認められること、久しきに及びながら、徹底的に此利益を享受する政策に出でるを得なかつた原因にして戰爭に對する恐怖に在るとすれば、國際聯盟に依つて、斯る恐怖の除却されたことは、即ち世界を擧げて、一の經濟單位たらしめる好機會を與へたものと云はなければならない。然るに諸國は表面上國際聯盟の趣意を奉ずると稱しながら、實際に於ては、貿易を制限し、或る方面に於て、國內自給の生活を期圖すること、依然として舊の如くであり、

更に英國に於て、自由貿易を主張する自由黨や、勞働黨が政權に近ざかり、保守黨内閣の下に、特惠關稅制度が行はれ、本國殖民地間に於ける自給政策の實現を見んとするに至つては、事毎に國際聯盟に對する不信を語るものであつて、國際聯盟の下に、關係諸國が戰爭の絕滅を豫想し、國際共通經濟に向つて、步を進めるが如きは、國際聯盟に於ける現在の實力を以つてしては、企て及ばざる所である。國際聯盟にして世界永遠の平和を確實に保障することに資する以上は、其一面に於て、國際共通經濟の相伴うことを要する。一方に國際聯盟行はれながら、他の一方に依然たる鎖國孤立の經濟政策の行はれて已まないのは、國際聯盟其ものゝ如何に信頼するに足らざるかを立證するものに外ならないのである。

（四）

鎖國孤立を旨とする經濟政策は今日に於て、依然として行はれて居り諸國をして國際共通圈內に向つて、進展せしむるを得ない。其斯の如く爲るは、多く諸國自身の爲す所に依つて、然るものと考へられるが、我國は今日此點に於て、如何なる地位に居るであらうか。私をして日本の經濟政策を批判せしめるに、我國は從來自發的に鎖國經濟を營む方嚮に向ひつゝあつたのであるが、今や日本自身の經濟的環境から鎖國經濟を營むの餘儀なき狀勢に壓迫されて居りはしないであらうかと思はれる。日本をして自發的に鎖國經濟を營むに至らしめたものは、實に其貿易政策に外ならない。維新開國の當初日本が諸外國と締結した通商條約に於て、諸外國の爲めに、其關稅自主權に對して、甚だしき束縛を蒙るや、無主義無方針の下に、自由貿易に類する關稅政策が行はれるの已むを得ざることゝ爲り、其間外國から物資の輸入される勢ひは極めて自由であつた。然るに明治三十二年の條約改正以來、日本が關稅權を恢復し、多くの物資に對して、自由に輸入稅を賦課するを得るに至るや、我國の關稅政策は第一關稅に依る國庫の收入を增加する爲め、輸入品全部に

重率の輸入税を賦課すること、第二內國農業の如き生産費が加重して、存立に困難なる事業を保護する爲めに、外國から輸入される米穀並に穀類製品に重税を賦課し、更に同樣の趣意を擴充して、林産物畜産物の類にも課税すること、第三製鐵、製鋼、機械製造、染料、製藥の如き、我國に於て發達の勢の幼稚なる産業を保護する目的を以つて、是等既製品の輸入にも亦課するに重税を用ゆるの方針に發展し、日本を擧げて、總ての點に於て、一個の保護關税國たらしめた。而して更に此方嚮に一歩を進めたのは、最近の奢侈品關税法であつて、政府の認めて、奢侈品とする輸入品に對して、課するに十割の重税を以つてするに於ては、其從來の保護關税と相俟つて、輸入禁遏の効果を期したものであることは疑を容れざる所であつて、其目的の鎖國孤立經濟を實現する一事に存することも亦明瞭であると云へる。

日本が始めて外國から輸入される米並に籾に課税したのは、明治三十七年日露戰時財政に處する計畫の一として、一方に地租の增徴に依つて、農業者に加へられる負擔の增加と均衡を持する爲めに、內國の米價を騰貴せしめる趣意に出でたものであつた。此趣意や、之を達する手段として行はれた所は果して正しきを得たものであつたかどうか。右の趣意は恰も英國に於て、ナポレオン戰役、戰時に現はれた穀物の所謂饑饉相場を維持する爲めに、相次いで穀物條例を改正し、其規定を峻嚴にして、以つて穀價の騰貴を謀つたのと、同巧異曲のものと云へる。而して斯く端を發した農業保護政策は次第に發展し、內國に於て米價の暴騰した場合に、之を調節する爲め、一時課税を停止することはあるが、大體に於て、常時不斷に行はれ、日本國民が國外未開の地に資本を投じて、米穀を産出し、之を內地に輸入して、一方に對外企業の發展を期すると共に、他の一方に內國に於ける米穀の供給を豐富ならしめようとする場合に於ても、依然たる輸入税の賦課に依つて、斯る關係の圓滑に生ずることを妨害するの矛盾を生じて、顧みないのであつて、或は鎖國孤立の政策を施すことは、日本人の先天的に好む所であつて、其れから斯く枝葉を生じたものではないかと云ふ感すら起るのである。

然らば一方に斯る鎖國孤立に傾く經濟政策に力を注ぎつゝある日本は能く此政策を徹底せしめ得るかと云へば、必ずしも然るを得ない。現に我國に於て經營される各種工業の原料品は殆ど其十中八九を擧げて、外國の供給に係るのであつて、輸入貿易を通じて、之を我國に獲得する事實の動かす可からざるものがある。試に大正十二年の外國貿易表に就て、輸入貿易十九億八千七百萬圓の貨物類別價額並に其百分率を見るに、

	價格	百分率
食料品	二五一、五四八千圓	一二、六六
原料品	九九七、五八七	五〇、二〇
原料用製品	三五八、七八一	一八、〇五
全製品	三六二、九六一	一八、二七
雜品	一六、一八六	、八二

と爲り、輸入貿易の半額は原料品を以つて占められる有樣であり、之に原料用製品を加へれば、輸入貿易の三分の二以上に當る。而して是等の原料品並に原料用製品を類別して、其如何なる種類の貨物に就て、多きを見るかと云へば、

生綿　繰綿	五一三、〇七三千圓
羊毛	八一、八九三
苧麻	一七、九一一
油糟	一〇九、六四六
鐵、塊並に錠	一九、一一六

同、條、竿、板　一〇二、六五五

等であり、此外に皮革、生護謨等の輸入を數ふるときは、我國工業の原料品は盡く外國の供給に係ることを知るに足る一方に、食料品に就ても、米、小麥、豆類、麥粉、砂糖等の輸入額は年に依つて、多少の變動あるを免かれないとしても　尚ほ年額二億圓を前後し、全製品の輸入中にも、金巾、更紗、綿繻子、羅紗、セルヂスの如き國民被服として必要なる物資や、石油、鐵釘、機械類の如き國民産業に對する補助品として、缺く可からざるものが含まれて居る。近年我國に於て奢侈品の輸入高が非常に增加したといふことが頻に、一部人士の間に唱へられ、或はダイヤモンドや貴石類の輸入であるとか、香水其他の化粧品なり、玩具類なりの輸入であるとか、兎角世間の物議を惹くに至つた。畢竟是等の物資たる、其一個々々に就て云ふときは、價格の法外に高き爲めに、世人の注目を促すに至つたのであらうが、其輸入される總額に就て云へば、貿易の一小部分に當るに過ぎない。彼の奢侈品關税增率に關する法律案が臨時議會に提出され、或は之に依つて貿易の均衡を期する一助に充るとか、或は奢侈品の消費を抑制して、國民道德に有利なる影響を及ぼすとか云ふが如き理由が政府に依つて、聲言された際、私が盡く之を不可なりとしたのは、税法其もの丶適用される奢侈品の輸入額の寡小なる事實であつたのである。即ち我國に於ては、輸入貿易額中の大部分を占めるものが國民給養に必要なる食料品と、國民産業に缺く可からざる原料品との二者であることは、前述の通りである。斯くて茲に輸入貿易限論者の大なる誤謬が伴ひ來らざるを得ない。我國民殊に爲政者が輸入貿易を嫌忌する一方に、輸出貿易を愛重する僻の著しきことは、殆ど先天的痼疾であるやうに思はれる。而して從來輸入貿易制限の目的を以つて施された政策は其數に於て、少なしとしない。單に私の記憶に殘つて居るもの丶みを列擧しても、例の奢侈品關税の賦課は勿論、內國産業の保護を目的とする一般關税の增率の如き、外國品排斥、國産品重用に關する政府の方針、此方針を一般に徹底せし

める運動、奢侈品輸入に關する信用狀の制限、外國爲替相場に對する干涉に基き、輸入に加へる不便の如き幾多の政策が擧げられる。然も之を實際に徵して、是等の輸入制限政策が能く其効果を奏し我國をして貿易上に所謂有利なる地位に居らしめたとか、或は少くとも輸出入の均衡を保たしめたとか云ふことがあるかと云ふに、輸出超過の時期は甚だ少なくして、輸入超過の時の頗る多かつた事實を認める。即ち明治三十年現行貨幣法が實施されてから大正十二年に至る二十七年間の貿易に就て云へば、輸出超過は僅々七年間であつて他の二十年は年として輸入超過ならざるはなく、然も七年間の輸出超過中四年間は實に歐洲戰爭の際に屬した一方に、七年間の輸出超過は十四億三千二百九十三萬餘圓に過ぎざるに反し、二十年間の輸入超過は實に二十五億一千七百三萬餘圓の多きに上るのである。此貿易上の差額が如何にして決濟されて、今日に至るを得たかは姑く後段の問題に讓る。唯だ私が茲に一言するを憚らないのは、

第一、我國が貿易上先天的輸入超過國に屬し、容易に輸出超過國たるを得ざること、

第二、輸入品の大部分を占めるものは、實に國民生活上に、國民產業上に必要とする物資であつて、如何にしても其節約を許さゞること、

第三、現に關稅政策其他に依つて、輸入を制限しようとしても、原料品や食料品に對して、濫に輸入稅を賦課し、其目的を達するに憚らざるを得ざること、

の三點である。

（五）

之を外見的事實から云ふと、我國の貿易が常に輸入超過に傾き、加ふるに其輸入が専ら原料品並に食料品の形に於

て、行はれる二點は英國貿易の狀況と酷似して居るやに考へられるが、其酷似して居るのは、單に外見皮相の事に止まり、實質に於て、重大なる相違があり、然も其相違が我國經濟社會の全體に取つて、大なる弱點と爲り、病所と爲らさるを得ないのである。何を以つて貿易上の見地に於て、日英兩國の間に、存する重大なる相違とするかと云へば、

第一、我國には輸出品中外國に於て、之に對する需要の確實なるものなく、隨つて輸出高の不定であり、斯くて輸入超過額亦不規律に動搖するを免かれざるに反し、英國には輸出品の內、外國の需要を普偏的に、又固定的に充すを得るものが數多あり、其結果として輸出貿易は年々數量に於て確定し、遂に動搖せず、寧ろ年と共に幾分か增加し、輸入超過をして確實なる或る數量の範圍內に止まらしめるを得ること、

第二、原料品食料品の輸入されるもの多くして、爲めに輸入の輸出全體に超過することは、日英兩國共に同一であるとして、英國に於ては、斯くて生ずる輸入超過を決濟する對外債權收入の確乎たるものあつて、債務の支拂に何等苦む所なきに反し、我國に於ては輸入超過の生ずることの動かす可からざる勢であるに拘はらず、之を決濟する對外收入は甚だ不定であつて、決濟方法の將來に就て、國民をして不安の念なきを得ざらしめること、

の二點を擧げなければならない。以下實際の事實に徵して、說明を試みる。大正十二年中我國の輸入貿易十九億八千二百二十三萬餘圓に對して、輸出貿易は十四億四千七百七十五萬餘圓であつて、差引き五億三千四百四十七萬餘圓の輸入超過を生ずるに至つたのである。我國の輸出貿易は大正五年始めて十億圓臺を突破し、同八年には二十億九千八百萬餘圓と云ふ最記錄を作り、同七年並に九年に於ても、尙ほ十九億圓を上下するを得たのであるが、斯の如きは歐洲戰爭に伴ふ偶然の結果であつて、常態を以つて見るを得ない。先づ十數億圓の邊を上下することを以つて、當然であると推測して、一方に此十數億圓の輸出貿易が如何なる物質に依つて、支持されて居るか、大正十二年の數字に就て、重要輸

出品の輸出額並に其全體の輸出貿易額に對する百分率を計算すると、

	輸出額	百分率
	千圓	
製茶	一六、〇一〇	一、二
精糖	一四、七四二	一、〇
石炭	二一、五四五	一、四
生絲	五六八、三七〇	三九、二
綿織絲	七八、六一三	五、四
綿織物	二三四、四九九	一六、二
綿メリヤス	二一、二〇五	一、四
陶磁器	二三、四六五	一、六

と爲り、更に輸出價格の國別並に同上百分率を見ると、

	價格	百分率
	百萬圓	
支那	三四〇	二三、四
英領印度	九九	六、八
北米合衆國	六〇五	四一、七

に當るのである。果して然らば我國の輸出貿易は生絲並に綿織物の二者を以つて重なるものとする一方に、支那並に北米合衆國を以つて、重なる輸出市場とする。更に之を極言すれば、北米合衆國に生絲を賣り、支那に綿織物を賣ること

に依つて、我國の輸出貿易は始めて現時の狀態に於て、營まれるのであつて、他に幾百の輸出品あり、又幾十の輸出國ありとしても、固より零碎のもので、重きを置くに足らざることゝ爲る。然らば生絲の如き、綿織物の如き、將た又其れ等の販路たる合衆國にしろ、支那にしろ、我國輸出貿易の將來を維持するに就て、或は確實なる物資として、或は安全なる市場として、依賴するを得るとかと云へば、此點に於て、吾人は多くの脅威の存することを認めざるを得ない。

第一は米支兩國に對する我國外交上の關係であつて、兩國共に排日の風潮頗る旺盛であり、殊に支那に至つては、一日本人と共に、日本の物資をも排斥して、以つて日本の輸出貿易の支那に伸張する勢を阻害することを講じて、已まない。日本は辛うじて從來の關係を固執し、支那の關稅權に束縛を加へて、其稅率を低廉にし、以つて支那市場に於ける物資の販路を維持するに止まる。其れとても支那は機會の乘ず可きものある每に、關係諸國に向つて、關稅率の增徵を要求し、對支輸出貿易に關して、日本ほど利害の重大ならざる諸國は利害關係よりも、正義觀念に重きを置きて、之を容れ、日本亦後れ馳せに諸國の爲す所に追隨せざる可からざるに至ることは、從來多くの事例の證明する所である。然らば日本は何時まで支那關稅率の低廉なることに依賴して、支那に綿織物の販路を維持しようとする政策を繼續するを得るであらうか。支那が農業牧畜業の如き原始的產業を以つて、國の經濟を營み、之に安んじて居る從來の時代は姑く之を問はない、又今日の如く資本の供給乏しく、加ふるに之を結合する能力と信用とに缺くるものあり、自ら資本主義的經濟に移るを得ない場合には、何等恐るゝに値するものなしとしても、一旦支那が是等の點に覺醒し、直接には關稅權の回收に依つて、保護關稅策を實行し、自國に於て新に興さうとする、或は現に興りつゝある事業に對して競爭を試みる國の產物を排斥するの處置に出で、間接には國產奬勵論を唱出し、國民をして外國の物資を斥けしめるに至つたならば、爲めに最も不利なる地位に陷るものは日本の對支輸出貿易ならざるを得ないであらう。單に低廉なる關稅率に

依賴して、外國の販路を維持しやうとするの甚なるは、明瞭の事實である。殊に支那に利權回收論や、天然富源保持論の眞面目に主張され、又日貨排斥論の如きも、其根柢を國産獎勵論に置いて居る以上は、此種の議論亦之を輕々しく目送し過すを得ないのである。

合衆國の排日は日本人の入國住居並に營業等に對して、行はれるに止まり、日本人の合衆國に輸入する物資にまで、其烽燧を及ぼさないようである。隨つて排日の如何と合衆國の我國生絲に對する需要とは何等の關係を存せざるもの丶如くであるが、本來生絲の如き、如何に絹布絹製品に對する需要が盛である爲めに、其原料品たるの故を以つて、多大の賣行に接するとした所で、生絲其もの丶本來の性質から云つて、之に許すに必需品を以つてするを得ない、隨つて合衆國經濟社會の景氣不景氣に依つて、生絲の輸出數量には勿論、其價格にも高低の變化著しきものがあり、其著しき爲めに、常に内國の生絲産出地方は大なる影響を蒙らざるを得ない。現に近年内國に於ける一般物價並に賃銀騰貴の結果として、製絲業の生産費は著しく上進した。幸に合衆國の經濟社會が好景氣であつて、如何なる高値を以つてしても、生絲の販路の維持された時代には、其間に何等の支障を見なかつたのであるが、一旦合衆國の景氣が衰頽し、絲價に下落を來すや、之に伴つて生産費に節約を加へる能はざる内國の製絲業者は非常の苦境に陥らざるを得ざるに至つた。一國重要産業として多大の資本の放下され、又多數勞働者の糊口を維持する製絲業が他國の景氣如何に依つて、其消長を左右されるに至るが如き、我國經濟社會の弱點を暴露したものと云はざるを得ない。啻に然るのみならず、既に述べた如く、生絲の輸出は輸出貿易中の巨擘たる地位を占め、其合衆國に輸出される金額は絶對に云つても、他の作物に對する關係から云つても、共に巨大であり、其一進一退は斯業に資本を投じた者、斯る資本家に資金を融通した銀行業者、斯業に於ける男女從業員を通じて、一般經濟社會に及ぼす利害關係の重大なること、殆ど他に比類なしと稱するを憚ら

ざる次第である。更に近年に入つて、一個の問題として、我國貿易の將來に重大なる關係を惹起しつゝあるは、支那の蠶絲業者並に製絲業が如何なる程度まで發達するか、人造絹絲の品質が如何に改良されるかと云ふことであつて、其解決の如何は我國輸出貿易に於ける重要貨物に大なる影響を及ぼすものとしなければならないのである。

右の如き弱點は何故に我國の貿易に生ずるかと云へば、要するに一國の產物の中所謂關鍵工業（Key Industries）と稱されるものに於て、國民生活の必要品として、恒久、廣汎の需要ある物資を產出して、之を輸出する方針に出でないからである。綿絲、綿織物の如きは、聊か右の資格に該當するようであるが、尙ほ其海外に於ける販路の區域甚だ狹く、一の支那に變動が起れば、忽にして輸出品としての販路に打擊を蒙るが如き狀態であつては、遂に之に意を安んずるを得ないのである。私は嚮に日本の貿易狀態が英國の其れと類似して居るのは、外觀的に止まつて、實質に於て、大なる異なることを述べた。即ち兩者を比較して相違する所の著しきものとして、英國が石炭、機械、綿布、綿織物の如き、人生々活に必要なる物資を世界幾多の方面に向つて、輸出する事實が擧げられなければならない。試に千九百二十三年の輸出貿易額七億二千四十九萬磅に就て、重要輸出品の種類價格並に百分率を檢すると、

	價格	百分率
鐵、鋼鐵製品	六〇、九五八 千磅	八、四
機械	五一、七二六	七、一
綿布、綿製品	一八六、八八三	二五、九
毛織物	五八、四八七	八、一
車輛	四九、九五三	六、九

石炭	七二、五二九	一〇、六

と爲り、綿布、綿製品の輸出が價格に於て、聊か群を抜くが、尙ほ之に次ぐ幾多の輸出品があり、日本の如く生絲綿織物以外に、殆ど見る可きものを存せざる狀態に比較して、異なる所あるは勿論。輸出の行はれる國は殆ど全世界に亙り、其重なる國に對する輸出價格と百分率とは、

	價格（千磅）	百分率
獨逸	三二、〇七六	四、四
和蘭	三四、九〇三	四、八
佛蘭西	四八、三一〇	六、七
日本	二三、九七四	三、三
支那	二三、七三四	三、二
合衆國	五二、〇二三	七、二
亞留善丁	二二、七〇八	三、一
印度	九一、六二一	一二、七
濠洲	六〇、四五七	八、三
加奈陀	二五、二七一	三、五

と爲る。即ち印度に對して百分の十二、七に相當する輸出を爲すのが輸出國別の最高率であつて、他の諸國に對しては、何れも此以下の割合に當る輸出を爲し、全體を合せて、彼の如き巨額の輸出貿易を維持する。斯くて一の市場に如

何なる變動が突發して、時に英國商品の其市場に於ける販路を攪亂するやうなことがあつても、全體の輸出貿易には必ずしも大なる波瀾を生ぜざるを得るのであつて、此點に於ては、日本が支那幷に合衆國を重要なる二個の輸出市場とし、是等兩市場中の孰れか一に變動が起つた爲らば、爲めに全體の輸出貿易なり、輸出品製造事業なりに起つ可からざる打撃を及ぼすのとは、全然事情を異にするものと認めなければならない。

（六）

右に述べた如き次第であつて、日本は先天的輸入超過國である。其輸入超過を形ち作る物品が食料品や、原料品であつて、國民の給養若しくは工業の維持に缺く可からざる關係を持つ以上は、其數量の遂に減縮せらるゝを許さゞることを想像しなければならない一方に、輸出の方に於ては、此輸入を決濟して、餘りあるまでに、之を增進せしめる物資も、其賣却される市場も、容易に見出されない、否輸出に供せられる物資の製造に必要なる原料品は多く之を外國から輸入するのであつて、輸出の增加する場合には、之に伴う輸入の增加を生ずる、否輸入の增加起つて、始めて其一部に相當する輸出の增加に接すると云ふのが、我國經濟上の一特色と爲るのである。此點に於て、政府が輸出の奬勵又は貿易の調節に藉口して、輸入爲替を不利にしたり、又は金の輸出を禁止したりするの愚なることは、自ら暴露されるであらう。蓋し斯の如くして原料品の輸入を不利ならしめたならば自ら內國に於ける製造品の生產費を高くして、其輸出に妨害を招かざれば、已まないからである。此問題に對する批判は姑く之を措き、右の如き貿易上の差額を決濟するに就て、我國の確乎たる資源の存するものがあるであらうか。此事に關聯して、我國に於ては金融幷に貨幣制度の根本に亘る重大問題に接せざるを得ない。

我國は先天的輸入超過國であつて、明治三十年貨幣制度改革以來大正十二年に至る二十七年間の出超十四億三千二百九十三萬餘圓に對して、入超は二十五億一千七百三萬餘圓であつて、差引き十一億一千數百萬圓の入超と爲る。入超額をして能く此程度に居るを得せしめたのは、歐洲戰時數年間を通じて、異常なる輸出超過の現出した偶然の結果であつて、將來に於て再び同一の好機會に遭遇するを得るかどうか、之を豫期するを難しとしなければならない。而して一方に國內の狀況を察すると、第一我國に於て、國土の狹溢なる割合に、多數の人口を收容して居ること、第二國內に現に開發されて居る天然資源に乏しく、又將來に其開發される望み亦少なきこと、第三斯る不利なる事情の下に、製造工業は外國の模倣、國家の獎勵、近隣に於ける販路等の關係に促されて、旣に國內の需要を充すに止まらず外國の需要にも應ずる程度に發達したことの諸事實は相重なつて、從來の程度に於て、食料品や原料品の海外供給を必要とし、國民生活の標準を高からしめようとか、國民產業の規模を擴張しようとかすれば、更により多くの供給を仰ぐことを覺悟するの安全なるを信ずる。之に對する決濟が輸出の增加に依つて、現に行はれたり、又將來に行はれる見込があつたりすれば、何等議す可きものはないのであるが、旣往の實驗より云へば、斯の如きは全然架空の望みに過ぎない。最近二十七年間に於ける純輸入超過が結局決濟されて、尙ほ、我國の內外に有する金貨を幾分なりとも增加するを得せしめたのは、要するに歐洲戰時の數年間並に戰後の一二年間を通じて、一方に巨額の輸出超過の行はれたと共に、他の一方に傭船料、運賃、保險料等の對外收入の增加した結果である。若しも斯の如き好事が永く續くを得たならば、我國の經濟社會の面目は爲めに一新し、一轉するを得るのであるが、右の好事たる、我國の實力を以つて獲得したのではなく、歐洲戰爭に伴ふ外來的變動に依つて、齎されたものに過ぎないのであるから、戰爭の一過し、戰時狀態の收まると共に、諸般の形勢亦自ら舊に復し、大正八年些小なる入超の現出したに續いて、大正九年以來今日に至るまで、巨額の入超は相

次いで現はれると共に、對外債權の收入の減少するもの著しく、在外正貨の拂下に依つて、辛うじて債務を決濟せざる可からざるに至つたことは、世人の知る所である。

元來一國の經濟が或る程度まで發達すれば、國內に於ける資本の供給の增加するのは當然であり、其資本は先づ國外諸種の事業に放下されるが、或る程度を超へれば、必ず金利步合の低下と爲り、利潤の低下と爲る。玆に於てか資本家は國外に資本を供給して、高率の利子や、利潤を囘收するの手段を取るのであつて、其結果として利子利潤が對外債權の一科目に上るのである。對外債券の科目たるものは、利子利潤にのみに止まらない。此外に海運業の運賃、傭船料、保險料、手數料、海外移住民送還金、來遊外國人費消金の如き、何れも對外債權を成すものに相違ないが、其本來の性質から云つて、確實を期するを得ず、時に依つて變動する勢の大なるを免かれない。此間に唯一の對外放資に對する利子利潤の收入あつて、對外債權の收入全體に確實なる性質を與へ、對外債務を決濟する方便として、依賴せしめるを得るに至るのである。然るに我國の經濟には此點に於て、大なる缺陷の存することを免かれない。歐洲戰時對外債權收入の有利に爲つたのは、運賃傭船料の收入の增加した結果であり、隨つて戰後海運業沈滯して右の收入に減少を來せば、直に對外債權の收入全體を不利の方嚮に導くのである。若しも斯る場合に對外放資に伴ふ利子收益の動かすべからざるものがあつたならば、運賃傭船料の減少に伴ふ影響を或る程度に支持し得る道理であるが、我國の現狀に於ては、之を如何ともするを得ない。若し其れ今後我國に資本の供給增加し、其一部を對外放資に投下するの望みありとすれば、將來の爲めに、一道の光明を認め得る道理であるが、近年の如く國內に於ける資本の供給甚だしく缺乏して、金利步合亦頗る高く、銀行預金に依つて、六分五六厘、信託預金に依つて七分二三厘、株式放資に依つて一割內外の利廻りが確實に收得される場合に、對外放資の行はれることを望むが如き、架空に屬する所であつて、寧ろ今日の如き金利の低落す

る限り、外國から資金が流入し來つて、我國の對外債務を加重するものと覺悟しなければならない。大正十二年の震災前に於て、民間事業會社中、外資輸入を計畫し、又之に成效したものも相應にあつたが、震災後に至つては、政府自ら巨額の募債を外國に試みたのを始めとして、他に之に倣ひ、又倣はんとするもの〻續出するが如き、要するに内外國に存する利鞘の大なる事實の然らしめる結果であつて、將來我國金利步合の降下するに至らざる限り、我國の對外債務は加重するの外に、道なきものと考へられる。

若し其れ海外移住民の送還金に至つては、海外に於ける排日の風潮甚だ盛であつて、合衆國、加奈陀、南阿弗利加は勿論、最後に殘された南米諸國に於てすら、日本人の移住を喜ばないとすれば、將來此種の收入の增加することも望まれないであらうし、來遊外國人消費金の如きに至つては、固より論外であつて、齒牙に縣くるに値しないのである。

(七)

斯の如く論じ來ると、我國の經濟が何故に常に窮迫した狀態に居り、何故に絕えず他の脅威を受ける地位に居るかの所以は自ら明瞭と爲るであらう。讀者の理解を便ならしめる爲めに、項目に分つて、概括すれば、

第一、輸出品として輸出貿易の巨大と確實とを維持する物資がない、輸出額の最も大なる生絲は合衆國の經濟狀態に依つて、其價格や、輸出の數量を支配され、他の一たる綿織物は支那市場の狀勢若しくは支那に綿絲綿布業の起ることに依つて、販路に脅威を覺へざるを得ない。

第二、國民生活并に國民產業の現狀并に將來を案ずれば、外國から原料品并に食料品の供給を仰がざる可からざる結果、貿易上に輸入の增加する勢は到底之を免がれない。

第三、然も此輸入超過を決濟する對外債權收入の確乎たるものは、一として備はらず、海外放資は振はず、海運業の運賃收入は不定の狀に居る。

第四、今日我國に原料品を供給する半開國に工業勃興の機運を生じ、之に應ずる爲めに、原料品の供給を國内に留保するの處置に出でたならば、我國は忽にして從來發達しつゝある工業を維持し、又存立せしめる基礎を喪失するに至る。

第五、假令ひ諸外國に於ては、我國に對する原始的産物の供給を制限する意思を持たない、依然として其供給を繼續するとしても、我國々際貸借の狀況が不利であつて、債權收入の過剩額に依つて、輸入超過を決濟するを得ないとすれば、我國は原料品や食料品の輸入に依つて生ずる入超額の決濟には如何にして當る可きであらうか。決濟に必要なる資源を有せざる結果として、結局輸入額其ものを制限せざる可からざるに至る、

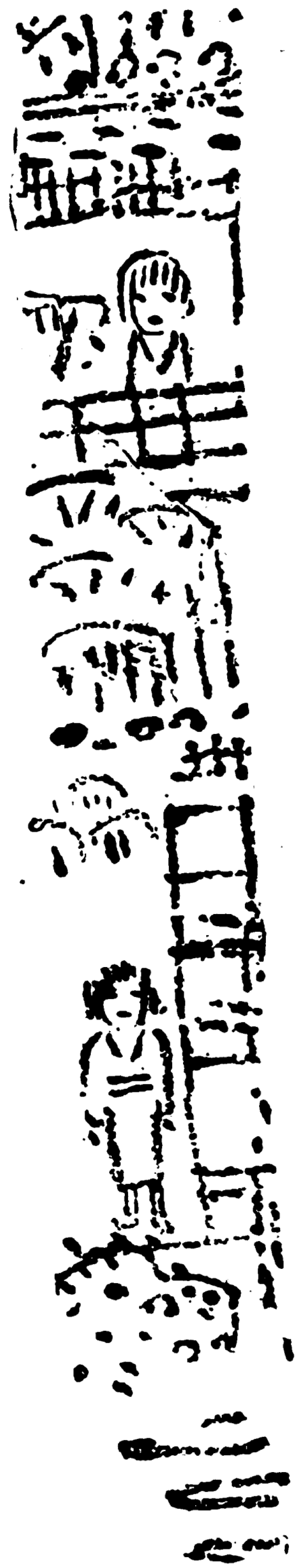
第六、些細の金額に於ける決濟であれば、或る程度まで現に我國の所有する金貨の現送に依つて、之に當るを得るであらうし、又其現送の結果として、内國の通貨に收縮を來しても、何等の苦痛を國民に感ぜしめないであらうが、幾回かに亙つて、此政策の繰返さるゝに至つて、尙ほ國際貸借の狀況を有利に轉回せしめるを得ないとすれば、茲に我國貨幣制度の基礎を撼搖し、總ての方面に亙つて、國民的信用の失墜を招くと云ふ悲慘事に接するであらう。近年我國圓價の低落するや、國民の錯愕甚だしきやに認められる。然も尙ほ其低落の起つて以來、日を閲することの淺き一方に、貿易上の狀勢一轉したならば、圓價の恢復亦期して、待つを得るであらうとして、自ら慰める者があるが、私を以つてすれば、我國經濟の根柢に種々の弱點あり、幾多の缺陷あるに於ては、圓價低落の如き、起る可き必然の事相であつて、一時の恢復は更に仍、永き經過に於て、此事のあるを以つて、當然とする。

諸點に歸着するのである、我國は傳統的經濟思想に制せられて、貿易上に保護政策を實行することから、免かれるを得ない。斯くて保護政策の行はれるだけ、國際共通經濟の範圍を制限し、其效果を奪取し、我國をして鎖國孤立の狀勢に赴かしめる次第であるが、此以上に我國自ら鎖國經濟を可なりとして、之に就くが如きことのある可からざるは勿論である。然も尚ほ内外經濟上の狀況から考へて、鎖國經濟の窮境に陷らざる可からざることゝ爲りはしないであらうか。現に最近國際經濟上に起りつゝある出來事で、我國に重大なる影響を及ぼすものは、一として我國を其意に反して鎖國の狀勢に導きつゝあるものならざるはなき極きに居るではないか。第一、外國に於て我國の移民を排斥するが如き、第二我國の海運業に使役される船舶が其噸數に於て、其速力に於て、外國の所謂優秀船に比較して、遜色を示し、海運國としての我國の地位頗る危殆であり、到底運賃收入の增加を望む能はざるが如き、第三斯る事情に依つて、減少の已むを得ざるに至る對外債權の收入を他に補ふに道があるかと云へば、殆ど之を見出すを得ざるが如き、第四斯くの如くして外國から購入する物資の代金を決濟する方便を得るに難く、其購入を制限せざる可からざるに至るが如き、盡く我國に向つて、鎖國經濟を强要するものに外ならない。

我國が輸入超過を抑制し、貿易上の均衡を得る目的を以つて、奢侈品の輸入を禁遏する政策に出でたのは、一種の鎖國經濟を營まんとするものに外ならない。然しながら奢侈品の排斥であれば、鎖國經濟の及ぼす影響必ずしも大なりとしない、若し其れ原料品や、食料品の方面に鎖國經濟が適用され、然も其適用されるや、原始的產物の國內自給を必要とする自發的意思に基くのでなく、支拂方便の不備不足する結果として、强制的に行はれるに至つては、其國民生活を壓迫し、國民產業を攪亂し、國民をして懶惰せしめるもの、尠少なりとする能はざるのである。我國としては今日此鎖國經濟を强要せられんとする國際經濟上の狀態を打破し、自由に外國の物資勤勞資本を利用すると共に、我國の物資勤

勞資本亦外國の之を利用するに任せるの方針を取らざる限り、經濟的立國の安全を期圖するを得ないのである。英國が百二三十年前ナポレオンの大陸制度に依つて、鎖國の狀態を強要されるや、一時相當の苦痛を嘗つたに相違ない。然も武力を以つて行はれた鎖國は同じく武力を以つて、之を打破するを得るし、一のナポレオンの擁する勢力を剿滅すれば、以つて大陸制度其ものを除却するを得たのであつて、事の甚だ簡單なるを認められた。之に反して今日我國が陷らんとする鎖國經濟に至つては、國際經濟上に於ける自然の狀勢より來る所多くして、特に或る一國又は少數の國の作爲し、計措するものでないと共に、我國經濟政策に於ける積年の謬妄の然らしめる所もあり、我國をして此狀態を脫せしめるに就ては、種々の難問題に接せざるを得ない。難中の難事は我國民が我國經濟の現狀に對する理解を缺き、恰も釜中の魚と異ならざる運命に陷りつゝある我國の經濟に對して、依然たる一種の樂天觀を持し、徒に一時の推移に任せて、他に顧みる所なきの一事である。時に時艱を正解する人ありて、種々の對應策が發案される。是等の政策を詮案し、綜合すれば、以つて經濟的經綸を樹立するに難しとしない。即ち原始的產物の供給に於ける不安若しくは其不足に當る政策としては、對支經濟關係を刷新し、我國工業の一部分を支那に移すが如き、滿洲朝鮮に對する經營方針を一變することの如き、內地に於ける水力を利用し、殊に水力國有の根本策を決定するが如き、化學工業を獎勵し、殊に其基本たる學術的研究を盛ならしめるが如き、幾多の機會に於て、多くの人々に依つて發表された意見であつて、何人も之に反對せざる有樣であるに拘はらず、當局者に斷行の勇を缺き、綜合の力を備へざるものゝ如くである。更に議論の紛糾することは免がれないであらうが、私一個の意見としては、國有主義の如きは、啻に水力に之を適用するに止めず、獨占的性質を有する富にも亦廣く及ぼして、富の少數者に集中される勢を遮斷し、集中せしめ可くんば、之を國家の手に移し、國民全體の生活を容易にすることに依つて、貯蓄の奬勵、資本の增殖を謀り、增殖された資本の對外的運用を

望にすることを必要とする。是等の問題に就て、議論が闘はされ、其正しきと認められる所に向つて、經濟的經綸が進められるならば、甚だ可なりとするを得るが、今日の狀態を見れば、當局者に綜合的能力を缺くことの結果、一の政府の爲す所、盡く矛盾と撞着とを以つて、滿されて居るではないか。財政の規模は廣大なる儘に、之を放置して、國民經濟の振興を求めたり、國家自ら莫大なる消費を試みつゝ、物價の調節を必要としたり、物價高くして、國民生活を壓迫しながら、國民に勤儉貯蓄を奬勵したり、生產費の增加著しき際に、輸出の振興を期待したりするが如き、何れも我國經濟政策の謬妄を極めることとの一斑を語るものに外ならない。斯の如くして我國をして鎖國經濟の窮境を脫せしめるが如き、思ひも及ばざる所であつて、我國は心ならずも四圍の壓迫から、鎖國孤立の苦痛を經濟生活に嘗らされば已まざるに至るであらう。其時に到達して、惶惑するも、如何ともするを得ない。今日此狀態に近づきつゝある時を以つて、私は我國民が我國經濟の現狀に對して、正當の理解を持つこと必要とし、此一事を忠言せんとするものである。



戰爭反對國際週間に就て

アンリ・バルビュッス

先月、わが歐羅巴には一つの重大な事件が起つたが、政府筋又は反動派筋の大新聞紙は、これに關して、すべて實に意味深き同一歩調をもつてして、僅に之を報道するが、又は之を全く默殺するに留めた。この事實よりして、吾人は果して次の何れについて吾人の驚きを最も大にしなければならないのであらうか。或はこれから私の述べやうとしてゐる運動の、その物質的又精神的方面に亘つての疑ふべからざる結果に就てであらうか。或はまたこの運動に關し、大新聞紙の手により輿論に對して企てられた、あの組織的統一的な默殺に就てであらうか。

問題はかの「帝國主義的戰爭に反對する國際週間」である。これは純然たる無産者の諸團體が口火をつけたものであつて、運動は特にフランス並にドイツに於て深く大衆の心を動かしたのであつた。歐洲諸國に於ても、單に毎日、新聞を讀むことによつていつも社會の報道に接してゐるものとのみ無邪氣に思ひ込んでゐる多くの人々は、いまかうした秩序立つて大膽な、大仕掛な戰爭反對のプロパガンダのことを知り、またその運動が勞働階級の中に惹き起した大きな反響のことを聞くに及んで、全く驚倒せざるを得ないであらう。

先づそれについては、このプロパガンダの形式の上からして直ちに生じて來る、運動の明確な國際的性質について特に述べて置かなければならない。即ちこの運動のためにフランス人はドイツに出かけて行つてプロパガンダをやり、それと同じくドイツ人はまたフランスにやつて來てその使命を果したのであつた。（私は特にこの意味深い獨佛提携しての運動のことを力說したい）このことからして（これが重要な點であるか）人々がよくインタアナショナルの同志に對して浴せる非難、すなはち彼等は單に隣邦の國家主義を盛ならしめん爲にが自國々民を衰微せしめるものだといふ非難は、之を加ふるの餘地が全くなかつたのであつた。運動の鬪士達は至るところに於、て國家主義者やファシスト達の狂人じみた攻擊にぶつつかつた。フランスに於てもドイツに於けると同じく、かうした意味で大分馬鹿騷ぎが演じられて、吾等の同士や私などは、種々忌はしい宣言の的にされたものであつた。反動派の諸新聞紙は立つて、この危險なる「攪亂分子」たる我等に反對を試みた。（尤もさうはいふもの丶この點反動派諸新聞紙の態度は、吾人が進んでその國に至りその地に於ける民衆の裁斷の前に切つて落した戰ひの眞正の意味、その戰ひの眞實の偉大さを傳ふるに際して、前に私の述べて以て反動派諸新聞紙の態度となして置いたところのものと異る點なしと云はねばならぬ。如何となれば彼等は戰ひの狀況を報道するに當り、その戰ひの實際に於ける壯大さとは似てもつかぬ報道しかなさなかつたからのことで

あつた。）

かうした運動の意味並びにその重大さこそ私が日本の讀者諸君に向つて明確に說述しやうと思つてゐるところのものなのである。かうして私は讀者諸君に、今や吾等が住む古き大陸にあつての「革命的狀態」とも呼ぶべきものに關して、理解をお與へしたく思つてゐるのである。

かの一九一四年戰爭の第十回記念日に際して、種々な運動が組織され、特にそれが所謂「平和論者」の團體によつて組織されたのは人の知るところであらう。彼等は雄辯に世界平和の必要や戰爭の恐ろしさなど說いたものであつたが、その一を確立し他を滅ぼすためにといつては、何等有効の手段を執ることもなく、また眞摯な手段を考へることすらなさなかつたのであつた。かくしてこれは各國民に對し、たとへ鬪士の面々は同情すべき善意をもつて動いてゐたかは知らないが、要するに一の美事な欺瞞を敢てしたことに外ならなかつた。しかもかうした夢のやうな、眠り入つたやうな、糠喜びをさせるに過ぎない運動に對しても、保守派新聞紙は（これは如何にも尤もなことではあるが）決して機嫌を惡くするやうなことはなく、いゝ氣になつて書き立てゝやつたものだつた。ところで改めて云ふ迄もないことではあるが、吾等の運動たるや、かうした無益な、從つて一の罪惡ともいふべき（何故かといへば今や問題は多數民衆にとつての死活問題に繫つてゐるのではないか）かうした空論とは全然別種なものなのだ。

われらのこの「週間」の提唱は、同時に「舊戰鬪員インタアナショナル」「共產インタアナショナル」「革命青年團」並に「統一派勞働同盟」によつてもなされたのであつた。

一九二〇年吾人がジエネバに創立し、佛、獨、墺、白、伊、露、塞、勃、希、米の大戰生殘りの人々によつて作られた「舊戰鬪員インタアナショナル」は、戰爭に反對するため、實際的積極的の方法によつて戰ふために、決然として、

政治的立場、無産者的立場に據つて立ち上ることになつたのであつた。一九二一年ウインナに於ける總會は、所謂「文明」國なるものが殆んど二つに立ち分れ、その各々が史上曾て類例なきほどな虐殺と破壞とを敢行せんがために互に打ち合つた一九一四年七月三十一日なるかの宿命的な日を迎ふるに際して、諸國の支部に說くに大々的デモンストレエシヨンを行ふべきことを以てした。この記念祭は昨年行はれたのであつたが、その目的が値してゐるだけの反響は之を聞くことを得なかつた。今年、その最近ベルリンに於ける總會の決議に本いて、「舊戰鬪員インタアナショナル」は再びこの戰爭反對の壯烈なる記念祭に更に重さと廣さとをば與へて之を決行すべくその決心を固めたのであつた。

「舊戰鬪員インタアナショナル」は、かの第二インタアナショナルやアムステルダム・インタアナショナルと各々聯絡をもつ社會主義團體又勞働組合をもその中に包括せしめて、あらゆるプロレタリア的色彩をもつた前衞諸團體に向つて呼びかけをなした。そして共々に一つの「實行委員會」を組織し、かうしてその色彩の上の多少の區別などは問ふことになし、全プロレタリアとしての反動運動の力を一つに集めて、大々的に事を行はふとしたのであつた。これこそかの「共同戰線」の戰法なのであつて、この戰法たるや帝國主義的戰爭反對の大衆運動には屈强の戰法とも云ふべきものであつた。實際「舊戰鬪員インタアナショナル」たるや何等の黨派の屬するものではない。それは「諸國家などから超越して居るものであると同じやうに、それは各黨派からも超越して」ゐるものなのであつた。その目的とするところは純然たる戰爭反對、その綱領は全くアンチ・ミリタリズムの語に盡きてゐて、且この運動の特質(であると同時に權威)をなすところのものは「アンチ・ミリタリズム」なるその語の示す意味を充分に體現せしめんとするところ、並に「戰爭に對する戰ひ」を論理的に伸張して、現代社會に於てその戰爭の恒久的、宿命的な原因をなしてゐるかの資本主義に對する戰ひにまでこれを發展させやうとするところにあつたのであつた。

然るに「舊戰闘員インタアナショナル」より發した呼びかけの言葉に對しては、單に共產主義團體・分子からの回答が聞かれたのみであつた。他の團體はすべて之を回避した。すなはち彼等權力階級との關係やら、またはその歡心を買はんとする下心などからして、彼等にとつては余りに革命的に思はれたこの舉のまへに、意氣地なくも尻込みして、かうして彼等は現代の政治的鬪爭のなかにあつての彼等の存在の意義は全く失はれてゐるものであることを證明し、そしてかのレニンの云へる「改良論者は社會主義の右翼にあらずして、ブルジョアジイの左翼なり」といふ言葉をば改めて裏書きするに至つたのであつた。

だが一方、共產インタアナショナルの側に於ては、これまた戰爭反對のための大衆運動を組織しやうといふ考へを持つてゐた事でもあつたからして、かうして事實上また論理上、かの絕對的戰爭反對の國際的同盟、即ち合理的實際的にして決して口舌のものにあらざるかのアンチ・ミリタリスムの同志達は、戰爭の眞の原因に對するその勇壯なる行動に出づるにあたつて、味方としては、これも自らの樹立する共產主義のプログラムを確立せんとする、共產主義的團體のみを見出すことになつたのであつた。

かうして一再ならずも吾人が常に斷言してはゞからなかつた主張、そして表面的な觀察者にとつては一見僻論のごとく見られながら、しかもそれは事實の正確犀利なる判斷として誤りなかつた從來の吾人の主張が、改めて確證されるに至つたのであつた。

仍ち今日の社會的政治の鬪爭は二個の「集團」の間の鬪爭に還元して考へなければならない。二個の「集團」とは何ぞや。一は保守的集團であつて、これはあらゆる既成權力の力づよき團體、及びこれに變革を加へんとするものに對して直接間接に反對するところの凡ゆる分子（その中にはかの所謂「反動主義者」よりはじめて、無數に存在する無智者

憫情者も包含して、かのソシアル・デモクラシイを說くもの迄を包容する）より成立し、××××××××××××
××。××××
×××××××××××××××××××××××××××××××。××、××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××××××××××××、×××××××××、×××××××××××、
×××××××××、×××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××、かへつて物質的にも精神的にもその基礎を強固にしてやるといふやう
な結果に了つてしまふものなのだ。そしてメカニスムの全體は何うかといへば、その不正、虚妄、罪悪を藏しながら厳然としてその存在をつゞけて行く。

私は繰返して云ふが、いま在る事實が、その全體よりすると部分からするとを問はず、吾人の心に迫つて止まぬ所以のものは、これまさにそれが單なる學理的の承認を云々すべき程度のものではなくなつて、實に常識的確認を必要とすべくなつてゐるからなのである。實に世界目下の狀態たるや、輝きわたる鮮明さをもつてその實相を現はし來らうとしてゐるのである。

今私が玆に述べる運動にして見ても、かゝる目下の情勢を更に裏書きしてゐるものであつて、この運動こそは人力の如何なるものを以てするも最早默殺することを得ない大いなる萬國民衆運動の幕を開けたものといつて差支へない。

三週間に亘つて――「戰爭反對國際週間」はその期間に於て「週」の三倍を要することになつてしまつた――私の同志や私は「實行委員會」の命令の命ずるまゝに、北より南に、東より西に、白耳義を通過してフランス及ドイツの大部市に散開して出動し、吾人が徵寄して以て「戰爭に對する戰ひ」の眞のプログラムと言ひ得るところのものをば開陳し

て歩いたのであつた。

吾人はかのブルジョア的、架空的　抽象的な「平和主義」の、その辯舌巧みで見てくれのいゝ蜃氣樓をば、あからさまに暴露してやつたのだつた。彼等こそは實際、かの武器による鬪爭の血腥い問題の解決をば、單に假幻架空の理論によつてのみ處理しやうと試みるものであつて、一旦之を實際生活の上に適用する段になれば、忽ち後退りして回避して了ふ手合なのだ。

吾人はまた國際聯盟の無力と僞善との面皮をも引き裂いてやつたのだつた。これなどは要するに華やかな假幌のかげにかくれて、列強の、殊には英と佛との帝國主義的掠奪の道具になり了つてゐるのだつた。かうした列強の指導者達は皆このお芝居じみた機關が、單に表向き立派な言葉を挽きこなす粉挽小屋位の役目しかもつてゐないことをよく心得てゐるものなので（その例證は多々擧ぐることが出來る）國際聯盟といふも、要するに「正義」と「各國民の權利」とのお芝居を大ツぴらに演ずるために、さうした連中のお役に立つてゐるものにしか過ぎないのだ。

吾人はすでにソシアル・デモクラシイ政治の破産のことを述べた。それは英國にあつてはマク・ドナアド政府によつて代表されたが、これは前任者達に劣らざる殘虐さを以て、かの長年月のこの方よりの英國の壓制政策（印度、埃及、スウダン、波斯、コンスタンチノオプル等に於ける）を踏襲したのだつた。又一方佛國にあつては社會黨が之を代表し、ルウル占領の豫算を可決し、エリオ内閣を熱心に援助したのであつたが、そのエリオたるやポアンカレの創意に出たあらゆる政策の忠實なる後繼者であつて、かのドオズ案の名の下に知られてゐる、資本によりドイツを植民地化さんとする不條理なる條件までをも踏襲し去つてゐるではないか。

吾人は目下世界の國民なるものは、傀儡と變りたる一個の人爲的方法によつて互に合體せられ、かくして國家的集團

をなして居るものであるといふこと、實際に於て人類は世界を擧げて搾取者と被搾取者の二個の部分に分たれてゐるものに過ぎないといふこと、××「×」××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××、××、××××××××××××××××××××××××××××××××××××××、現代の陋劣なる社會にあつて今日まで山をなして酷使され虐げられつゝあつた人々の群を救ふの途は、再び來らないであらうことを力說したのであつた。

いま世界各國民の接近の問題のうちにあつても特に佛獨兩國の民衆による接近が重大な意味をもつ今日に於て、吾人同志の輩はフランス及ドイツの至る所に於て右に述べたやうな趣旨を宣言し、かの昨日の大戰また來るべき明日の大戰の眞の責任者の何人なるやを說き、かの所謂講和條約がその實は掠奪と報復の條約に過ぎざることの僞瞞を剔抉し、更に社會生活の上に於て益々增大しつゝある資本主義の跳梁、特に米國資本主義の跋扈のことをば指摘したのであつた。吾人は云つた。戰後の復舊のための費用たるや、これを現に金錢の蓄積せられてゐるところから取り來らなければならない。×××××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××。そして今現に釀されんとしつゝある新しき帝國主義的の戰爭は、之を未然に防止するか、或はまた一旦戰爭勃發の曉に於ては××××××××××××××××××××××××、と。吾人は所謂「外國の」兵士達に向つて、同胞愛の神聖なる義務について說いてやつたのだつた。感動すべくまた注目すべきことには、かうした鮮明な性質をもつたプロパガンダは、絶えず新顏の集つて來る民衆の無數の聽衆のうへに、深い共鳴と熱烈な感激とを惹き起

したのであつた。ドイツに於ては、かうした言葉は、どれもこれも聽衆（無産者、青年、學生、婦人）無慮五千人を超ゆる會合に於て叫ばれた。しかも特にベルリン及ハンブルグに於ける講演會は驚くべきほどの聽衆をもつて滿されたのであつた。かくして吾人がドイツに於ける講演會はその數八十回を超えた。これによつて吾人の知り得たところのものは、今や無數なる無産者階級も遂にその眞正なる運命を了解してその絕對意思を表白しはじめ、かのブルジョワ階級が、その兆候を默殺することによつて完全にこれを封じ得たりと自ら信じ慰めてゐるあの大事變も、實は想像以上な速さを以て近きつゝあるといふことであつた。過般、ドイツ青年革命黨の人々から托せられて來た赤旗を手渡しゝた、わがフランス青年革命團の會合の席上でも述べたことであるが、たしかにいま世界には何ものか變つたことが行はれつゝあるのだ。

改革者に反對する公權力の二つの武器「兇暴な迫害」と「デモクラシイのお芝居」とは、今やプロレタリア向上の炎大な勢ひと、その熾んな活動とによつて、その力を日一日と失つて行つてゐる。乍併さうはいふものゝ、これを以て今直ちに、既成勢力を守らんとする人々と、又これを徹底的に攻擊せんとする人々との間に存在する、現在の大いなる力の差異を看過するの愚をなしてはならない。現在民衆のもつ力は漸くこれから伸びて行かうとする力である。それに反して資本主義による壓迫の力たるや現在の力であり且實際的の力である。然し爰に注意すべきは、前者は今後益々その力を增大して行くべき傾向あるに反し、後者が步一步その力の凋落を見んとしつゝあることである。

今日より以後に於ては、各國の民衆に於てもその利益とするところを辨別し得るやうになり、他方達識正義の士に於ても、現時世界政治上にあつてな旺勢を占めてゐる今日の遣り口をして此儘に存續せしめるときは、遂には人類をして疲弊荒廢、修羅場の慘に導くことに了るだらうし、從つて現に行はれてゐる不斷の軍備擴張だとか、益々完全なものと

なつて行はれるであらう戰爭の勃發だとか、それに伴つては地上に生を享け忍苦の生活を營む他の同胞を虐げることによつて我れ一人利する特權者流の暴富だとか、植民地を目的とする破廉恥な掠奪行爲だとか、その他、數理的に何等安協の餘地の見出されない諸國家間の競爭によつて起つて來る諸種の難問題とか、かうしたものを絶滅させるためには、他なし、人間活動の全部を擧げて、均等でありそして萬國共に手をたづさへての協同勞作の基礎の上に之を建直さなければならない、といふことを認めざるを得ないことになつて來る。今や數世紀に亘つての獨尊の榮華の後に於て、かの全能なる英帝國は躓屈んで蹣跚たるものがある。今日より以後に於ては人類は自己について十分の自覺をもつことになり、他の優勢なるものをして自らに代らしめて晏然たるなどといふやうなことはその跡を絕つやうになつて來るであらう。吾人は今日、實に、一の民衆が他の民衆を壓倒支配した歷史の、その最後の時代に際會してゐるものなのである。そしてこれよりして吾人は正に、全民衆の支配の時代に入つて行かうとしてゐるのである。

*

今日貴誌によつて與へられた機會を利用して、私が日本の諸君に向つて、現時西歐諸國の情勢並にその心的狀態についてお話しする所以のものは、何も單に諸君をして一種報道的な意味に於て歐洲に於ける革命思想の進步に通曉おさせしたいと思つてのことではない。すなはち私の意の在るところは、×××、×××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××。日本の國たるや、その古い歷史とその過去の富とに拘らず、その新氣、その鋭い理智、その驚くべき同化の能力、更にその神秘思想とその實行的な飛躍力の蓄積とを以てして、正に現代人類社會

に於ける大いなる若き力の一つを示してゐるものである。

未來は正に一部、日本に繫つてゐること、恰もこれが他の地球上の「新らしい」國民、例へばラテン・アメリカの國國を別としても、かの資本家の米合衆國や（これは現時眞實の意味に於て富裕なる唯一の國家であらう）勞農露國に繫つてゐるのと同樣である。

今や實際的な社會問題の論爭といふところまで入り來つてゐるとは云へ、その旺なる好奇の念にはまだ全體としての指導や調和が欠けて居り、その間、或は徒に障壁を設け或は努力の濫費の行はれてゐるやに思はれる目下の日本の智識階級及勞働者諸君は、どうか現在歴史上の今日なる時に於て、二十億の人々の面前に提出されてゐるこの廣大なる問題の、しかもその悲壯たる單純さを理解して頂きたい。そして複雜な政治上の關係や、こちたき論辯などといふものを立ち越えて、××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××、今や世界的な團結、×××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××××、世界的な團結が成立し、その秩序立つた組織が着々として確立されつゝあることを知つて頂きたい。

かの北米合衆國と英國との帝國主義的資本主義を盟主とする社會的保守主義の試みる反對運動に對し、地上にあつては無産者露國がその第一の實行者として立つたかの解放運動の意義を十分に研究して頂きたい。そして×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××、××××××××××××のものなることを十分に會得して頂きたい。かくして日本に於ても今や歐洲に於て然らんとしつゝあるごとく、×××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××。××、××××××××××××××××××、××××××××××。心正しき人なるかぎり、一度心中に自ら反省することあらんか、×××××××××××××、ずるべき時代の人々を救ふべきもの他に無きことを悟るであらう。

*

長き年月の間に人智が閲して來た數多い幾多の變革は、すべて深い類似點をもつてゐて、そのうちのある分子を置き換へることによつて、一を他に結びつけて考へることが出來るものである。凡ゆる稔り多かりし思想上の變革なるものは、それが哲學的、宗教的又は科學的、藝術的の思想に關するものたるとを問はず、すべてそれまで冒すべからずとされてゐた一つの形式(フオルマリズム)より脱して、純眞なる天來の法則をば發見し、或はまた之をば既に用ひ古され又は紋切型となつた在來の形式の中に再び發見しやうとする努力なのであつた。此の如くにして、現今大いなる宗教の建設者或は改革者と呼ばれてゐる人々は、當時の大多數の人々からは罵られながらも、宗教からして抽象的又は具體的の偶像をば逐ひ拂つた人達なのであつた。また形而上學の深邃なる思想體系を打ち建てた人々も、亦哲學から既成概念といつたやうなものを逐ひ出し得た人々なのであつた。また實驗科學の建設者と稱せらるゝ人々は、科學からして迷信や假說を放逐し了せた人々なのであつた。これと等しく、新らしき社會組織の建設者は、いまや社會科學なる實驗的思想、集團的實在よりしてその亡靈を逐ひ拂はんとしつゝあるところのものなのだ。

吾人は自らそれを意識することなくして神聖なりとされた種々の言葉の影響をうけて生活してゐるもので、たとひさうした言葉が何等實在する何ものかと適合することなき場合に於ても、なほ且吾人はそれに對してある迷信を持つてゐ

るのである。人間の性質に普遍的な或る一種の惰性からして、吾人はかうした良い加減な言葉に滿足してしまひ、例へばかの「文明」だとか「デモクラシイ」だとか「國家」だとかいふ荘重な言葉を愛好して、かうした言葉を尊重することがさうしなければ何となく冒瀆のやうに思ひなされるといふ位の氣持からのことなので、かうした言葉がその實すでに以前の美しい意味を失つて了つてゐて、今や人工的、假想的な觀念にしか當嵌らなくなつてゐるのだといふことなどは認めやうともしなければ、認めることもなし得なくなつてゐる。しかもかうした言葉こそは、民衆の自由やその生存上の利益に對して加へた自らの犯罪的行爲を糊塗せんがために、世の權勢ある人々が好んで用ゆるところのものに他ならないのだ。

今かうした言辭的偶像の厭ふべき妖術を打ち滅ぼし、新らしき世界を打ち建て直さんがためには、單に論理と正義の觀念あれば以て足りるのである。しかも二者實は一者を成すところのこの二個の資質たるや、常に嚴しきものであり、ねばり強きものであり、且大膽なものなることを必要とする。この意味に於てこれらは寧ろわが歐洲諸國に於てよりも、寧ろ理解力に富み、活氣に充てる民族の内に於て之を求むべきものと云はなければならぬ。悲しいかな、われらが歐洲の諸國にあつては「選ばれたる人々（エリット）」は全く疲れよろめき、只プロレタリアのみ巨人の如き雄々しき足取りを以て歩みを運んでゐるに過ぎない。プロレタリアのみは、かうした老衰によつて枯れ萎んだ國々にあつても、猶且未だ曾て試みたことのない力の有つ、あの滿ち溢れる若さをもつてゐるのである。

吾人は別に過失に陷るの虞れなくして、目下のこの民衆高揚の目覺めをばかの自然力の目覺めと比較し、またこの地

上の事件に向つて勞働者團體の主權が擴張されて來るといふことをばかの物質的宿命の性質に從つたものとして解得することが出來るのであるが（事實、勞働團體は最も强力なものであつて、今日まで彼等が受動的であつたといふのも、要するにそれは彼等の無智と無自覺からの結果に他ならなかつた）――然し、それにも拘らず、この運動に對しては數多の罠が張られてゐて、一時的にでもこの運動の進展をとゞめ、その步調を亂さうとしてゐることを忘れてはならない。プロレタリアは只組織の力によつてのみ國際的に自らの地位を占めることが出來るのだ。即ちあらゆる努力をば一の目的に向つて集中せしめ、××××××××××××××××××××××××××××、次には各部分各分派の内に於けるこの運動をばまとめて、事實、實行的にして眞摯なるかの共産インタアナショナルなる單一の國際的運動のうちに合致させて行かなければならぬ。

かうしたやうな凡ゆる擴げられた人々の活力をば集中させる大運動にあつては、その中央統一をあまりに急いではいけないし、また一般から云つて眞劍な連中を逸する惧れある安價な黨派的精神を愼まねばならぬ。今日に於ては革命家にも多くの異つた階級、或ひは多くの異つた層といつてもいゝが、何しろさうしたものがある。或者は實行的にも理論的にも必要なだけの智識はすべて之を體得してゐるに反し、他のある者はまだ生成の途中にあるもので、現に動きつゝある前衛の方に向つてその道を辿りつゝある狀態にある。かうした宏大な仕事のために力の動作をなして、かうして人類社會の長年月に亘る形態をその根底よりして變改しやうとするに當つては、各人は各々の手段に應じ、その爲し得る程度のことを爲し、自らの任務を盡さなければならない。この意味に於て、その進路を輝かし實際的の計劃を策する政治的部派の他に、各々それ自身特有の目的を持つた附隨的の團結も今迄通り存續させるか、または新たにこれを創設することがなければならない。「舊戰鬪員インタアナショナル」のごとき、正に之に入るべきものである。××××××

×××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××。一方、例へば智識階級を集めての團結といふやうなものもまた欠くべからざるものゝ一つである。すなはち、××。かうしたことこそ正に今日の人々の前に開かれた活動範圍なのであつて、××。爰にいま私が極く概略的に、その必要であることゝ而してそのためには今が最も好き時機であることだけを述べて置いたかうした團體の各々については、他日改めて更に詳述するの機會を有することゝ思ふ。×××××××××××××××××××。「×××××××××××、××××××××、××××××××××、××××××××××××××、××××××××××××××、×××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××」×。

FÈTE FUNÈBRE

Je vous invite tous à une petite fête. Ce soir on enterre mon nom. Il était temps, j'en étais excédé. On va l'enfouir quelque part avec les apaisements appropriés de manière à ce qu'il ne se réveille pas tout à-coup en poussant des hurlements. Que je me sers à mon aise et soulagé dans ce nom nouveau! Cela vaut bien de boire quelques coups de saké Acceptez également, Messieurs, ces crevettes salées.

FÊTE POPULAIRE

Une heure du matin J'éteins la lampe et aussitôt Fête populaire entre les jambes du grand *torii* sous l'arbre municipal qui porte à son coup allongé une cloche comme un chameau. Les familles sont bien heureuses de profiter d'un rayon de soleil entre deux averses. Toutes ces dames et demoiselles ont sorti leurs plus jolies ombrelles roses et vertes.

GRAIN

Dans l'infini de la neige au-dessous de moi je vois un point noir comme un grain de tabac qui se déplace vers mon ermitage. Le détachant de l'ongle et le plaçant sous le microscope il ne serait pas difficile de distinguer une femme suspendue à un bâton dans son *kago* entre les deux porteurs, empaquetée, comme il convient pour une si longue pérégrination.

EXPOSITION INTÉRIEURE

J'ai suspendu ces poëmes tout autour de ma hutte et quand j'allume ma lampe au milieu ils apparaissent tous à la fois.

(*Extraits du "Vieillard sur le Mont Omi"*)

PAUL CLAUDEL

「蛾眉山上の老翁」解說

昨年秋十月、ひとり伊香保に遊んだクロオデル氏は、一夜その客舍にあつて「蛾眉山上の老翁」と題する短章二十餘篇から成る散文詩の想を得た。こゝに揭ぐる「葬禮」「祭禮」「粉」「展觀」をはじめとしてその他「秋思」「月人」「無人」「虹」等の諸章、すべてこれ悉くその夜ク氏の心内に動き來つた奔放怪奇な幻想の數々を綴り出したところのものであつて、正しくこれ「展觀」にうたはれたごとく「これらの短章を探つてこれを四閉の壁面に揭げ、中にあつて忽ち燭に灯を點ぜんか、之等の詩篇は一時に照し出されて、讀者は正に蛾眉山上の老翁がその夜の詩境に參するの思ひがあるであらう。

「葬禮」(Fête funèbre)は詩人が自らの名を葬るをうたつた短章である。このしめやかな葬禮に詩人は我等を招きたいといふ。今宵詩人は自らの名を埋葬するのである。時は至つた。自らの名にもいまは疲れた。わが名が再び呼び聲をあげて月をさますことのないやうに、何處ともしらず、そつとそれをば埋めてしまはう。さて新らしい名を得て、何とわが身も心も輕々としたことぞ。杯を擧げて祝はうではないか。「何うぞ」といつて詩人はわれ等を招く「この骸骨をも肴に受けて與れたまへ」。

×

朝の一時、詩人が燈火を消すと、あの鬼燈のやうに頭に鈴を下げた大きな村の木の下の、鳥居の間をくゞりぬけて、お祭の行列がやつて來る。雨の晴れ間をよろこんで村の人々は大よろこび。女子供が取つて從きの美しい桃いろや緑の日傘をさしかざす。(「祭禮」(Fête populaire)

×

「粉」。(Grain)見下ろす下の無限の芥のなかを眺めてゐるとまるで煙草の粉とでもいつたやうな小さな黑い點がだんだん動いて、この私の隱れ棲む庵の方へとやつて來る。爪で掘り出し顯微鏡下に置いてみたら、おそらくそれは女人の姿、二人の駕夫がかいてゐる駕のなかに、この長旅のためにとてふかぶかと身を包まれた女人の姿が見られやう。

「蛾眉山上の老翁」の詩、もともと全篇としてのみ鑑賞せらるべきものであつて、クロオデル氏の原稿が横に幾つか折りたゝまれた青き高麗の一枚紙の上に記され、その一つ一つの面をもつて「心」をとりまく壁に擬し、その上に幾つかの詩句を散らして題してあるところから考へてみても、これらの詩句は、「その只中に燭を點ずるとき」同時にあらはれ出づべきものであつて、種々の事情からしてその内の幾つかの短章のみしか公にし得ざることは、ク氏に於ても少からず心のこりとするところであり、われらに於ても如何にも憾み多きところであるが、これら三四の短章をとつて見るも、クロオデル氏としてはめづらしいその輕快な散文詩形のうちに、「蛾眉山上の老翁」の風格をうかゞひ得て、讀む者微笑を禁じ得ざるものがあらう。

(山内義雄)

普選實施と政治敎育

普選實施と政治敎育

堀江歸一

我國民の間に、多年要望された普通選擧制度は今期の議會に於て、愈々成立する形勢と爲つた。固より我國の政治權力圏内に居る者の間には、依然として普選其ものを喜ばざる固陋の一派があり、其徒が如何なる術策に依つて、普選の實行を阻止する手段に出るかは、政治上の實際問題として、豫測する能はざる所であるが、今日の形勢から考へれば、先づ普選案が貴衆兩院を通過することだけは、間違なからう。道理から云へば、普選制度の成立を機會として、政府は衆議院を解散し、新選擧法の下に、總選擧を施行し、斯くて衆議院をして完全なる民意代表の府たらしめ、又は之に近きものたらしめるが當然であるが、今日の加藤内閣に斯る決斷は望まれないであらう。隨つて普選制度に據る選擧は意外の政變のない限り、大正十七年の改選期を待たなければならない。私共普選の實行に依つて、多少なりとも、我國政治の局面に變化の起ること、改善の行はれることを期待して居る者の立場から云へば、甚だ待遠しい。一日一刻も早く普選の下に總選擧の行はれる機會の生ずることを希望して、已まざる次第であるが、一方から考へれば、大正十七年に至る三年間は普選實施の準備時代として與へられた期間であつて、此期間に於て、私共は我國民に充分の政治敎育を施し、完全なる理解を現實の政治に持たせて、彼等の始めて行ふ參政權に過誤なからしめることを期したければならない。

ジョン・スチュアート・ミルは其代議政治論の一節に於て

「政治の理想的最善の形態として、主權の民衆全體の掌裡に置かれるものが擧げられる理由は其れが他の諸種の政治形態に於けるよりも、善く、又高く國民的品性の高上に資するを得るからである」と述べた。誠にミルの言の如くデモクラシー其ものが國民に對する一種の政治教育である。專制政治や、制限選擧制度の下に、多數の國民は政治に對して、風馬牛相關せざる地位に置かれ、如何なる政治が行はれても、之に服從する外に、爲す所を知らなかつた時代には、國民の政治に對するや、極めて冷淡であり、無理解であるを常とした。無理解であるが爲めに時に少數志士の煽動に依つて、暴動を敢てすることも亦絶無ならずとしなかつたのである。然るにデモクラシーの下に、多數國民が選擧權を持つことに依つて、政治に參與するに至れば、政治に對する興味の增進されるのは勿論であつて、自己の信條なり、利害なりに從ひ、一の政黨と他の政黨とに對して、批判を下し、其正しき政綱を掲げるものに向つて、各自の力を藉すのみならず、更に一歩を進めては、利害の相同じき者が政黨を組織することも亦必然の結果であると考へられる。

故に普選が實行されゝば、其事のみを以つてして、自ら國民の政治的知見を上進するに與つて力あるや、論を俟たない。我國に於て近年著しく左傾的急進的氣勢に支配されて居つた一部の勞働團體が普選實行の望みの近きに在ることを信ずるや、遽に態度を一變して、議會政策を主持するに至つたことの如きは、確にデモクラシーの國民に及ぼした教育的又は教化的效果と云へる。革命の如きは、政治的に國民の發展する道を杜塞した場合に生ずるものであつて、英國の政治學者ヘンリー・シヂウヰツク氏がデモクラシーを以つて革命回避の一方便としたことの如き、正しき見解と云へる。

デモクラシーと教育とは相併行せざる可からざるものであるが、本來教育の進歩には或る限度なるものが存しないと共に、教育の普及は絶對の必要事に屬する。日本で近年比較的多くの讀者を得たと稱されるハーンショー氏の「岐路に居るデモクラシー」に於て、氏はデモクラシーの缺點五個條を指摘して、其善良なる政府を得る能はざること、政府の健全なる限界を定める能はざること、細目に涉る過度の干渉を惹起すること、其適非に無政府を誘うこと、金錢萬能の風を盛ならしめることを擧げた。ハーンショー氏自身も此等の點に對して、駁撃を加へて居るが、私の見る所を以つてしても、上記の所謂缺陷たる、若しも幾分なりとも其形態があるとすれば、國民の無識の之を然らしめるものであつて、國民の知識を向上させる工風を講じたならば、優に之を回避して、デモクラシーの美果を收めるに難か

らざることゝ認められる。

我國現在の政治權力圏内には、保守固陋の意見を有する者が居り、又斯る種のみを以つて、特に一の權力機關を組織せしめて居る事實がある。此種の機關に於て、普選反對の意見を持するが如き、誠に其所であるが、其反對意見の一として、普選の下に、政治が極端急進に失することが擧げられる。彼等の見て以つて極端とし、急進とする政治は抑も如何なるものであるか。固陋の尺度を以つて、測つた急進の政治は正しき見地から云へば、存外公正の政治であるかも知れないのは勿論、假令ひ我國現在の制度を維持しようとか、急激の變革を避けようとか云ふ趣意から云つて、多少の變る所があるとしても、之を防ぐのが教育の效果であつて、教育に依つて、知見を進め、國民多數の是なりとする所に向つて、政治が動いて行けば、私共は其れを以つて、其時代に於ける正しい政治であると認め、之に服從して行くの外はないのである。デモクラシーの下に、私有財產權を束縛する政治の行はれるのは當然の歸結であつて、其事は私有財產權の擁護を過重視した從來の制度と違つて、有產者階級に不利益を及ぼすであらう。然しながら有產者階級に不利益を加へることを以つて、誰れか國民全體を傷けるものと云ひ得るであらうか。國民全體の利益に協ふ以上は、國有市有制度に依つて、私有財產を公有に移すことも、斯く公有に移された財產を國民又は市民全體の利益の爲めに經營することも、共に憚る可からざる道理である。唯何を以つて國民全體の利益とするやの判斷は一に國民の知見に於ける進步に俟つて、其公正を期しなければならない。

然らば如何にして普選の下に、國民の政治的知見を向上し、其政治的知識を普及せしめるを得るか、私は左に其方法として必要であると考へるものを個條書きにし、簡單なる說明を付する。

第一、國民の團體的運動例へば勞働組合、產業組合、小作人組合、消費組合の如きものを盛にし、所屬團體の利害を明にし、之に依つて政治上の嚮背を決せしめること、

第二、從業員勞働者に對しては、其從事する產業經營に參加せしめること。是れは國民が政治上に完全なる參加を認められ、デモクラシーの完成された以上は、產業上の方面に於けるデモクラシーとして、必要缺く可からざる條件と爲るのである。

第三、簡易廉價なる政治的出版物の刊行されること。英國の總選擧前に爲ると、諸政黨が黨の立場を說明して、國民の了解を求める爲めに、選擧の題目に充てられる重要問題に對し

て、簡易通俗の説明を加へた小冊子が一斤とか、一斤とか云ふ如き廉價を以つて、出版頒布され、國民をして政治上の趣旨に通ずる所なからしめることを期する。

第四、右の外、例へば Pros and Cons と題し、種々の問題に對して、贊成反對兩派の所説を公平に記述した書物が出版され、國民の知見を誘導する效果の少なからざるものあるやに認められる。

第五、出版物の外に、政黨員は勿論、中正獨立の地位に居る**人士に依つて行はれる**通俗講演が政治教育の方便として、有**效のものであることは**論を俟た**ない。**時事問題に對する解説**を主とし、學説學理の民衆化を行うことは、**デモクラシーを普及し、之を價値たらしめる必要條件である。

私は以上の見地から云つて、識者階級に居る人々が自ら高く標置したり、又は横文字を縦文字に引直したりすることのみを以つて能事とせず、我國實際の活きた問題を研究し、自ら街頭に立つて民衆啓發の任に當ることを望まざるを得ない。一方に民衆も自己に知見を授ける人に對して相當の尊敬を拂ひ、講演場に於て、帽子を被つたり、喫煙したり、私語を交へたりする無禮を慎み、講演者の注意を喚起して、説明の歩を進める便を與へる以外には、一切の野次的批評を爲さゞる位の道德を遵守されたいものである。

民衆の創造力と政治

靑野季吉

民衆の政治知識はまだいたつて低い。だから今直ちに選擧權を與へることは危險だ。それがかの普選尚早論者の口實であつた。ところで、普選實施がほゞ既定の事實となると、普選實施後に、鋭意政治教育の普及に努めなければ、せつかくの普選も反つて政治を混亂に導くばかりだ。と言ふやうなことがよく所謂識者や官僚の口に上る。

そこでそれらの人々が、民衆の政治知識が低いとか、政治教育が普及されねば普選も無意味に終ると言つた場合の、政治知識とか政治教育とかは、何を意味するかを考へて見なければならぬ。第一にかう言ふ場合、彼等の意味する「政治」とは、何かしら専門的な、指導的性質を具へた特殊の技術である。したがつての機構は、十分な教養を待つてゞなければ、理解することの出来ぬものである。そこで彼等の意味する政治知識、政治教育とは、民衆が、その機構を或程度に知ると言ふことであり、民衆にその知識を注ぎ込むと言ふことである。

それなら果して「政治」とは、彼等のいかにも勿體ぶつて振りまはすやうに、それほど専門的な特別な技術であるかと言ふに、決してそうでない。その證據には、大して政治知識も教育もなささうな金持の馬鹿息子や、華族の若造が、今日の「政治」に參與して、大して混亂を惹起して居ないのでも分る。政治知識や政治教育が、それほど政治に參與して行く上に大切なものならば、今日の兩院の議員中に、その資格を具へたものが果して、幾人あるかと言ひ度くなる。

「政治」をそんな風に、一種特別な機構でもあるかのやうに、自分でも思ひなし、他にも吹聴するのは、今日の治者階級が自己擁護の必要から編み出した一つの思考方法に過ぎない。政治を行ふと言ふこと、政治に參與するといふことが、彼等の國家に對して持つ仕事であつて、その重大な仕事に從事するが故に、彼等は國家から特權的地位を、當然に許されてゐるのだと言ふのが、その考へ方である。つまり政治を一種特別な、專門的な機構に造り上げなければ、彼等の特權擁護に都合のよい理論が出て來ないからである。

彼等がそんな理由で「政治」を天上界に祭り上げたに拘らず、政治とは渡にも言つた通りに、そんなに俗人の手のとゞかぬ底の代物ではない。實際、今日の政府組織などは複雜を極めたものには相違ないが、それにしてもいろんな傳統や、勢力關係などが動いて、無理に複雜にしてゐるから複雜になつてゐるまでだと言つた部分が、極めて多いのである。つまり非科學的、非機能的な複雜さであつて、本來そんなに複雜である可きでないものが、複雜にされてゐるに過ぎぬのである。政治全體に於ても同樣である。

政治の本來の性質は、社會生活の統制である、それを政治と名附けやうが何と名附けやうがそれは勝手次第であるが、とにかく社會生活の統制が、政治を必要とする根本である。それが階級對立の社會、即ち今日の社會に於ては、階級支配の用具に、必然の理由で、使用されてゐるに過ぎぬのである。そこで政

治的進化とは、その階級支配的歴史的な要素をふり落して、純粹社會統制の方向を生長させて行くことに外ならない。さう見て來れば、階級支配の用具として複雜化された政治を、社會人の自らなる統制と云ふ方へ、引戻して來るのが進化の必要であつて、いはゆる民衆の政治知識とか、政治教育とかを、上から啓發注入されることは、それといつて、餘り望ましいものではない。否、その産れの上に害毒さへ流し兼ねないのである。

いつたい社會生活の統制と云ふ方面では、民衆は、その時の生活條件に應じて、それぞれの形態で、相當に逞しい創造力を發揮してゐるのである。その事實は、所謂治者階級の政治の及ばぬ社會が、どうして維持されたかを歴史上に見れば分ることであるし、今日でも一國の平和は、**政治家と軍人が維持してゐるやうに吹聽してゐるが、實際個々の社會單位がどうして平和**にやつてゐるか、それがどれだけ大きな力となつて働いてゐるかを見れば容易に分ることである。**寧ろ政治家や軍人は**、さうした民衆の眞の「政治力」とでも言つたものを、破壞して行つてゐるので、その意味では、民衆が全然その創造力を失つてしまつて、治者階級の政治と同化してしまふやうに訓練された時が、彼等から見て民衆の政治知識が高まり、政治教育が普及した時なのである。

そこで普選實施後の政治教育を問題にする場合でも、飽くまでもその見地に立つて考へて見なければならぬ。今日の治者階級の持つてゐる政治意識から出發して、民衆をその意識でつつむことを目的としての政治教育ならば、そんなものは一切無きに勝るのである。民衆が、それに完全につゝまれることは決して有り得ぬには相違ないが、それにしてもそのおせつかいは、民衆の眞の政治的創造力の生長を大いに妨げることは言ふまでもない。たとへて見れば卑近なことだが、今日の勞働組合などは何等の他からの強制もなく、目醒めた勞働者の自らの社會的結合で、自らなる統制力を發揮してゐるものであるが、その統制力をますます生長させる事は、今日の政治や警察のおせつかいを、**完全に退けるのが一番よい**。組合間の統制の必要上から、**勞働組合法が必要ならば**、それは組合自身にこさへさせるのがその自らの統制力を生長させる所以であつて、治者階級が組合法を作成して強制することは、その生長の妨害にこそなれ、助長には決してなり得ない。民衆に對する政治教育の場合でもそれと同じことである。先づ第一には治者階級のおせつかいを一切打ち切つて、民衆自身の統制力を發揮させることである。

それには民衆に實際、政治を行はしめなければならぬ。今日の政治組織に於ける、官僚的な要素を一掃してしまつて、民衆自

身の社會的、經濟的な結合を土台として、それを政治單位として、民衆の統制力を發揮されることが、第一の政治教育である。例へば今日の地方長官の任命制の如きは、ずいぶん地方社會を馬鹿にした話で、よく言はれる通り、維新革命直後の極度の中央集權の歴史的殘滓、詰り政治上の盲腸である。それから政治區劃にしても、封建政治の自然的區劃をそのまゝに執つてゐるのが多く、今日の民衆の產業生活にとつては、全然意味を失つてゐる部分が多い。さう言ふものをそのまゝにしておいて、且つさう言ふものゝ上に仕組まれた機構を叩き込んで、政治教育の能事終ると思つたら大間違ひである。元來から言ふ政治組織の改革は、民衆の勢力が政治の上に強く反映しなければ、到底實現出來る事柄ではないが、それにしても民衆の政治知識や政治教育を云々するからには、その準備がなくしては無意味だ位は知つておく可きである。今日の學生に社會的關心がないとか、社會的知識が缺乏してゐるとか非難しながら、學生が社會的な活動に親しんで眞に研究を充實させるやうな企てに出ると、すぐさまそれを危險だとして禁壓するやうな今日の治者階級の「教育」に關する觀念が、一切の教育別けても政治教育の第一、の非重要な障礙である。

前にも一寸それに觸れたが、いつたい特別に「政治」の專門學があると思ひ込んで、それを教へ込まなければ、民衆を政治に參與させるのは危險だと云ふのは大へんな間違ひで、民衆の自然の社會的、經濟的結合を助長して、義務教育でも終つたらば、直ちに各人その欲する產業活動に入ることを容易にして、そこで社會的の統制を生長させる一要素たらしめるのが、何よりの政治の教育なのである。さうしてその產業生活の經驗を理論化し、それが反映綜合されて、政治となるのが本當であつて、それこそ政治進化の方向線の示してゐる政治である。そふ云ふ風に教育の制度を改革することが、民衆の眞の「政治教育」にとつて、根本的に必要なことである。それあつて始めて、普選によつて、民衆が政治に參與した效果があるのである。

普選實施に對する治者階級の目標は、「覺醒した」民衆に甘く取り込むことになり、この目的達成に必要の範圍に於て、政治教育を云々するのであるが、民衆が普選を求め、民衆が政治に參與して來る眞の意義は、治者階級の當面の目標などとは無關係に、民衆自身の創造力による民衆自身の政治を發展せんがためである。普選實施後の政治教育は、この根本の意義から出發して、工夫されない以上一切が無駄であり、有害でさへある。(一、六)

國民教育斷片

室伏高信

○

國民教育をもつと增大させなくてはならぬといふことは一般にいはれてゐるところである。眞實の意味においての教育であるならその必要は無限大である。人間は不斷に、そして自然にこれを求めて止まないのである。必要なことはけれど教育の分量ではない。性質を革命することである。

　今日行はれてゐるごとき教育は寧ろこれなきに若かないのである。われ〳〵の生命生活上における續出しきたるところの害惡は教育不足のために起つてきたところの如何なるものでもない。教育過剩である。教員過剩である。教育によつて衣食するものが數萬若しくは十數萬に達して教育の害惡はいよ〳〵極まつてきたのである。今日行はれてゐるごとき教育、今日存在するがごとき教育家を悉く廢絶することができるとしたら文化の創造のうへに寧ろ幸ひであると私は考へてゐるものである。

○

この短い一文において私は教育についての自分の考を述べることはできないが、私の見るところでは、國民教育なるものが抑も誤りである。如何なる國民教育が可であるか不可であるかといふのではない。抑も國民教育なるものが誤りであると私は考へてゐるものである。

　私は民族たるものの存在と意義とを疑ふがために國民教育を否定せんとするものではない。私は寧ろインタナショナリズムに對してナショナリズムを、もつと詳しくいへば民族的コオペレエションを主張せんとするものである。民族的精神なるものは說明さるべきものではなく、また從ひて教育さるべきところのものではない。それは靈感され、そして各人の心のうちに生長さるべきところのものである。

○

教育の目的と國家の目的とは二律背反である。一方は眞理の追及であり、他方はそれの隠蔽である。一方は自由の要求であり、他方は權力の確立である。

こゝにおいて國家が教育を擔當することは教育の目的を壓迫することである。教育は教育でなくして宣傳となるのである。今日行はれてゐるごとき教育は凡てみな宣傳である。少數の利益において多數を奴隷化せんとするところの宣傳であり、知的陰謀である。

○

獨り宣傳教育が然るばかりではない。凡ての教育が一つの仕組まれたるところの或る企てゞある。上は大學教授から下は幼稚園の女教師に至るまでみな等しくパペットである。彼等は「斯く信じ斯く語る」のではない。何ごとも信んぜず、そして凡てを語るのである。

○

普通選擧の實行とともに政治教育といふことが八釜しく唱へ用されるであらう。國民に政治的知識を與へるとは國民をして職業政治家に對抗せしめるうへに或程度まで役立つであらうと思はれる。それは丁度今日の社會科學運動と稱するところのものが一派の御用學說に對してそうであるごとくに、そこに多少の意義あることを私は決して拒もうとするものではないのである。それはけれど謂ふところの社會科學運動なるものがそれ自體には何等の學問的根據をもつものでないごとくに、政治教育なるものも何等の積極的價値をもつものではないのである。

○

政治を過重視することは政治に冷淡であることよりも危險であることは歷史の證明したところである。人民主權は國家主權と最もよく結合する。平民の間における政治が勃興して自由はあらゆる方面に失はれたのである。今日はけれども尙ほ政治時代である。政治の否定は思想としては可能であるが運動としては尙ほ直に有力なるものとはなりがたいのである。こゝにおいて今日の政治における最少の害惡は政治運動を階級運動に轉向せしめることである。就中農民が一つの階級であるといふことを自覺せしめることである。普通選擧の實行とともに農民運動はこゝに正しくその機會を捕へなければならないと私は考へてゐるものである。

政治的蠻族の侵入

山川均

一

普通選擧がいよ／＼實施せられると、今日まで全く政治の圏外におかれ、從つて政治上の經驗と訓練のない一千萬といふ大衆が、手に手に一票の武器を持つて、新たに政治勢力の圏内に躍入つて來る。久しい間、少數の權利を獨占して泰平の夢を見てゐた政治上の特權階級の眼には、之は文明人の社會に蠻族が押し寄せて來たのと同じような恐怖や不安となつて映ずるに違ひない。そこで文明人の間に蠻人の教化の必要が叫ばれるように、この政治的蠻族に對する政治的教育の急務が叫ばれる。

斯ような意味での政治教育とは、政治上の文明人の政治意識と政治上の慣行とをもつて、この新來の政治的蠻族を教化することである。言葉を換へて云へばブルジョア政治の典範にならはず、ブルジョア政黨に簡便に從はぬこれ等の政治的蠻民の野蠻性を折伏して、之をブルジョア政治に同化することであつて、要するに新たに參政權を與へられる一千萬の大衆をして、その一票の武器を、在來の三百萬の政治的文明人と同じ劍法に從つて取扱はしめるように教育することに外ならぬ。この政治上の武器を操つることを、自分の優越した政治的技能に基づく特權と考へてゐた文明人が、それと同じ長さの武器を、今や政治的教養のない蠻人が、しかも自己流の滅多矢鱈に振り廻はすとあつては、少からぬ危險を感ずるのは無理からぬことであつて、今日尚ほ普選尚早論者のあることは、その爲めである。そこで一般民衆の政治教育が、急務中の急務となつて來る。

それと同時に、この一千萬人中の一大部分を構成して居る要素の間には、右と全く反對に、ブルジョアの政治勢力から離れて、一つの獨立した政治勢力となり、獨立した政治意識に達しようとする努力がある。それがためには一般大衆は、政治上の教育と經驗と訓練とを得なければならぬ。そこでこの第二の意味からも、一般大衆の政治上の教育が、何よりも必要なことに

なる。

普通選擧の實施を前にして、政治教育の問題は、斯ような全然相反した二つの立場二つの意味から、各々その重要と急務とが呼ばれてゐる。この二つの立場は相反して居り、この二つの要求は相反してゐる。けれどもこの相反した要求は、一般大衆の政治教育の必要といふ、共通の言葉に言ひ表はすことが出來る。そこでこの共通の言葉で言ひ表はされてゐる限りは、それは一般大衆の政治教育といふ唯だ一つの要求と必要とがあるかのように見える。けれども事實はそうでない。そのうちには全然相反した、決して相容れない二つの要求と二つの努力が含まれてゐる。即ち一方には、新たに政治勢力の圏内に入り來る一千萬の大衆を、ブルジョアジーとその政黨との政治勢力のうちに吸收し同化しようとする努力があり、一方には無産階級の獨立した政治意識に到達しようとする努力がある。この二つの政治教育の努力は、普通選擧の實施と共に、正面から衝突するに相違ない。そして今後相當に久しい間、この二つの努力の交叉の上に、日本の政治的形勢が展開するに違ひない。

□

この二つの努力の鬪ひに於ても、舊るい勢力は新らしい勢力よりも、常に有利な立場に立つてゐる。或る時期に於いて、或る社會を政治的經濟的に支配してゐる階級は、大體に於いて、思想的にもその社會を支配してゐるものである。或る階級が眞に支配階級であると云ふことは、この階級の政治意識が、大體に於いて一般大衆の思想を支配してゐる政治意識であると云ふことを意味してゐる。ブルジョアジーが大衆を政治的に教育すると云ふことは、斯ような既成の狀態を維持すると云ふことを意味して居り、無産階級が大衆を政治的に教育すると云ふことは、斯ような狀態を打破することを意味して居る。それのみならず、狭い意味での教育の機關が、全然、舊勢力の手にあるように、廣い意味での教育の機關——特に一般大衆の政治上の判斷と意見の基礎となるべき材料を供給する言論機關と報導機關——は、殆んど殘らず舊勢力に属してゐる。そこで一般大衆をして、支配階級の政治の支配を脱して、獨立した政治意識に到達せしむる政治教育の事業は、極めて困難な事業となる。

ところが普通選擧の實施そのものには、之と反對の教育的効果がある。三百萬の有權者が一千三百萬に增加する結果は、議會に代表せられる利害の幅が非常に廣くなる。それは最早やブルジョアジーの利害の尺竹を以つても、無産階級の利害の尺竹を以つても、如何なる階級の利害の單位を以つても、唯だ一つ

の單位を以つては云ひ現はすことの出來ぬほど、それほど幅の廣いものとなる。その結果は云ふまでもなく、階級と階級との利害が、政治の上に明白に反映され、明白に對立させられることゝなる。

今日までの政爭は大體に於いて同じ利害の上に立つ支配階級の内爭であつた。たゞ國民的利害の被ひによつて、階級的の利害を最もよく隱すことに成功したものが、大義名分の上に成功した。政界を革新する理想的の選擧とは、或る一定の政綱や政策に投票することではなくて、人物に投票することであつた。そして其の人物とは、特に一定の政綱や政策を持たぬ人物であつた。なぜならば或る一定の政綱や政策を持つことは、或る一定の階級的利害の上に立つことを意味して居るからである。

普通選擧が正當に運用され、代議政治の妙諦が發揮されゝばされるほど、議會には異つた階級的利害が代表され、政爭はこの異つた階級利害を反譯した一定の政綱と政策とを中心にして行はれることになる。一定の政綱と政策とに投票することは人物に投票する代りに、一定の政綱と政策とを持つた黨派に投票することを意味して居り、一定の政綱と政策とを持つた黨派に投票することは、一定の階級と階級的利害に投票することを意味してゐる。

普通選擧の斯ような作用は、一般大衆が政治上の教育と經驗と訓練とを得るに從つて漸次に發揮せられるものであるが、それと同時に、一般大衆は、普通選擧の斯ような作用によつて初めて自分を教育し、訓練するのである。

この問題の一生命點

杉森孝次郎

各人に共通の私事を公營することが政治の一特徴だ。政治は、それの方法に於いてはどんなに公であつてさへも、それの結果に於いては明確至極に各人の私だ。

かくして、社會の大衆者が政治に冷淡であることは、結果的

意義においては、かれらがかれら自身の利益に冷淡であることとだ。大衆が參政權外に閉め出されてゐることは、かれら自身の私事が、かれら以外の少數者のみの私意によつて營まれることだ。

治者及び被治者、政治的支配者及び政治的被支配者といふ事實は、社會の進化と共に絕滅に趨く必然がある。その事實がすこしでもあるあひだ、それはその被治者、政治的被支配者たる人々の最深被害を意味する。最深被害とは道德的被害の事だ。道德的被害とは人間最深のプライドに加へられる害をすくなくとも意味する。

政治家の存在は今後永く必要的に許容されるが、その政治家は、道德的または權力的關係に於いての治者では決してなく、社會保存のための一專門、一職業、一事務の擔當者のほかのものではありえない。政治家と政治家以外の人々との間なる關係は、或る義務、權利、責任、仕事を委託されてその勞を取る人々と、委託してその勞を省く人々との間なる關係以外のものであつてはならん。

以上は餘りにわかり切つた事でもあれば理でもあると見えるかも知れん。しかし、普選未實現はそれがさうでないことを證明する。

普選未實現は大衆者に於ける習性的卑屈を意味する。大衆が利害や道理を有力に考へればそれはすでに瞬刻も保持されえない時代錯誤的一制度だ。なぜかれらはそれを有力に考へないかといふに、その答へはかれらに於ける習性的卑屈だ。

普選實施の準備としても、實施された普選の防腐としても、大衆者に於ける習性的卑屈を、それをかれらに自覺させることによつて、無くすることが肝要だ。

資本主義は、生產の方法が個人的、家族的であつた時代に自然であつた私有制が、生產の方法が遙かに超個人的、超家族的な組織的大集團に必要的に依賴する現代に及んで、なほ且つその大集團の大部分を形成する人々の習性的卑屈によつて保持されてゐる制度にほかならない。資本主義の弊は富の集中に存するよりもしば〳〵プライドの獨占にある。例へば三井、三菱の全財產と全產業が國家や組合の所有及び經營に移されても富の分配には大差は生じないかも知れん。それらの家族が消費する富は現在に於ても大したものではないからだ。しかしながら、被使用人とか、被雇用者とかいふ名前が暗示する精神的卑屈は貧富以上の大問題だ。資本主義の否定はこの精神的卑屈の否定を意味する限りに於いて最も有意義に必要だ。

制限選擧は政治的資本主義だ。普選は大衆の或る卑屈からの脫却を第一に意味するものであらねば不健全だ。各種の形式と

特權とに於いて可能である物質的、有形的利益は、それが普選を條件として可能であることは明らかである場合に於てさへも、普選實施の副次目的として豫想されることが健全だ。

社會的習性ほど重大なものも多くあるまいが、社會的習性ほど厄介なものも少くない。しかし、社會的習性に支配されず、それを支配する方法を持つことは、社會進歩のために必要だ。

社會的習性に變化を與へる、決定を與へる、即ちそれを支配する方法は、しかるに、現代に於いては、決して絶望的ではなくなつた。それは交通の發達と出版の發達とによつて無限に有望にされて來た。

交通と出版とを發達させ且つ善用することによつて、さもなくば不治、難治の社會心理的弊患や痼疾と見られるほかないものが容易に治療されるか、輕い疾患と化する。

普選實施は、義務とか、責任とか、奉仕とか、連帶とか、協同精神とか、相愛とか、利益とかいふ興味からしてよりも先きに必要的個人愛及び人間愛の意識に於いて進取され、確設されべきものだ。

普選實施に關係して考へられる限りの政治教育も、大衆者に於けるヒユーマン、ブライドの教育を缺くならば、有力たりえないと想像される。

議會當面の諸問題

馬場恒吾

普選に絡はる種々の手

凡べての人が、此第五十議會で普通選擧法が通過するものと安心して、そろ〱後の準備をしてゐるやうだ。併し普選が成立すると云ふ事が、さほどたしかに安心してゐられる事であらうか。諺に云ふ親がなくとも兒は育つと云ふは、他人が其兒を虐めたり、捨てたりはせぬと假定しての事である。普選は三圓の國税さへ納めぬ所の、收入の乏しき一般民衆が要求する所である。彼等の起した普選運動が既成政黨を刺激して、之を自分の政綱として採用したのである。云はゞ、民衆が普選の生みの母親であつて、之を採用した憲政會や革新俱樂部は養ひ親である。ツイ先頃まで普選反對を標榜してゐた政友會は後添になつて來た繼母である。今は此三派が賛成してゐるから大丈夫と云ふものゝ、民衆運動の背景を有たぬ普選は親のない子である。普選要求の民衆運動が下火になつて、普選案が政黨と政府の手に渡つたとき、一面から云へば立派な家に養子に往つたとも云へる。他の一面から云へば生母の手を離れて、他人の手に渡つたとも云へる。此兒が毒殺もされず、捨てられもせず、片輪にもならず、無事に今年の議會に成立するか、否か、さう安々と斷言は出來ぬ。

◎

現に今普選法案は樞密院の老人の手に懸つて、殘酷にいぢくり回はされてゐる。彼の老人は必ずしも鬼婆々と見るべきではあるまい。併し彼等は曰く、教育の普及せざる民衆をして政權に參與せしめた爲めに、國家が大に亂れた例は幾つもある。だから、無條件に選擧權の納税資格を撤廢する事には考へ物であると。かう云ふ事を新聞などに書かして、意地惡るさうな事を云つて見るものゝ、事實に於て普選に反對する勇氣はない。其勇氣があつたら却つて戯曲的に面白からうが、それほどの勇氣はない。若し納税資格撤廢の條件として、政友本黨の云ふ如き世帶主のみに選擧權を與へると云ふ修正すら、之を持ち出す勇氣もあるまい。結局は少い字句を修正する位だらう。併し表面は斯ういふ風に人民の希望に從ふように見せて、實は酷い奸智を施こす手がある。それは何うするかと云へば、普選案を愼重に議すると云ふ名義の下に、樞密院が二月中頃或は末迄も此案を審議した日には、例令最後に可決してもそれこそ事だ。

◎

樞密院には政界のしたゝか者がゐる。表面の謹愼振りを亂たさずに、濡れ手で粟、政治上の藥劑の調合、嫁いびり、繼子殺し、色々の藝をなしうる。今假りに樞密院が政府に返へして來るのが二月半若しくは末になつたと假定せよ。議會の會期はもはや一ケ月を余すのみだ。衆議院はやけになつて即決可決をするかも知れぬ。貴族院は其時は豫算案が衆議院から廻はつて來てゐるから、之を口實にして、普選案の討議を幾らでも延ばし得る。若し其所に貴族院改革案でもあらうものならば、さあ孰方を助けるか、孰方を捨てるかと政府と衆議院に詰め寄せ得る。其所で貴族改革

新が普選を助けようと云ひ、政友會が貴族院改革を生かそうと云へば、三黨派の協調が破裂して、政府が斃れるか、然らずんば議會は解散される。其時普選案はと云へば、路傍に捨てられてゐる。民衆が騒ぎ立てゝも喧嘩の持つて行き處がないから、時機已に後れてゐる。此悪戯の作者である樞密院は憲法付屬の法典を慎重に審議した我等に罪はないと済ましてゐる。此事に限らず、日本では何日でも慎重が非を過つてゐる。

○

これがならずして、普選法が無事此議會に成立したとすれば、日本の無産階級を地盤とする各種の運動家は棚からぼた餅が落ちて來た立場に置かれる。彼等の多くは普選運動の激昂なりし時、當時の友愛會を除いては、普選運動に参加しなかつた。勞働者が政治運動に参加するのは勞働運動の堕落だと云つて、普選運動の傍觀者となつてゐた。今では、普選實施後には無産政黨を作らねばならぬと主張してゐるが、此普選を必ず此議會に成立せしめやうと云ふ運動は何處にも起つて居らぬ。其態度が普選の實現は誰れかやつて呉れるだらう。普選の收獲は我之を收めると云つた如くに見られる。それでは余りに蟲が良すぎる。

○

況んや普選は繼母、鬼婆、小姑の手に渡つてゐる。それが暗殺、捨兒などの運命に遭はずとも、片輪者にされたり、骨抜きにされる惧れは充分にある。普選に依つて無産政黨を作らんと思ふ者は、普選を成立さす事にも一臂の力を添ゆべきだ。一臂所ではない。全身の力を込めて、此民衆の力を確立する法律を取らねばならぬ。樞密院や貴族院が厭がるならば、無理にも之をもぎ取る位の決心を以てかゝらねばならぬ。さうした勢ひで世に出た普選であつてこそ、普選が初めて改造の武器たる普選になりうるのである。

雛壇をかじる鼠

加藤總理の口吻を眞似るのではないが、僕は今日政界の問題になつてゐる所の貴族院改革には氣乘りがない。貴族院を改革しないでもよいと云ふのではない、改革する必要は大にある。徹底的に改革する必要がある。或は貴族院と云ふものと華族と云ふものをスツカリ別物にする事も必要であらうし、或は貴族院からすべての特權らしきものを洗ひ去る事も望ましき事であらうし、それが六ケ敷くば貴族院の權限を縮少して一院制みたやうなものにするか、或は一時の事、廢して了ふか、然らずんば之を英國の帝國會議か、米國の上院か、或は各職業の代表議會に改造するか。さう云ふ風に徹底的に貴族院を改革するのなら吾輩も興味は湧く。併しそんな事は官僚政治の圏外に居る吾々のみが云ふ事であつて、政府や政治家は問題にしてゐない。そんな事は憲法改正を必要とし、憲法改正は攝政治下では出來ぬから問題にならないと嘯くのである。

◎

それなら、彼等が大騒ぎする貴族院改革は何んであるかと云へば、華族の互選議員の選擧が今迄連記で行はれてゐた事を單記にするのだと云ふ。これが改革されれば甲の華族が落選して、乙の華族が當選すると云ふやうな事にあらう。併し矢張華族だ、華族の特權に據つて吾々を支配せんとする連中たる事に變化はない。誰れか烏の雌雄を知らんやだ。特權仲間には興味がある問題かもしれぬが、民衆にはどうでもよい事柄だ。次ぎには公侯伯議員が今迄世襲であつたのを互選にすると云ふ案がある。白瓜の代りに黄瓜を持つて來やうと云ふ案た。次ぎに、多額納税議員を廢

して、公選議員を拵つて來ると云ふ。其公選議員は何んな風に公選するか決つてゐないが、結局納税資格のある人民をして選擧さすと云ふ事になるらしい。多額納税議員の代りに小額納税議員と云ふ改革である。大體之れが政治家が唱へてゐる貴族院改革の要旨である。それを實行する爲めに、國民に奮起せよと云つたつて、國民は馬鹿々々しくて奮起する氣になれない。別に惡い事でないから反對はせぬ。寧ろ贊成してもよいが、其爲めに血を湧かす心持になれないと云つても、誰れを責めるわけにも行かぬ。

◎

併し實質がこんな貧弱であるに關らず、此問題が矢張今期議會の重要問題である事は爭はれない。それは此問題の內容如何に關らず、政界色々の策戰が此問題に絡らんで作られてゐるからだ。問題が重要なのでけない。問題を種にする政略が重要なのである。例へば昨冬此議會が召集された時、政友會は貴族院改革の決議案を出すと騷いだ。政府も別に反對せぬものを、何故殊更らに決議案などゝ騷ぐか、一寸外間には理屈が判らない觀があつた。併し此所に最も可笑しかつたのは、政友會が此決議案を出すならば、政府不信任の意味で、政友本黨は之に贊成しやうと云つた事である。本黨は人の知る如く、清浦內閣即ち貴族院專橫の權化を擁護する爲めに、政友會から分離した連中の黨である。だから、彼等は貴族院擁護の先天的使命を有つてゐるものだ。それが現在の三派連合の政府を懲さんが爲めには、貴族院改革の決議案にでも贊成しやうと云ふ。彼等に採つては主義主張は第二義的なものだから、如何に其內容が貧弱で、空疎で、矛盾があつても、それが政治の渦卷を起すべききつかゝりになりさへすれば、之に向つて大騷ぎをする。政治家が貴族院改革に熱中するのは大低此類である。

◎

政友會と本黨との合同問題は此議會の暗礁である。假りに彼等が合同したとすれば衆議院の二百二十名ばかりを有して、約半數に近い。其所で現在の第一黨たる百六十名の憲政會を顚落して內閣を乘取り得る。玆に政界の大波瀾に卷き起る。尤も政友會の中には、政本合同しても直ちに政變の起るものでない。政友會は本黨議員が政友會に復歸する事を拒みはしない。併し復歸したとて直ちに政府反對に出られては困る。政友會は三派連合して護憲內閣を作つた。そして內閣の使命たる普選と貴族院改革は此を無事に遂行せしめねば政友會が護憲內閣に參加した大義名分が立たぬ。故に本黨から復歸する連中も、少くとも此議會中は內閣を支持する積りで來て貰はねば困ると云ふ意見がある。政友會が始終大義名分に依つて、進退する黨派であるや否やは甚だしく疑はしいが、護憲三派の一つとなつて以來の出所進退は公明正大と云つて差支ない。例令大義名分に從つて行動する事が得である場合のみに、大義名分が採用せられるにしても、兎も角も大義名分に從ふと云ふはよい事だ。

◎

政府は貴族院改革案を此議會に提出する積りだと橫田法相をして言はしめた。それは樞密院を經て貴族院に提出するのである。所が樞密院は普選案を審議するに日を費やす。それから貴族院改革を亦念入りに審議する。幸にそれが貴族院の開いてゐる中に提出されたとして、今の貴族院の空氣では、政府に好意を有たぬ研究會、好意を有つ公正會も、共に改革反對に手を擧げさうだ。なあにこんな不徹底の案なんか、否決されたつて政府は辭職するに及ばぬとは局外者の云ふ事であるが、政府の更迭を計畫して政界の策士は、貴族院

改革案の否決と共に、政府の更迭を要求するであらう。否、初めから政府を更迭さす目的で貴族院改革に反對するものもあらう。貴族院改革に贊成するのも反對するのも其動機は十人十色である。

◎

だから、貴族院改革に二種類ある事を忘れてはならぬ。人民の要求する貴族院改革は貴族の特權を基礎とする貴族院制度を改めたいといふのである。政治家の云ふ貴族院改革は貴族院の議壇に並ぶ蛾舞する顔振れが氣に喰はぬ。同じ段梯でも、京人形よりは、博多人形がよいと云ふのである。人民の要求する貴族院改革は今は誰れも之を行はうと云はぬ。政治家の云ふ貴族院改革には人民が共鳴せぬ。されば吾々はどうしたらよい乎。

◎

政治は勢ひである。民衆は先づ普選を成立せしむる事に力を集める。そして政治を合理化せんとする大潮流が起るとき、貴族院改革などは[illegible]に任かしておいても出來るのである。

芝居を見る以上の感興

年末に大阪から來た商人は非常に不景氣に驚いてゐた。そして曰く、大阪は紡織の株が高いので景氣がよくなつた。然るに東京はまだ不景氣だ。しかも其の不景氣の性質が頗る惡い。不景氣の癖に物價が高い。生活が困難だ。商人の信用程度が低くなつた。震災の結果、金がなくなつた爲めでもあらうが、今少しく地道に努力をせぬと今に行き詰ると。

◎

これは大阪商人に教へられる迄もなく、吾々の經驗し盡くしてゐる所である。餘り惡辣でない例の家主すら、家賃は震災前の二倍だと公言してゐる　市中に貸家の多き事を見よ。而して家賃の高き事を見よ。貸さんとする人もある。借りんとする人もある。而して空家のみ多いのは家賃が高いからだ。愚なる家主は、家賃の呼値を下げるの賢さに、家が立腐れになるのを知らずに居る。遂には空家で首をくゝるやうな破目になるだらう。

◎

所が家主ばかりを笑はれない。日本は内地で十二億の正貨を有つてゐる。内地で最も多く有つてゐた大正十年末の十二億二千五百萬圓から大して減じてはゐない。之が少くなる事の恐ろしさに、日本はまた金輸出を禁じてゐる。其爲めに外國から來る物價は爲替相場の關係丈けでも約二割五分高くなる。外國に輸出すれば、高い外國の相場に賣るから、内地の物資は從々少なくなる。そうして少數の[illegible]、多くの[illegible]に苦しむ。稅金は十二億あるはある。併し其金貨を抱いて國民は飢へんとする。空家を抱いて家主が飢へると同樣である。

◎

濱口藏相は元來金の輸出を解禁せよと云ふ議論であつた。それが責任の地位に立つとさう無謀の事は出來ぬと云ふ。それが間違ひである。内地に積んである金貨が、爲換相場の關係で、春の雪だるまの如く、段々に融けて行くのを座視するより、値打のある内に、有效に費つた方がよい。空家の例もある事だ。此所は濱口藏相が度胸を据へて、斷の一字を振り廻はすべき秋だ

◎

議會には狸共者と猾者が林の如く居る。彼等は如何にして政治の大芝居を打つかを知つてゐる。彼等は如何にして自己の勢力と利益を向上かを知る。彼等は如何にしてブルジョア階級を喜ばしめるかを知る。併し彼等の中の誰れが眞剣に此日本を平民の爲めに住みよき國にしやうと思つてゐる乎。一體そんな事を考へてゐる代議士があるか、ないかと疑問である。上流社會の人に取つては日本ほど住みよい國はない。平民に取つてはこれほど生活の困難な國はない。それは一歩國外に出て見れば判るのである。平民を國外に放逐する積りでなくば、今の政治は根底から改めねばならぬ。議會が國民生活の危險に觸れない間は、議會は之を見物しても芝居を見る以上の感興を起さしめぬ。（一四、一七）

近來の不景氣の眞相

高橋龜吉

歲暮から新年にかけての街の不景氣と云つたら、御話しにならない程ヒドかつたと云ふ。「こんなミジメな歲の瀨を越したことはない」と云ふ會話が、電車の中で、街の傍で囁かれてゐるのを何度聞いたことか。「イツになつたらこの不景氣は直るんでしやう」と云ふ問ひを、いろ〳〵の職業の人から幾度あびせられたことが。いま、世の中は不景氣のドン底の生活苦に、喘ぎ〳〵鞭打たれてゐることを、誰もが泌々と感ぜざるはない。實に、近來に於ける不景氣風は、いかにも骨を刺すやうに冷くなつて來た。

然るに斯く一般の不景氣は愈々刻深になりつゝある此の秋に於て、他方には、株式市場も商品市場も昨秋以來、尠からぬ好景氣を畫して、福の神に見舞はれた莞顏がアチラにもコチラにも現はれて來た。例へば、重要商品市場も、株式市場も、大體その惡化のドン底は昨年の六月に於て終り、爾來寧ろ驚くに足る好景氣を現はしてゐる。いまその一例として左にその代表的なものゝ相場の騰貴を示す。

株式及商品市相場表

	六月中安値	十一月高値	新年發會付値	六月に比し騰貴
東京取引所株	一〇六・一圓	一三六・八圓	一三〇・〇圓	二三・九圓
大阪取引所株	八六・四	九九・三	一一〇・七	二四・三
鐘淵紡績株	一六七・〇	二三八・四	二四一・三	七四・三
日本郵船株	六七・一	八〇・九	八六・〇	一八・九
大日本精糖株	九六・九	一二三・四	一一〇・〇	一三・一
生糸先物相場	一四八・六	二一九・八	二一九・六	七一・〇
綿絲先物相場	二七七・二	三五一・〇	三五五・九	七八・七

斯様な一見矛盾した世相を見て、ものゝ識り顏の人々は、商品界や株界の此好人氣を浮薄な好景氣だといふ。何となればこの深刻な不景氣は、日本が過般の大震災に襲はれた結果に外ならないのであるから、いま、景氣がよくなるなどと云ふことはあり得べからざることだと考へるからである。從つて斯に考へる人々は、どんな犧牲を支拂つても、政府はこの彼等の所謂好景氣を抑壓する政策を採らねばならないと主張してゐる。事實果してさうした見方が正しいであらうか。私はこれと少からず見方を異にしてゐる。

なる程、十二年九月の大震災が今日の不景氣の原因の一つをなしてゐることに間違はない。しかし、今日の不景氣の眞因を、專ら過般の震災の打擊であると見ることは間違つてゐる。元來、今日、資本主義經濟の景氣不景氣の流れから云つて、戰中戰後の大景氣時代の消滅した後には、深刻な不景氣が一般の生活に逆襲ひ來るが當然である。現に歐洲諸國は勿論、成金王國の米國に於ても、一九二〇年（大正九年）の財界反動後、一時深刻な不景氣のために一般の生活は多大の壓迫を蒙つたのであつた。然るに日本に於てはどうであつたか。いかにも九年春の恐慌以來、事業會社の經營には多大の不景氣が襲ひ來つた。又その不景氣を最も多く轉嫁せられた一部の勞働階級の間には失業其他の不景氣風が吹き荒んだ。例へば、東洋經濟新報社が重なる會社約百五十社について調べた所によると、我が事業會社の利益は、大正六七八年を頂上として九年下半期以來低落してゐる。即ち、その年

均拂込資金に對する利益の平均率は大正六―九年上半期の五割內外より、九年下半期には二割六分六厘に激減し、十、十一、十二年を通じては大體に一割に八分に過ぎない。しかしながら、斯樣な事業會社の不景氣は、同じく一般の生活に迄直ちに浸透して來たかと云ふに、從來商店に於ては未だそれ程ではなかつた。其の證據には、當時事業會社の多くは青息吐息であつたにも拘らず、一般の賣行は左程に減ぜず、三越其他の小賣の賣行は、誰しも意外とする盛況であつた。之れ、大正八年以降從前商品の我が輸入超過額が、實に十五億三千三百萬圓の巨額に達し、戰中の輸出超過額總計十四億八百萬圓よりも多きこと一億二千五百萬圓を算するに至つたわけである。而してこの輸入超過は、當時、我が國に於ける賣行が値段の割高な內地品を去つて多くは値段の割安な外國品に向つた結果であり、內地の賣行が良かつたにも拘らず事業會社が殆んど欠損を續けたわけである。

いま、斯樣に九年の反動以來十二年の震災前迄一般の賣行もよかつたわけ――從つて見せものや花街などの景氣もよかつたわけ――如何といふに、その理由は二つある。(一)は事業會社の利益の激減は直ちに一般の人々の收入減とはならなかつたといふこと、(二)は好況時代の蓄財の蓄積が可なり澤山あつたと云ふこと、之れである。この二つの財源が一般の人々の手許にあつたために、九年以來事業會社は(從つて日本の經濟全體は)實質上永く欠損狀態を示すの大不景氣であつたにも拘らず、一般の生活は左程に不景氣の影響を感じなかつたのであつた。

先づ(一)について見るに、今日の經濟組織の實際に於ては會社は其の期に利益が減少したからと云つて、乃至は欠損が生じたからと云つて、直ちにそれだけ、株主に對する配當金や勞働者、社員、重役等に對する給料手當賞與金等を減少するものではない。或は過去の利益が積立てゝあるのを喰込んで、或は帳簿をゴマかして表面上利益を捻出して、出來るだけ多くの配當や賞與やを出すものである。そのわけは、一つは重役自身の位地に關するから、一つは株主の目先ばかりの我利我利から、一つは重役自身多くの賞與金がとりたいから(配當を減ぜば重役の賞與も減ぜねばならない)である。而して、斯樣に重役や株主が賞與や配當を依然多額にせしめてゐる限り、如何に少額でも、勞働者や社員の給料や手當や賞與やをもさう減少さすわけには行かない。否、如何にさうしたくても、それでは皆んなが承知せず、その背後には例の恐しい勞働爭議が威脅してゐる。斯樣のわけで、事業そのものは早く欠損狀態を示すといふ極度の不景氣に襲はれてゐたにも拘らず、一般の收入はその割合に減少しなかつたのである。いま、右の事情をハッキリと物語らしむるために、その具體的な一例として日本郵船會社の利益と配當と重役賞與との變遷を左に示すことにする。

日本郵船會社利益及分配表(*印、期末現在積立金の中には前記の繰越金を含む)

年次	當期利益	同上の中政府補助金	株主配當金	株主配當率	重役賞與金	期末現在積立金*
三年下期	二・五四	二・四三	一・二〇〇	一・〇	二〇	四三・四四
四年上期	二・三八	一・八〇	一・二〇〇	一・〇	一〇	四七・五
四年下期	五・四二	一・四三	一・六〇三	一・五	二五	三九・六八
五年上期	九・六四	一・四二	二・六六	二・〇	四一五	三三・六三

五年下期	二七・六四四	一・四〇一	三・八五〇	二・八	六〇〇	四〇・五三四
六年上期	一九・五一七	一・三三七	九・六六五	七・〇	一・五七五	五四・三三五
六年下期	二八・九八二	一・一五八	九・九〇三	五・〇	一・三五〇	五八・二二一
七年上期	三〇・六一八	一・一四六	九・三九八	五・〇	三七五	七七・八三一
七年下期	五三・六八三	・九一三	一五・七九四	六・〇	六三〇	八六・〇三一
八年上期	三一・五八八	・六三四	一四・五〇〇	五・〇	五八〇	一一九・五〇五
八年下期	一八・五九三	・九八五	一九・〇〇〇	一〇・〇	五・四一五	一三一・一二五
九年上期	一六・九九六	・七八九	一一・六〇〇	四・〇	四〇四	八〇・六三九
九年下期	九・三八九	一・三七〇	八・七〇〇	三・〇	四三五	八四・五八四
十年上期	五・五四一	一・三八五	七・二五〇	二・五	三六二	八五・六八五
十年下期	三・五三一	一・三三七	五・八〇〇	二・〇	二一〇	八三・八〇三
十一年上期	二・六〇五	一・〇〇九	四・三五〇	一・五	一八〇	八一・〇四八
十一年下期	二・七九一	一・三五九	四・三五〇	一・五	二〇〇	八〇・八六九
十二年上期	二・三四九	一・四九一	四・三五〇	一・五	二〇〇	八〇・六三三
十二年下期	一・二二四	一・三〇八	一・九〇〇	一・〇	四〇	七八・四四五
十三年上期	一・六一八	一・三七一	二・九〇〇	一・〇	四〇	七六・六六八
十三年下期	一・九一四	一・四二一	二・九〇〇	一・〇	四〇	六六・六三七

この表によると、郵船會社の利益は大正七年下半期の約五千三百萬圓が頂上で九年上半期には已にその三分の一の約千七百萬圓に激減してゐる。しかし、その配當は千五百七十九萬圓から千百六十萬圓と僅に約四百萬圓を減少した過ぎない。しかして、十年上半期に於ては利益は五百五十余萬圓しかないにも係らず、配當金は七百二十五萬圓、重役賞與は三十六萬二千圓と利益よりも約二百十萬圓多く出してゐる。斯樣にして、其後利益は激減せるにも拘らず、配當金や重役賞與やはその割合に減少せず、常に利益金(しかもその殆んど全部は政府の補助金から)以上を拂出した。斯くて十年以來十二年末迄の三ケ年間に過去の積立金を喰減らした高は實に五千三百余萬圓の巨額である。しかもこの外に表面に現はれぬ帳簿上のカラクリもあるであらうから、實際に喰減らした額は遙かに之れ以上である。右の外、一般社員の收入も亦大體に右の如き趨勢であつたと見て大過ない。且つ、たま／＼解雇や休職になつたものと雖、斯樣な事情の下に於ては大なり小なりの手當を受けて、實際のその收入は、震災前迄に於ては未だそれ程に減少してゐなかつたと見てよい。

斯樣な過去の蓄積の喰減らしによる購買力の持續は、民間のみでなく、政府の財政に於てもさうであつた。即ち、政府は好景氣時代に殘した數億圓の歲計剩餘金を、日本銀行から引出してはバラマイタのであつた。

加ふるに、一般の人々の懷も、九年の反動と共に直ちに空になつたわけではない。戰中戰後の好景氣時代に、ビックリする程のボーナスをもらつたり、成金的に儲けたりした金が少からず貯蓄せられてあつた。

所へ當時住宅難で家賃は暴騰する好景氣時代に顧られなかつた地味な事業の水力電氣や電鐵や、其他が不足で利益が增すと云ふわけでこれ等の方面へ資金はドシ／＼使はれた。更に好景氣時代に習慣になつた贅澤な生活も何とかそれを維持せられる金がある限り益に

緊縮も出來ないのが人間だ。そこへ、斯様にしてはそれを賄ふ金があるのだ。更にこれ等の金が廻り廻つて皆んなの懐を温めたのだ。當時一般の發行が一向に減らなかつた筈ではないか。不景氣は何處を吹くと云つた當時の街の景氣のわけが分るであらう。

しかし、其街の景氣の眞最中に於てさうした景氣を維持する金は、刻々と減じつゝあつたのだ。其金は要するに皆んな過去の貯へを居喰してゐたに過ぎなかつたからだ。たゞ、今日の不完全な經濟組織の下に於ては、各人の觀察ではそれは如何にも新に「儲けた」ものゝ如く假想せられてゐるに過ぎないのだ。而して、斯様な居喰の行詰は、相當注意してゐる人々の眼には、已に、震災直前には可なり明かに看取せられてゐたのであつた。當時、輸入が激増して輸出が著減しつゝあつたことがその具有力の指標である。であるから、例令、夫の大震災に襲はれなくとも、日本の社會は早晩今日の如き深刻な不景氣に襲はれざるを得ない運命にあつたのである。

所へ、大震災が來た。その結果は一時右の如き不景氣の進行を止めたが、しかし、政變の頻發を主因として復興計畫に蹉跌を來して、所謂復興景氣なる景氣が昨年以來擡頭するや、茲に再び不景氣はその進行を始めた。しかも、震災の影響によつて、その進行を急激にし、且つ深刻にした。之れが、即ち、近來の不景氣である。

然るに元來ならば、所る不景氣の場合には、賃銀や物價の下落が起つて、所謂財界の整理が出來、茲に再び輸出が有利になり、さうすることによつて、その國の景氣が回復し出すと順序である。之れ、今日の物價や株式の騰貴を好景氣と見る人のあるわけである。所が、日本に於ては、斯様な本統の財界の整理をやる實力や、經濟の分つた政治家がゐなかつた。そこで、資本家どもは、弊害は極めて多いが、しかし、抵抗の最も少ない、しかも自家に有利な財界整理の方法を政府に採らしめた。それは、金の輸出を禁じて、我が爲替を暴落せしめることだ。例へばいま日本の貨幣の値段は、普通ならば百圓につき米貨約五十弗に相當するものが三十八弗半位しかしてゐない。即ち約二割三分の下落である。それだけわれ〳〵の勞働賃銀も、給料も、何にもかも下落したことになるのだが、實は、われ〳〵は何時それが下落したかを知らない。これが若し、正面から賃銀を二割半近くも引下げると云つて來たらどうであらう。二圓の日給を一圓五十四錢に引下げると云つたらどうであらう。無論ストライキ續出だ。地主は復た政府に運動して米價引上を迫つたであらう。然るに爲替の暴落で資本家のために斯様な整理が何の苦もなく笑つてゐる中に出來たのだ。會社は茲に「儲かる」ことになつたのだ。株式相場が騰貴するのに何の不思議もない。

併しながら、斯様に安々と實質上の賃銀や給料の引下げが出來たわけは、實は、未だ、その引下の影響が勞働者や月給取りの生活に響いて來ないからだ。その苦痛が此後に殘されてゐるからだ。その苦痛とは即ち物價の騰貴だ。收入は增さなくて物價が騰貴する。それが爲替暴落による賃銀や給料の引下げの形式であるのだ。斯様のわけであるから、今後徐々に物價が騰貴してその苦痛が現はれればおかない。果してさうならば、いま物價が著しく騰貴しつゝあるのは、資本主義經濟の仕組みから云つて極めて當然の出來である。それは、資本家が漸く自己の苦痛を無産階級に轉嫁して、いまホッと安心の胸をなでてゐる姿である。之を、いま彼等の言葉に翻譯して云へば、景氣は今や着々と好化しつゝあるのだ。

思ふに、物價は今後更に騰貴して無産階級の生活難は今後何ほど少くとも當分は一加重せられるであらう。爲替の暴落による賃銀又は給料引下げの苦痛が始めてその時に於て十分に痛感せられるのだ。之に反比例して、今後資本家の利益は增進して、所謂、財界の景氣は好化を續けるであらう。さうして、この無産階級の生活難の加重と資本家の好景氣とが或る點迄進んだ時―恐らくそれは早くとも今春前には來ないであらう―賃銀引上げ運動を中心とする勞働爭議が勃發することになる。要するに、いまの不景氣の姿は今日の經濟組織の仕組から云へば、財界が好轉するに必要な荒療治が正に終りつゝある時の苦悶のそれであるのだ。

戀愛と生活

石原純

一

戀愛を讚美するものと、これを貶し卑しむものと、人間の心はなにが故にさう異つた外形に於てあらはれるのでありませうか。

自然の諸態、私たち人間の姿すらも、それはいろ〳〵なあらはれに於て悉く或る差別をもつてはゐるとしても、しかも斯ほどに離れた背反はあり得ないのではありますまいか。自然があの一義的な原理と法則とに順つて、唯一つの神に統べられる限り、その根本に於て相逆らふところのものは存在し得ない筈です。

併しながら獨り人間は、その神から惠まれた自由なる意志に於てふるまひ、しかもその眞實なるものを求め究むるに先だつて、恣いまゝに行ひ、若しくはその貧しい賢さを誇らうとさへしてゐます。そこにあらゆる爭ひと醜さとを生むこともまた止むを得ないことではありますまいか。けれども之あるがために人間はまた、より高い、より美しいものを憧憬する心をもつのです。私たちは十分に愼重な思慮を費してその生活を深めることを忘れてはならないと思ひます。

戀愛を讚美するものと、そして之を卑貶するものと、果していづれをより正しいとすべきでせうか。多くの年若い人

たちはこの喧囂な世上の論議に對して深く迷ひ、自ら處するに苦しみ惑ふことの餘りに屢々あるのを見ます。私たちは自らの信念をいづれに向つて定めたならよいのでせうか。

私は先づ、或る道德軌範なるものを勝手に固定して、すべての純眞な心をもつて世に立たうとする私たちの後繼者を無意味に縛り、彼等をして罪の罪たる所以を解せしめることなしに、おのづからな感情を歪めしめようとする舊道學者を大いに排斥しなければなりません。彼等は人生をして一つの牢獄に囚はれたものに隨せしめ、美くしい自由な空に溢れる光明に對して盲目ならしめるところの專制者であります。抑も人間の心が生れて盲目であつたならば、それは無益な苦しみに陷らない一つの安全な保護地帶であるかも知れません。牢獄に於て給與せられる食餌に甘んずる限り、或る縮之者にとつてそれは最も勞少なくして最も安らかに衣食せられる場所でもありませう。それにも拘らず、人生に於て一牢獄を存することは決して希はしいものではなく、また奬むべきことでもありません。まして彼等舊道學者があらゆる人間をかやうな牢獄に繫がうとすることは、何といふ越權であり、暴慢でありはしますまいか。私は之を徹廢することを人間の最も至當な叫びであると信じます。

私は固より舊道德のすべてを批難しようとするのではありません。之を形式的軌範として如何なる場合にも之によつて律し去らうとする暴擬を責めようとするのです。若し彼等が之をもつて眞に人生を律し得ると信ずるならば、それは思慮の到らない愚昧でなくて何でせう。恐らくは彼等はこの愚をもつて任ずるものではなくて、その當然除外すべきものをも強ひて無視するやうな專制を敢てしようとするのです。しかもすべての人間がその最も純眞なる心に眼覺める限り、もはやその悉くを除外しなくてはならない筈です。すべてを除外して尙ほ空虛な城壁を守らうとすることは私たちに於て寧ろ憐れんでゐるのかも知れません。私は彼等についてこれ以上の言葉を費す必要もあるまいと思ひます。

舊道徳を必ずしも死守しようとするのではなく、もつとも自由な人生に關する思索からして、尙ほ戀愛を異端視し、之をいろ〳〵な罪惡の源泉として恐れ斥けようとするものもあります。更にまた戀愛を單なる性慾衝動の果と見做して之を卑め避けようとするものもあります。之と比べて、戀愛を人生の美しい花となし、若くは之を一つの理想にまで高めて、人間の行爲としての哲學的意味をさへ究めようとすることの餘りに甚だしい差異ではありますまいか。それからなかには人生に對する態度を異にしてゐるものがないとは云はれませんが、又一面に於ては等しく戀愛なる言葉に意味せしめるところのものを全く異にしてゐるために起される議論も少なくないと思はれます。私たちは徒らに用語の如何によつて云ひ爭ふやうな無益さを止めて、お互を深く理解し、依つて人生の眞の道を本質的に探し求めなくてはなりません。

それ故に私は更に戀愛について論じようとするに當つて、私の之によつて意味するところを嚴に云ひ表はしておきたいと思ふのです。

二

私たち人間はその生れて呱々の聲をあげる瞬時から永遠なる死に至るまでの間に於て、その獨自的な生命を保ち之によつて活動することをゆるされます。私たちは之を名づけて生活と云ふのです。

生活は私たちの生命が所屬する個體の種々の機能によつて行はれます。單なる肉體的官能によるもの、之を官能的生活と名づけてもよいでせう。人間と等しくすべての生物は之を行ふことが出來るのであつて、それが自然に屬する限り、固よりそれには價値的差別を生じないわけです。なほまた或る生物並びに人間にはこの官能の發達によつて種々の

感情を伴ひ生じます。感情によつて行動するところのものを私たちは感情的生活と名づけてもよいでせう。官能的欲求即ち本能の滿足は通常快なる感情を喚び起し、そしておのづから肉體的生命の存續を可能ならしめるやうに導きます。之等は自然の一つの原理であつて、私たちは之をいかにしても否定することはできないところのものであります。

併しながら、誰でも知つてゐるやうに、私たち人間には單なる本能若くは感情の滿足を企圖しようとする原始的意志の外に、極めて複雜なる意志作用が存し、依つて謂はゆる思想的生活を營むことができます。しかも各の個體にとつて全く自由であるとして意識せられるもの丶なかに、おのづから普遍的として思惟せられ得る理性なるもの丶存在は、遂にすべての人間にとつて普遍的なる理念を結果し、理想を描くことを可能にするのです。

固より理性を普遍的であるとしない限り、理念若くは理性を一定に形づくることは不可能でありますけれども、そして又私たちは完全に普遍的な理想を永遠の後に求め得るまではその可能性をさへ絕對的に證する何の根據をも恐らくは求め得ないでありませうけれども、併し豫め之が可能を信ずることは、第一に宗教的信念への感情に一致し、第二にまた人間の行爲をして價値的判斷に頼らしめ得る點に於て、永遠の進化なる思惟的欲求をも滿足せしめる唯一の途であると私は思ひます。かやうにして私たちはその存在を假定せる理想なるものに對して至高價値を歸し、之に向ふあらゆる生活行爲に對して亦それ〴〵の價値を論ずることが出來るのでありませう。

人間に於ては官能若くは感情的生活はそのまゝで純粹に孤立してあらはれることは殆んどありません。全く自由意思なる意識を缺くところの極端な除外例に於てそれが偶々行はれないとは云はれますまいが、併し人間が人間として生きる場合に或る行爲の前に之を選擇する意志のはたらくことは否定せられない事實です。そこに官能的生活又は感情的生活の至當なる抑制が存しなければなりません。この抑制を費さない限りに於てそれらの生活は私たちに取つて價値をも

たないことになるのです。それ故に私はかう云はなくてはなりません。官能的若くは感情的生活そのものは決して本質的に卑しめらるべきものでも、亦高めらるべきものでもありません(それが自然である意味に於て美であると云ふことは出來ます)。併しながら當然抑制せらるべき場合に、敢て之に赴き浸ることは却つて思想に於ける或る欠陥から生ずるのであつて、そこに卑しめらるべきものがあるとすれば、即ちこゝに働く處の思想そのものでなければならないのです。私は特に性慾に對し、又は男女相互の戀情に對する舊時の誤解に對して之を云ひたいのです。それらの純粹なる發見に對してどこに卑しむべき又は咎むべき要素があるでせう。その咎むべきところのものは、之等を抑制すべき處に抑制し得ない意味に外ならないのです。

ともかくも私たち人間の生活に於て價値を與へるところのものはその思想でなければなりません。そして單なる感情も之に多くの思惟と反省とを加へて思想的に發展せしめられる場合に、即ちこの感情を最も合理的に滿足せしめるためにどんな思想と結合し得るかを私たちが追究するときに、そこに始めて價値ある思想的行爲として見做すことが出來、又その價値的究極たる理想として希求することも出來るのです。

私はかやうな理想の一つとしてすべての人間の人格完成を見ないわけにゆきません。自己の人格完成を希ふ心、それは自らに對する愛です。他人の人格完成をも等しく希求しようとする念、それは他に對する愛でなければなりません。之を措いて愛の眞義をどこに見出すことが出來るでせう。感情の恣いまゝに從ひ、之を庇ふことが、決して本當の愛であることの出來ないのは明らかです。

性慾の存在を機縁として全人格的に結合する一對の男女間の愛を戀愛として云ひ表はすならば、戀愛は即ち彼等相互が相一致して人格完成に赴かうとする行爲であり又その理想でなければならないわけです。この意味に於ける戀愛の理

想價値を否定することは、誰しもに取つて出來ないことであると私は思ひます。

若し問題がこゝに殘されるとするならば、只かやうな定義を戀愛に對して下すことが適當であるかどうかと云ふに過ぎません。併し之は單に私の多く拘らうとしない言葉の問題であつて、それがたとへどんな他の言葉で置き換へられようとも、しかも本質的に之に相當する理想と行爲とは依然として存在し得るわけです。

私の意味する戀愛の理想價値については、もはやこの上論議する必要はありますまい。より重要なる多くの問題は之と種々の生活行爲との關係であります。戀愛が卑貶せらるべきものとして屢々論ぜられる場合にも、それは私の上に云ふところの戀愛ではなくて、却つて之と或る關係に於て立つ他の生活行爲であると私は解するからです。私はこの論述に於て聊かそれらに觸れて見たいと思ふのです。

三

私は上に戀愛を定義するに當つて、性慾の存在を機縁としてと云ふ言葉を用ひました。或る人は之に對して、單に性慾ばかりではなく、容貌、性質等を機縁としても戀愛は成立し得ると云はれました。それは勿論事實でもありませう。そして恐らくは誰もそれを無理に否定しはしますまい。けれども、之等の要素は同性に對しては通常特殊な愛に導くものでないことを省りみたならば、異性に對する場合にそれらの要素の背後に、たとへ無意識にでも性慾的感情が隱れてゐないとは保證するわけにゆくまいと思はれます。ともかくもこの際に性慾なるものは男女結合の唯一の特殊的作用であつて、之をもつて等しく特殊な男女結合の事實たる戀愛の機縁として見做すことは、少なくとも本質的に不當なものではないと思ひます。

かやうにして戀愛生活に於てのみ性慾生活は伴ふことがゆるされるものであると私は主張するのです。由來性慾なるものは純粋に官能的なものであつて、あらゆる異性の間に自然的に存在し又行ひ得る筈のものです。若し人間の生活に思想的なものを缺くならば、即ち私の云ふやうな戀愛生活が戀愛理想のもとにあらはれることがなかつたならば、人間は恐らく隨時どんな異性の間に性慾行爲をなしたとしても、それは必ずしも自然に背反するものではなかつたかも知れません。併しながら私たちが既に戀愛生活を希求する以上、私たちは當然性慾を抑制して之を濫りにしてはならないのです。戀愛に於ける一つの特質的機緣として性慾が見做される以上、性慾生活は私たちの戀愛生活のなかにのみ見出さるべきものでなければならないと思ひます。なぜならば、之れ以外に性慾を充たすことはその人格を種々の意味に於て傷ける點に於て明らかに戀愛生活を攪すものであるからです。いづれにしても性慾は戀愛生活に於ける當事者以外に之を行つてはならないものであつて、之を破ることは既にこの戀愛生活の否定でなければなりません。

性慾行爲の可能性は併し單なる肉體的機構に關するものです。それ故に偶々或る肉體的欠陷のために之が不可能であり又は廻避せられなければならない場合もあるでせう。この際に於ける感情齟齬が萠いて戀愛生活に禍することのあるのを屢々見ないではありません。けれども之は他の肉體的欠陷若くは不時の病症の起る場合と等しく、共に相悲しむべきことであつて、人性に於て亦止むを得ないものではありますが、只それが純粋に精神的なものに屬しないだけに、恐らくは醫學の發達が或る程度まで之を救つてくれるでせう。かやうな欠陷のためにその對者が性慾行爲を他に求めると云ふごときはゆるすべからざることであつて、彼は十分に之を愼しむ必要と責任とをもつわけです。しかもこの一事が不幸にして彼の心に癒やすことの出來ない重大な影響をもつ虞れがあるとしても、恰も或る藥品中毒者が之を醫藥的に用ひることによつて余儀ない精神的影響を免がれねばならぬやうに、止むなく何等かの醫藥的又は機械的方法によるの

外は、絶對に他の人格的對象に於て性慾行爲を弄してはならない筈のものでありませう。

私はこの唯一な肉體的性慾生活を含めた意味に於ての戀愛生活を名づけて結婚生活と云はうとするのです。結婚の意味、從つて亦夫婦の意味は之を措いて外にはない筈です。結婚は決して法律的制度によつて保證せられるのでもなく、一片の儀式によつて成立するのでもありません。之等は單に本質的な結婚の成立を社會的に認めさせるために役立つ便宜的な規約並びに方法に過ぎないのであつて、之等と獨立しても亦結婚生活なるものは存在しなければなりません。ところが現時に於ては之と反對に、結婚生活の本質的內容を具備することなしに、單に制度儀式によつて之を始めようとし、若くは之によつてのみ結婚を行つたと云ふ意識を習慣的に起してゐるに過ぎないことのあるのは、抑も結婚生活從つて亦戀愛の眞意義を沒却し、その諸弊を極むるに至る重要な所因をなすと云はなければなりますまい。私はこゝに故厨川白村博士がその著「近代の戀愛觀」に於て、形式的結婚を痛罵駁擊せられた多くの言葉を思ひ出さずにはゐられません。そしてまたそこにも引用せられたエレン・カイの言葉

「成規の結婚なしにですらも、戀愛は道德的である。しかし戀愛なしには結婚は不道德である」

を固より肯定しようとするのです。否、私は更に一歩を進めて、戀愛生活なしには結婚生活はそこには存在しないと云はうとするのです。單なる制度儀式上の結婚なるものはその名と外形とを具へただけであつて、その內容は全然空虛であり得るわけです。空虛な指環の箱を取つて、これこそ「指環」であると人に示したところで、それが何の價値をもつでせう。指環を寶店の飾棚に並べるためには箱も亦必要であるかも知れません。併し指環の價値は決してその箱にあるのではなくて、却つて指環自身に存するのです。まして人生に於て結婚生活は只結婚當事者の生活價値のためにのみ行はるべきものであつて、他の何もののためでもありません。社會のためでもなく、兩親のためでもなく、尙ほまた必ず

しも生るべき子供のためでもないのです。空虚な外形的結婚生活こそ彼等にとつて最も呪はしい不幸なものでなければなりますまい。之を敢てするよりも寧ろ獨自的な生活こそ清淨な望ましいものではないでせうか。

外形的結婚生活はいかに之を强辯しようとも斷じて私たちの理想に添ふものではありません。そこに營まれるところの性慾生活は、たとへ人間が子を生むことを社會のためであると解したとても、之は畢竟生物的若くは官能的なるものに過ぎないのであつて、かやうにして私たちは單なる生物的社會をつくるより外、何の意味をももち得ないでありませう。性慾生活がより高い戀愛生活に伴つて、始めてそこに人間の行爲としての價値をもつのです。之によつてこそ性慾も亦人間的に高められると謂はなければなりません。

四

「結婚は戀愛の墳墓である」といふ言葉を戀愛に對する一つの皮肉として解する人も恐らく多いでせう。厨川博士さへも、それは「戀の花やかさ美しさだけが結婚後に於て消滅すると云ふ意味に於て確に半面の眞理を語つてゐる」と述べられました。若し博士の論ぜられた戀愛がこの意味のものであり、こゝで殊更に「戀」と書き直されたものと終始同一者であつたならば、之からして戀愛讃美がそれ程容易には引き出されたなかつたであらうと私は思ひます。結婚後に於て「その戀愛はおのづから變じて潜在的內面的とならざるを得ないわけだ」とせられるのも、實は極めて曖昧な議論であると私は思ひます。そしてまた之等の論は戀愛讃美の內容をして屢々大いなる誤解に導く虞れがありはしまいかと私は思ふのです。

恐らく他の多くの戀愛讃美論者に於てもさうであらうと思はれるやうに、私に於て戀愛生活は一つの思想的生活に屬

する人格的結合に外ならないのです。戀愛の理想はこの結合にある男女相互の人格完成を希求する處にあると私は既に論じました。そしてかやうな思想的生活に隨從相應するものとして結婚生活をも見做さうとする以上「結婚は戀愛の墳墓である」と云ふやうな結婚も戀愛も私たちの語彙のなかには全然見出し得ないのであります。若し私がこの章句の意味するところを私たちの正しい語彙によつて飜譯するならば「或る性慾的結合（同棲）は戀情を減滅せしめる」とでも云ひ換へなくてはならないでせう。男女間の單なる戀情が相互の接觸を增すことによつて寧ろ減ずるでもあらうことは一つの心理學的事實ではありますが、併しそれは必ずしも思想的な戀愛生活に累ひするものではありますまい。厨川博士の意味も亦明らかに之と同樣であつて、只戀愛なる言葉が幾通りにも稍々曖昧に用ひられてゐるに過ぎないと思ひます。

然らば私の云ふ戀愛なるものは男女間の一つの感情としての戀情とは全く緣のないものであるかと問はれる人もあるかも知れません。私はこの間の關係を明らかにして之に答へなくてはならないでせう。

戀愛は思想的なる點に於て、戀情は感情的なる點に於て、それは明らかに異なつたものであると私は先づ斷じます。併しながら思想と感情とは互に相關聯してゐるものであつて、それらは常に全く獨自的に存在するのではありません。

私は戀愛をもつて人格の向上完成を希求する一つの愛行爲であると論じました。道德的善も亦等しく人格の向上完成を期するところの行爲です。けれども、之を能動的に見て、そこに善が愛と分たれる重要な要素があるのを知ることが出來るでせう。即ち善は純粹に思惟的に之をなすことをもつて自らの義務と判斷し、之をなさざることに於て自己の人格の毀損を見るところの行爲です。たとへ感情的に之をなすことを嫌厭する場合があつたとしても、尙ほ努めて之を行はなくてはならないとするところのものです。之に反して愛は、たとへ思惟的判斷を經て人格完成の希求に相應するや

うに行爲しなくてはならないものではありますが、併し能動的には、之をなさねばならないと云ふ强制的義務を感じて行ふのではなくて、却つて自らよろこんで之をなさうとする感情的衝動に基づいて行ふところのものであるのですこゝに愛は思想的ではあつても、なほ之をはたらかす動機としての感情を具へなくてはならない點に於て、後者と密接に關聯してゐるのです。

之は思想的なる愛の特質であつて、それが道德的善と異なるところはこゝにあるのです。勿論私たちの理想的究極にあつては、すべての善は當然よろこんでなされなければならないものとして、愛に歸し得るものでありませうけれども現實的な人間生活に於ては多くの善に背反しようとする感情の存在を免がれないのです。それは悲しむべく苦しむべきことではあつても、亦止むを得ない事實なのです。

私はこゝに私の論じやうとする最も重要な一頂點に達しました。戀愛生活はそこに結合せられた男女の人格完成への一道程です。即ちその戀愛行爲なるものは常に周到な思惟的判斷を經た人格完成に向ふところのものでなければなりません。けれどもそれが同時に一つの愛なる限りに於て、之は決して强制的に發せられるものではなくて、或る感情的衝動に刺戟されて敢て之をなすことを快とするものでなくてはなりません。この感情的衝動なるものこそ即ち彼等の間に存する戀情に外ならないのです。

この戀情なるものは、通常單に戀（又は戀慕）と云ひ慣らはされ、そしてまた多くの人たちに於て戀愛として云ひあらはされてゐるのです。すべての誤解は之を私の上に云ふ意味の戀愛と混同することから生ずるのであると私は思ひます。戀情は併しどこまでも單なる感情であつて、それは決して他にはたらきかける愛行爲ではありますまい。この感情の熱火を强く燃やすことによつてのみ愛なる機關は動かすことが出來るでもありませう。併しながら私は愛なる機關が

十分に思想的に構造せられてゐなくてはならないことを思ふのです。若しこの思想的構造を缺くならば、これはもはや眞に希求すべき愛としてはたらくことは出來ないで、單に感情的に熱せられるに過ぎないのです。そしてそこに謂はゆる溺愛なるものが結果するばかりでありませう。戀愛が思想的にはたらくことに於て始めて人格完成の理想がそのなかに生れ得るのです。

私はこゝに戀愛と戀情との差別をどこまでも嚴格に保つと共に、またその或る必然的な關聯をも明らかに認めなくてはならないのです。

五

私は上に戀愛を一つの愛行爲として、それが道徳的善から差別せられる點を說き示しました。戀愛生活從つて亦結婚生活は即ちこの意味からして本來の倫理生活ではないのです。それ故に結婚生活の間に戀愛行爲を行ふことの何等かの不可能な理由を發見するに至つたならば、之を強要的に續けなければならないとする思惟的要求は、少なくとも戀愛生活それ自身のなかには存在しないわけです。なぜなら、かやうに強要せられた戀愛行爲なるものは既に戀愛そのものではないからです。私はこの點に於て結婚生活の終結、即ち離婚なることのゆるされ得る正當な哲學的根據を見出すものであります。

このことは併し離婚の可能性についての理論的根據であつて、それは必ずしも直ちに實践的に離婚の行はれなくてはならない場合を示すのではありません。なぜなら、實践的には戀愛生活と倫理生活とは獨立的に存在すべきものではなくて、常に同時に行はれなくてはならないからです。

私は即ちその結婚生活の道程に於て偶々戀愛行爲の原動力としての戀情の火焔を消失することもあり得るでせう。特にこのやうな熱烈に燃え得るところの感情は亦時に屡々消滅し易い傾向をも具へてゐるのです。そしてまた日常の接觸はこの生活にある男女兩者をしてそれ程激越な感情に燃えしめることは到底不可能であり、寧ろ持續的な潛在的な形にまでそれを變ぜしめることも自然なのではありますが、それがいつの間にか絶滅してゐることも見出されないとも限りません。私たちは之等の場合に既に戀愛行爲をはたらかせることを不可能とするでせうが、併し何等の道徳的反省なしにこれだけで戀愛生活を終結せしめてはならないこと勿論です。私は只いかにしても戀愛生活を保續することに相互に困難を感ずる場合に、その當然なる終結に到達することも亦止むを得ないものであることを思ふだけです。

まことに戀愛の心を失うてなほその結婚生活を續けなくてはならないこと程慘ましいものはありますまい。それは既に上に述べたやうに眞の意味の結婚生活ではあり得ないからです。私たちは相戒しめて之に陷らないやうに努めなければなりません。戀愛をもつて人格の向上完成への行爲となす限り、それの中途的終結は、たとへどんな事情や理由がこに存在しようとも、人生に於ける最も悲しむべき失敗です。それは嚴にお互とも責められなくてはならないところのものです。私たちは之に到達しないやうにあらゆる用意を費さなくてはなりますまい。

とは云つても、人間が人格的に完たきものであり得ない上は、遂にいかに悲しまうとも戀愛に於て敗れることがないとは云はれないのです。尙ほまた全く敗れないまでも、そこに倦怠を生じ又は危機を醸さないと云ふことは出來ますまい。私たちは之等から免がれるために、常に戀情の火を持續することに注意しなくてはならないのです。

戀情は一つの感情ではありますが、之は思想的に大いに影響せらるべきものであります。私たちは常に感情を新たにして、その對象者に對するものを倦怠に陷らしめないやうにしなくてはならないのでせう。「愛の創造」といふ言葉は私

も亦極めて適切なよい言葉であると思ひます。愛を常に創造するがためにはその動力としての戀情をいつも新たに備へなくてはならないのを信じます。

併しながらこの戀情なるものは畢竟やはり感情であるがために、それがいかに思想的に影響されようとも、亦他面に於ては對象的存在そのものの肉體的狀態や感情や思想にも關聯しないわけにはゆかないのです。いかなる人間とでも戀愛生活を行へと云ふことは、この戀情の自然的に生じない以上、それは不可能なことでなければなりません。戀情が心理學的に並びに生理學的に性慾によつて惹き起されることが證明せられ、また性慾があらゆる男女間に存在し得ることが證據立てられたとしても、又之に反する種々の嫌惡の感情が人間相互の間に存することも事實であります。その嫌ふところのものは、たとへ或る程度まで抑へることはできようとも、深く人間の個性に根づいてゐるやうな場合に、遂に之をいかにともすることの出來ないのは私たち人間に免がれ得ない悲しみであつて、又之を强ひて抑へることによつては眞の戀愛に到達することも困難な次第であります。かやうな事實は、私たちが戀愛の對象者を選ぶに當つて最も愼重周到な思慮を要することを示すものでなければなりません。

私はこゝに、この對象者の選擇が絕對に戀愛以外の要素、例へば權門財産等の功利的見地の如きものからなされてはならないことを特に述べる必要もあるまいと思ひます。たとへ功利的見解からでなくとも、長者が適當なる忠言の範圍を超えて、特に又自己の好惡の感をさへ之に附加して、この選擇に對して强壓的に關與する如きは最も多く差し控へなくてはならないことでありませう。對象者の選擇は常に結婚當事者の最も自由なる且つ十分なる思慮に任せなくてはならない筈のものです。そこにのみおのづから戀愛の理想が可能にせられる唯一の途があるべきであると私は思ひます。

六

私たちが一たび異性に接して懐かしさの心を動かし、何となき戀しさ愛しさの念を抱くことはまことに人間の至情であつて、そこに何等の他の念慮、特に功利觀念のやうなものを少しも混へない純粋さに於て一つの美くしさの極致を示します。藝術的に寫され又情話的に語られる戀愛なるものは、そして亦通俗的に戀愛として解せられるものは、かやうな感情並びに之をあらはす行爲を指してゐることが多いのです。併しこの謂はゆる戀愛なるものが戀愛論者の取つて理想となし至上となし、そして私の亦上來論じ來たつたそれとは異なるものであることは、くれぐれも繰返して斷らなくてはならないところです。之を等しく戀愛といふ言葉で云ひあらはすのはいゝでせう。けれども若しさう名づけるならば、それは云はゞ感情的戀愛であつて、之に反し私たちの意味するものは思想的戀愛であること、亦既に說いた通りです。戀しく愛しいのは單なる感情であり、それ故に私は之を戀情と名づけて後者と差別したのでした。

感情的戀愛即ち戀情がこの汚濁に充ちて人性に於ていかに美しきものであり純なるものであるかを私はよく知つてゐます。そして亦之が人間に於て最も强烈に起り得る官能的欲求たる性慾と或る關係に於て結びついてゐる限り、或る時機を得て最も熾烈に生じ得ることも事實です。しかもこの戀情は、私が既に論じたやうに、思想的戀愛とも或る必然的な關聯をもつてゐるといふことは、實にこの戀愛をして、愛のその他の種々相のうちに於て最も深く體驗せしめ得るやうにする理由をなしてゐるのです。人間相愛の如きものはより多く思想的であるだけにまたより多く持續的であり得るわけですが、併しこの愛行爲を生ずる動機としての感情に於ては、遙かに戀愛の場合のそれに及ばないこと云ふまでもないと思ひます。

私は嚢に戀愛を愛の種々相のうちの一つとして論じ、愛行爲を分析して敬愛と慈愛との兩要素を歸し、それらの差によつて愛の階層關係を差別しようとしました。今再び愛の動機としての感情を考ふるに當つて、何が故にかやうな階層關係が生ずるかを明らかにすることが出來るやうに思はれます。

愛すべきものを見出して之を敬し愛しようとする敬愛なるものは、少なくともその愛の動機をそゝるものが對象者そのものゝなかに全く內在すべき點に於て、より受働的なる要素をもつに反し、自らの心の或る欲求からして慈しみ愛しやうとする慈愛は、たとへ對象者によつて等しく之をそゝられるとは云へ、その愛の動機を全く自己の感情のうちに湧かしめ、且つ進んでその作用を對象者に及ばさうとする點に於て、より能働的であります。前者に於ては又直接に官能的欲求を刺戟することのないだけ思想的に傾き、後者に於ては或る官能的欲求に基づく感情を動機とするだけ感情的にあらはれることを免れません。

之等の事情は慈愛に於て謂はゆる愛の創造作用を專ら現ぜしめ、依つて之をより多く要素として含むやうな愛行爲に於てより高い階層を私たちに判ぜしめるのであると思はれます。自己愛に於て、又之に次ぐ戀愛に於て、いかに強く官能的欲求が働らき又創造作用が之に含まれるかを省りみたならば、如上の言葉を肯定することが出來るでありませう。

かやうにして愛の創造作用を最も著しく現はすところのものは自己の愛であること勿論ですが併しこの場合にお てはその對象が之を作用せしめる自己と一致するといふ特殊關係をもつに反し、之に次ぐところの戀愛に於ては對象者を自己以外に見出す故に、そこには新たに自己犧牲なる行爲をも生じます。固よりこの自己犧牲は、それが官能的欲求に出來する戀情によつて行はれる限り、より純粹に思想的に結果する場合に比べて、道徳的に價値あるものとして見られないかも知れませんが、併しそれは戀愛が道徳的善と差別せられる意味に於て當然のものであつて、それにも拘らず

この自己犧牲が戀情と共に一つの純眞なる自然的美をなすと云ふことは出來るでせう。官能的欲求即ち本能の滿足が卑しめらるべき場合は之を抑制すべき思想的道德的要求に反じて行はれるときです。けれども之を越えた感情として最も純粹なるものに至つては、美は即ち美でなければなりません。誰が戀情をしも卑しいと云ふことが出來るでせう。

併しながら人間が感情によつてのみ行動し、生活することは頗る危險であり又謬れるものであることは云ふまでもありません。純粹なる感情生活は之を自然的なるものとして、たとへ美であり得ても、既に思想を有し理性を具へた人間にあつては決して理想的なものではなく、價値あるものでもありません。それは沒價値的なる自然に等しいものであつて、一人の人間の行動生活としてゆるさるべきものではないのです。そこには屡々盲目的、感情耽溺なる言葉が歸せられるのはこの故です。しかも私たちの論ずるところの戀愛は決してかやうな感情的に、即ち戀情に於てのみ依存する行動生活ではなくて、却つて全く思想的に人格完成を期する行爲に外ならないことは判然と辨別せられなくてはなりません。そしてこゝにのみ戀愛の理想價値が生じ、戀愛生活の實現が讃美せられるのです。彼と此とを混同して解することは嚴に避けられらければなりません。

私はこゝに情死の如き問題が之等の觀念が十分に明瞭にせられた上で、始めて最も嚴肅に論ぜらるべきものであることを特に注意しておきたいと思ひます。そこには恐らく單に感情生活の一行爲として見做さるべき場合もあり、又その思慮深さに當つては人格完成の一つの變態的行爲として戀愛生活に屬すべき場合もあるかも知れないと私は思ふからです。

七

「戀愛なき結婚は人としての自己の存在を無意味ならしむるばかりか、民族の發達人類の進化の爲にも大なる障礙を與ふる者である。だから法律とか財産とか家名とか、其樣な外的條件を如何に完全に具備した結婚であつても、そこに兩性間の戀愛を缺いてゐると云ふ事は、最高の道德から見て三文の價値なき者だ。……」

之は厨川博士の著書中にある言葉として、最近に石丸梧平氏が一つの論題として引用されたところのものです(「人生創造」新年號)「厨川博士の云はれる戀愛なる言葉がその所論の處々に於て異なり頗る曖昧になされてゐることは私の既に指摘した通りです。それが一つの理想として云ひあらはされ、又は「人格的結合」として論ぜられる場合には、私の意味する戀愛なるものと同一であると解せられるのですが、一方に於て戀と云ふ言葉と共に雜然と列ねられ、或は

「人の心は戀を知るに至つて始めて淨められ高められる」

と云ひ、

「あわびの貝の片おもひ、振られては熱くなると云ふ火事場のまとひ、さう云ふ片戀もまた、悲しい戀ではあるが、たうとい戀である」

と云ひ、

「衝動的肉感的戀愛は永續しないが」云々、「戀愛には……青春の胸の血の躍るに任せた一時の戀もあれば、また共白髮までも續いて」云々

とせられるやうな言葉、その他隨處に見當るそれからすれば、明らかに私の思想的戀愛と差別したところの戀情なるものをも含められてあるのです。卷頭その他に引かれてあるブラウニングの詩句「戀は至上である」といふのさへ、私はこの意味をもつてゐると思ふのです。「戀愛にもまた種々の相があり階段がある」としてその差別が時に云ひあらはさ

れなくてはならなかつたのですが、畢竟之を明瞭に厳格に分たない處に、大きな誤解を伴ふことは免がれないと思ひます。

石丸氏はこの故に、「戀愛なき結婚」と云ふ言葉に代ふるに「人格的信頼なき結婚」と云ふのを以てしようとせられたのでせう。それは寧ろ妥當でもあると思ひます。併し人格的信頼なるものは殆ど思想的に偏した要素であり、そして又寧ろ消極的なものであることは否定せられますまい。之に對して戀情に基づく積極的戀愛行爲なるものが顧みられないではゐられない筈であると私は思ひます。そしてまたそこにこそ謂はゆる愛の創造が芽ぐまれるのでありませう。

併し私は抑も厨川博士の云はれる戀愛なき結婚は「最高の道徳から見て三文の價値なき者だ」と云ふことに疑問を挾まなくてはならない點に於て石丸氏に同ずるものです。最高の道徳とは何であるかを私はこゝで解することが出來ませんが、私の意見に於て最高の道徳とは人間全般の最後の理想を措いて外にはないと思ひます。それが何であるかは私たちが只究極的に尋ね求めることをゆるされるものであつて、決して豫め斷ずることの出來ないものです。暫らくこの問題を措くとしても、私たちが結婚生活を始めるに當つて、若くはそれ以前に於て、戀情のあると無いとは、何等道徳的に關するものではありますまい。

私の見解では、相互の人格完成を希求する戀愛行爲は結婚生活に於て始めてあらはれるものです。眞の結婚生活に於て戀愛の存しなければならないことは絶對に必要であるとはしますが、之が結婚と同時に始まることは何の差支へもありません。この意味に於て結婚なるものが、相愛の男女の自由意志によつて成立しようとも、又は古來の或る慣習としての媒酌の如きによつて成立しようとも、少なくとも理論的には何の差別もない筈です。彼が「道徳的に」ゆるされ、此がさうでないとする理由を私はどこにも見出すことが出來ません。それにも拘らず私が媒酌結婚の如きを斷じて斥けよ

うとする理由は、結婚當事者の人格を尊重し、その十分なる自由意志によつて之を行ふことにより、人生行路の偶然なる不運を減少し、從つて戀愛生活の可能性をより容易く實現せしめようとするに外ならないのです。それは私たちの一つの理想への最善の方法であつて、之に對するすべての障礙を出來るだけ少なくしようと云ふ意味でなければなりません。若し自由意志による結婚對偶者選擇の心もとなさを感じて、之を自らの信賴し得べき長者に任せることをより賢い方法であるとするものがあつたならば、それは自己の生活を或る有力者の指示に仰ぐと云ふことと同じ意味に於て、亦彼にゆるさるべきものであると私は思ひます。只かやうな委任さへも再び當事者の自由意志に依らなくてはならないのは勿論であつて、それ以上の一切の强要的干渉は一つの人格侮蔑として責めらるべきことであります。

要するに私は結婚以前に於て或る戀情の必要であると云ふ何等の必然的理由を認めるわけにはゆかないのであつて、只私たちの理論的に要求する主點は結婚生活に於ける戀愛の存在でなければならないのです。

けれどもこの理論的判斷にも拘らず、私は尙ほ實際に於て次のやうな事情を省慮しないわけにはゆきません。戀愛が結婚以後に於て行はれさへすればよいとは云ふもの丶、旣に上に說いたやうに、戀愛の實行はその感情的動機としての戀情の存在に待たなくてはならないものです。理性的に感情が導かれないとは云はれませんが、併しこの感情の機微は往々にして理性を超えるものです。それ故に私たちの戀情も亦、結婚以後に於て理性的に誘導せられ、若くは結婚を決斷する際に單に想描的に存在することよりも、寧ろそれが自然的に釀されるに如くはないのです。しかも、然うであるとするならば、結婚以後に於て自然的に釀されるところのものと、それ以前に於て起されるところのそれとは、心理學的に確に異なつたものであることを免がれますまい。

私はこゝに厨川博士の言葉を極めて痛論せられたところの、戀愛なき結婚は少くともその初夜に於て賣淫若くは强姦

和姦等の罪を犯すものであると云ふ感情的に機微な問題について却つて多く云ふ必要はないと信じます。彼等の最初の肉交が果して少しの戀情すらもなしに行はれたかどうかは誰しも確實に斷ずることの出來ないものであつて、既に以前から戀情を以つてゐた場合に於てもその最初に於て處女が肉交に對する或る恐怖を感ずることは生理的且つ心理的にあり得べき筈であるからです。

私はともかくも性慾生活に伴つて戀情の生ずべき場合と、純粹なる童貞として、若しくは性慾生活を離れて、男女相互の間に戀情の醸される場合とは、その心情の過程に於てかなり大きな相異の存在すべきことを認めなくてはなるまいと思ふのです。そして私はこの相異を人生の體驗に於いて決して無視すべきものではないと思います。謂はゆる戀の味とか尊とさとか名づけるものは、即ちかやうな體驗の得がたさを語るものであつて、之がその儘育つて戀愛生活に入り得ることは、確かに人生の一つの幸であり、之が偶々片戀とか失戀とかに終るとしても、亦必ずしも呪ふべきではありますまい。私はこの意味に於て戀情から育てらるべき結婚並に戀愛生活を、より自然的であるとなし、人生體驗の上により好ましきものであるとしないわけにゆかないのです。

戀情は燃えてまた忽ち冷め易い果敢ないものであるとなし、之に反して結婚以後に初めて生ずる愛情を持續的であるとして、かの媒酌結婚に依らうとする人たちもあります。彼等は只前者の弊を見て、却つて兩者の本當の意味を審かに比較したことはないのであらうと想像するより外はありません。安易にのみ路を步むことを望むならばそれもまたよいでせう。只彼等は恐らく同時に人生の價値の積極的創造に與かるためには遂に緣なき衆生として終らなくてはなるまいことを私は憐れ悲しむだけです。

八

私は尙ほ戀愛及び結婚生活に對して最も直接に關聯する家庭生活について論及しなければならないかも知れません。併しながら之に關する問題は既に戀愛の根本義を正確に理解する以上、それによつておのづから解決さるべきものであつて、私はこゝにもはやその一々を評論することを止めて單に問題の輪廓を示すだけにしようと思ひます。

一つの家庭は結婚生活者の各に對して獨立に營まるべきことをその本體とするでありませう。なぜならば、結婚生活にある男女はその他のものゝなかにあつて特殊の結合におかれたものであるからです。

家庭に必然的に所屬すべき者としては、その家庭に生れて、しかもまだ獨立に生活することの出來ない小兒を措いては外にありますまい。併し抑も家庭なるものが結婚當事者のために形作られるとするならば、何等かの事情のためにこの結婚生活に支障を感ずる限り、その小兒といへども亦之を他に托することも止むを得ないでありませう。

種々の事情のために家庭は、より複雑になることもあります。併しそれらの場合に常に戀愛生活が可能であるやうに私たちは導かなくてはならないのであつて、何等の理由によつても或る家庭的事情のために、戀愛生活が犧牲にせられてはならないと私は思ひます。產兒制限の如き問題も之に全く關聯するところがないとは云はれません。

結婚者の一方がその從事する文化價値的な仕事のために戀愛生活を犧牲にしなくてはならないと云ふ問題も起されます。之は單なる家庭的事情でなくて、抑も人生に於て絶對な目的とすべき仕事に關する點に於て、遙かに重大な問題でなければなりません。けれどもこの仕事に努めることが彼の人格完成の最も重要な要素として認められる限り、それは本質的に私の意味する戀愛生活と決して矛盾すべき筈のものではないのであつて、只そこに適切なる方法と理解とを缺

くために生ずるのであらうと私は信じます。私たちは相共に之を見出すことそれ自らに戀愛行爲の一つのあらはれを期待しなくてはなるまいと思ひます。

家庭生活が外に對してもつところの問題の第一は經濟的關係による職業の問題です。之はいろ〳〵の點に於て戀愛生活に影響を及ぼすものでありますが、私たちは之によつて戀愛生活を損はれることについて十分に戒めるべきであり、又それは比較的容易に可能でもありませう。只私たちは今日の社會的經濟及び財産制度、職業報酬の規定等が當然認むべき社會人生存權並びに家庭生活の成立存在を少しも顧慮してゐないことに對して遺憾に感じ、之等の或る改革を絶對に必要であると思惟しますが、少なくとも今日に於ては謂はゆる「手鍋提げても」と云ふ思想の私たちに存することを賴りとしなければなりますまい。

婦人の家庭勞働若くは職業的勞働の問題に至つては、私は更に根本的に、人間のすべての職業勞働が何故に文化價値的な仕事であり得ないかと云ふ最も重要な人生問題に向つて之と共に考究せらるべき筈のものであらうと考へます。

家庭生活の外部に對する問題の第二はその社交關係であります、社交的に多くの人に接することによつて戀愛生活が亂される危險性をこゝで最も多くもつからです。對象者の選擇に際して十分な機會若くは思慮を經なかつたといふ意識が起される場合に、之は更に著しくはたらくでありませう。種々の人格的欠陥から起る感情、特に嫉妬、感情弄戲、好奇心等が現生活に於ける倦怠又は嫌厭と相待つてあらゆる機會を覗はないとは云はれません。私たちは最も深く之等に對して相戒め、自らの戀愛生活を常に緊張せしめることを須臾も忘れてはなりません。

最後に、戀愛生活がいかにしても止むを得ない事情のために終結に導かれねばならない場合、若くは既に之が事實上空虛にせられてその恢復を望むことの困難である場合に家庭生活をいかに變更すべきかといふ問題があります。之はそれ

ぞれ具體的に最善の方法によらなくてはならないことですが、ともかくも或る戀愛生活を終結せしめなくてはならなたことな、人生に於ける深い悲しみとして相悼み、せめては之をよりよい體驗に生かすより外はないのでありませう。

世にはなほ極めて多くの人たちが戀愛生活としての見倣すことの不可能な、そして單に法律制度に賴り、外形的家庭のみを形づくる空婚生活をなしてゐるのを見ます。之等は厨川博士等をして賣淫、和姦に等しいと叫ばしめた行爲を敢てするものであり、人間生活の一つの虛僞な姿に陷つてゐるものであることに於て、不當な嘆ずべきものでなければなりません。彼等は自ら省りみて深く恥じ改めるところがあらねばならなかつたのでせう。地上に充つる娼婦の群は果して何を語るのでせうか。

戀愛と生活とについて私の尙ほ論ずべきところがないではありません。只この篇の餘りに冗長ならんことを虞れて私はこゝに筆を擱きます。戀愛に對する努めて公正なる且つ最も嚴肅なる觀念が多くの年わかい人たちの間に常に普ねく保たれんことを私はひたすらに祈つて止みません。

堺利彦傳

堺利彦

第一期　豐津時代（下）

（一）士族の商法

堺家の祿たる十五石四人扶持が公債證書に替へられた時、何んでも其の金額が七百圓ばかりだつたと聞いてゐる。そしてそれが七歩利付きだとすれば、年に五十圓足らずの利子となる。私の小耳に挾んでゐた所に依れば當時、私の家で、月に五圓あればどうやらこうやら暮しが立つといふ事であつた。若し其の通りの計算だとすれば、年に十圓以上の不足となるわけである。

當時の貨幣の價値は今日の十倍、もしくはそれ以上であつたとは云へ、一家の生活が月五圓とは、ずいぶん簡單なものであつた。然し、それはその筈で、家はある。山はある、畑は次第に廣げて行く、野菜物は何でも總て出來る。是非とも買はねばならぬ物は、米、炭、薪、油ぐらひに過ぎなかつた。味噌も醬油も内で作つた。酒も少しやつて見たやうだが、それは失敗したらしい。私の記憶には甘酒の事だけが殘つてゐる。魚は滅多に買はないし、菓子といふ物も殆んど買はない。私等はよく、近處の家や親類の家に行つた時、黒砂糖を一かたまり手のひらに塗りつけて貰つたものだ。白砂糖は茶菓子として客に出すより以外に使はれなかつた。私等の散髪は大抵、父がチヨキ〳〵やつてくれたし、足袋は勿論、紐つきの奴を母が拵へてくれた。シヤツといふ物がはやつて來た時にも、母が何かのキレでそれを拵へてくれた、衣服の材料として多少の反物類は買つてゐた樣に思ふが、我々の着物の多くは手織であつた。糸挽の事は前に話した通りそして大抵の家には機（ハタ）があつた。然し私の内には、それが無かつた。母の健康がそれに堪へなかつたのだらうかと思ふ、それで私の内の織物は、主として母の里の志津野

や、母の妹の篠田で出來たやうに思ふ。茸とり、土筆つみ、蕨とり、魚つり、ワナかけなどは、娯樂が主であつたか、實用が主であつたか分らない。兎にかく、學校の戻り道に、蕨を取つたり、茸を取つたりする時、私等の心の中に、明日の辨當の菜を拵へるといふ考へがあつた。私は山芋をすりこんだ味噌汁が大好きで、よく山芋を掘りに行つた。鮎つりの獲物や、ワナの獲物の小鳥などは、我々の稀な肉食の材料であつた。

こういふ質素な、原始的な、自足的な生活すら、ウツカリしてゐては迚も維持しきれないと云ふので、士族の殿原が皆な騒ぎだした。先祖代々からの祿扶持はなくなつた。有るものは只公債證書ばかり。然しそれを後生大事に守つてばかり居るのでは、次第弱りになるより外はない。そこでは一方には『官途に就く』事、一方には『士族の商法』が始まつた。

私が物心のついた頃には、私の家の近所に『屋敷跡』が幾つもあつた。それらは皆、官途に就くか、或は何かの職業を求めるか、或は何かの商法をやるかして、一家を擧げて他郷に引移つたのであつた。私の親戚中では、前に云つた通り『間宮のおちさん』は陸軍に勤め、『浦橋のおちさん』は大阪府に勤めてゐた。『廣瀬のおちさん』が小學校教員になつた事、兄の平太郎が間宮のおぢさんの『引き』で『陸軍十六等出仕』になつた事も、前に云つた通りである。父も初め暫らく田川郡あたりに行つて戸長か何かやつたらしい。

斯樣にして、他國に出る者は續々として出て行つたが、豐津の原に殘る者は、皆何かの『商法』を考へた。本町の鈴木といふ家は桶屋をやり出し、寺山といふ家は雜貨屋をやりだした。それが私等の子供心に、士族が『町の者』になつたといふ風に考へられた。里見といふ家が錦町の一丁目で郵便局をやつてゐたが、それは私等に、『町の者』らしく感じられなかつた。少し後になつて、本町の上の方で、或る若い人が煎餅屋を開業した時、大變な奮發として評判になつた。私の内の直ぐ近所の向井といふ家では、（そこは大ぶん工面が好かつたと見えて）、白壁の倉を建てて酒つくりを始めた。其の倉の棟上式の時、棟の上から餅まきがあつて、私等はそれを拾ひに行つた。御家老樣の松の御門にすら、いつの頃からか眼藥『精錡水』の看板が掛つてゐた。『二月谷の志津野のおちさん』が、大阪からマッチをいかいこと（たくさん）買ひ込んで來たが、皆んな濕つて役に立たなんだといふ話は、當時有名であつた。世事には最も疎い拙三先生までが、商法氣を出した所に面白味がある。私の母なと、每度おかしさうに其の話をしてゐた。

私の叔母の内の篠田と同苗の家が甲塚にあつた。そこで、前

者は上篠田、後者は下篠田と呼ばれてゐた。其の下篠田のおぢさんなる者が非常に滑稽な人物だつた。丸い大きい頭のツルツルに禿げた工合から、短かいおとがいの上に白い鬚のある一の字の脣を踏ん張らせた所など、江戸言葉の謂ゆる『とつちやん小僧』の概があつた。此の人は私の父の友達で、碁も打ち、俳句も少々はやるのだつたが、殊に『冠り句』の點者として知られてゐた。或る時、私等が、冠り句をやりだして、其の選を此のおぢさんに頼んだ時、『ビツクリ』といふ題に對し、拙者の句として巻の終りに、『曲り角からバアアア』とあつたのが、ひどく私を感心させた。最も平凡な、最も有りふれた趣向を大膽率直に云つてのけた所がエライと私は思つた。所が、この滑稽な老人の商法氣が、如何にも善く其の特質を發揮してゐた。彼は先づボケの木をたくさん山から掘つて來て自分の畑に植ゑた。『そんな面白うもない花をどうなさるのかな。』人が怪しんで問ふと、老人は得意らしく、鼻を一つクンと鳴らして、『マア見てお出で、今に接穂(つぎほ)をすると、これが皆んな海棠になる。海棠は値の高い植木ぢや。』この計畫はどんな結果になつたか、それを私は聞いた覺えがない。然し篠田老人の考案は其のくらいに止まらなかつた。モツト空想的な、モツト詩的な、モツトろまんちつくな商法を思ひついた。彼は鶴嘴を肩にして馬ゲ嶽に水晶掘に出かけた。馬ゲ嶽は斑らな禿山で、水晶が出ると云はれてゐた。篠田老人は何んでも只、奇抜な思ひつきを種にして、元の掛らぬ金もうけをしようと云ふのであつた。然し折角の此の名案は、辨當持の二三日の徒勞の結果、全く絶望に歸したのであつた。

私の内の押込(おしいれ)の隅に、何か器械の様なものがしまつてあつた。あれは煙草を刻む道具だと、母が私に説明してくれた事を覺えてゐる。然し自分達の飲み料を刻む爲に器械を買ふ程の事は無い筈だから、案ずるにこれは、ボケの栽培と類似した程度の、父の思ひつきであつて、同じく實効を奏 ぬ商法計畫であつたらしい。

士族の商法の氣運がこんなに盛んである間に、公債證書を金にしてムザムザ使ひすてた話もある。小寺といふ家では、『夫婦とも揃ひも揃うて好え氣なもので、今日は鯛にせう、明日はコチにせうと、毎日々々サカナを買うては、飲んだり歌うたりしとるそうな』といふ評判が高かつた。果して、それから間もなく此の家は沒落して豐津を立退き、近隣の農村に小屋掛か何かして、親子で天生田川で網打をして食うとるそうぢやと傳へられた。其の子といふのは私より一つか二つの年上であつたが、それが學校もやめて、そうした生活に落ちてゐると聞いた時、

私は大ぶん變な氣持だつた。××といふ家では、年寄が無くなつてしまつて、若い男の子が二人だけになつたが、其の兄の方の青年が毎日ブラ〱遊んでゐて、『不斷に博多の帶を締めとる』といふ評判だつた。間もなく此の家も沒落した。然し其の博多の帶を不斷に締めてゐた人は、ズツト後に何處やらで警察署長をしてゐると聞いた事がある。

豐津に於ける、幾らか事業らしい事業としては、紅茶の製造、養蠶および製糸、金貸し會社、この三つであつた。豚を飼ふといふ話も聞いた事はあるが、實現されたのを見た事は無かつた。私等の小學校――それは前に云つた通り、元のお城の一部分であつたが、――其の小學校に續く建物の中で、或る時、急に若い人達が大ぜいやつて來て、何か忙がしそうに働らきだした。私等小學生は、それを珍らしい事に思つて、皆が寄つてたかつて見物した。折しも夏の事で、若い人達は皆なフンドシ一つになつて、大きな平たい竹籠の樣な物を兩手にかゝえて、其の中に入れてある茶の葉を篩うてゐた。それが即ち紅茶會社の新事業であつた。私の家から二月谷に行く道に、可なり廣い茶園のあつた事を覺えてゐるが、それは多分、この會社の時に出來たものだらう。この會社については、志津野の捨三おぢさんが私の父にも勸めに來たそうだが、父は其の話に乘らなかつたらしい。事情は知らないが、その會社は間もなく消え失せた。

私は只、右の茶篩ひの光景を見た時、士族の若い人達に似合はしくない仕事だと感じてゐた。つまり筋肉勞働は、士族の面目でないと感じてゐた。

（一二）　養蠶と金貸し

養蠶は一時、可なり盛んになつてゐた。豐津の士族で、大なり小なり蠶を飼はぬ家は無いと云つてい丶程だつた。後には住居の外に蠶室を新築するほど、稍や大仕掛にやつてゐる家もあつた。開蠶社といふ會社の樣なものが出來たが、それは桑畑を作る事を目的としてゐた。何處の家でも多少の桑畑を持つてゐないのは無かつた。私の叔父の志津野の家など、道から家まで半町ばかり、丈の高い桑の木の下を潜つて行くのであつた。初の間、桑の木はそれほど大きく育てられてゐた。私等はよく、志津野の畑で高い桑の木に登り、あの紫色の實を貪ぼり食つた。

私の家では初めのほど、井戸ばたに四五本の大きな桑の木があるばかりだつた。蠶はほんのおもちやに飼ふのだつた。兄の分だの、私の分だの、別々に小さな箱に入れた蠶があつた。私はよく、大きく成長した蠶を口に入れて嘗めずつたりした。あの滑らかな皮膚が口の中でツル〱して好い氣持がするのであ

つた。然し私の内でも、後には前の山を少し開墾して、新らしい桑畑を作り、少しは用に立つだけの蠶を飼うた。それでも精々二年か三年くらゐのものだつたらうが、私が初めて拵へて貰つた博多織の帶は、たしかに内の繭から取つた糸で織つたのであつた。

兄の養子に行つた本吉家は、大ぶん本式に養蠶をやつてゐた。こゝではモウ、竹籠を持つて、頬冠りをして、嬢さん達が桑の葉を摘みに行くといふ悠長な遣り方でなく、總て刈桑式になつてゐた。それで蠶の盛り時になると、家の殆んど全部が蠶室になつて、丸で戰場の光景を呈してゐた。おかあさんがエライ元氣の働らき手で、來合せるほどの人々をつかまえては、皆んなに桑の葉むしりか何かの手傳ひを强制するのだつた。本吉家では更に糸取りから博多織までやつてゐた。お浪さんは糸取りが上手で、おかあさんは機織が自慢だつた。私の帶も本吉で織つて貰つたのだつた。

所が、この養蠶事業に附伴して、一つの悲劇が發生した。製糸會社といふほどのものであつたかどうか知らないが、杉生十郎といふ人の經營で、製糸工場の設けられた事がある。そこには士族の嬢さん達が大ぜい呼び集められてゐた。この杉生といふ人は私の長兄あたりと同年配で、少し家柄であり、そして豪傑的の人物らしく聞いてゐた。然るに其の事業は全く失敗した。嬢さん達は只はたらきになつてしまつた。『杉生さんもあんまりぢや。御自分はそれで仕方もあるまいが、せつかく羽織の一枚も拵へやうと、それぱかり樂しみにして永いあいだ働らいた嬢さん達が可愛そうな。』そういふ批判が私の母などの口から出てゐた。然し杉生さんは無責任でなかつた。彼は遂に自殺した。

かういふ蹉跌あつたもの丶、兎にかく豐津の原は、桑畑と、養蠶と、製糸とに依つて、せめて幾許かの經濟的基礎を得るだらうといふ望みが生じかけてゐた。しかしそれも夢で、それから幾年かの後、豐津の養蠶事業は全く亡びてしまつた。其の樣子については、私は何も知らないが、兎にかく地味か何かの關係上、桑が育たなくなつたのだと聞いてゐる。

小さな金貸し會社は幾つも出來てゐた。現に私の内の坐敷も、しばらく三成社の事務所になつてゐた。三成社には關さんといふ若い人が毎日辨當持で通つて來て、父と二人で何か頻りに帳面をいぢくつたりしてゐた。この關さんといふ人は『廣瀨の叔父さん』と懇意で、同じ節丸村に住んでゐた。その關係上、關さんと父との共同事業が成り立つたのらしい。叔父が其の事業の出資者の一人であつたかどうかは、私に分らない。金を借りに來るのは大低、近村の百姓達であつた。それで貸付は

出來るけれども、回收は中々出來ないといふ話だつた。そんなら祇當の田畑を取るかと云ふに、取つたところで、それをこちらで作るわけには行かず、どうにも仕方がないと云ふ話だつた。半季か年末かの決算の時だつたらうと思ふが、一度三成社で御馳走があつた。何んでも鮓飯が大そう旨かつた事を覺えてゐる。然し三成社が成功したか失敗したか、私は全く知らない。只いつの間にか、關さんが來なくなつて、三成社は消えてしまつた。その後、父はしばらく小倉に出て、何か小いさな事業をやつてゐた。それは三成社の事業の繼續、もしくは變形であつたかどうか、それも私は善く知らない。只、或る時、父が母の晴着用として、茶縞の絹地の羽織を一枚持つて歸つた事がある。それは新調でなく、古着であつた。父の事業は質屋であつたかも知れない。そしてその茶縞は流れ物であつたかも知れない。然しそれも長くは續かなかつた。

金貸し會社の中で『海山社』は大きくもあり、有名でもあつた。母の里の志津野が（すぐ後に話す通り）田川の方に移つて行つた後、其の家が海山社になつてゐた。志津野のおばさんは松崎家から來た人で、其の松崎家は志津野の隣りにあつた。又、松崎の弟の宮田の家も、志津野の隣りにあつた。つまり、そこには、兄弟つゞきの三軒家が桑畑の中に並んでゐたわけだ。そして海山社は主として、松崎と宮田との事業であつた。然し社長には福與慶茂さんといふ家柄の人が擔がれてゐた。志津野のおぢさんがどの程度まで海山社に關係してゐたか、それは私に分らない。然し叔父は田川の炭坑を目につけて、一家を擧げてそこに移つて行き、海山社も炭坑に手を出してゐたと云ふ事だから、必ず何か關係があつたものと考へられる。それは兎もあれ、海山社は一時盛んにやつてゐたが、忽ち何かの破綻を生じて行き詰つた。松崎氏は其の責に任じて切腹した。さすがに立派だといふ評判だつた。宮田氏は行衛知れずになつてゐたが、數日の後、或る山の中の池から其の屍體が發見された。『福與さんはお氣の毒な、何んにも御存じで無かつたさうぢや』と云ふ話だつたが、然し責任上、止むを得ない、身代限りか何かの刑になつた。杉生事件と云ひ、海山社事件と云ひ、士族の商法が頻々として悲劇を生み出したのであつた。

（一三）志津野家の沒落

其の前に今一つ、モツト直接に、私等の周圍に悲劇があつた。志津野のおぢさんは（前に云つた通り）寡言沈默の、ドツシリした、體格も可なり大きな人だつたが、早く炭坑に着眼した所を見ると、よほど大志があり、よほど冒險的であつたと思

はれる。然し先驅の冒險者が無殘な失敗を遂げるのは通例の運命である。

　叔父が赤池炭坑に移つてから後、私の母がよくこんな事を云つてゐた。『範雄が商賣といふものは、面白いものぞな面白いものぞなと云ふとるが、赤池の方はよつぽど好えと見える。』然しそれは暫らくの間の事だつた。叔父の事業は忽ち蹉跌を來した。そして叔父は有らゆる金策に究した末、コレラに罹つて死んでしまつた。跡には子供が四人あつた。松崎から來たおばさんは、それより少し以前に亡くなつて、外から後妻が來てゐたが、其の人は此の大變で直ぐに里方に歸り、四人の子供だけが親なしで豐津に戻つて來た。

　子供達と共に赤池から戻つて來た多少の荷物を親族中で片づけてゐる中、書類の間から數通の料理屋のツケが發見された。それが藝妓の揚代など少なからぬ金額であるので、皆が呆れてしまつた。『そんな物ばかり殘しといて何になるか!』と母は吐きだす樣に憤慨してゐた。『もうズツト前から、ヤケになつてしもうとつたのぢやのう』と父は寧ろ同情的に批評してゐた。然し父は又、『範雄が俺に反古をつかませた』と云つて、苦笑ひをしてゐた。叔父が沒落の少し前、豐津に金策に來て、何かの株券か地券かを抵當にして父から五十圓かの金を出させて行つたが、其の抵當が無價値の品である事が後に分つたのだつた。然し『初めから欺すつもりでも無かつたろう。金さへ持つて來て返せば事は濟むといふ積りぢやつたろう』と、母はさすがに弟を辯護してゐた。

　私の内の損害は其くらいで濟んだが、篠田家の打撃はひどかつた。篠田のおぢさんは公債證書の大部分を志津野のおぢさんに預けてゐたのであつた。尤も、篠田のおぢさんは、若安老として隱者といふ職業を持つてゐたので、それが爲め全く食へないわけでは無かつたが、然し遂に養子に背かれ、娘には死なれそして又この災難に遭つたのだから、よほどこたえたものと見える。その時の歌、『泡となりて返らぬせにや我が僞せし過ぐ世の罪の浮きて流れん。』せには『瀬に』と『錢』とをきかせたのだと聞いてゐた。その後、私の子供心の思ひなしかも知れぬが、篠田のおぢさんの顏に憂ひの色が深くなつたような氣がしてゐた。前に云つた李白の話などする時には、如何にも面白そうな老人だつたが、それがどうかすると、ひどく沈んで見えるようになつた。年に似合はず可なり房々した白髮を稍や長く延ばしてゐたが、私は唐詩選の『白髮三千丈、愁に依つて個の如く長し』といふのを、何となく此の人に思ひ寄せたりした。おぢさんが毎晩、食後に、佛壇に向つて法華經か何かを讀誦して

ゐるのを見る時など、殊に氣の毒な樣な氣がしてゐた。

扨、志津野の親類中では、範雄の不都合、不始末を幾ら責めて見た所で、死んだものを何んとも仕方がない。只だ兎もかくも、四人の孤兒の振方をつけることが眼前の急務であつた。四人の孤兒、――姉がヨシ、通稱およさん、私と同じ年で、その時が幾つであつたかシツカリ分らないが、私は此の人の昔の事を思ひだすたびに、髮を男髷に結うてゐた十か十あまりの小さい姿が目に浮かんで來る。あとが男三人、郞、又郞、海彥。そこで親類會議の結果、篠田家に子供が無いのだから、およさんを養女にして貰ふ事とし、あとは郞を松崎に、又郞を二月谷志津野に、海彥を堺と篠田とに半分づゝ引取る事となつた。此の半分づゝと云ふのは、どうした話あいの結果であつたか知らぬが、ずいぶんおかしなわけで、私は、半月のあいだ私の內に居た海彥がねまきを持つて篠田に行くのを、送つて行つた事を覺えてゐる。其の本人としては、さぞ落ちつかぬ心持だつたらうと察しられる。

それでも兎にかくそんな事で一應の話はついたが、それから暫らくして海山社の事變が起つた。赤池炭坑の失敗と海山社の破綻との間に、どんな關係があつたか、私には分らない。郞は又も家を失うて、その後は篠田家に引取られた。海彥は幸ひにして、錦町の平野といふ古道具屋に養はれた。又郞は、二月谷志津野が大阪に移つた時、更に堺家に引取られた何しろ志津野家の沒落は大事變であつた。

（一四）小學校

私は多分、七ツの春から小學校に行つたと思ふ。小いさな子が學校に行くと云つて、評判されたと母がよく後に話してゐた。年弱の七ツ、而も年の割に小さくて、よほど目に立つたらしい。

小學校では、先づ『いと、いぬ、いかり』などゝ書いた、壁人の掛圖で敎へられた事を覺えてゐる。それから間もなく『小學讀本』で『神は天地の主宰にして、人は萬物の靈なり』『酒と煙草は養生に害あり』などいふ事を敎へられた。猶その讀本には、怠惰な子供が學校には行かないで、道ばたの石にもたれて遊んでゐる話だの、久しぶりで故鄕に歸つた人が自分の家の燒けて無くなつてゐるのに驚く話だの『狼來たれり、狼來たれり』と嘘を云つて人を驚かした惡少年が、本當に狼の來た時、誰にも助けられなかつたといふ話だのがあつた。總てがアメリカの讀本の直譯だといふ事を、後に英語を學んだ時、初めて知つた。又『地理初步』といふ本には、劈頭第一、『マテマチカル・

ジョウガラヒーとは　』といふ、驚くべき外國語の新智識があつた。然し私等は、決してそれを變だとも不思議だとも思はず、只だ何んとなく語呂が好いので、面白がつて暗誦してゐた。

然し、一面にそれほど歐化的でありながら、他の一面には、よほどまだ漢學的であつた。私は卒業前に漢文の『國史略』を讀まされた。それに似た事は學校の外にもあつた。私は學校にはいる前、既に福澤諭吉の『世界國づくし』を暗誦してゐた。『世界は廣し萬國は多しと云へど大凡を、五つに別けし名目は、亞細亞、亞非利加、歐羅巴、南北亞米利加、五大洲』と云ふのであつた。然るに一方、或る年の夏休みには、近處の或人の處に通うて、四書五經の素讀をやつた。『故』の字を『かるがゆえに』と讀むのはどういふわけだらうかと不審に思うてゐたが、素讀の事だからそんなわけは聞きもしなかつた。『ヘイヒタルカンドウ、キルコトナカレ、オルコトナカレ』といふ詩經の文句を覺えてゐるが、今では既に其の字を忘れてゐる。

つい先頃の事、或人が私に、あなたの時代の小學校は腰掛でしたかと聞いた。そんな事が問題にならうとは、私は思ひもそめなかつた。何しろマテマチカル・ジョーガラヒーを教へるほどの新式の學校だもの、腰掛でなくてどうするものか。然し校舎は、前に云つた通り、元のお城の一部分であり、學校の名稱も、後には豐津小學校になつたけれども、初の内は『裁錦小學校』と云つたくらいで、色々古風な處も勿論あつた。雨の日の休みの時間などには、いつも廊下で組打ばかりやつてゐた。私はからだが小さいのでよく馬に乘せられたが、その代りいつでも組み敷かれてばかりゐた。

『利さんは學校で大かた毎日泣かされてばかりおゐでる』と、志津野のおよさんか誰かゞ告げ口をしたので、私は兩親の手前、甚だ面目なく感じた事がある。實際、私はよく泣かされた。それと云ふのは、からだの小さいのが第一、而かも年の割に級が上で、おまけに口が達者と來てゐるので、力の強い大きな友達の目からは、よほど生意氣に見えたのだらう。大體、先生からは可愛がられたが、それでも何かの罰で園の上に直立を命ぜられて、ひどくなさけなかつた覺もある。

十三の春、私は豐津小學校を優等で卒業した。そして大橋(今の行橋)の郡役所に呼び出されて、輿地誌略と日本外史とを御褒美に貰つた。

(一五) 中學校

元は藩學育徳館、私のはいつた時には縣立豐津中學校。幸ケ原

といふ平野の一隅に在る宮殿式の（實は粗雜な）建物で、高い塔の上にホラツが掛つてゐた。私は入學願書を持つて初めてそこに行つた時、實に堂々たるものだと思つた。何んでも此ごろは二百人から生徒があるさうな」と、母などが驚きがほに話してゐた。當時、豐前の國（俗小倉領）に只一つの中學校だつた。

育徳館時代には、カステルといふ英人の教師がお雇ひになつてゐた程の新式であつた。本町にその教師の住宅として建てられた異人館があつた。私等の物を覺える頃には、其の家には志津野啓さんの一家が住んでゐた。この志津野は、他の志津野と區別する爲、異人館志津野と呼ばれてゐた。カステルが蘭學であつたか、英學であつたかは、それは知らないが、何しろ此の山の中まで西洋人を引張つて來た處に、當時の意氣込が窺はれる。從つてマテマチカル・ジョーガラヒーも決して不思議でない。然し私等の入學した中學校は、まだほんの初期で、藩學としての長所は無くなつて、新制度としての發達は極く幼稚だといふ狀態であつた。

私は中學校に畫學といふ科目のあつたのに驚いた。小學校にはそんなものは無かつた。畫と云へば、芝居の寺小屋で見てゐる通り、子供として先生に叱られる筈の遊び事だと考へてゐた。それを學校で教へるとは何事だらうと思つた。然し別たん不平を鳴らすほどの事でもなかつた。殊に初めの中、先生が黒板に白墨で手本の畫をかいてくれて、それを我々が眞似するといふ位の程度のもので、實際ほんの遊び事であつた。只、私は天性の不器用で、どうしても畫らしい畫はかけなかつた。學校以外でも、四君子といつて蘭・竹・梅・菊などをかいたりする、文人畫の流行があつて、それは私にも高尚な一風流と感じられて、幾らか眞似をして見た事もあるが、どうしても畫らしい格好のものにならなかつた。

體操といふ事も中學校で初めて教はつた。これも何んだか馬鹿馬鹿しくて厭だつた。殊に私は脊が低くて、いつでも列の最後になるのが厭だつた。卒業間近になつて、兵式體操が初めて行はれた時にも、可なりの反感を覺えた。

ついでに、當時はまだ總ての學校に唱歌といふものが無かつた。後に、學校で唱歌を教へると聞いた時、私は變な事だと思つた。私の心持としては、畫も體操も唱歌も、皆な同じく、學校で教ふべき學問では無いのであつた。然し後になつて考へて見ると、それは一面には、私が自分の性質および體質に適しないものを嫌つたのであつたらしい。私の耳は、現に今でも、音樂に對して全くキクラゲ同樣である。尤も、子供の時、少しなり

もと小學校で修練されてゐたら、これほどでは無かつたかも知れない。

簿記、經濟學などいふ科目も私は厭だつた。私は卒業近くなる頃には、將來、政治家もしくは學者になる積りだつたので、さういふ町人らしい學科が自分に必要だとは考へられなかつた。數學も餘り好きでは無かつた。只だ幾何は少し面白く感じた。物理學、化學、生理學などには非常な興味を持つた。動物、植物、地理などは、味の出る處まで行かなかつた。それには、教科書の惡いといふ事もあり、受持教師の惡いといふ事も大いに關係してゐた。歷史では日本外史、十八史略など、漢文では文章軌範、論語、孟子など。これらは皆な熱心に學んだ。和文の土佐日記は餘り好きでもなかつたが、ちよつと珍らしいので面白いと思つた。

日本外史や文章軌範の受持に緒方先生といふ人があつた。號を清溪と云つて、善く詩を作つた。ヤギの樣な頬髯があつたと思ふ。先生の中で一ばん年若で、一ばん生徒に好かれてゐた。幾ぶん生徒を友達扱ひにする處が、受のいゝ原因だつた。私は或る夏休みに、此の先生の處に通つて史記の列傳の講義を聞いた。唐宋八家文も少し教はつたかと思ふ。私の漢學は其の位の事に過ぎない。

論語の受持の島田先生は、薄あばたのある、小柄な、極く靜かな人だつたが、緒方先生とは違つて、大へん丁寧な言葉で我々を大人扱ひにしてゐた。私はそれをこそばいい（クスグツタイ）樣にも感じたが、又一面には、少しく愉快にも感じてゐた。例へば、こういふことがあつた。論語の中に、――（私は今、手元に論語を持つてゐないので、ウロおぼえのままで書く。少し間違つてもゐるだらうが、其の方が却つて面白いかも知れない。）――子貢、子路、冉有、曾參、公西華などいふ孔子のお弟子さん達が侍坐してゐる時、孔子が『何ぞ各々其の志を言はざる』と、彼等の意見を求める所がある。そこを島田先生が大へん力をこめて、如何にも面白さうに講義してくれられた。元氣者の子路や、氣取屋の子貢などが、それぞれ得意になつて、政治家としての大抱負を述べる、その他の連中も皆な謙遜はしながら相當大きな望み事を云ふ、然るに曾參が最後に、彈いてゐた琴を靜かにやめて、莞爾として、『私の志は大ぶん諸子のと違ひまする。即ち、暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人も連れて、溫泉にでも行つてブラブラ遊びたいと思ひます』と云つた樣な返事をしたので、孔子が『我は參に與せん』と云はれた。島田先生の講義が此の曾參のくだりに入る時、先生自身も莞爾として、『堺さんあたりの定めてお好きになりそう

た處ですが』と云つてそして拳拳服膺云々の講義に移られた。私は驚いた、そして恥かしかつた。然し嬉しくもあつた。そして何となく大人らしい自負心を感じた。但し、其の時の私に、挑發と共鳴しそうな性質が現はれてゐたらうとは考へられない。一體、私の何處をどう觀察して、島田先生はあんな事を云はれたのだらうかと、その後、幾度も思ひだして考へたりした事だつた。

孟子の白河先生は馬の嘶く様な咳拂ひをする人だつた。或る日、物理の加瀬先生の家に私が遊びに行つてゐた時、白河先生もそこに來てゐられた。加瀬先生が鶏の御馳走をすると云ふので、私と誰か今一人の少年とが命を受けて、庖刀で其の鶏の首を斬り落した。すると、それを見てゐた白河先生が六かしい顔をして、『あんた方は實に殘忍な事をするなア』と云はれた。私は先生が冗談にそう云ふのだと思つたが、直ぐに笑ひだしもしないので意外だつた。そして私が、殺すのが殘忍なら、食ふのは猶ほ殘忍だといふ意味の事を云ふと、『それぢやから君子は庖廚を遠ざくといふ事がある』と、先生は矢張り六かしい顔を續けてゐられた。此の先生の眞意は今以て私に分らない。作文の試驗の時、『雨中看插秧』といふ此の先生の出題に對し、私は大ぶん得意な一文を作つた。其の結句は今でも覺えてる「一瀾に臨んで魚を羨むは、退いて網を結ぶに如かず、家に歸つて書を讀む。」所が採點を見ると、それがヤット三十五點。そして先生は『少し奇く出來過ぎた』と云はれた。つまり剽竊と目されたのであつた。私は非常に不平だつたが、遂に辯解もしなかつた。然し後になつて考へると、或はそれが、自分に氣のつかない、自然の剽竊であつたかとも思ふ。俳句や歌の場合には、折々それに似た事があつた。けれども又、幾許も讀書をしない少年が記憶した他人の文章を、無意識の間に、其まゝ自分の物として考へ出すといふ事が有り得るだらうか。これは今でも多少不愉快な疑問として、私の心中に殘つてゐる。

赤壁の賦を講義して貰つた。西玄理といふ老先生があつた。何んでもモウ八十くらいで、頭には毛がなく、口には齒がなく、そしてその大きな顔には皺と斑點とがあつた。然し此の老先生が、『夜中に一羽の鶴が、ツルン、ゴロンと鳴いて……』などと詩的な講義の仕方をすると、私等は何とも云はれぬ様な尊とさを感じた。私は此の先生に、極く短かい十行ばかりの作文（その頃の作文は總て漢文）を出した時、其の餘りに短い故を以て叱られる事を豫期してゐた。所が、どうだらう。初から終まで全文に朱丸の圈點がついてゐた。私は一體、文章を短かくし過ぎる癖がある。それは技巧上の癖でもあらうが、根本にそう

いふ頭の鋒があるらしい。(稿料を稼ぐには餘ほど損な質だ。尤も、此の『傳』は餘り簡潔でもない)

數學の先生吉村破拵六さんは酒豪であつた。教場でも我々に酒くさい息ばかり吹きかけてゐた。あの先生の息に火をつけるとキット燃えると云はれてゐた。兎かく生徒中に數學の不得手な者が多いばかりでなく、又屢々數學無用論が唱へられたりするので、吉村先生は盛んに數學の効用を宣傳してゐたが、惜しいかな數學は測量や建築などに必要だと云ふに過ぎなかつた。

私は其の後、東京に於いて、數學は實際上の應用は別として、一般に頭を論理的に鍛錬する効果があるといふ話を聞かされた時、非常に深遠な道理に接した樣な氣持がした。若し中學校で其の深遠な道理に接してゐたなら、モット數學が好きになつてゐたかも知れない。吉村先生は或る時、私に『代言人』といふ仇名をつけた。今の辯護士の事を其の頃は『代言人』と云つた。私のおしやべりは餘ほど著るしかつたものと見える。

以上の諸先生は皆な國の士族であつた。他國から來た人の中、稻垣先生は病身でもあつたが無性な人で、椅子に腰かけたまゝ、からだを半分うしろにねぢむけて、ものうそうに黑板に字を書くといふ風で、快活な少年に好かれる筈がなかつた。從つて私は、先生の受持たる經濟學と簿記とが一層いやだつた。

前にチョット記した加瀨先生は理化學と數學とを受持つてゐたが、よく大きな、赤い表紙の、フランス語の本を教場に持つて來たりしてゐた。此の人は酒好きで、其の豪放な無邪氣な所が、私等を喜ばせてゐた。自分の設計で理化學の教室を新築させたほど、教授上には熱心だつたが、私は或る時、先生から其の實驗室に引き止められて、砂糖水にアルコールを入れたのを飲まされた事がある。私は此の人に於いて、初めて少し常規を逸した、愉快な人物に接觸したのであつた。

英語が初めて學科目にはいつた時、私等の嬉しさは喩へるに物が無かつた。先生には、大澤友輔といふ、脊のスラリとした、鼻の高い、髮の美しく縮れた、若い、氣の利いた、どうしても豐津あたりの人間と種の違ふ人が來た。初めは餘ほど暫らく、スペルリングばかりをやつた。ベー、ビー、バイ、ボー、ビユウ、バイからやりだして、イン・コム・プレ・ヘン・シ・ビ・リ・チーといふ最も長い綴りの字まで、ずいぶん面白くない事を、只だ珍らしさに釣られて、大聲で稽古した。此の先生はどういふわけか間もなく罷めて歸つたが、ズット後に新聞で其の名を見た時には、『大詐欺師』の肩書がついてゐた。

今ひとり花見先生といふのがあつた。これは豐津出身の人でズイ（The）ソン（son）イズ（is）オップ（of）といふ調子で

教へてくれた。その頃、私が母に、英語ではおかあさんの事をモーザアと云ふと話したら、母が、厭な事おやなアと答へた。

其の次に須川辰次郎といふ先生が來た。これは白皙の綺麗な、洋服の着こなしのキチンとした、立派な紳士で、慶應義塾出身だと云ふ事だつたが、英語の教へ方はホンの通り一遍で、サツパリ面白くなかつた。この人はたしか後にエライ實業家になられた筈だ。

最後に理學士松井元治郎さんが來た時、私は初めて少し本當に英語を學んだ。松井先生は純正化學が専門で、大學を出たてのホヤ／＼で、瀟洒たる青年であつた。大學の卒業證書を教場に持つて來て、笑ひながら拜む樣な眞似をして、私等に見せたりした。何しろ年は僅廿四五で七十圓からの月給を取るのだから、大變なものだつた。七十圓と云へば、どんなに安く積つても、今日の五百圓には相當する。前に話した異人館志津野は豐津の學務委員などした人だが、松井先生の來た時、一度わさわざ訪問して其の人物を鑑定した。曰く『學士も矢張り只の人間で、別だん角も生えちや居らん。』私に取つては、松井先生は化學の先生たるよりも英語の先生で、其お蔭で私は、豐津中學卒業の水準よりは、少し高い英語の力を養はれてゐた。松井先生は後に京都の高等中學の教授になられた事もあり、大阪の製實會社の技師長とか社長とかして居られた事も聞いたが、今はどうして居られるか知らない。其の弟の慶四郎さんは外務大臣まで立身されたが。

（一五）士族の子と有産者の子

中學校の諸先生の事を話して、校長の事を話さないのは少しおかしい樣だ。然し話す事がない。校長は入江淡と云つて、エライ學者だと云ふ事ではあつたが、我々生徒とは直接何の關係も無かつた。叱られた事もなければ、褒められた事もない。要するに私は、入江校長から何等の感化をも受けなかつた。

その他、私の中學生活は誠に無事だつた。只だ私は『才子』——その頃、さう云ふ言葉が流行してゐたが、——その才子の一人に數へられ、幾らか好い氣になつて『一番』で卒業した。但し同期の卒業生は僅かに十人足らずで、一番も二番も大して問題では無かつた。實際、私は勉强らしい勉强をした事もなく、學科の重荷とか、競爭の苦しさとかを感じた事は、少しも無かつた。其の點では、近年の學生などに比べて、幸福だつたと思ふ。

然し私は中學校で、初めて士族以外の人間に接觸して、少し世の中を知りはじめた。豐津の町の者は、一人も中學校には來

なかつた。豐津の者で中學校にはひるのは皆な士族であつた。豐津中學校は藩學育德館の後身として、士族の學校たるかの觀があつた。町の者や、田舍の者（農村の住民を指す士族の言葉）には、高等の教育を受ける資格が無かつた。私にはそんな風に思はれてゐた。所が實際は必ずしもさうで無かなつた。私は初め、町の者と云へば錦町の人々、田舍の者と云へば馬や牛を引いて米や薪を賣りに來る人々より外には知らなかつたが、町人の間に富豪があり、農村に地主があり資産家がある事を、漸くにして學び得た。中學校には、それらの地主、資産家、富豪の子弟が入學してゐた。そして其の少年等は、言葉や風俗に於いて、多少は士族の嘲笑を招くに足るものがあつたに係はらず、種々の點に於いて能く子族の子を凌駕し威嚇するに足るものがあつた。即ち彼等の或者は、其の粗野剛健の風に於いて、士族の子のグズ共と比べものにならなかつた。又彼等の或者は、其の俊敏な素質に於いて、遙かに子族の子の凡くらに立ち優つてゐた。更に又、彼等の或者は、其の富裕な生活から生じた氣品に於いて、貧乏たらしい士族の子を見下すに足るのであつた　或る大庄屋の息子や、或る大町人の息子などは、温和らしい貴族的の容貌や風采に於いて、貧弱なる下級士族の子等と類を異にするの感があつた　然し種々な點を差引いた所で、我々士族の子と、それら有産者の子とは、ほゞ平均する地位にあつたものと考へられる。亡びゆく階級と、勃興しつゝある階級とが、暫くそこで行き違ひに机を並べたわけである。

この對立は、大體上、通學生と寄宿生との對立として現はれてゐた。寄宿生と通學生との間に反目を生ずるといふ程ではなかつたが、自然、多少、氣風の相違があつた。つまり寄宿生は亂暴であり放縱であつた。それだけ元氣であり、活潑であつたとも云へる。或る雪の積んだ日、晝休みの事だつたらうと思ふが、寄宿生の一群が運動場に出て來て、何か頻りに騷いでゐた。私は教場の窓からそれを見降して、ツイ思ひ浮かんだまゝ『奴輩勞す！』と大きな聲で呼びかけた。それは、其の前日かに讀んだ日本外史の中の、木下藤吉が部下の者をねぎらつた時の言葉で、緒方先生がそれを面白おかしく講義したのであつた。すると、寄宿生群の間にゐた内野辰次郎といふアバレ者が、行きなり教場に飛びあがつて來て、私を引ツつかまへて運動場に引きずりだし、雪の中に押し仆して、私の目から口から耳にかけて、散々雪の玉をブツつけた。内野は大きな男でもあり、年も一つ二つ私より上なので、私は滅茶々々に成敗されたのだつた。このアバレ者が、今は豫備の陸軍中將で衆議院議員になつてゐる。

その頃、生徒の中にはまだ靴をはく者も、洋服を着る者もなかつた。上草履といふ物も全く無かつた。梅雨の頃などには、——豊津は赤土で殊に道が悪いので、——私など毎日ハダシで通つた事もある。私は元來、よく下駄の緒を切らしたり、歯を欠かしたりするので、それを父に叱られるのが辛くて、それほどならイツソ下駄なんど無くてもいゝといふ意地もあつたのだつた。そういふ野蠻な生徒等の間に、或日、突然、洋服を着て靴をはいた一人の生徒が現はれた。本人もよほど極まりわるそうにして、遠慮らしく靴をギユウ／＼鳴らせたりしてゐたが、外の生徒等は大變な囃し方で、丸で先生のような生徒だといふ事に批評が一致した。其の生徒は、私も至極心安くしてゐたのだが、椎田の町の大きな商店の息子で、錦町の新店といふ雑貨店が親類なので、そこを宿にして、通學してゐるのであつた。

私と一緒に卒業した者の中、私が今ま思ひだせるのは六人だけだが、其の中四人が士族、二人が平民だつた。士族連では、青木、生石、小石。小石榮治君は其の頃から既に頬缺の剃りあとを青くしてゐるほど大人らしい人で、いひなづけがあるとか云つて冷かされたりしてゐたが、卒業後、全く消息を聞かない。青木健彦君は小學校からの私の親友で、非常に利口な才物だつたが、九州鐵道の驛長を勤めたりして、不幸にして早く死んだ。生石久間太君も鐵道に勤めたりしてゐたが、今はどうして居るやら（生石君や青木君については、まだ外に書くべき機會があると思ふ。）平民側では大森升太君、どつしりした人物でもあり、學問もよく出來たが、後に小學校の校長をしてゐた事を聞いたきり、消息に接しない。恐らく今では、地方の有力者に成つて居るだらう。最後に杉元平二君、神崎といふ酒造家の二男だが、兵役の關係上、他家を繼いだ形になつてゐた。私はこの杉元君と二人一緒に東京に遊學した。後に色々話がある。この杉元君は今、神崎姓に復して、三井家の有力な人物になつてゐる。

ついでに杉元君の兄さんの神崎勳君（今の衆議院議員）も、其の頃、おかしい事には、私等より下の級に居た。多分これも、兵役の關係上、もと／＼中學校などには行かぬ事にしてゐた人が、急に後ればせに入校したのだらう。其の頃はまだ色々の意味から中學校に行かない人達があつた。芝尾喜多夜叉といふ人は私などより少し先輩だが、これはお父さんが偏屈な漢學者であつた爲に、中學校には來ないで『稗田の塾』にはいつてゐた。稗田の塾は有名な村山佛山の開いた、維新前からの學塾で、末松謙澄さんもそこの出身である。井伊大老の櫻田門の變を詠じた佛山の詩、落花紛々雪紛々、雪を踏み花を蹴つて伏兵

起る、白髪斬り取る大臣の首、落花紛々雪紛々」は人口に膾炙してゐた。そんな事からして、私等は何んだか其の塾の事を床しく思つてゐた。あそこの塾生は皆な銘々、米をかついで行くのだそうだとか、あそこでは皆な二食で勉强するのだそうだとか、そんな事まで何だか大へん有りがたい様に噂したりしてゐた。豐後の廣瀨淡窓の塾の事なども、折々噂に聞いてゐた。

（一六）神道、儒道、自由民權

斯様に私は、一方には佛山塾の名殘、一方にはホヤ〳〵な青年理學士と云つた風に、新舊兩面の感化を受けて育つて來た。そして思想の系統としては、儒教と、神道と、自由民權主義とを注入されてゐた。

神道と云つて、別にそれを信仰したわけでもないが、維新前後の排佛毀釋の風が大ぶんそこらに殘つてゐて、幾らかその感化を受けた。國史略の中に、木下藤吉が子僧にやられた時、僧は乞食の徒なり、學ぶに足らずと云つて飛びだしたといふ話がある。その外、國史略や皇朝史略には敬神排佛の字句が到る處にあつた。それから村上昇平といふ若い辯者が豐津に來て盛んに佛法を罵倒し、遂に錦町のお寺の坊さん達と問答をやつた事がある。私等小供連は村上崇拜で、問答の席上、村上のうしろに坐つて聲援したものだつた。然し私は其の後、その同じ寺で、大内青巒氏の、『非有非無』といふ題の、佛教演説を聞いて、ひどく感服した事もある。私の家は元と禪宗だつたそうだが、父は早く斬髪になつたの同じ様な氣持で、その頃神道になつてゐた。それで折々神主とも坊主ともつかぬホウジョウといふ者が、大きな琵琶を持つてやつて來て、神棚の前で其の琵琶を彈きながら、何かノリトの樣なものをあげてゐた。そんな譯で、私は神社に對しては、相當の崇敬心を以て禮拜したが、佛寺佛像に叩頭する事は屑よしとせぬ氣分であつた。

儒教と云つても、たか〳〵論語孟子あたりの感化なのだが、修身齊家治國平天下などいふ考へ方は、士族の子の頭には入り易いものであつた。私は自分の家の貧乏なことは善く知つてゐたが、そうかと云つて直接、衣食に不自由をさせられた事はなし、只だ學校の教科書――それは大部分、學校から貸與されたが、其中の或部分――を買ふ時、父が容易に承諾してくれなかつたり、或は其の結果、教科書なしで濟ましたりした位が、唯一の苦勞であつたのだから、自分の將來を考へるについても、衣食の計などといふ事は天から問題でなかつた。そこで、修身齊家と云ふのも固より總て道德的の意味であつて、つまり治國平天下が士人たる者の目的であつた。孝經も少し讀まされたが

「身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざる、孝の始なり、身を立て、道を行ひ、以て父母の名を擧ぐ、孝の終なり」といふ樣な事が、餘ほど實際的の指導になつた樣に思ふ。そこで中學校を卒業した時の私の希望は、政治家になるか、學者になるかであつた。そして學者と政治家とが、そんなに違つたものでなく考へられてゐた。嶋田先生は折角、曾參を以て私に擬してくれたけれども、私は寧ろ子貢子路であつた。子貢ほどの自惚や氣取は無かつたらうが、子路の率直と正直とを學ぶ樣な氣分があつたかと思ふ。

それから自由民權の思想。これはどういふ順序で私の頭の中にはいつて來たか善く分らない。長兄が東京にゐた時、朝野新聞を送つてくれたのは、蓋し可なりの感化力であつたらうと思ふ。福澤諭吉さんの物も、前記の世界國盡し以外に、何を讀んだか記憶がない。中學校の先生の中には、この方面で智識を與へてくれた人も、感化を與へてくれた人もない。只、兄（本吉の兄）が其の方面に於ける唯一の指導者であつた。が、それとても大した事はない。福岡日々新聞を何時頃から讀んだか、どうもハッキリした記憶がないが、何處かで多少は必ず讀んでゐたに相違ない。兎にかく私は當時、漠然ながら自由民權主義の追隨者であつた。同級の（前記の）青木などと演說會や討論會の眞似事をやつた時、「一院制と二院制との可否」といふ題目で論議した事を覺えてゐる。ついでに、兄などの時代には、中學校で演說會をやらせてゐたのだが、私等の時にはヤメになつてゐた。それだけ學校が進步して、保守的になつてゐた。それで私等は御內家の空部屋を借りて、そんな會合をやつてゐた。何しろ國會の一院制と二院制との可否を討論するほどの少年共だから、自由黨の運動などについて、大體の智識は持つてゐたに相違ない。板垣退助さんが刺された時、板垣死すとも自由は死せずと叫んだ事など、少年の心を刺激せずには置かない筈である。それで當時私等が崇拜の中心とした先輩は、征矢野半彌さんであつた。征矢野さんは育德館出身の秀才として有名であつたが、亦た國會開設請願運動の率先者として有名であつた。私はその頃まだ、直接、征矢野さんに會つた事は無かつたが、豐前に於ける自由民權の代表者として、常に其の德風を想望してゐた。

斯くて私の儒教から來た政治家志願は、自由民權運動と一致する事になり、政治家となる事は即ち國會議員となる事だとも考へられてゐた。

（一七）東京遊學

中學校の卒業生は大抵皆な東京に遊學することを望んでゐた。舊藩主小笠原家の補助と、舊藩出身先輩の寄附とで設立された育英會といふ團體があつて、官立學校への入學志願者は、多くばそこの貸費生にされてゐた。國の先輩には、小澤武雄、奧保鞏、小川又次、その外、陸軍の軍人として出世してゐる人が多かつたので、士官學校志願が大いに奬勵されてゐた。私等の同期卒業生の中で、青木、生石の二君は初め其の志願で上京した。杉本君と私とは、内々で少し軍人志願を輕蔑して、大學を志願した。それは一つには、二人ともチビで、第一、體格が軍人向でなかつたのに依るかも知れない。

是より先、その前年、私は椎田の中村といふ家から養子に貰はれた。後で聞けば、豐津中學校第一等の秀才を選拔したのだつたさうだ！。それで私は、忽ちにして中村利彦と成り、其の養家の便宜に依つて、安々と東京に遊學する事が出來た。育英會の貸費生となるにしても、少々は其の外に足しが入るので、堺家の財政では迚もそれに堪へられない筈であつた。

斯くて私の前途は苦もなく自然に切り開かれた。運命は常に私の爲に笑つてゐるかの樣な心持がせぬでも無かつた。兎に角私は意氣揚々として故鄕を出た。時に明治十九年春四月。十七歳。」

（前號の寫眞は其の年の夏寫したもの）

× × × ×

以上、私の豐津時代をずいぶん亂雜に、前後の次第もハツキりさせずに書きなぐつた。それは記憶が正確でないからでもあるが、又必ずしも精密に年月を追ふ必要はあるまいと考へたからでもある。然し行燈の事を書いて置いて、それの進化を書き落したなどは本當でない。行燈の第一進化は、種油の皿が石油のカンテラに取換へられた點に在つた。光度は大いに加はつたけれども、行燈としての外形は元の儘であつた。それから第二の進化として釣ランプが來た。これで燈火の外形が全く變化した。そして其の釣ランプのブリキの笠の下に、三分心の小さい黄色い火のとぼれてゐるのを、何といふ明るさだらうと感嘆したのであつた。

ランプと牛肉と、どちらが早かつたか分らないが、兎にかく私は豐津で牛肉の味を知つてゐた。凉ケ原に屠牛所が作られてゐた。中學校の晝休みに、そこの屠殺を見に行つて、目かくしをされた牛が、額の眞正面を鐵の槌で打ちおろされ、ゴトゴトと足踏みをしてドタリと仆れたのを見て、非常に厭な氣持がしたが、それでも矢張り肉はうまかつた。

故郷を辭す

室生犀星

家のものが留守なんで一人で風呂の水汲をして、火を焚きつけいい梅鹽にからだに温かさを感じた。そして座敷に坐り込んで熱い茶を一杯飲んだが、庭さきの空を染める赤蜻蛉の群をながめながら常にない靜かさを感じた。空氣がよいので口あたりでも埃が見へないくらゐである。となりの家の塀ごしに拓榴が色づいてゐる。まだ口を開けてゐない。この間まで花が着いてゐたのにと物珍らしげな眼をあげてゐると、灰ばんだいろをした小鳥が一羽、その茂りの枝を移りながら動いてゐる。わたしは茫然とそれをながめてゐるうちに、穏やかな日ざしがだんだんとなり家のひさしへ移つてゆくのに氣づいた。

門前の川べりへ出て見ても、毎日眺めてゐる山々の景色にも痩せた皺や襞をもの佗びしく眺めた。怒つたあとのやうな疲れが山肌に見え、とげとげしさが沈んで見えた。川の瀬も澄んで鮎屋が昨日もつて來ての話しでは、もう下流でないとゐないひと言ひ、このあたりにゐるのは若々しく寂びてゐないから味さは味いが、かぞへる程しかゐないと言つた。九月の終りころから鮎は寂びたが、十月になつてから一さうさびしく寂びてしまつた。この夏は門の前の瀬に網を打つ漁師を呼んで、毎日のやうに鮎を食膳に上したものであつた。春淺いころまだ一寸くらゐの鮎をながめてゐたわたしは

夏深くなるごとにかれらの育つて行くのが眼に見えた。美しい柔らかい肌をしてゐたかれらが、もう卵を胎んで尾の方から黄ろくなりかけてゆくのや、荒い瀬なみを拔けきることのできなくなつてゐるのや、流れを下るだけで上ることのないのを、何かやはり人情の中のものにくらべながら思ひ出したのであつた。

季節はもう二度の秋をわたしに送らせてゐる。わたしは田舍にあいてしまつたが、さて此の田舍をあとにして東京へ行つても又田舍を慕ふやうになるだらうと先き先きのことを考へ、やはりもうしばらくゐようと思つてゐる。田舍では古い舊友がたづねて來たり、その舊友が昔と變つて人なつこさうに話しこんでゐるありさまをみると、わたしの方が餘程冷淡になつてゐることに氣づいた。舊友はそのころの友だちのだれかれの暮しや、その立身出世のことを話しながら幼時の忘れがたい昔語りに熱心ではあるが、わたしは自分のことも人事のやうにきき流す張り合ひのない聞手になるくらゐであつた。そしてしまひにはそんなむかしの事などはどうでもよいといふ氣になり、默つて返事もいいかげんにして了ふのであつた。舊友はそんなことに氣づかない。たまに訪れた故郷の有樣や移變や人情について縷々として盡きるところがなかつた。わたしはさういふ人情に一と月に一ぺんくらゐ出合つては、しまひには煩さく物悲しくなるのだつた。そればかりではなく、さういふ人々と一しよに食事なぞしなければならない破目になると、わたしはやはりめぐり合ふた舊友のために、不幸な半夜を送らねばならない自身のことを、賴りなく又た限りなく厭はしく感じた。

故郷といふものは一人でやつて來て、こつそりと夜の間か晝の間にぬけ出てかへるところであつた。そして訪ねたいとか逢ひたいとか考へてゐる人に、ふいに會へばともかく、さうでなかつたら實にさりげなく見過すべきであつたらう。わたしのこれまでの經驗ではいつも二日か三日くらい逗留してゐて、そしてぬけて出るのであつたが、かうして落ちついてゐるうちに古い人情のこだはりが、何の刺戟や新しみなくくされかかつて、妙にくろずんだ柿のしぶのやうに

わたしの心を染めてくるのに、物憂いながらわたしは氣づいてゐた。しかしわたしはそれさへ面白いこととして暮してきたのであるが、このごろではその柿のしぶがつやをふくんで、消すこともできずにくすんでしまつたことが、何やら氣がかりになるのだつた。むかし對手にしてくれなかつた人々までがいくらか表面だけらくに見えるわたしの暮しを訪ねてくるのにも、輕薄な人世のことが窺はれその氣もちは解りながらも、さういふ人心には悄せくも物悲しさをおぼはずにはゐられなかつた。わたしならそんなことはしなかつたらうと思はれるほど、さういふ人をばわたしの向ふに坐つて扱てさまざまな物語りをしながらそれにも拘はらずわたしを悲しくさせた。かれらの情熱は凡て一しよに手を拍たねばならぬ強ひた情熱の種類で、事古りたさもしいむかしがたりである。わたしはそれに聞きあきた。そのためにもどれだけわたしが一人で思ひふけらうとしてゐる昔の景色や人情を、その故にめんどうくさくなつて思ひふけることができなかつたかも知れないのである。

「むかしの友だちなんてものは停車場で會つてすぐ別れた程度のものがいいではないんですか、つまりはつとしてゐるうちにすぐにわかれてしまふのが本統らしくていいですね。」

わたしはいつ日から言つてみたが、對手の人はそれでは呆氣ない、人間はそんな風な考へをもつやうになつてはならぬといふふうに、自らをいましめるやうに舊友は言つた。だからわたしはしかたなしに話の通じないのを幸ひにして默つてしまつた。

このごろ殊に國へかへつてから、わたしにはわたし自身の好みといふものに或る偏屈を感じ出して、偏屈な人間はその偏屈であるためになほかつ偏屈にならなければならないことに、その意識を强めることが少[illegible]くない氣がし出した。自分は孤獨だからと言つてその殻の中におさまりかへつてゐるのは、さくろが熟さず割れないで腐つてしまふやう

なものだと思へた。わたしもその中の一人で、文壇人とは交渉をもたずそれに自らも遠ざかり、そして少々偏屈であつたが、そんなことの下らなさがつくづく思はれ出した。他人とつきあふことと、それが同じい仕事をしてゐる人々の場合では、あんなに退屈な、むかしばなしの友だちよりどれだけ增しだらうと思へた。すこしの心のこだはりなしに平氣で同じい仕事をしてゐる人々と話をするのは、へんくつ故に無理に孤獨の型にはまり込んでゐるよりどれだけいいか分らなかつた。へんくつそのものもそれが餘り永い間持ち合してゐたら、しまひにはそのまま枯木の蔓のやうに曲りなりに固まり、何のおもしろみも無くなるだらうと思へた。と言つてわたしが田舍にゐて文壇のことを思慕するのではない、これまで餘りしばしば意識しすぎて孤獨と偏屈だつたことに氣づき、そしてさういふ考へには自分乍ら贊成できないものがある。きまりわるい感じさへするとさう考へたからであつた。人間の中で一番わるい見にくいものがあつたら、それは「見え透いた」ことを平氣で遣つたり故意に遣つたりする感情の人々のことだらう。ほんの少々でも「見え透いた」感じのするのはまだぬかつた一點をみるやうでいいものだが、一瞥の後にすぐくる「見え透いた」ものは一番わたしにはきらひでもあり不愉快であつた。その見え透いた「孤獨」や「へんくつ」がやつとわたしには忌々しい古い日記をひつぺかすやうに過去の雲や霧の中に見えてきて、その根ざすところに不贊成をしたのだつた。

自體孤獨などといふものはいつも一人でやつて來て、またいつの間にか一人でさういふ心をかたちづくるものだつたらしく、わたしは意識しないでぼかんとしてゐる時間の己れを割合に好んでゐた。人好きしないからとか自分の性分は人には不向きだとかいふのは、その人がやはり孤獨といふ熟字を何となく勉强してゐるやうであつた。勉强はわるくはないが、そのために「偏屈」の「人目知り」になるのは、わたしにはだんだん厭はれもした。自分では止めたいと思つた。當然しづかに話をできる素質をもちながら、わさとその人生の外がわに僻見してゐるのは耐らなかつた。なん

でも平氣の平座でひと中へ家にゐると同じい心がまへで出られぬものかと思つた。おそらく枯淡とか枯古とかいふ言葉はさういふ意味のものを言ふのだらう。ずるい人間のしあしあと人中を歩いてゐるのと、心坦のきたえのきいたために平氣で談笑してゐるのとは、やや一致しないではないが、ずるい人間のそのしあしあはすぐにぼろを出してしまふし、後の者は出るにもぼろがないから對ふ人はその美しい枯淡をかんじるにちがひなからう。山沼に住んでゐて俗外世間にふれない人間が平氣で何んでも考へてゐることを言ふのも、やはりわたしの言ふところの境にあるものだらうと思つた。そのかはり同じ山間にゐるものでも喋れないものは始めから一言も云へずに口籠つてしまふ、つまりその二人の美の微妙さは誰の中でもあるが、それらはやがて同じ枯淡のあぢはひを含んでゐるに違ひないと思はれた。

この間わたしは閑暇のあるのにまかせ、或る川べりの上流にある川料理屋へ行つて友だちと昼食をたべた。そこは小さい山のふもとと麻の川といふ流れとに挾まれた風雅な川料理店であつた。泉滴ところどころに起り、配石はみな青い苔につつまれてその苔の匂がした。そして庭には離れが四つくらゐあつて客と客との話しごゑがやつと樹の間に聽えてくるくらいであつた。秋のことだから落葉が散らばつていることは言ふまでもない。とにかくわたしと友だちとは離れの中で川魚で飯をたべてゐた。そのとき突然に苔の上に落ちたものがあつた。見ると青い野梨の實で、尻肥りにいがんだかたちをしてゐて、まんまるい梨ばかり見てゐたわたしどもには、先づそれが梨だか何だか分りかねるやうな氣がした。

「こんな變な梨をみたことがないよ、まるでゆがんでゐる。」

わたしは泥をつけたのを拾ひ上げ、そのかたちを珍らしがつた。南蠻瓶型などといふ水指によく似てゐた。

「野木の梨にはよくそんな奴があるものだよ。とにかく、いいかたちをしてゐるね。」

友だちもそれを珍らしがりわたしは床の間の板じきに据えた。そして床の間に或る野趣とも許すべき調和をさへかんじたのだつた。わたしだちはそこで撒儆をしまつてから、十五六本くらいある松の木のある入口まで送つて出てきた女とわかれ、落着いたいい料理屋だなと言ひ合つた。が、途々どうしても梨の實の尻ふとりにゆがんだ形が忘られなかつた。あれも手入れをしないで孤獨でゐたものだから歪んだなりに固くて歯も立たないで、そしてとうたう軸がくされて落ちてしまつたのだらうと思つた。地べたに落ちた柔らかくてふしぎに肉體的な音だけを考へても、もの言へぬ寂寞がこもつてゐるやうで、ああいふ音を一年に一度が、二年に一度くらゐしか聞くことのないわたしには、全く幼稚なまでに深い感興があつた。しかも彼の形といへない奇體な形、孤獨でゆがんでしまつたのだらうかと思ふと、わたしは何か知ら、ゆがんだ、ゆがんだ、と左う言つてそこらに呀を返す大際に呼んで見たいやうな氣がした。しかも對手はどこか病的な感じのする梨であつた。なし、ありのみ、わたしは口のうちでかうつぶやいて見て、これは木の實のなかのよほどの陰氣ものだなと思つた。

その日から一週間ほどあとに、卯辰山といふ山麓にある古い料理屋の、いまは癈業してゐる庭を見に行つた。自分の好きな料理人がゐないのでそれきり料理屋の方を癈め、好きな茶を飲んで遊んでゐるそこの老人は、一見老師ではあるが、きかぬ氣立の、澁い、むつりした茶人であつた。庭はひと口に言へば石と苔との庭であつた。一切が茶庭の風色で、しき石のまはりには深々と密着した百年の苔が、大方、わたしどもが行くために打水したのであらう、水氣をふくんで淸らしげに見えた。燈籠も古い石佛を刻んだのが隅々の目立たぬところにあり、立木は松ばかりであつた。どもまで行つても石と苔と、あるひは七八本の篠竹のそよぐくらゐのものであつた。

主人は狹い茶室の中から聲をかけた。そして黒い襟のついた四十からみの、まだ、ほのかに明るい色艶をもつた女房

らしい人が、奥庭へわたしだちを呼びに來た。主人は七十いくつかであるのにと、わたしは或る注意を惹かされた。その人がしき石づたひに行くうしろ姿が老ひてはゐるが、練つた美しさがあつた。茶屋へ行く側のそとがわに、筧の雨垂れ落ちに黒い玉石が十五六粒と、そこから一尺ばかり離れたところに五つの小石を積んで飾つてあるのに二三本の竹がむら立つてゐるのが、目を惹いてならなかつた。なんでもないのにさういふ雨垂れ落ちを古くとり統べた心が、細かいところはどこまでも微かく行つた茶庭の精神を、しぶさ以上のしぶさで感じた。

「木槿が庭にあるものですから大へんよろこんでゐます。」

さういふ主人は、かくしやくたる老人であつた。その顏色に古備前の强さをかんじたくらゐだつた。床の間の竹筒には二花の白い木槿にわれもかうの花をツン拔かして生けてあつた。わたしは茶の飲み方を知らぬ故をもつて辭退したが、かまはないと言つて一服を立ててくれた。主人はたぎつてゐる釜の湯へ新らしい一杯の杓の清水を入れ、その杓で湯の中をしづかに廻して、そして茶器へその湯を移した。お茶はうまかつた。主人はやはり七十で、そして朝夕庭へ水をまくことと、茶を入れることとで日をくらしてゐると言つた。うすぐらゐ茶室の床の間の横の明りとりの板に、古い猫が一疋、香箱をつくつてゐたが、だんだん時がうつつてからやつと室のくらさに慣れてから、それが描いた猫であることが分つた。

そのうちに窓から入日が松の枝越しにこぼれて來て、盆のやうにまんまるく古藤表の夏しきものの上にあたつた。十月であるに座ぶとんを出さない古藤の上で、わたしは足にしびれを切らした。茶道また難いかなとさう思つた。が久しぶりに飲んだ一服の茶の味は永い間氣のせいもあらうが氣もちをさつぱりとさせた。若いみそらであるために、なほ、こんな暮しに目を驚かせることが嬉しかつた。庭にも夕日がちらついてゐる。――しかも燈籠にからんだ美女かつら

の赤い實が一しほ赤く冴え、しんかんと落ちつき拂つて見えた。これだけの廣さの庭を朝夕手入れをするとなると、二時間くらゐの時間が朝夕に入るだらう。それに茶の道具とか、生け花とか、いろいろな時間があつてこの老人は一日たつぷりした暮しだなと思つた。決してひまではないと思へたが、しかしその心もちは一人きりだらうと思ふと、こんな暮をする氣になれぬが、あこがれは充分もつてゐるわたしには暫く心を沈靜にさへした。

この茶人の庭には石印の形をした銅の支那の燈籠があつた。あたまは唐獅子の銅作りであつた。が、或る朝その唐獅子の頭が失くなつてゐた。あとで附近の乞食が持つて行つて獅子を砕いて鑄物屋に賣り飛ばしたことが分つたので、老人はその砕けたのを八方へ手分けをして集めた。乞食は一ところにまとめずに、三ケ所ばかりの鑄物屋へ賣つてあつた。老人はこれを先きと同じい石印の形に鑄なほさせ、切角緑青を吹いた古銅の古淡さを慕つてゐたさうである

かへりに玄關さきの石の上に立つたときに、さつきの女房らしい老艶な女のことが、船板づくりの腰板のある戸口で、しとやかに一揖をした。わたしは世に拗ねた暮しの中にも、その友を呼ぶ魂をさりげなく見過した。山を下りてから或る茶店で此の茶人が市中に若い女を圍ふてゐることなどを聞いて、何となく茶道は色道に通ずといふ氣がしきりに感じられた。

けさ起きてみると門前の流れが肌身に泌みてうそ寒く　通り過ぎの霰が落葉とともに板塀の際に吹き上せられてあつた。山はすつかり白くなつてゐる。――やはり東京へかへることにしやう、とさう昨夜も物うげに音を立てる雨戸のきしみを聞きながらゐた心が、日をさへぎる山の姿や寒流のひびきを見たときに何氣なくさう呟やいた。それにわたしが

故郷にかへつてからもう二度目の冬になる——毎日二階にこもりながら訪ふ人もない冬の日の侘びしさは、いくら一人でゐることの好きなわたしにも、一寸耐らない氣もちであつた。こちらが降れば東京が晴れてゐる、東京がふればこちらが晴れる、さういふ裏表の氣候さへ目に見えて來て、色紙に鋏して造られたやうな東京の町なみの姿が、程よい柔らかい冬の日の表にてらされてゐるのが思ひ出され、そこをぶらぶら用なしの姿で歩くのもいいなと子供のやうに考へられた。新聞や知人の話にも地震の性質がよくなりかけてゐることも安心のたねであり、活動寫眞を見られるのも樂しみの一つであつた。この田舍では西洋物專屬のものは一つきりで、それさへ晝間は客がすくなかつた。黑いカーテンを引くかわりに墨汁を硝子戸に塗りこくつて、その塗りそこねた隙間から人家の屋根石や日かげが透いて見えたりした。寫眞はたいがい東京で一度見たものばかりだつたが、その寫眞を半分以上も見てゐないと一度見たことがあるかないかさへ解らないほど、記憶力がなくなつてゐるのに自分ながら驚いたりした。が、霰や雪の音をききながら寒い小屋がけの二階に唯一きり坐つてゐると、わたしは用なしで、何も世間の事ができなくて仕方なしに左うやつて、時間をつぶしてゐるやうに思はれた。興味中心の通俗小說もかけなければ教師や飜譯や編輯などの仕事もできないわたしは、あひもかはらず左ういふとぼけた時間つぶしの外何もすることがなかつた。求めて人を訪ねたことは一年間一度もなかつた。凝乎と見つめてゐると山の上に自分の影がうつつてゐるやうな暮し方であつた。

町で知り合ひにあふと、まだゐらしつたんですかと言はれた。よくこんなところに辛抱してゐられますねとさもわたしを氣の毒がつて言ふ人もあつた。東京へかへる人を見送つて行つても東京へかへりたく思はなくなつたのが、このごろになつて窓をあけて荒涼な土手の上に荷車のひびきを耳にしただけでも寂しくなつたのはどうしたものであらう、ひよつとすると少し話しがしたくなつたのかなとも思へた。自分自身とは飽きるくらゐに話を仕合つたが、對手がほしく

なつたのではないか？さう思つても見たりした。

　震災當時こちらにかへつてゐた家族や知合ひが、みんな引き上げてしまつて、殆ど殘つてゐるものはわたしが最後の一人であらう、東京の子供が土地の小學校へ出るときまつてものができるさうだつた。そしてどの親達もこんなところで子供が教育ができるものかと言つて歸京して行つたが、その親の心もちもおぼろげながら解るやうな氣がした。そんなに異ふかなと考へ込んだりしたが、わたし自身では田舍は空想のちからを減らしてゆくことは實際であつた。これが肉體的にも非性欲的になるやうだつた。ただ自分のからだを大切にしすぎるやうなところが田舍へきてから甚だしくなつた。二週間書かないでゐると百五十目殖え、十日ぶつ通しで書くと百五十目減つた。ぶらぶら遊んでゐて三百五十目にふえたりした。人がよく頭をつかふと疲れるでせうねといふが、わたしは大してそんなことに氣をつかはなかつたが、このごろになつて鮮しく自分のからだを試驗してみて、結局、書かないでゐると肥ることが分つた。雜文六年、わたしは自分のからだをだいぶ虐待したことがやつと此頃になつて解つた。わたしに取つては一日三食後のビタミンAの服用や、同じく三回の飲料であるポリタミンを用ゐるよりも、やはり悠然と怠けてゐることがからだによいらしかつた。けれども癖づいたこれらの藥品と離れることができなかつた。これらの藥品にもたよつて見ることは百萬の知己よりも大切で、信じることができるやうな氣がした。この世のあらゆる藥品に手頼つてみることが、間もなく藥品を用ゐない人と同等の健康さにまで辿る道のりにすぎないわたしの健康は、恐らく後々までもつづくだらう、何となく孤りでゐたがる人間はいつも不健康だとも言へるのだ。それゆゑにかれはいつも孤りでゐるのではないか？——。

　この間海岸へ行つたときに、そこの砂丘の下の松林の中にいまから十五年も前に一人で母親と暮してゐた男が、ただそこの與小屋の中で達者にくらしてゐるのを見て、當り前のことではあるが愕然とした。かれは實の母親と夫婦のやう

な暮しをしてゐたのだつた。その十五年あとも同じい姿をして、暗い爐端からのつそりと立つて居幸を吊してある檐の下へ出て、

「やあ、――。」

と言つた。

町から四五町隔れてゐて少しばかりの芋畑と、松露掻きで渡世をしてゐるらしいのだつたが、むかしのやうに黒猫までが、爐火の冴える暗い家内にうづくまつてゐた。かれは鯰や鮒を川へ釣りに出たりするほか、めつたに町へも出なかつた。

「こちらに無線電信もかゝつたりして賑やかなことでございます。」

かれは左う言つてお世辭笑ひをした。なるほど、砂丘の上には電信局が立つて高いマストから縦横に電線がひかれてあつた。それが海風に鳴つてゐた。わたしがこの海岸にゐたところから見ると、風物はよほど文明くさいところができた。道路や電車も通つてゐたが併し此の松林の中の家は依然として暗悒な姿をしてゐた。かれの母親はなくなつて今は一人暮しらしかつた。なりの高いかれがこんな松林の中で後の餘生を誰とも交渉なしに生きてゆくことを考へると、さういふことに馴れてゐることがかれの孤獨を不死身にしてゐるのだなと思つた

こちらへ來てから小さな庭をつくらうかとも考へて見たが、そのうち、いつの間にか石手洗ひを置き、芭蕉を植え、とくさを石のまはりに植えたりした。これはわたしの病ひらしかつた。人間は自然風物を愛するものであるか、もう一

度それを自分の所有の中で愛したいものであるらしかつた。自分のものとしての池や樹木にまた別な、他山の石でない石を愛するものである。も一つ言へば自然の眞似をしてみたい子供らしい考へもあるのであらう、自分は自分だけの世界で小さな自然をいつくしむ感情、自分で自分の心を配して慈しんでみたいのも自然の風物であらう、何も荒涼な山河の風景のみが、絶品だと言へない。わたしはこんな悒せき心持を風流とか云ふものでなく、もつと机上のものとして考へたいやうな氣がするのである。机上によい硯や硯屏や凝つたちろりを置く心もちにも近いのである。庭つくりはこせこせした氣もちである。頭がいたむ仕事だ。人は却つて庭などをいぢくつてゐる人間はさぞさつぱりした仕事のやうに言ふが、實際は決して然うではない、絶えずあたまがつかはれて疲れてくるものである。庭へ出てゐる間はわたしなど何か機嫌がわるいやうに思はれてゐる。生きた草木を心のきままに配しやうとしたりするのは、當然こちらも生きてゐるせいで、大きな地面を對手の仕事であるために思ひにまかせぬ疲れを感じる。一枚の原稿に心血をそそぐ人はあらう、それと庭つくりと同じい心もちだといふこともできるのだ。庭といふものは荒ければ荒いなりに又た細ければ細かくえぐつて置くべきであつた。石庭などはやはり一草の悋なくしてそれの味はひを出すべきであらう。

兼六公園内の成巽閣の庭をこの間見たが、後藤雄次郎作の佛を刻んだ六角の石燈籠の姿が大へんに好かつた。古さといひ、胴の瘠せたところ、石佛の彫りなども素的であつた。後藤雄次郎は鑄金家であるが石彫りはだめだらうと言はれたので、かれは即座に引受けた。何代かの舊藩時代のものである。手洗ひも美事であつた。その下を小さい流れが這つてゐて、茶室の深い庇の下へ流れを引き、雨戸を閉めても冬の夜にもその細流の姿が眺められるやうになつてゐる。わたしはさういふ細かい夜にも庭のおもかげをつたへた庭つくりの心が、懷しく思つた。庭は一草一木の奇をつくしてあつたが、それよりも一叢のとくさが流れの上手に、蒼古として叢生してゐるのが嬉しかつた。そのとくさの一とむれの

蒼さは木枯れの庭をしつかりと調子を高めてゐた。細流には黑のあぶら石がならべられ、水は音もなく落葉の下からながれてゐた。

廊下づたひの石手洗の水の捌け口に、受け石三つくらゐ盥形の砂利穴になつてゐるところに、鬼歯朶の葉が二枚、重い朝露をふくんで垂れてゐたのに感心した。歯朶はどうかすると野卑でつかはぬものであるが、思ひ切つて垂れたこの二枚の葉の美くしさは稀れに見るところだつた。そこにある役石の上に小石三つを載せてあるのも、何とも言へないしやれた面白みであつた。役石の嚴格な氣もちを柔らげたものであつた。

わたしは既う一度雨戸の内側へながれる流れを見たかつたのであるが、案内する人が急がしたので割愛してそとへ出てからも、冬の夜にその流れを障子一重で感じる氣もちはまた別だんであらうと思へた。兼六公園は今は廢れかゝつてゐる。手入れの行きとゞかないためと俗人の遊びにまかしてあるため、苔や流れに汚ないものが引つかゝつて目さはりであつた。しかし折柄の霰が一と存りつゞいたので、曲水のほとりの笹の葉のあるあたりに、白々(しら〴〵)とした冬の姿がよこたはつて好ましかつた。わたしは池に望んだ茶店でお茶をのんでゐるうちに、ふと浮んだのは成巽閣も兼六公園も何となく古九谷の感じだと思へた。古び侘びてもどこかに美しい榮えがあつた、備前や伊賀やしがらきではない、また、しのやはぎのやうな一と色の寂しさではない、全く古九谷の感じであつた。それさへ、いまは吉田屋あたりの悪いものになりさうに思ふのは、強ちわたし一人ではなからう、くだらない木の燈籠や野暴な棚などを取り廻はしたあたりや、ほしいまゝに廣げた道路などもそんな必要もないのにさうこしらへてある。名園の撥れてゆくのが目のあたりに錯落として背ある如く感じた。今日の加賀一面の九谷といふものゝ墮落して天下に悪名をながしてゐるのも、みな名園が古九谷から吉田屋ものになつてゐる證據のやうに思へた。金と赤繪のいやらしい庄三まがひの九谷を市中の店舗にながめるご

とに、わたしはむしろ物憂い厭嫌に似た氣もちにさへなつた。

しかし何と言つても兼六公園と別れるのは、わたしが故郷に一年もゐる間に一番深く馴染んでゐるだけ心は惹かれがちであつた。用なしのわたしは何かのついでには此の公園に來て、泉滴の音を聴いたり茶店に坐つたりしてゐたのだつたが、いま此處を去ると思ふと一さう沁々した氣持もちになつた。わたしが噴水のほとりの松の老ひ木が繁つたあたりに出たとき、霰はまた一と頻り走つて青い苔の上に點々たる時ならぬ梅花を散らした。この地方の苔の美しさは四季を通じて冬の初めが一番色が冴え、そして雪の下敷になつて萠えてゐた。町によくある築地の石垣、または崖や屋根の上の苔など、雪のはだらなかに髣乎して鮮苔の色を深くした。いま、わたしの散歩前の松の根本から一面の苔が烈しい寒さにも劣らずに苔を燃やしてゐる。冬でなければ見られぬ鮮やかな色であつた。

町をつゝんだ木はすつかり裸になり、ところどころの庭のある家々には、小盃の繪三島のやうな澁い立木と落葉とにうづもれてゐる。十一月になると庭を掃かうとしない町の人々は、しぐれゝ霰とに色の變りかけた柿色の庭々を荒れたまゝうつちやつて置いてあつた。落葉を叩くそれらの雨やあられの音は、俳句の題の身に沁むにはすこし遲いやうではあるが、全く身に沁みる風景の數々であつた。わたしは柑子の黄ろくなつた庭さきや、茶の花が白く覗いてゐる玄關先き、または累々として實だけ殘つた柿の木のある畑地などを見返りながら、寂しいうそ寒い散歩をつゞけてゐるうちに、幾くたびとなくくさめをするために外套の袖から手を出したりした。ただ一切が心の底へぞつくりと應へる風色である。その木の姿なぞ肌身に映つてくるやうな氣がした。濡れた痩せほそれた枯木の姿の、好ましい立ちすくんだ枝々が心に觸つてくる……。

家へ歸ると門の前に川漁師が二人、川岸づたいに歩いてくるわたしの姿を見て、防寒帽を眼深にかぶつたまま挨拶を

した。見ると一人の男は一疋の大鮭を下げてゐる。それが光つて見える、――前の川で今漁れたのだと言つて海苔のやうな濃い蒼い脊中をしてゐる鮭を玄關の石の上に置いた。女の太腿くらゐある腹に朝燒けのやうな紅みが走つてゐて、大きなあぎとがばつくりと動いた。眼はまだ活きてゐて美しかつた。わたしはその蒼い脊中に矢羽のやうにつツ立つてゐるひれに指をふれた。腹がふくれてゐるところから見るとめすらしかつた。めすの鮭は卵をうみつけるときに自分の頭で、川底の砂利を二尺四方くらゐ穴を掘るさうである。どうかすると、さういふ穴を三つも四つも見つけることがあつて、その中に鮭がじつと泳ぎ澄んでゐるさうであつた。何だか物凄く立派な畫布がわたしの心を惹いた。漁師が去つてましつてからわたしは永い間この美事な魚を感心してながめた。腹の中に二たすぢのすぢ子がうすい袋におさめられ、柘榴のやうに透明な紅い色をたたへてゐた。口の中へ入れると花火のやうにつぶれた不思議な液體があふれた。むかしのわたしならルビーを食ふ人とかいふ題で、何かしやれた一篇の詩をかいたらうにと苦笑した。

その晩ひとり二階で寢てゐながら川の瀨の音を聞いてゐると、石垣のきわの深みから今ごろこつそりと上流へのぼつてゆく河の王者の姿を目にえがいた。なんだかわたしの耳もとを忍んでゆく鮭の泳ぐありさまが、瀨なみの荒いところに身をかわすごとに、れいの美しい太腿くらゐあるからだを光らせるのが目に見えた。捕れるとすぐ川原の石で頭を五つ六つやつつけるんですが、それでも中々弱りません。こいつの尾でからだを叩かれたら十日くらゐの痣のやうな赤い痕が殘つてとれませんと漁師が言つてゐたことを思ひ出したが、なぜか彼の美しいからだをいぢめすぎるやうで可哀さうな氣がした。

門前の川原にこがらしといふ石があつた。黒い肌地にナイフで切れ目をきざみ込んだやうな、岩壁の一片のやうな石だつたが、庭に用ゐられるので珍重がられた。打水をするとその切れ目に水が沁み込んで肌が乾いてもそこだけ濕つたすぢを殘してゐる、――わたしはそのこがらしを砂利すくひに賴んで庭へはこばせ、つくばいの中石に用ひたりしたが打水をしなくともすぢ目がにうのやうに深く割れ込んでゐて面白かつた。それから能登石につくばいを刻ませたりした。とにかくわたしの小さい庭は竹のやうな芦の穗の出る根元に、一基のつくばいを置く程度の、極めてささやかな子供らしい作りでつくられたが、門前の芭蕉が破れてから近隣の落葉が吹き溜つたりして、掃除に骨が折れた。それに川原の上手に光る國境山脈の雪が妙にわたしを威嚇してならなかつた。庭へ出るごとに雪で塗られた山々がずつと近づいて見え、嚴しい冬を眼のあたりに誘ひ脅かした。自分の住んでゐる市街を十五倍にしたものが東京だつた。東京の一區がわたしの町の人戶であつた。そんなつまらないことを能く思ひ出した。さういふわたしの幼稚な考へはともすると十年くらゐ都に隔れてゐたやうな思ひをさせ、そして今更東京に自分の住むところがあらうなどと思はれた。

「もうおかへりださうですね。」

家主の奥さんがどこで聞いてきたか、芭蕉を束ねてゐるわたしに聲をかけた。破れた芭蕉はきれぎれに裂け、芭蕉破れて幽に雨をきく夜かなの句が思ひ出されるほどだつた。水氣の多い葉は冷たかつた。

「ええ、もう一年も居たもんですから、そろそろかへらうかと思つてゐるんです。」

奥さんはわたしが來て植えたものばかりの庭をながめて、「植木だの石だのはどうなさいますの。お持ちなさいますか。」さう言つて唐棕梠の葉をなでて見たりした。

「このままにして行きますからお世話でも面倒を見てやつてくださるんですね。」

「お氣の毒さまでございますね、こんなにご丹精なさいましてね。」

わたしはなるべく居拔きにして、根のあるものは動かさぬやうにしたかつた。わたしが去つて枯れても仕方がないが、ゐる間に植えかへて枯らすのは耐らなかつた。あつちこつちと借り歩いては其處に自分の心もちを殘して去るのも、借家人暮しのいいところだ、それを壞したりなぞするのは氣もちを傷つけるも同樣だと思つた。紀念につくばい一つだけを搬ばうと思つた。自分の母方の親しい六十いくつかの、彫りのうまい老人がこの夏彫つてくれたのである。本みかげで蒼みもいくらか色づき、覗きもなだらかで小ぢんまりした手ごろのものだつた。「これだけは持つて行かうと思ひます。」と言つたら、「さうなさいまし御切角お彫らせになつたものでございますから。」と言つた。

も一つのつくばいは川原の崖に半分顏を出してゐた石で、石質が柔らかかつたが苔が美しかつた。植木やをやつて掘らせたが、掘つて見ると長さ三尺に幅が二尺ぐらゐある大物だつたが、石のまはりに日苔が蒸してゐて美ごとだつたのでこれにも穴を掘らせた。このごろになつて苔はだんだん廣がつて、古さも蒼みも好ましくなつてゐたが、これはこのままに置いて行かうかと思つた。その傍に石菖を植えたらいいだらうと母が言つて持つてきてくれたのが、いまはよく根づいて綠の葉を水の上に垂れてゐる。ときどき川原から石叩きの羽根の白い奴が飛んで來て、この上に止まつて水をのんでゐた。二階から覗いてゐるわたしに驚いて石叩きはまた川原へ舞ひ戾つて行つたりした。あんなに澤山ある川原の水よりかぽつちりと蒼みがかつて湛えられたつくばいの水を飲みにくる石叩きにも、何か物珍らげな風情があるのだらうと不圖思はれた。

門の前から上流と下流とへつづいてゐる長い土手からの眺望にも、きのふ今日といふふうに濃くなる哀愁があつた。夏は土手の上へ椅子を持ち出して晩涼を趁ふたが、いま蕭殺として流れの響に痩せられ石垣に一點の靑いものさへなか

つた。虎杖の枯れたのに實がついてそれさへ吹き荒まれ、下流の方へ揉まれ込んでゐた。何たる哀愁か！——わたしは石を拾つて川の中へ投げ十分ばかりも遊んでゐたが、二階へ上つて、又た土手と川原を覗いてみたりした。

晚、炬燵の上でお名殘の意味で、母に泊つてもらふことにした。滅多に泊まらない母はかうして子息が一年もゐる間に泊つたことが、たつた二度しかなかつた。泊ると咳をするためによく子供が目をさますので泊つて貰はなかつた。それ故、泊つてくださいといふと無上によろこんだ。そして今夜は炬燵の上で久しぶりで花札を[illegible]うといふ計畫で、むかし覺えた手つきで母が切る花札が、ともすると札が新しいために辷つて切りにくがつてゐるのが、氣の毒げに見られた。ぱつちりと二束に切ると手元へばらばらと花札がこぼれた。歯がゆかつたが泌々と身にこたへるものがあつた。お前、切つておくれと言つて女房へ札をわたした。が、花の約束には少しもむかしと變化つたところがないと見え、細かい役の數々もよく飲み込んで、ちやんと覺えてゐた。唯、負け勝ちにちからを込めることがなく、結果はどうなつてもいいらしいやうに見えた。のろい調子で札をめくるのも年老りくさかつた。

「忘れてゐるやうに思つてゐたが、してゐるうちにみんな思ひ出してくるものだの。」

さう言つて眼鏡をかけた。

が、幸ひ母がよい手がついてめくりにも運があつた。お母さんにしてやられましたねと女房が言ふと、ふゝと嬉しさうに笑つて、枯れた手つきで札をあはてゝめくつて、二枚下の分までめくつてごめん〳〵と言つたりした。一年すんだあとで流石に母もつかれたらしく見えた。炬燵ほてりのしたのに柿の冷たく柔らかい汁を吸ふと、一沫のひやゝかさを感じ、いまさら外があまり靜かすぎるのに思はず聽耳を立てた。障子とすれすれに雨戸が閉つてあつたが、そこから三尺ほど隔れて山茶花のとなりの垣根があり、その葉にさわる憚い衣づれのやうなものを耳を倂せてみんなが感じ

た。瀨の音も階下の奥の間には遠ざかつて、その他に何の少しの音すら雜つてゐなかつた。

「雪だね。」

一人が一つづゝの柿の汁を吸ふてゐたが、少しは積るらしい今年初めての雪の音を珍らしく聞きすました。葉の厚い硬い山茶花に觸る音は深々と遠い蟲によく似てゐた。しかも北國では雪がふりながらも椽の下でひいひい啼いてゐる蟲を聞くことは珍らしくなかつた。椽の下には秋おそい栗の實を川原砂に埋めて置いたりした。

「粉雪だねあの音は！――。」

衣づれは依然としてつゞいてゐる。表では下駄の雪を箒杯ではたき落す音が手に取るやうに聞えた。あの音もしばらくは聞くことができまいと思つた。もうやすみませう、お母さんは炬燵の間に寢て下さい、夜中に咳が出ると子供が目をさましてこまるからと女房が言つて床をしいた。母は小ぢんまりとちぢこまつて床の中へはいた。

笑ふべからず

大泉黒石

宇宙間にありとあらゆるものなら、馬の草鞋でも百圓札でも何でもござれ、片つぱしからベソ搔いて悲劇的に考へる人を「ほんとに眞面目なお方でいらつしやるわ。」と、あがめ奉る世間の俗物どもはまた、何でもかんでも喜劇的に考へる人に向つて「ヤイ〳〵！てめえみたいに不眞面目な野郎は滅多にゐねえぞ！」と頭からコキおろすのだ。「へゝゝ。どうせ、さうでせうよ。私の了見が、あなたがたにわかる筈はないんだから、何とでも仰有るがいゝ。」とコキおろされた方は鼻の尖であしらふだらう。いや、その通り。相手は俗物。何とでも言ひたまへ。僕も矢つ張り不眞面目な野郎の一人なんだ。お聽きゝなさい。その僕の細君が病氣だといふので、つい此のほど滿洲の旅から引つ返して來ると、病氣ではなくて今や將に五番目の赤ン坊が生れやうとするんだとわかつて、ホツと安心してゐると、やがて、差出人不明の手紙が一ツ舞ひ込んだ。取り敢へず封を切つた。「讀賣新聞」の小さい切拔が現はれたので何だらうと思つて見れば即ち、一と行李もある原稿紙を擔いで滿洲三界へ出稼ぎ中の僕が、自宅からの電報に接してアタフタ歸京すると是はしたり、僕の留守中に不思議や細君のお腹が膨れ上つてゐる。誰の子だかわからないが、折角の授かり物だ、有り難くいたゞいて置いて、預金代りに生めや生め〳〵！と黒石先生が欣喜雀躍したなんて途方もない鐵棒なことが書いてあるから、驚いて細君に見せると「まあ。ひどいわ。あなた。早速訂正して貰ふやうにハガキを出して下さいな。世間の人はほんたうにしますからね。妾、困るわ。」と、ありもしない柳眉を逆立てながら寢床の中で憤慨した。だから僕は彼女の道徳的名譽を恢復するために、彼女のお腹の赤ン坊は、亭主たる僕の實子として進んで認むべき過去の原因にもとづく當然の結果であり、且つ僕の旅行中、娑婆へとび出す支度をしてゐたんだから、留守中の入算で

はない出算だ。僕の細君は亭主のやうに、天下の俗物諸君！何とでも言ひたまへ！澄しちやいられない人種だから、宣敷く訂正の上、こんなことを書くひまには、赤ン坊のために、縁起のいゝ名まへでも考へてくれたまへ。と、言ふてやると、翌日の「讀賣新聞」に此の辨駁文がそつくり出たのは言ふまでもないが、泥坊と閑人は不景氣の世につきものと見えて、この新聞記事を拜見つかまツたといふ前口上で、「願はくは下記の一字をもつて、足下の御子息に御命名下さらんことを！」といふ共一字の傍らに、性名判斷式の講釋やら故事來歴なんか仰々しく附け添えたハガキに手紙が、見ず知らずの僕の家へ、毎日五六枚もとび込んで來るのだ。思ひがけぬ奇特な親切には流石恐れ入つたが、中には食人部落へ持ち込んでも恥かしくないやうな凄物や、苦心慘憺の御丁寧な嘘字がある。大變な名づけ親の志願人があつたもんだ。お禮の申し様がないと思つてゐるうちに、三十幾通たまつたから、細君の枕もとに積み重ねて「何が機縁になるかわからんもんだ。この中に格好なのがあれば、苦んで考へるに及ばなくて有り難いや。」「ありさうですか？」と細君が面白がる。「どうだかね。」「讀んで聞かして頂戴。」といふわけだ。一通づゝめくつては名まへの文字とその能書を朗吟し乍ら、tête-à-tête どうだかうだと評議してゐると臺所の硝子戸がソツとあいて戸棚を掻きまわすやうな怪しげな物音がするから飛んで行くと「開化樓」の舟子が、戸棚の中から洋食の空き皿を取出して、岡持に移してゐる。「開化樓」といふのは此村に古くからある田甫道の酒場だ。村に引つ込んで二年になる今日まで、うまくもない十五錢のカツやコロツケを挽ます飽かす夫婦掛け合ひで食つてやるので、亭主の久兵衛や女給の舟子ともすつかりお馴染みだ。「先生。お早う。奥樣の御容態はいゝの？まだ寢んでゐらつしやる？さう。御退屈でせうと思つて家の好きな物を買つて來たわ。」とエプロンの下から出してくれたのが、氣の毒にも潔癖屋の細君にとつてはナメクヂより嫌ひな「醜婦の友」十二月號だつた。折角の親切を無にして斷るのもよくないから、禮を言つて受取ると喜んで歸つた。時々かうして、田甫の草花を摘んで持つて來たり、お客に貰つたチツプで兒どもを駄菓子屋へつれて行く。その心根は眞實可愛いオボコ娘のやうに見えるが、年は十九。睫毛の長い愛嬌顔もまんざらでないし、當人御自慢の聲は滅法と玲瓏たるもので、暇さへあれば、酒場の蓄音器を師匠に、ワルツやオペラの類から流行唄に至るまでの練習で客の度膽を抉るのだ。いつだつたか、ダダの平辻潤平が此の聲に打たれて、田甫の中に棄てゝ置くのは勿體ない代物だと溜息をつくと、お舟ちやん、餘つぽど嬉しいと見えて

「この方は何て仰有るの？」と僕にきくのだ。「有名な平辻先生だよ。」「何をなさる方なの？」「そりやピアノでも何でもおひきなさるのサ。」「あらいゝわね。ネクタイさんよりや偉いんだはね。」と舟子は感激のあまりに此の大音樂家がボリ〳〵嚙つてゐる油揚豆の袋から、藝者や女優の寫眞を摘み出しては、小汚い彼の帽子のリボンにズラリと挿し込んで、叩き潰すやうな力でペツシヤリと頭におつかぶせて「ねえ。平辻先生。（籠の鳥）を唄ひませうよ！」と言つたこともあるが、ネクタイさんといふのはやがて此の話の中に現はれいでゝ縱挺な活躍をする人物だから一寸紹介して置く。即ち、夏冬ぶツ通し垢光りのモーニング一着に、ネクタイばかりは三日にあげずに取替へるので評判の、僕の近所の貧相のピアノの先生。いや、舟子の聲にゾツコン參つて通ひつめる村の習兒連の中でも多少は彼女の思召しにかなひさうな果報者なんだ。が、さて〳〵舟子に貰つた赤々しい婦人雜誌なんか、どうせ誰も讀みはしないんだから、そのまゝ家の屑籠へ投げ込んで了へば世話はないのだに「舟子がこんなものをくれたよ。」と細君の枕もとへもつて行つて、何の氣なしに頁をペラ〳〵繰ると、島田清次郎なる若年小說家の顏が現はれた。見ると奴さん、往來の眞ン中で突然發狂して巡査に取ツ捕まり、巣鴨の保養院へ叩き込まれて暗い獨房でワイワイ泣いてゐるといふ大變な見出しの記事があるのだ。ハテナー島田清次郎といへば、例の阿呆くさい戀愛鬪爭に味噌をつけて以來、世間の俗物どもに愛想をつかされて、書いた原稿のハケ口までなくなつた結果、ど偉く貧乏悲觀して、戀人から貰ひ溜めたラブレターの風呂敷包みを背負ふたまゝ、暫く行衛不明のところ、此のほど信州山奥の木の枝に首を釣つてダラリダラリと昇天したなんて笑劇的新聞記事を、僕は旅の途上、馬關か大連かで見た。貧乏悲觀まではほんとうかも知れないが、縊首自殺はまさかと思つたので、好奇半分に讀むと、發狂の顚末が如何にも巨細にわたつて、いゝ氣味だ、態を見ろと言はぬばかりに書きのめしてある。昔は人間の首を戸塚ツ原の獄門臺に晒したが、今日では婦人雜誌がその役目を引き受けたと見えて流石に是は虛說でないやうだ！それによると可哀相な此の兒でござい、頭の方で御免を蒙りませうといふやうなボロ〳〵原稿たつた一ツが所持品で狂人監獄の御厄介になつてゐる此の早發性痴呆患者本尊はもとより、ひとりのお母さんも昔と變つた悲慘な有樣で、親戚朋友誰一人として寄りつかないんださうだ。寄りついこいきなり喰ひつかれるやうでも困るし、そんな險呑な人間には、もはや一切用はなからうが、しかし見ろ處女作小說「地上」以來の讀者を向ふにまはして傲然天下に大見得を切つた一

代男の、その一人の同情ある見舞状にもありつけない不意の末路とはサテ心細い次第だ。いやこいつ將來狂人になる見込みのない安全小說家にとつても、まこと心細い現象だ。當然らおやと言ひたくなる。若年島田清次郎が一躍して有名になり、二躍して金持ちになり、驚くべき高熱を吹きまくり吼え猛つて、氣の小さい文壇諸師の心臟を引つこぬいたお蔭により、忽ち憎み嫌はれたのは自業自得だらうが、女郎に背中を向かれて溝の中へ墮落する善人もある。あの若さで、やんやと世間に騷がれて見たまへ、誰だつてポーッとのぼせ上るものだ。奴さんみたいな男は大きな過失をやる。その位のことをやつたつて世間は何とも思はないほど寛大であると考へてゐるからだ。島田清次郎のやうな眞似の出來ない文壇諸師の書いたものが、飛ぶやうに賣れなくて甚だお仕合せの至りサ。憎まれてゐる最中にヘマなことをやつたものだが、若い男が若い女とゴタつくのに不思議はない。文ダンとか青年ダンとか操ダンとか、ダンのつく奴に碌な物があるものか。よその娘と角力を取るなんか中の上で、近頃は他人の奥さんを舐めて歩るく先生達もゐる文ダンだ。ウイクトール・ユーゴーさんの言ひ草ではないが、不幸は人を造り、苦難は精神の力を生む。若年小說家が二躍しての發狂沙汰は、要するに大將、口ばかりで腕がなかつたせいもある

が、俗物どもが寄つてたかつて舐め過ぎたのは事實だ。島田清次郎とは僕の家で一度、誰かの出版記念會で一度。會つたきりで時々は消息を寄越すこともあつたが、僕はあの人相が氣に食はないので交際は遠慮してゐた。然しかうなつては見てゐられない虐待だ。此の際何とか出來るなら何とかするのが僕の性分だ。誰も構はなければ僕が構ふ。發狂まへに持ち廻つて散々斷られたといふ其のボロ〳〵原稿はどんなもんだか知らんが恐らく大將の結構だらう。一ツ讀んだ上で本屋に掛け合ひ、出版したら歡喜ぶだらうと考へた。「大きにお世話ぢやありませんか、およしなさいよ。狂人に顏でも引つ掻かれてごらん。つまらないわ。」と僕の細君は反對するに違ひないから、實以て御苦勞千萬た物ずきだが、大切な赤ン坊の名まへの選擇なんか打ち忘れ、「婦人の友」なふところに、差當り僕の用もある日本橋のS社へ、默つて出掛けた僕は、この婦人雜誌の記事を突つけて話を持ち出すと、發狂作家の肩を持つのは僕ひとりではなかつたんだから面白い。「その原稿が立派なものなら出版しやうぢやありませんか！賣れゝば結構。賣れなくても構はん！」といふ主人の挨拶だ。「ぢや、僕は明朝、狂人病院へ行かう。本人に會つて原稿を借りて來て讀むことにしやう！」といふ僕の親切だ。さて。讀者諸君よ！大體この一編は狂人小說家の話を以て埋まる

べきものではなくて、實の中心は「開化樓」のお舟ちやんの身邊にあるのだから、此處でまたお舟ちやんの話へ移つてもよからう。といふのは居館乍ら家を出る時、腹の加減が穏やかならず、夕方、S社を出て、村の「開化樓」の側まで來ると、一旦こらへてゐたのが、今や將に漏れさうな勢なので、裏口から入つた僕は、コツクに斷つて二階の雪隱へとび込んだ。さて中に蹲んでゐると客部屋の方から廊下づたひに忍び來る足音が、雪隱の外でピタリと止つて、男と女のヒソ／＼話が始まるのだ「なあ。お舟ちやん。このあいだも一寸話したやうに、いよ／＼この暮一ぱいで役場をやめて故郷で家を持てといふお袋の手紙なんだ。だからその返事の中に、お前の事を匂はしてやつたのサ。お袋にとつちや、天地にかけがへのない一人息子の俺だ。なア。おツかあや。おめえすまねえが、家の屋根のテツペンさあ上つてな、クリ／＼と尻まくりで三遍まわつて地べたへ飛びおりてくんねえか、と言へば、三遍まわつて飛びおりることなんか厭やしないほど可愛いゝのだ。俺が中學校の入學試驗に落こつた時のことだ。くやしまぎれにお袋は半紙一ぱい『召し上れ』と書いて校長の家の門に貼りつけに行つたが、翌日みると無い。さては校長の野郎駭いて引つぺがしたに違ひない。と根氣づよいお袋は又書いて貼りに行く。と翌日また剝がしてある。サア。これが村の評判となり、毎朝校長が起きぬうちに門前を通る村の衆、何のことだかわからないけど、また貼つてあると笑つて行く。何度剝取つても『召し上れ』の貼紙が絶えないので、校長め。不思議に思つて『何を？』と書いて或る晩貼り紙した。それを見るとお袋は、いきなり家の廐の馬の糞を笊に盛り上げて校長の門にコツソリ釣したものだ。後できいて見ると、何でも菓子折の一つも袖の下に持つて伺はない家の子は落第させたなんて噂に憤慨したお袋が、そんな學校へ大切な倅をやることは出來ない。おまへサンなんざ、糞でもくらへと言つたつもりなんだ。この通り。お袋が俺の身を想ふ心は昔も今も變りはない。俺のいふことなら何でもウンよし／＼ときいてくれる。お舟ちやんと世帶を持つのにだつて異議や反對のありつこはなしよ。今夜はその打ち合せに來たんだが、約束通り何時でも暇をとつて俺と一緒に川合へ行けるやうに店の方の都合はついてゐるんだらうな？」といふ聲は咽喉の奧でガラ／＼鳴つてゐる。女は遮らふやうにかう言ふのだ「店の方はどうでもなりますけどね。奚。何だか氣がすゝまないわ。」「そりやまたどうして？」と男はビックリする樣子だ「奚、あんたには默つてゐたんですけど、少し考へてゐることがあるのよ」「何か厭になつたといふんぢやあるまいな？」と男は心配さうな聲を堅

だ。「あら、そんなことたいわ。」「ぢや、どんなことサ？」女は思案の體だ。「田舎へ行く氣がしなくなつたのよ。妾みたいな者でも、どうかして偉くなりたいと時々思ふことがあるわよ。」「フン。」「妾。まだ若いでせう？」「フン」「だからモウ少し待つてくれたつて、あんたと一緒になるのに差支へはないでせう？それに今いゝ機會があるんですもの。」「なるほどな。ちつとばかりの金を稼ぎ溜めやうてんで、下町へんのカフヱーにでも住み替へやうといふんだらう？」「そんなつまらないことぢやないわ。ホラ。店に來るお客さんで、いつか妾に聲樂をやつたら乾度成功するから是非やりたまへとすゝめる人があるつて話をしやしなくつて？それは此の近くのピアノの先生なのよ。その先生と仲間の方に誘はれて、まへの定休日に報知講堂の音樂會で、生れて始めてほんとの聲樂を聽いたわ。でもね、こんなことをいふと、あんた笑ふかも知れないけど、妾だつて一生懸命練習したら眞似事ぐらい出來ないこともないでせう？と先生に言ふと、大きにさうだ！その意氣で一ツやつて見やうといふ氣があるなら、自分の先輩が雜司ケ谷に塾を開いてゐるから、いつでも喜んで世話をしやうぢやないか、どうだい、朝から晝にかけて店のひまな時に通ふことにしたら？と熱心にすゝめるんでせう。」「いや。わかつた！お前はその聲樂とか何とかいふやつで出世の蔓にありつかうてな了見になつたんだな。驚き入るよ。」「だつてあんた、音樂は妾たちの才能をのばすことの出來る仕事の中でも一等立派なもんですわ。儲かるお金のことだつて考へてごらんよ。」「フツ！それも多方そのピアノの先生てな野郎にきいたんだらう。お前の口からついぞ聞いたこともない口上だが、そんな大それた考への娘は世間に掃くほどあらア。」「ぢや、妾には見込みがないといふの？可哀相に、是でも覺悟一ツでは成功するかも知れないのに、始めつから思ひ切るなんて厭だわ。それに妾、もう約束しちやつたんだもの。塾で試驗をうけることになつてゐるから、それが巧く行かなければ、仕方がないと思つて妾あきらめるわ。」「フン。さうか。俺は厭だな。お前はもつと悧巧な女だと思つてゐたよ。音樂志願の娘たちがみんな思ひ通りになれたら、世の中は騷々しく耳が聾にならア。夢みたいなことは止して田舎へ行かうぢやないか。」「ぢや、妾には才能がないといふの？」「さうサ。お前の咽喉笛なら文句はなからうが、聲がいゝから成功すると決つたものでもなからうぜ。」「さあ。それだから、やつて見て駄目なら止すといつてるぢやないの。わからない人ね。」と女はだん／＼焦れて來る。男はボツ／＼怒り出す。「チヱツ―それまで俺を釣つて置く肚かい？え？駄目なら俺のいふことを聞く。巧く行きさうなら俺なん

かに川はない。素敵な筋書だよ。近頃の流行唄ぢやないが、ストトン、ストトンと通はせやうて奴だな。まかり間違つて偉くなつた曉は、犬みたいなハイカラ共にヤンヤンと持囃されて、お前のまわりに集つて來る金のありさうなスケ平の鼻毛を片つ端から引つこ拔きの方寸だらう。音樂でも噛らうてえ女の心得は大概そんなものサ。迚も凄いや。」「まあ。ひどいことをいふのね！あんたのやうにさう頭から誹しつけるもんぢやないわ。妾がこれほど決心してゐるんだから、たとひ見込みはないと思つても、何とか元氣をつけてくれるのが、あんたの眞實といふもんぢやありませんか！」「いや全くだ！俺が惡かつたよ。勘辨しな。まあせい〳〵勉强して、物にならんけりや、迚も毛唐の小唄なんか妾には唱へません、と一と筆書殘して首でもくゝることにしやうぢやないか。へつへ。」「人を馬鹿にしてゐるわ。憎くらしい！」と男の脊中をドンと叩く音がした。「痛い！」「お舟ちやーん！と金切聲が帳場から飛んで來た。女はバタ〳〵と階下へおりて行く。男は客部屋の障子をあけ乍ら「オイ〳〵お舟ちやん。話があるんだから直ぐ來るんだよ。お銚子を熱くしてな！」「えゝ。えゝ。仇をとつてやるから待つてらつしやい！」と振り返りさま投げつけて行く女の一と聲で、即ち此の間のぬけたる郊外流の痴話劇は一幕の終りを告げて、舞臺は寂然閑となつた。僕に言はせると、雪隱の中の無用たるや風の昔にすんではゐたが、お芝居の最中に藪から棒と首を出して驚かすのも氣の毒だ。人の戀路の邪魔をするのもよろしくないと我慢づよく潜んでゐたのだ。もうよからうと思つて廊下へ出ると眞直ぐ家へ歸つた。が、申すまでもなく、今の女は女給舟子に違ひない。そも相手は何者だ？とその客部屋の前を通りがゝりに障子の穴から覗いて見ると、驚く勿れ。箱火鉢によりかゝり、水つ洟をすゝり上げてゐるのは、舟子の情夫とも思はれぬ紋付羽織の、色も赤茶けた人相――いや馬相のほども長々しくペシヤンコ面の男だつた。愉快なる哉。わが讀者諸君よ！諸君が住むところの町や村の居酒屋小料理店に於て、現代の女給なるものとお客との間に、のべつ幕なく頻々として交換される右のやうな月並情的痴話なんか、トントお聞き慣れに違ひない諸君は忽ち、何だ！そんなこと珍らしくもない！と仰有るだらう？然り而して諸君が言ふが如く、また僕の言はずんばあるべからざるが如く一體全體こいつ巫山戯てゐるのか眞面目なのかわからない男女痴話の正味が、單にこれだけのものでお了ひならばだ、僕またりヒテル先生の所謂「餘談的長廣舌」を振ひまくるの勇あらんや。此處までが序幕だ。話はこれからだと思つて聽きたまへ。その晩のことだ。生れた赤ン坊が何時までも名なしのベビ公で

は困るから早くつけて下さいといふ細君の催促もあるし、大方江湖の特志な閑人各位から折角送つて來る『赤ン坊の名まへ』のハガキも溜つてゐるので、その中から縁起のよさゝうのを選りどることにした。ときに是は極く古い話だが、僕は或る文學雜誌に頼まれて、新年號に出す懸賞募集の短篇小説の選をやつたことがあるのだ。頼む奴が頼む奴なら、頼まれる奴も頼まれる奴で、百餘篇の中からタツタ五ツ採るのに全部一々目を通すなんて七面倒な鑑賞は眞つ平御免蒙り、作者の年齢職業が姓名のそばに記入してあるのを幸ひ、一等貧乏人の作だけ二十幾つ選りぬいた。當選すればお正月の餅が一と切れでも餘計に買へるだらうと思つたからだ。あとの原稿は一と束にまとめて家の雪隠へ持つて行き、不幸な運命をあきらめて貰ふことにした。書いたものゝ内容なんか問題でないといふ便利な始末でよかつたが、その二十幾つを讀むのが、また／＼厄介なものだから、取り敢へず部屋のまん中に一枚の座蒲團をしいて、隣りの部屋から「ヤツ！」といふ掛け聲もろともに、抱えてゐるその原稿を一度にバラ／＼投げとばし、首尾よく座蒲團の上に乘つかつたものだけを五ツ、懸賞當選の大傑作ときめたものだ。亂暴と門動當話は時にとつて手數を省くに都合のいゝ妙術だと感心したやうな次第だが、倅の命名と來ては、他人の小説を取り扱ふやうに粗末なことも出來ないから、鹿爪らしく頭を捻り曲げて相成るべくは後世恐るべき金持ちに成りすまして歴代の貧乏から親父やお袋を救つてくれなくとも、せめては親に苦勞をかけることなく眞直ぐに伸び上るべき前先のいゝ天地陰陽は五紀の配置にかなひさうな文字を選んで兎も角も村役場へ届けることにした。ねえ。トツチヤン。家の兒どもにみんな秋生れで學校へあがるのに一年づゝ損をしてゐるんだから、このベビちやんは元日に生れたことにして届けて下さいな。」と僕の細君は産婦の袖から蒼白い雁首をもだけた、ところへ知る人ぞ知る、小説を書いて十五萬圓たまつたので、近來もつぱらブラリ／＼と餘生を樂んでゐる沖野岩三郎隱居が、禿げ頭で風を切つてやつて來た。禿げ頭にも色々あるが、沖野老人のは名ごり惜しげな毛髪が少しばかり横さまに靡いてゐるところ漉こしに赤がね色の月を見る形。即ち雁月禿頭だ。赤ん坊の名まへはきまりましたかね？」「いや、そのことですよ沖野さん、小泉とはどんなもんでせうな。」小泉つて？フーン、大泉小泉か。そりやいゝ！」と雁月を叩いてゲラ／＼笑ひ出したが、よくなつてもう決つたんだから、翌朝の霜を踏んで、半里あまりの村役場へ、田甫つたいに駈けつけた僕は、高い窓わくに首を突込んだ。「兒どもの名は何てんだい？」と戸籍係りの役人が言ふから「名は小泉」と答へる

と、「小泉？大泉小泉つてのか？いやにヒネつてやがる。何日生れたのか？」と型の通り横柄だ。「元日です。」「元日つて？いつの元日だい？」「むろん大正十四年です。」「何んだつてオイ。大正十四年？十四年はまだ來ないぜ。」「いづれきます。」「そりや不可！」「ハテネ。兒どもはもう生れてゐるんですが就學年齡の計算上、少々日のべをしたいんです。いけませんかな。」「不可々々！」「ヘエ。どういふわけだらう？約束手形や小切手の支拂期日みたいに出産届だつて十日や二十日先の日附でも受取つてくれさうなもんですな。約手や小切手は不渡りの恐れもあるだらうが、僕の兒どもは現に生きてピン／＼してゐるから、そんな心配はないんだがな。」と言ふが、村役人は啞としてて應ずる景色がないのだ。よく／＼融通のきかぬ奴だと思つて爪立ち乍ら、薄暗い窓の中の役人の顏を見ると、ゆうべ「開化楼」の客部屋で水つ洟をすゝつてゐた舟子の情夫、紋付羽織の馬面だから驚いた。「なあ、お舟ちやん。お前ほんとに俺が厭になんたんで、そんなことをいふぢんやないか？えゝ財布の底を引つぱたいてお前に入れあげたお鳥目だつてどれ位だか、胸に手をおいて考へてみな、今さら田舍へ行きたくねえなんて義理ぢやあんめえ。」と哀れつぽくシミツタレに舟子を口說いた男とは思はれず傲然と村長氣取で「そりや不可。先例のない事だよ。斷じて不可ね！」とナタ豆煙管に金蝙蝠の吸ひかけを詰めて鷹揚にプウ／＼ふかすんだから可笑しくて癪に障るが、こんな沒分曉漢に彼是いつたつて始まらぬ。仕方がないから改めて出直すつもりで村役場を立ちのいた。ふツと思ひ出したのは、今朝、例の狂的小說家の原稿を取りに行く約束になつてゐたことだ。巢鴨の保養院は此の村から停留場二つの距離にある。序に一と足と思つて運んだ。讀者諸君よ！あなたがたの中には彼の小說の一つや二つぐらい讀まれた人もあらうところの所謂狂天才と僕の對面ぶりが、いかに非常識の滑稽を極めて、世にも悲しく嗤ふべきものであつたか、此處に萬障くり合せて特記しなければ納まらない話であるが、長くなるから失敬して、僕が此の狂天才の手から受取つた原稿を抱えて、日本橋のS社へまわり、僕の用を足して夕方、村へ歸つた。いや、歸る途中から引きつゞき申し上げるならば、「開化楼」から二三丁の、薄暗い田甫の枯草を踏み分けて步いてゐると、靴の先にフワリとあたつて、コロ／＼コロと轉んで行くフート・ボールの拉げたやうな眞つ黑い物の塊りがあるので、ポン／＼と、蹴とばし乍ら電柱の下まで來ると僕に驚いた。赤い電燈の光りに浮びいづる黑い塊りは、正しく女の髮ではないか！怖々手にとつて見れば、香油の匂ひもプンと胸をそそる七三に結び分けた濡羽色の艶つぽい代物だ。オヤ／＼。こ

いつ棄てたのか落したのか？棄てるわけもない。落して行く筈もない。誰のものか無論わからない。川筋の中に蟠とは是如何？と、袴の上にのせてクル／＼まわし乍ら考へて見たが、遂にわからない！おかしな事があるものだ。僕みたいな男には縁も因緒もない品で、何となく氣味も惡いが、元の場所へ棄てるのは惜しいやうな氣もするので、そのまゝ家へ持ち歸り、書棚の上にあげて置いた。「何處を迂路ついてるんです！あなた、」と細君の部屋から鋭い叱聲が飛んで來るのだ。「役場から町へ行つたんだよ。」「屆けの方はすみましたか？」「これが駄目さな。元日まで待たなくちや。」と僕は頑迷な村役人の馬鹿さ加減を力說して聞かせたが、その村役人なる者が意外にも舟ちやんの情夫の一人であることも、狂人病院訪問のことも口を封じて言はなかつた。況んや蟠拾得の件をやだ。由來僕の細君は亭主の一擧一動半言隻句に對して、概ね異議をとなへるか、さもなければ、針棘に罵倒することにより、彼女の天職は全うされつゝあるものだと心得てゐる傾きさへあるんだから、亭主たるもの戰慄れさるべけんやといふ調子で、大抵のことは內密に口を拭いてゐるのだ。するとその翌日。夕めし時には何時もおきまりの舟子がブラ下げて來る洋食の岡持を、亭主の久兵衛が急しさうに提げてニコ／＼と臺所へ入つて來た。「親方の出前とは珍らしいね。」と僕が言ふのだ。「えつへつへ。家のお舟坊が寢てんぢやつたもんですから、私ひとりで內外かけ持ちでやつてますよ。」「フン。風邪でも引いたのかい？」「いゝえ。それが、その。」と久兵衛は口籠りながら「ゆうべ家のお客に小ツぴどく毆られて、頭痛がするつてんですよ。」と顏を顰めて笑つた。「フーン。舟公を毆るやうな客もあるのかい？隨分可愛がられてゐるやうだが？」と不思議に思つて訊くと「えゝ。お蔭さまで皆さん御贔屓にして下さるので有り難い仕合せと喜んでゐますと困つちやいましたね。先生。私の油斷もあるでせうが、何分にも年頃の娘ですからね。その。可愛さあまつて憎さが百倍。こん畜生。俺のいふことを聞きやがらねえ。なんてお客さんが二人現はれての鬪爭が起つたんですよ。へつへ。」「おきまりの戀の鞘當てといふやつだらう？お舟ちやんにはありさうな事だからな。」「まあそんなところでせうよ。先生。あなたゞからお話しますが。ホラ。あのネクタイさんとそれから役場の人。ね。御存じでせう？この二人が以前からお舟坊に思召しがあつたといふんですな。」と戸棚のまへの椅子に腰かけて低聲で饒舌る久兵衛の話によると。昨日の夕方。女給舟子が洗湯の歸りにネクタイさんと川筋の中でバッタリ出會つたので、二口三口話をしてゐると。偶然そこへ通りかゝつたのが、役場の大將——金川さ

んです。お舟坊が洋服の男と睦まじげに肩をすりつけてのヒソヒソ話だから。ハツと思つたのが。まづ／＼嫉妬の蟲をおさへて。後ろから聞いてゐると――ねえ。ピアノの先生。聴いて頂戴よ。あの役場の馬面が。妾に音楽なんかやれるもんぢやないから、田舎へ行つて俺のおかみさんになつてくれつて仕様がないのよ。きつぱり断れば、あんな男だから何をするかわからないし、妾どうしたらいゝか困つちまふわ――フーン。そんなことを言ふのか？あ。あ。あいつが！生意気な身の程知らずのはした役人め！と力みかへつてネクタイ先生。後ろをふりかへると、その半端役人が満面殺然として歯を喰ひ縛りながら突つ立つてゐる始末だ。納りがつかない。即ち。型通りの痴話喧嘩は大正十三年十二月の下旬午後六時何分を以て枯草の上に始まるの止むなきに到つた。この刹那に於ける村役人の胸のうちは恐察するにあまりある――おゝ！吾輩の愛すべきエンゼルは、かくて今や此のモーニング野郎の誘惑に打ち負けて了つたのだ！吾輩の手からマンマと舟子を奪ひ去つたのは此ン畜生なのだ！いや。この悪魔こそは舟子の心に野方図もない野心の種をフリ撒いて。吾輩と彼女との折角の中を引つ裂くのだ！覚えてゐやがれケダモノめ！村役人は、「何かのお間違ひではありませんか？」と蒼くなつて尻ごみするネクタイ氏に飛びかゝり。胸ぐらを捉へて。復讐的腕力にまかせて殴りつける。「何をするんです。！」と舟子は顔を消して、村役人の腕に縋りついて二人を引分けやうとする。その途端であつた。村役人のアカギレだらけの大きな拳が。風を起して飛んで来たかと思ふと、ネクタイ氏の顔をかすめて舟子の頭上へ。力一ぱいガンと落ちかゝつた。舟子は此の恐ろしい打撃をくらつて枯草の上によろ／＼蹌けた。その拍子に彼女の頭から何かしら異様に真つ黒い物の塊りが轉げ落ちた。おゝ！二人の男にとつては實に早、何とも言ひがたき驚愕の瞬間であつたに違ひない！たゞひたすら呆然として相手の顔と。濡れ手拭ひで頬かむりをしながら一目散に逃げて行く舟子と、ころ／＼轉々する黒い物とを見たには、肚の底から溜息をつくばかり、戀の鞘當ては消えてなくなり、お互ひさま極りがわるいやら恥かしいやら、ガツカリするやら。角力に物言ひといふ形で別れて了つたといふのだ。「ヘエ！その黒い物とは何だい？」と僕は久兵衛の心配げな顔を見た。「鬘ですよ。」「鬘？何だつてそんなものをお舟ちやんは頭にのつけてゐたんだい？」「さあ。それが。その。」と久兵衛は言ひにくさうに「お恥しい次第ですが。お舟坊には頭に毛がないんですよ。」

「薬罐坊主なのかい？」と僕も流石に驚いた。「さうなんです。」

「ヘエ！ちつとも知らなかつたね。」

「さうでせうとも。知つてゐるのは私と家内だけです。お舟坊が私の家へ來るまへに、大塚終點の酒場に働いてゐた時なんかも、矢つ張り昨日みたいないきさつでね、お舟坊、往來のまん中で、男に髪を摑んで引ずり廻されたもんだから、髢がぬけて飛んだ恥つ掻きでさ。そいつが評判になつて大塚にもゐられなくなつたといふわけです。あの娘のお袋はこの近在の髪結ひですが。何百何千と他人の髪を結ふてやる！而も生みの娘の髪だけは結はうつたつて結へないんだから因果な皮肉ぢやありませんか。」「可哀相に、さういふわけで、百年の戀も度々醒めるんだね？お舟ちやん泣いてゐるだらう」「だから、お客なんかと深くならんやうに矢ケ間敷く言ひますが、後悔してきた矢をくり返す。ホラ。これが人間なんですよ。ゆふべは泣きつ通しですよ。聞いて見ると、髢を落つことしたきり手拭をかぶつて來たつてんでせう？あの髢を造るのに百二十圓もとられたといふんだから、失くなつたり踏み潰されては一大事と、田甫の隅から隅まで探しましたが、不思議とないのです。お舟坊、戸外へも出られず、蒲團の中で大泣きの始末。弱つちやいましたよ。」と久兵衛は滔々と溜息を吐くのだ。實をいふと行李の中の黒い物が髢ときいた時に、サテハあれがさうだつたのか？今まであれをかよつて男を操つてゐたのか？と流石に可笑しくなつたが、これが紛失してゐるので大弱りときいて僕は微笑し乍ら「その髢は僕が拾つたよ！」といふと、久兵衛は忽ち目を丸くして驚いた。「え？先生が？ほ、ほ、ほんたうですかい？」「嘘ではない。今あげるよ。」「そ、そ、そいつア有り難え！助つた！」と椅子からとびのいて熊とらしく大袈裟に胸を撫でおろしたかと思ふと、グツと唾をのみ込んで「あゝ嬉しい！お舟坊をびつくりさせてやりますから、どうか、出して下さい。」と手を出すのだ。が、あるべき品はそこにないのだ！いや、何處にもない！どうしたんだらう？

話の先にまだあるが、豫定の紙數と締切りとが來たから、一と先づ此處で筆を擱くことにして、機會があつたらまた改めて先を書く。



古琉球の二詩人

——オモロネヤガリとアカインコ——

伊波普猷

島嶼又は山中のやうな交通の不便なところに、言語風俗習慣等が、その原形に近い形で遺つてゐるといふことは、爭ふことの出來ない事實である。この意味に於て、わが南島は、天然が時間を場所に現はして學者に與へた好適例であつて、南島全體が日本文化の古物博物館とも云ふべき所である。柳田國男氏が南島を研究しなければ、日本上古のことが解けない、と絶叫されて以來、南島研究が急に盛になつて、學者や藝術家の琉球を訪問するのが、瀕繁になつた。この機運に乘じて、南島談話會では、帝國學士院の補助の下に、琉球の聖典ともいふ可き『おもろさうし』を刊行することになり、私がそのテキストを校訂する任に當つたが、校訂が漸く濟んで、不日印刷に附せられようとしてゐる。それから私は、この『おもろさうし』を研究する人の爲に、その中から特に代表的のオモロ九十八首を選んで解釋を施し、『琉球聖典おもろさうし選釋』と名づけて、世に公にしようとして、今印刷中であるが、これはオモロの解釋といふよりも、オモロの研究といつた方が適當で、いはゞ「オモロに現はれた古琉球の文化史」ともいふべきものである。今私はその原稿の中から、古琉球の二詩人——オモロネヤガリとアカインコ——の一章を拔き出して紹介しようとしてゐるが、これを紹介する前に、極めて簡明に、オモロの如何なるものであるかを説明して見ようと思ふ。

『おもろさうし』は二十二冊、歌數總べて千五百五十一首、中に重複したのもあるが、それでも千五百首を下らない。西暦十二世紀の中葉から同十七世紀の中葉まで、殆ど五百年間のオモロを收めたもので、琉球の萬葉集ともいふべきのである。第一冊は明の嘉靖十一年我が天文元年（西暦一五三二）に、第二冊は明の萬暦四十一年我が慶長十八年（西暦一六一三）に、第三冊から第二十二冊までは明の天啓三年我が元和元年（西暦一六二三）

に、いづれも琉球政府によつて編纂されたものである。これは形式の方面からいふと、琉球の萬葉集といふべきものであるが、内容の方面からいふと、古事記、萬葉集、祝詞の三つを合せたやうなものである。オモロは普通神歌と記し　又神唄とも書く。その語原は詳にすることが出來ないが、ウタといふ意味の言葉であることは、断言するを憚らない　兎に角祭政一致時代の産物で、その大部分が祭事に關するものであつて、神事若くは神と稱せられる祝女、その他の神職の間にのみ用ひられたことからいふと、語原はともあれ、今は神歌と稱へても差支ないのである。オモロの中には、琉球の創世記を初めとして神や王や英雄を謡つたもの、戰爭を歌つたもの、航海や貿易をうたつたもの、若衆の遊をうたつたもの、風景を咏じたものなどがある。そして極めて稀に戀をうたつたのもある。世にオモロを措いて、古琉球の思想及び言語を研究すべき資料は無い。オモロには、何等技巧の見るべきものがなく、之を修辭の側から見て、別にとり立てゝいふべき程のこともないが、西詩などのやうに、韻を踏んだところなどは、萬葉などと全く趣きを異にする點である。その他所謂頭韻法に相當する繰返しといふことなどが、かなり用ひられてゐるのも注意すべき點である。それから對句は日本歌謡の最も主要な裝飾であるが、古琉球人も亦之をよろこんだのである。それに琉球では古來、歌はよむ歌とうたふ歌とに分離しない形態にあつて、どの歌でも樂器に合せて謡へるやうになつてゐるので、オモロはもとよりその他の歌謡にも、旋律的なのが多い。就中オモロの旋律はオモロの意味を解せない人にも感ぜられるやうになつてゐる。二三年前南島の風物をうたひに行かれた詩人佐藤惣之助氏も、オモロを謡して、頻りに旋律的だといつて居られた。これで見ても、オモロの旋律は琉球語の解せない人にも感ぜられるといふことがわかる。

さて、「おもろさうし」の第八冊「おもろねやがり、あかいんこがおもろさうし」は、その名稱の示す通り、オモロの詩人オモロネヤガリとアカインコとを謡つたもので、八十二首のオモロが收めてあるが、四百年前の南島詩人の生活をかいまみるに、都合のいゝ資料である。その二章「あまへわちへがふし」(喜び給ひての歌の義)にかういふのがある、

一おもろ、ねやがりぎや、
二時とたる、三まさしや、
四あふれ、五よそわて、六ちよわれ
七せるむ、ねやがりぎや、

（八）きやのうち、ぬきまるが、
時とたる、まさしや）
（九）ぐすく、二ぐすく、時とたる
（一〇）おどん、二おどの、時とたる

これは公的魔術師（琉球語の所謂時之大屋子）としてのオモロネヤガリを謳つたのであるが、これを翻譯する前に、一通りその語釋をしておく必要がある。

（一）おもろねやがりは、人名オモロの詩人にして時取りの名人、今の尚侯爵家の太祖尚圓王の子尚眞王時代の人である。（二）時とたるは日の吉凶を占ひたるの義。日の吉凶を占ふ人を古くは時とやり又はゑがとやりといつた。（三）まさしやは正し又は適中すの意。（四）おふれは來ませ。（五）よそわては國家を平穩にして。（六）ちよわれは在せ。（七）せるむねやがりはおもろねやがりの對語。（八）きやうちぬきまるはその異稱。きやのうちには御城京のうちの事といふ註がある琉球古語の辭書『混效驗集』に。『きやのうちぬきまる。時取の名人也。もくだよのかね。是も時取の名人也』といふことが見えてゐる。このもくだよのかねは、有名な公的魔術師武久田大時のことで、きやのうちぬきまるはその高弟であつたといふ口碑がある。京の内ぬき丸といふ名から判斷して見ると、彼はいつも宮中に出入してゐた詩人であると思はれる、（九）ぐすくは城。（一〇）おどんは宮殿又は大名などの邸宅、

これを文字通りに譯して見ると、オモロネヤガリが占ひたる時は奇しきかな。（オモロネヤガリよ、）來ませ、（來りて）國家を平穩ならしめよ。欽定詩人セルムネヤガリが選びたる時は奇しきかな。二ケ處の城を築く時、日の吉凶を占ひしは彼ぞ。二ケ處の邸宅を造る時、日の吉凶を占ひしは彼ぞ。といふ意になる。十三章にも亦彼を謳つたのがある。

一 おもろ、とのばらよ
二 すゑの、くち、まさしや、）
三 おしやへ、しちへ、）
もちみちへる、ぐすく
せるむ、とのばらよ

（一）おもろとのばらはオモロ殿原で、詩人の義。（二）すへのくちは發音。（三）おしやへしちへの意味は判然しない。物貨もてとか貨物もてとかの義があらう。（四）もちみちへるは充滿するの義。

詩人よ、汝の發音は能く適中す、この城は貨物にて充滿せり。の意である。これで見ると彼が詩人であると同時に、所謂

コマトキ（古ひの能く當る現の義）であつたことが能くわかる。今から二百四五十年前に琉球を支配してゐた名相向象賢の『仕置』に、

前々より時之大屋子とて文字之一字も不存者を百姓中より立置、日の吉凶を撰、萬事用候得共、此前より唐日本之暦用可由申達相濟候事

と書いてあるのを見ると、此頃まで時之大屋子といふ覡（トキ）があつて、民間で勢力が有つたばかりでなく、政府の御用をも務めてゐたことがわかる。清の康熙四十五年（西暦一七〇六年）程順則等の學者によつて編纂された『琉球國中山王府官制』に巫覡長、時之大屋子といふ職名があるのを見ると、この頃までこの職のあつたことがわかる。康熙五十二年に編纂された『琉球國由來記』に毎年十二月に、公議（王府）から國頭の邊土地名〔へ御水を取りに、時之大屋子を遣はす時、琉球神道の本山聞得大君御殿から供物を渡されるが、彼が取つて來た御水で除夜に、神體の一たる御火鉢を清める儀式があるといふことが見えてゐる。これで見ると、この公的魔術師は、政治上ではとうに其の勢力を失つたが、宗教の上ではまだ多少の勢力を有つてゐたことがわかる。時之大屋子は其の漢名巫覡長の示す如く、トキ（覡）やユタ（巫）の頭であるから、祭政一致時代には可なりの勢力を有つてゐたに相違ない。それから當時トキ・ユタの職業の公認されてゐたことも明白である。組踊（琉球語の脚本）「孝行の巻」の人身御供の時に、時の大屋子が出て、活動するところなどは、この邊の消息を語るものである。最初に、伊祖の領主の頭取が出て來て、北谷無漏池に大蛇が棲んでゐて、その爲に風雨の根が絶えない。この一兩年不作が續いて租税は納まらず、おまけに餓死するものがあちこちに出た。國民が心を一にして、神意を伺ふと、十四五歳位の處女を蛇の餌にしたら、世並みがよくなるとの神託があつた。誰か萬人に代つて、今度の犧牲になるものがゐたら、兩親はもとより、親類のものに至るまで、御引立て下さる、といつて高札を立てる。と、ある孝女がそれを見て、一家の困難を救ふ爲に老母のとめるのもきかず、自ら進んで、犧牲にならうと申出る。そこで無漏池のほとりに祭壇を設けて、いよ〳〵人身御供をやるといふ役になる。時之大屋子がこの可憐な孝女を列れて來て、

たう〳〵わらべ、祭り時なたん、果報時になたん、急ぎ立ち登れ、お祭りをすらね。

といつて、犧牲を祭壇に坐らせ、それから

今日のよかる日に、けふのまさる日に、我の覡、我の物知りの、御祭りよしゆもの、おたかべよしゆもの、このわらべ

得て誇れ、このわらべ取て誇れ、うんきやらや又からや、風の業するな、雨のわざするな、あゝたうと〳〵。

と唱へると、大蛇は口から火を吐きつゝ出て來て、この犧牲を受取らうとする。其の刹那に、神が天降して、孝女を救ふ。この奇蹟を見て、頭取が驚嘆して、

あゝ天道も近さ、神も有るものよ、神もあるものよ。

と叫ぶと時之大屋子も、

あゝ天道も近さ、覡もあるものだやべる。と、自畫自讃をやるといつたやうな仕組になつてゐる。この劇は琉球の政治家が神託を伺つて、政治を行つてゐた時代、即ちトキ、ユタが幅をきかしてゐた頃の傳説にその材料を取つたのであらう。それからこのユタといふ言葉は、文獻にはよたになつてゐるが、和國語のミコ又はカンナギに當るから、巫といふ漢字をあてはめたらいゝかも知れない。清の康熙四十五年(西暦一七〇六)頃編纂の『女官御双紙』には、「よたのあむしられ一員、下庫理出御並行幸の御時殿中の美御みさだり(先行)勤めらる」と見えてゐる。第八冊の六十二章、アカインコを謳つたところに、「あかの、あゑつきや、しまの、よた、やれば」と見えてゐるが、これが恐らくよたといふ言葉が琉球の文獻に現はれた最古のものであらう。そしてこれで古くは男子の場合にもよたといつてゐたことがわかる。今日の琉球語では、占ひのことをトキウラカタ又はトキハンジといつてゐるが、このトキは男カンナギ即ち覡のことで、この言葉は田舍には今尙遺つてゐる。私はかつて占ひの上手な老翁をさして「コマトキ」といふことを聞いたことがある。けれども琉球の標準語では、トキユタ(覡巫)といふ熟語があるのみで、トキといふ語はとうの昔死語となつて了つた。兎に角巫覡のことを古語で、時とやり、ゐがとやりといつてゐるところから考へて見ると、トキは時や日の吉凶を占ふところから來た言葉のやうにも思はれる。それから琉球語で、トキ、ユタのことをひつくるめて物知りといつてゐるのは注意すべきことである。日本の文獻で、物知人といふ言葉の始めてあらはれたのは、龍田風神祭の詞であるが、平田篤胤翁がその『たまたすき』の中に、神祇の情態を知り明せる人と解されたのは卓見といはなければならぬ。

一寸横道に這入つたが、今少しオモロネヤガリの素性を明にする必要がある。琉球の漢詩人喜舍場朝賢翁の『東汀隨筆』に

國王の御墓を玉御殿といふ。昔に稱するには、玉陵と書す。綾門の路傍に在り。三個相並ぶ。中の御墓は初め葬御せらる時、葬り奉る所なり。東の御墓は御洗骨の後御夫婦の遺骨を厨子に納め奉る所なり。西の御墓は御子部を葬り奉る所な

り。中の御墓内に一の石厨子あり、銘もあらず、何人たるを知らず、世に是れ武久田大時の髑髏たりと云ふ。昔何王の時代たるを知らず、巫道盛んに流行し、妖術を以て人を眩迷せしむるとて、堅く厳禁せらる。其時武久田其魁となりたるを以て、其術を試みんと欲し、匣に鼠一匹を入れ、武久田を召して幾匹ありやを占はしむ。武久田占つて三つありと云ふ。王以て験あらずとて、之を誅せらる。蓋を開けて見るに、果して子を産して三匹あり。王悔みて玉陵に葬らせ給ふと傳へらる

といふことがあるが、もとの首里市長知花朝章氏も、故尚泰侯の葬式の時、この疑問の厨子を見られたとのことである。琉球の木村鷹太郎といはれた故知念積敦翁の話によると、この時武久田の弟子のキヤノチ（きやのうちぬきまる即ちオモロネヤガリ）とアガリカタカネの二人が、かういふ神通力を有つてゐる人を殺して大變だといつて騒いだので、首里王府の方では大ぶうろたへたあげく、たうとうその死體を玉陵に葬つたといふことである「おもろねやかり、あかいんこがおもろさうし」の二十六章に、かういふのがある。

おもろ、ねやがりや、
せるむ、ねやがりや、
とひや、くさ（一）す（二）、ちよわれ、
しよりもり、ちよわる、
おぎやかもい（三）、がなし（四）
てにに（五）、てる（六）、ほしじよ（七）、
ほし じゆ、さに（八）、しよはれ（九）

（一）とひやくさは千年。（二）すはこそに相當する助辭。（三）おぎやかもいは尚眞王の神稱。（四）かなしは敬語（五）てには天。（六）てるは照る。（七）ほしじよは星をこそ。（八）さには算（九）しよわれはし給へ。

オモロネヤガリよ、千年もながらへかし。首里城に在す、尚眞王の、天に輝く、星をこそ、星をこそ、占ひ給へ。の意。これで見ても、オモロネヤガリが尚眞王時代の人であることは最早疑ふ餘地がない。彼は時の大屋子となつて、宮中に出入することが出來た。十七章に、

おもろ、ねやがりや、
せるむ、ねやがりや、
くにたかい（一）、

二しよりもりぐすく、かち
三はやく〳〵
四おみつかい、おがで
五がゞ、おらに

………………

(一)いゝいゝくになかは國中。首里城内アザナの東部外にクンナカの御嶽といふ靈所があつて、『琉球國由來記』には、國中城となつてゐるが、古くは今の首里城を入れて、この一帶の高臺をクニナカ(國の中央の義)といつてゐたに相違ない。それは『くになかのしよりもりぐすく』なる文句を見てもわかる。(二)いゝかちはの方へ、(三)いゝいゝはやく〳〵は一時も早く。(四)いゝいゝおみつかいは迎へ奉りて。(五)いゝかゞは輝き。(六)いゝおらには居らんものを。

オモロネヤガリを、クニナカなる首里森城に、一時も早く、迎へ奉りて、其の光に浴せんものを、の意。如何に宮中で歡迎されてゐたかは、これでよくわかる。彼は其の名の示す如く、オモロの詩人であつた。十二章に、

おもろ、ねやがりや、
せるむ、ねやがりや、
おもろ、たね、こや、べら

………………(オモロネヤガリよ、オモロの種を乞ひ侍らむ、の意)とか、四十章に、

おもろ、ねやがりや、
せるむ、ねやがりや、
おもろど、そない
せるむど、さかな

………………(オモロネヤガリは、朝夕、オモロを御物とし、セルムを肴とすの意)とかあるのを見てもわかる。彼が高齢に達して、如何に衆望を荷つてゐたかは、十一章に、

おもろ、ねやがりや、
ひやくさ、ぎやめ、
ちよわれば、
しま、たづな、
くにごしやん、
みおやせ
せるむ、ねやがりや

とあるのでもわかる。

(一)ひやくさは百歳。(二)ぎやめは迄。(三)しまたづなは島を手綱に。(四)くにごしやんは國を杖に。(五)みおやせは奉れ。

オモロネヤガリは、百歳までも、ながらへ給へば、島を手綱とし、國を杖とし奉れよ、の意である。彼は公的層術師であると同時に、欽定詩人であつたらう。『おもろさうし』の中には、彼を謳歌したオモロは四十三首もあるが、彼が作つたといふオモロは一首も見當らない。あることは沢山あるに相違ないが、作者の名を殆ど記してない『おもろさうし』の中から彼の作を探し出すといふことは、今のところ困難といはなければならぬ。兎に角彼を謳つたオモロを通して彼の生活をかいま見ることは出來たが、彼の作といふものが見當らない限り、彼の思想は容易に知ることが出來ない。けれども彼が御用詩人であつたとすれば、第廿一冊の二十章の八重山征伐のオモロや第十三冊の十七章の眞南蠻へ行く使者をおくつたオモロのやうな、國家的の事件を歌つたオモロ外二三首は、同一形式のものであるから、大方この人の作になつて了ふだらう。試みに後者を紹介してみよう、

大ぎみは、たかべて、
せぢあらとみ、おしうけて、
大君に、おゑちへ、こうて、はりやせ
せだかこは、たかべて
あぢおそいぎや、おさうぜや、
むかう、かた、しなて
おぎやかもいが、おさうぜや、
むかう、かた、しなて
あぢおそいぎや、おやおうれ、おしうけ、
かず、まぶりよは
げらへ、せぢあらとみ、くりうけ、
かず、まぶりよは
ぶりしまの、かみ〳〵、
あよそろて、まぶりよは
きみはゑは、たかべて、
せぢ、あらとみ、おしうけて
のろ〳〵は、たかべて

これは[illegible]ゑとのおもろさうし中のしよりゑとのふしで「正徳十二年十一月廿五日ひのとのとりのへにせぢあらとみまなばん

に御つかいめされ候時におぎやかもいたのみてづからめされ候ゑと」（西暦一五一七年、勢治荒富丸を眞南蠻に派遣された時尚眞王が親ら朗讀された歌）といふ説明がついてゐる。これは「わが王神に祈りて、勢治荒富丸を浮べぬ、わが君の爲に、順風を乞ふて、船出せよ。大御心は至る所にて成就せむ。尚眞王の御意は至る所にて迎へられむ。わが君の大御船を浮べぬ。風よ吹けかし、美しき勢治荒富を浮べぬ。風よ守れかし。琉球群島の神々よ、心を一にして祈れかし。久米の君南風、勢治荒富を浮べぬ。祝女等よ、祈れ。」といふことである。

最初にあげたあまへはちへがふしに、二ケ所の城を築く時、彼が日の吉凶を占つたといふことがあつたが、琉球で諸侯が各地方に城を構へて割據したのは、四百年前即ち尚眞王以前であるから、彼が尚眞王の即位以前から有名であつて、諸侯の間にもてはやされてゐることが窺はれる。尚眞王が各地の按司部（諸侯）に首里存住を命じた頃、彼が既に首里城中に出入して、幸福な生活をおくり、當時社會制度の激變の爲に、職を失つて、放浪生活をおくつてゐた群小詩人の羨望の的になつてゐたことは、彼を謳歌した四十三首のオモロが能くこれを證明してくれる。

オモロネヤガリのことはこれ位にして、次には彼と全く素性を異にした放浪詩人アカインコを紹介することにしやう。「おもろねやがりあかいんこおもろさうし」の七十四章きみがなしふしに、

あかのおゑつきや、
ねはの、おゑつきや、
とも〻と、ちよわれ、
あしかわの、あらぎやめ、
くもさうず、あらぎやめ、
いしぎや、のちてば
いしは、われる、物
かねが、のちてば、
かねは、ひぢやむ、物

之を直譯して見ると「阿嘉の長者よ、根波の長者よ、壽かれ。萊生ゆる小川の流るゝ限り。汲む清水の湧き出づる限り。君が命を石に譬へばや、石は破れるものなるを如何にせむ、君が命を金に譬へばや、金は錆む物なるを如何にせむ。」といふことになる。古琉球人がどの位その詩人を尊敬したかがこれでよくわかる。『混効驗集』を繙くに、あかいんこにねにのこの事で

ねはいんこともいつた。オモロの詩人である。オモロネヤガリの同時代の人で、「おもろねやガリ、あかいんこおもろさうし」を見ると、時の人は之をおもろてだ（詩王）又はゑとてだ（歌彦）と稱へてゐた。この双紙の四十六章には

あかのこが、
ねはのこが、
もゝちやらの
ぷれおもい、てだ
……………

（アカインコは、諸侯の與つて、愛する君ぞ）と見えてゐる。
又六十八章には

あかの、おゑつきや、
ねはのいん、おゑつきや、
かみしもの、人ひぢめ、てだ
……………

（阿嘉の長者は、根波の長者は、上下の人を、治むる君ぞ……）といふことがある。又八十一章にも、

あかの、おゑつきや、
しま世のあらぎやめ、ちよはれ、
ねはのおゑつきや、

（アカインコは國家の有らむ限り、ながらへかし）といふのがある。かういふやうに、謳歌されたに拘はらず、オモロが衰へるにつれて、このオモロ詩人の名も全く忘れられて了つた。中頭郡讀谷山村の楚邊といふ所には、毎年九月二十日に、赤犬子の祭といふのがあるが、土地の人たちは、その祭る神がどんな神であるかを知らない。そこにはたゞ、赤犬子といふ人は偉い人で、人間と赤犬との間に出來たものだといふ民間語原說と赤犬子原といふ地名とが遺つてゐるばかりだ。舊おもろ主取故安仁屋眞刈翁は赤犬子はオモロの名人アカインコのことであると、私に話したことがあつた。口碑によると、アカインコは、津堅島の生れで、三味線を提げて、沖繩中を放浪して歩いたといふことであるが、同島にいつて聞いて見ると、島の人達はアカインコの名を知らないのみか、その傳說らしいものさへ持つてゐない、けれどもこの人が沖繩中を放浪して歩いたといふことは、オモロの說明するところで、その蹤跡が、沖繩本島はもとより、交通不便な伊平屋島のやうな離島でも見出されるのである。

アカインコは詩人であつたと同時に、音樂家であつた。琉球音樂の大家野村安趙氏の著書『絃聲之卷』に、

本國絃聲の其初をたづぬるに、ふるき言の葉に、

歌と三味線の、むかしはじまりや、犬子ねやがりの、神のみ作。

千はやぶる神の代の跡をのこして、今までもうたひやうたふ。

といふことがある。この「歌と三味線のむかしはじまりや」といふ上句を一見しただけでは、アカインコが歌の鼻祖でもあり、また三味線の鼻祖でもあるやうだが、彼が歌の鼻祖でないことは明であるから、この歌は、琉球で初めて歌を三味線に合はせて歌つたのは、アカインコだと解した方がいゝと思ふ。小中村博士の「歌舞音樂略史」を讀むと、三味線は支那から琉球に渡つて、それから日本に渡つたといふことが見えてゐるが、この說の可否は暫らく問はずにおいて、アカインコは、この新音樂器が舶來して間もなく、之を自國の歌謠に合はせて歌つた最初の人であることを推定しても差支あるまい。琉球語では「歌三味線」といふと、歌を三味線に合はせてうたふことを意味するから、この歌の第一句の「歌と三味線の」もこの意味に解すべきもので、音節の數が合はす關係から、その間にとを入れたまでのことであることを知らなければならぬ。

アカインコを謡つたオモロは四十首もあるが、これらを能く調べて見ると、彼は單に詩人や音樂家であつたばかりでなく、航海者でもあり、又オモロネヤガリと同じく、興でもあつたやうだ。「おもろねやがりあかいんこおもろさうし」の六十二章に、「あかのおゑつきや、しよの、よいだ、やれば」とある詩句でも、彼が興であつたことは明であるが、第十七冊「恩納より上のおもろさうし」の四十二章あおりやへふしを見ると、これがもつとはつきりして來るのである。

あかのこが、
いぢへた、おて、みれば、
みやきせんは、
御さけど、もりよる
ねはのこが
ゑひやに、おて、みれば、
みやきせんは

これはアカインコが伊平屋列島中の伊是名島にゐて、對岸の今歸仁にゐる阿應理屋惠按司といふ女の神職が、尙家發祥の地

伊平屋を遙拜してゐるところを透視したのをうたつたオモロである。これを譯して見ると、アカインコが伊是名島にゐて、遙に今歸仁の方を眺めると、今しも阿應理屋惠按司が、神酒に盛つて、此處を遙拜してゐるところである。といふことになる。それから同双紙の六十五章月てだのやにてゞかゞちよわれがふし（日月の如くに照り輝き給への歌の義）に。

あかの、おゑつきや、
ねはの、おゑつきや、
（一）このひやし、（二）あげれ
（三）しもの、世の、ぬしの、
（四）あぢの、またの、あぢの
（五）やまと、（六）ゑむ、（七）せんどう、
つくしゑむ、せんどう

といふのがある。

（一）このひやしは此の拍子を、即ち拍手喝采を、（二）あげれは奉れよ。（三）しもの世ぬしのはもと南方の國主の義で、三山時代即ち五百年前の琉球の分爭時代に、島尻地方のしまおそひ大里に割據してゐた按司の稱であるが、三山統一の後までも、この邊の領主はこの稱を使用してゐたことがわかる。（四）あぢのまたのあぢは按司中の按司（五）やまとは大和。（六）ゑむはへも。（七）せんどうは船頭。（八）つくしは筑紫

アカインコを拍手喝采せよ。彼は按司の又按司と稱ばれた下のよのぬしの爲に、船頭となりて、大和及び筑紫へ赴きしほどの人なれば。の意。彼が航海者であつたことは、これで能くわかる。彼が作つたといふオモロは『おもろさうし』に二三首しか見當らないが、第十冊ありきゑとのおもろさうし（旅行の歌）や第十三冊船ゑとのおもろさうし（航海の歌）に出てゐる立派なオモロの中には、彼の作が澤山あるやうな氣がしてならない。彼が器用な人であつて、至る所で歡迎されてゐたことは、前にあげた「もゝちやらの、ふれおもい、てだ（諸侯が集つて愛する君）といふ詩句が能く說明してゐるが、オモロネヤガリが、首里城の京の内で幅をきかしてゐた御用詩人であつたに反して、彼アカインコは三味線一挺を提げて、津々浦々をうたひまわつた放浪詩人であつた。尙眞王以前の琉球人は、所謂邑落生活を營んでゐたが、氏神を中心として集つた彼等邑落民に取つては、政事は即ち祭事であつたから、集會のある每に、神事に關するそのオモロの詩人は、日本上古の語りべのやうに、神事に關する敍事詩を謠ひとべ（民衆）に語つて聞かせたのであらう。或

は叙事詩を作つて、手拍子や鼓に合はせて謡つたこともあらう。第十四冊いろ〳〵のゑさおもろさうしの六十六章に

くばのしぎや、おもろ、
とか、では、とうさ、
みきや、ばさめ、
世かけ、ひやし、
みおやせ
くばのしが、せるむ、

といふのがある。

（一）くばのしは久場の子、オモロの詩人。（二）とかは十日。（三）ではといへば。（四）とうさは間遠い。（五）みきやばさめは三日おきに。（六）よかけひやしは国を興す拍子。世もかひやしともいふ

久場の子がオモロは、十日といへば、間遠い。三日おきに、士氣を鼓舞する演奏をして貰ひたい。の意である。これは中頭地方の中城辺でうたはれたものであるが、第十七冊恩納より上のおもろさうしの二十三章にも、同じ意味のが出てゐる。これを見ても、古琉球の邑落生活のどんなに楽しいものであつたかゞ能くわかる。けれども間もなく琉球古代史の幕は下りて、この享楽の日は終りを告げた。即ち尚真王の中央集権によつて、三山の按司部（各邑落の領主等）は首里に引越さなければならないやうになつた。この社会組織の変遷によつて、氏神を中心として叙事詩を歌つてゐたオモロの詩人たちの中には、さしあたりその職業を失ひ、銘々の郷里を離れて、放浪したのもゐたらう。アカインコも亦その一人であつたに相違ない。団体生活を離れる刹那に、人間の個人性が目覚めるものとしたら、そこからは自然抒情詩が生れてこなければならぬ。

アカインコは或時中城の安谷屋といふ村へいつたことがあつたが、水に不自由な君臣が旱の時に、共同して井を堀り、清水を得て喜んでゐるのを見て、

おたにやの、いぢみ、さうず、
もゝぢやらの、うらやむ、さうず、
きもあぐみの、いぢみ、さうず、

と歌つた。安谷屋の清水よ、諸侯の羨む清水よ、けにもゆかしき清水よ。の意である。

官民親和して、喜びを共にする美を写した所は、首納の長数紀略中の「井戸の歌」を読むやうな気がする。又この頃、村中

な徘徊してゐると、一人の童子が筏の側を游つて來るのを見て、その筏を一本呉れないかと、いつたので、童子は早速筏を卸して鎌で筏の皮を去り、四つ割りにして呉れた。そこでお前の名は何といふかと聞くと、松と答へたので、

あだにやの、わかまつ、
あはれ、わかまつ、
よださちへ、
うらおそう、わかまつ
きもあぐみのわかまつ

と讃美した。安谷屋の若松よ、あはれ若松よ枝繁りて、浦々を襲ふ若松よ、心ゆかしき若松よ。の意である。これは組踊「執心鐘入」（中山傳信錄の所謂鐘魔）のモデルにされた中城若松の將來を祝福したのである。この二首は何れも中城越來のおもろさうし中のもので、アカインコが作つたオモロはこれ丈しか見當らないが、作者の殆んど知れない「おもろさうし」中には、彼の作はなほほかにも少くないだらう。特に中城越來のおもろさうしには、この二首と同形式のオモロが澤山あるやうに思はれる。そしてこの双紙中のオモロは、大方短歌めいたもので、何れも旋律的であるから、或はアカインコが三味線に合はす必要上作り始めた新しい詩形であるかも知れない。

私はオモロが、叙事詩から抒情詩に遷り、長いのが短いのに變つた理由を、社會制度の變遷に求めたが、これには、今一つ三味線の影響があることを附加へて置かなければならぬ。アカインコが所謂「歌三味線」を始めるまで、古琉球人がオモロを鼓に合はせて謡つてゐたことは、第十五冊の三章に、

あめくにやが、おもろ、
げらへ、おやつゞみ、
うちちへ、なり、あがらせ
あめく、しぎや、せるむ

といふオモロを見てもわかる。天久仁屋が創作したオモロに合はせて、すばらしい綾の鼓を「打つちへ、鳴り上がらせ」——一打よりは二打、二打よりは三打と、より高くより強く打鳴らせ。の意である。このオモロを誦するとき、私は特に壯大な旋律を感ずるのである。第八冊の六十一章に、

あかのこが、

おもろ、つゞみ、うたば、
もゝうら、うちよせれ
………………

といふのがある。この「おもろつゞみ」はオモロをうたふ時に使用するつゞみの意か、それとも歌を三味線に合はせてうたふのを「歌三味線」といつてゐるやうに、オモロをつゞみに合はせてうたふのを、さういつたのか、ここでは判然しないが、兎に角、當時オモロとつゞみと密接な關係のあつたことは、これで明になつて來る。多分は後者をいつたのであらう。さてこのオモロの意味は伶人にして詩人なるアカインコが「おもろつゞみ」を始めたら、百浦の人擧つて集合しろ、の意である。第十九冊の五章に、

さしき、かなもりに、
あやで、うちちへ、なよれば
せのきみと、きみと、
にしの、かなもりに、
上下の、みるめ
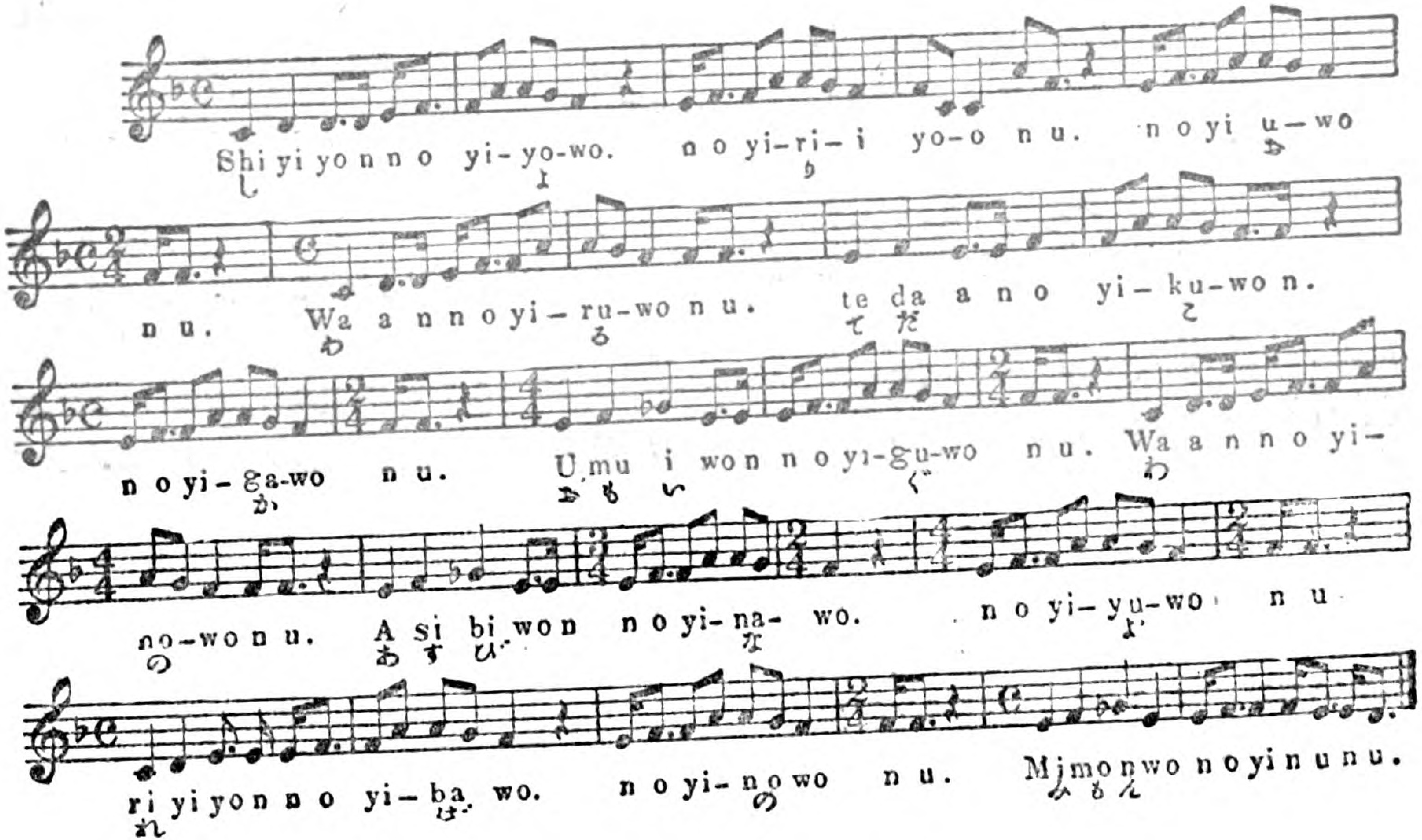
といふがある。そして「あやでうちちへ」には、「おもろ仕候時つゞみにて拍手を打事也」と註がしてあり、「なよれ」には、「鼓にておもろの時拍子を舞之風情之事也」と註がしてあるが、このオモロには、オモロを鼓にあはせて謡ひ、その上群集が手拍手を打つて、それに和してゐる真中で、佐敷の領主とその兒君とが一しよに踊つてゐる狀を謡つたのである。鼓の輸入されなかつた時には、或は鼓の無い所では、オモロを單に手拍子に合せて謡つたのであらう。

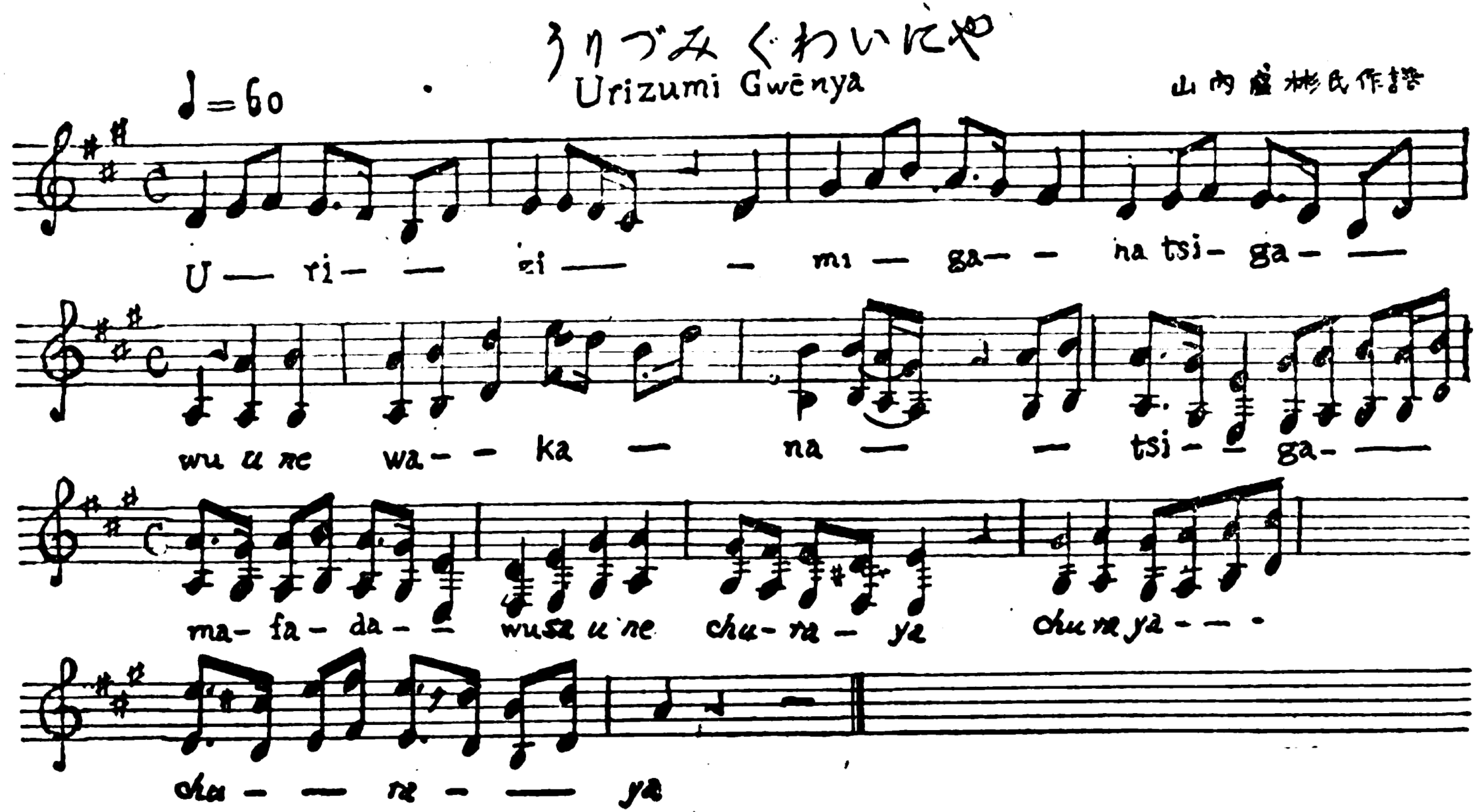
私はこれから新しい樂器を輸入された時、それが南島の詩形にどういふ影響を及ぼしたかを考へて見よう。いまだによむ歌とうたふ歌とが分離しない狀態にある琉球のことだから、その詩形が新樂器によつて影響されたことは、想像するに難くはない。思ふに手拍子に合はせた時のオモロと鼓に合はせてからのオモロとの間に、大した差異はなかつたであらう。手拍子と鼓とは何れも童歌のやうな單調子な曲と合はすに適してゐるから、オモロがいくら長くてもかまはなかつたのである。だから初期のオモロには、盛に對句が使はれて、おまけに韻を踏んだ叙事詩が多い（宮古島のあやごでも、八重山の歌でも、古いのは、何れも長篇の叙事詩になつてゐる。）けれども三味線が輸入されて以來、その詩歌の形式は著しく變化したに相違ない。思

御冠船の御時冊封觀劇の時のおもろ

しよりゑとのふし（假名を附してあるのが歌詞）

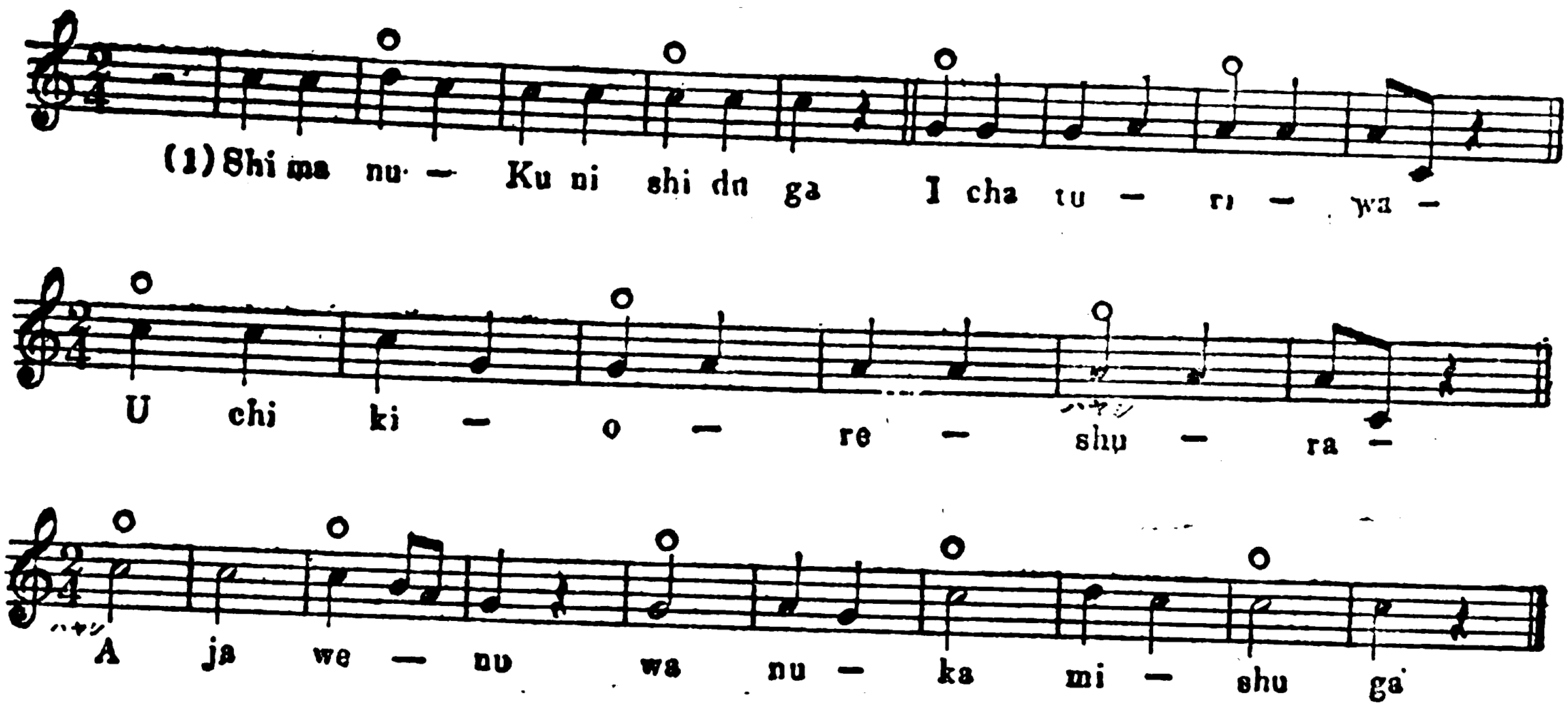
山内盛彬氏作譜




うりづみぐわいにや
Urizumi Gwēnya
山内盛彬氏作譜
♩=60
U — ri — — zi — — — mi — ga — — na tsi — ga — —
wu u ne wa — — ka — na — — tsi — — ga — —
ma — fa — da — — wusa u ne chu — na — ya chu ne ya — — —
chu — — na — — ya

Funaumui (恩納間切 恩納村)

○は鼓を撃つ



(2) Mura nu kuni-shidu ga. Tana turiwa, Uchiki ōrē shura. ハヤシは(1)に仝じ

ふに、皷が野外に適する樂器であるとすれば、三味線は室内に適する樂器である。そして敍事詩が皷に合はせて謠ふに相應しいとすれば、抒情詩は三味線に合はせて謠ふに相應はしい。かつて三味線をオモロに合はせて謠つたことがあるかどうかはわからないが、もしさういふことがあつたとすれば、その詩形は漸次短い方へ變つたに相違ない。オモロに短いのが增へて來たのは、或はその爲ではなからうか。それからオモロと八八八六調の琉歌とはずつと以前から並行はれてゐたやうだから、三味線がもてはやされるにつれて、オモロが衰へて、三十字詩が盛んになつたのは、寧ろ當然のことゝいはなければならぬ。

以上私は琉球の詩歌及び音樂の歷史に於けるアカインコの地位を略述したが、終りに、オモロの謠ひ方に數言を費して、この稿を結ばう。『おもろさうし』の第二十二冊みおやだいりのおもろさうしに收めてある四十七首中、八首だけは、明治十二年頃まで謠はれたもので、琉球音樂の硏究者山内盛彬君の作譜を見てもわかるが、著しく謠曲その他外來の音樂の影響を受けたやうである。そしてこれは樂器に合はさないで謠つたものであるが、オモロの謠ひ方本來の面目を失つたものであらう。オモロの姉妹詩に「やらし、くわいにや」といふものがあつて、首里那覇の婦人間に傳へられたものがある。それは家人親戚が海外に旅行した後で、相集り、手拍子や皷に合はせて、之を謠ひながら、連れて舞ひ、以て旅情を慰むるのであるが、オモロの謠ひ方の本流はむしろそこに流れていつたのであらう。その他地方の祝女が祭の時に謠ふオモリの謠ひ方にも、オモロの謠ひ方の古い形式が遺つてゐることを知らなければならぬ。因に云ふ。「やらし、くわいにや」には、根取（即ち音頭取）といふ者があつて、この歌を記憶して居り、依賴に應じて、音頭を取り、他をして之に和せしめてゐたが、目に一丁字も無い琉球婦人が「やらし」などのやうな三百二十ラインの長詩を記憶してゐたのは、不思議といはなければならぬ。第二冊の十章に

一きこゑ、なかぐすく、
二たまの、君てづて、
四よきや、のろす、
五おもろねや、
六とりよわれ

といふオモロがある。

(一)きこゑは名高き。(二)たまの君は神の名か(三)てづては手を摺りて卽ち祈りて(四)よきやのろは祝女の名。(五)おもろねやはオモロ音頭をば。(六)とりよわれは取り給へ。

名高き中城！玉の君をことほぎて、よきや祝女こそは、オモロの音頭を取り給へ、の意である。これで、オモロを謠ふ時にも、やはり音頭取のゐたことがわかる。

以上は雜誌「日光」所載折口信夫氏の「日本文學の發生」といふ論文にヒントを得て物した琉球文學史に就いての一考察であるが、この稿が萬一日本文學史硏究者の參考にでもなつたら、望外の幸である。

頼朝と女性

近松秋江

一

源頼朝といふ人間は偉ら物とは思ふが、自分は餘り好きな人ではない。けれども彼が女性に關係のあつた一面を想像すると、私は、なか〳〵に此の英雄の情史について興味を感じ、且つ深い同情さへも禁じ得ないのである。

人として情事を解し風流を知らざる者を、玉の盃底なきが如しと、古人もいふてゐるが、彼れ頼朝が流竄の身から起つて天下の政權を掌握した英雄豪傑といふだけで、一點情事の逸話を遺さぬ人間であつたならば、いかに一層無趣味な、冷薄な、愛嬌のない人物として吾人に不愉快な印象を留めたことであつたらう。

ところが、英雄色を好むと古い諺にもいふとほり、頼朝は實に英雄らしく色を好んだ。彼は軍事と政治とにかけては威壓が効き、抜け目なかつたにも係はらず、情事に關しては、恰も明治初年の元勲政治家が花柳界の俠な女性に弱い尻を抑へられて頭の上らなかつたごとく自分の家來共の手前にいろんな、愛嬌に富む破綻を暴露してゐる。

特別に深い研究をしない吾々にでも、頼朝の情事として普ねく知られてゐるのは伊豆の流人であつた頃伊東祐親の女に通じてその戀が終を完うしなかつたこと、その次が北條時政の女政子と通じて伉儷の契を得たこと。鎌倉の覇業漸く成つた頃ある美姫を蓄へてゐて、それが政子の知る所となり、一と騒ぎ持ち上つたこと。これだけは日本外史にも書かれてゐることで、少年日本外史を讀んだほどの人に皆知つてゐることである。

頼朝は沈勇にして喜怒哀樂を容易に顏に表はさなかつた人であるといふが、是等三人の女性に關係した方面から見た頼朝は、彼の性格を想像するに最も好い鍵鑰である。

二

賴朝も多くの平凡人と同じやうに幾度か戀をした。そして度々破綻の苦を嘗めてゐるが、彼はその苦を、毎時も凝乎と強い意志の力で嚙み締め踏み堪へてゐる。私が賴朝の戀に特に興味を持つのはその點である。これから私は少しの間、彼の三人の女性に關した點について賴朝の戀と、彼の戀の難關に際して發露した彼の性格とを思つてみよう。

古今東西の文學に書き表はされた英雄偉人の戀愛に關する記錄は珍しくないが、今日でも私の心を最も強く打つものはシエークスピアの四大悲劇の一つであるオセロの悲戀である。これは實錄ではない沙翁の創作であるが、これを讀んでも如何に、あの平和溫厚なる容貌の持主であるウイリヤム・シエークスピアが宇宙大の博大且つ深刻なる心境の經驗者であつたかゞ偲ばれて、今更この世界の文豪の肖像の前に拜跪させられるのである。

それで、オセロの悲戀は賴朝の情事とは何等の交渉がないやうであるが、私が今特に賴朝の戀について思つて見ようとする要點とは多少對照の意味の關係がないでもない。オセロは遂に戀に負けた。賴朝は毅然に戀に勝つた。オセロは戰爭には強い武夫であつたが、一婦人に對する戀には弱かつた。オセロほどの勇者でありながら戀には脆く、半ば自分の描いた夢魔の爲に到頭身を破滅してしまつた。その悲しい深刻な矛盾を取扱つたのが沙翁の大手腕である。

オセロの戀は悲痛なるものであつたに違ひないが、しかし賴朝の戀の悲みもオセロの悲みに比べて決して深刻でなかつたとは云へない。否な、ある場合に於ては賴朝の悲戀の方が遙に痛恨なものであつたらう。少くとも外形だけを見たところでは、さうあるのが當然である。それは賴朝が最初の戀であつたところの伊東祐親の女との悲しい經緯に於てさうであつた。

ある意味に於て常に現代に最も多く興味を持ち、且つ現代の認識者である私は、賴朝の如き、七百年も遠い過去の世の英傑について、さまで興味を持つてゐる次第でもない。それは、彼の生活した時世、彼の境遇、彼の事業等が今日の吾々の生活と殆ど全く沒交渉であるから、幾ら彼の人物や痛快なる偉業に感服したところで、今日の生活に、引いて參考とすべき必要がないからである。豐臣秀吉は小田原に北條氏を征伐した時足序に鎌倉八幡宮に詣し、賴朝の木像の前に立つて、卑賤より起つて天下の權を掌握した者は卿と吾とのみである。併しながら卿は元より源家の嫡流であるが、吾は本來の卑賤であると、磊落な

る秀吉は笑談したさうである。その後德川家康が豐臣氏に次いで天下の政權を掌中に收めた時には、秀吉とは違つた意味で、賴朝の治績にひどく敬服し、侍臣をして鎌倉時代の文書を研究せしめ、政治の參考に供したといふことである。(德富蘇峯氏の大日本國民史にも書いてある。)

即ち秀吉や家康などの、封建政治、幕府政治の行はれた時代ならば、立志傳的にも、又、政治上にも賴朝の遂行した事蹟は大いに參考になつたのであるが、吾々の現代の生活は、源賴朝の時代を稽ふべく餘りに時代精神が異り過ぎてゐるのである。それゆゑ私は格別源賴朝に就て研究してゐる譯ではない。否な少年時代から讀み古してゐる一部の日本外史と源平盛衰記と、吾妻鏡の一部分との他には彼に關する何等の知識もない。そしてその知識のないことを悔ゐも恥ぢもせぬ。何となれば、もし私が政治家の傳記を學びたいと思へば、七百年前の賴朝の傳記を知る前に世界の現代政治に關係のある英國のアスクイスかロイド・ジョーヂが、米國のウイルソンの傳記でも讀んだ方が、どんなに私を賢くするか知れないからである。

けれども境遇とか時代とかを遙かに超越して、人間不朽の本性に根ざしてゐる戀愛といふ問題になつて來ると、七百年の昔も今も變りはないのである。故にかういふことが言ひ得られる。賴朝の兵馬の事蹟など、今日の吾々とは全く風馬牛であるにも係らず、此の英傑の人間らしい戀の經緯ばかりは、永へに吾々の興味の中に新しく生きてゐるのだ。

三

嘗て、源平盛衰記を讀み、賴朝が、伊東入道祐親の女に通じ、千鶴丸といへる三歳になる男兒さへ出來てゐる戀慕の仲を父入道の爲に剖かれ、剩つさへ、いたいけなる、賴朝戀愛のその男兒は祐親入道の命により沈みを附けて淵に投せられ、女は奪はれて他人に嫁せられ、尚ほその上に賴朝は自分の一命までも祐親の爲に奪はれんとしたといふ悲痛なる、一條の場面に至つて、私は、此の冷靜にして理智的なる英雄兒の不幸なる運命に同情せざるを得なかつた。

事新しくいふでもないが、「源平盛衰記」に書いてある、その慘事の概略を取り摘んでいふとかうである、

賴朝が伊豆國に流罪せられてゐる時分、その國の豪族伊東祐親に頼つて居つた。祐親には四人の娘があり、その二人は既に他に嫁し、三人目の娘と兵衛佐と人を忍ぶ仲となつた。すると娘はいつしか兵衛佐の胤を宿し、生まれたのは玉のやうな男の子であつた。兵衛佐は殊に悦んで寵愛してゐた。名を千鶴丸と

呼んでゐた。それがやう〳〵三歳になつた春の頃、乳母に抱かれ、數多の幼いお供などを具して前栽の花を折つて遊んでゐると、その頃、祖父に當たる祐親入道は恰も京都の大番が果てゝ伊豆國に歸つてゐたが、一日ふとその幼い子供を見付けて、「その子供はどうした子だ。それはたれぞ。」と訊ねた。傍に附いてゐた乳母は、即座に答ふる術を知らないで、自分はその場を外づしてそうつと向ふに逃げてしまつた。祐親は家に入つて、妻女にそれを訊ねた。妻は遂に隱さんよしもなく「あれぞ、入道殿が京洛に上りておはす留守の間に三女が、さるやむごとなき殿との仲に設けたる幼き者にておはす」と、實を明かした。

祐親入道怒つて「誰れぞ、そのやむごとなき殿とは」と責め問ふた。「兵衛佐殿」といふを聞いて、祐親はます〳〵立腹し、「今平氏全盛の折柄、商人修業者など名もなき者を男にしたといふならば、却つてそのまゝにさし置いてもよいが、源氏の流人を此の祐親が婿にとつたと知れては、平家のお咎めあらん折はいかゞ申すべき」といつて、雜色三人、郎黨二人に嚴命して、やう〳〵三歳の春を迎へたばかりの可愛ざかりの千鶴丸を呼び出して、石を縛し伊豆の松川の奥の白瀧といふ淵の底に沈めよといひ附けた。三つになる千鶴丸は幼な心にも、おぼろげにそれを覺つて、泣き叫えて逃げようとするのを、取り押へて下人の手に渡した。眉目風姿紛らふべくもなく兵衛佐に似てゐるのを見ると、流石に雜色共も憫れに覺えて、何とかして救したくなく思つたが、祐親の命に從はなければ、汝等は他心あるかと、自分達の頸を斬られるのが恐ろしさに、泣々幼兒を抱き取つて松川の淵に連れ行き、沈みを附けて水底深く投げ込んでしまつた。そしてその母親なる娘を同じ國の住人江間小次郎なる者に嫁せしめた。兵衛佐の憤りと悲しみと思ひ知るべしである。愛兒は慘殺され、愛人は奪はれて他の男に與へられた、凡てが殘忍酷薄を敢えて爲て意に介することをしない野蠻な上代のことであるが、頼朝はつく〴〵と流人の身の甲斐なきを悲み歎いたことであらう。「盛衰記」には、「兵衛ノ佐此事どもを聞き給ひ嗔る心も猛く、歎くやも深うして……」と書いてゐる。實際、容易に喜怒を色に表はさないといはれた鐵の如き意思の頼朝もその時ばかりは、胸を打碎かれたと同じやうに心の弱きを覺えたことであらう。彼は激怒悲憤の情遣る瀬なく、祐親入道を討たんと思ふ心、千度百度逸つた。けれど、そのたび毎に凝乎と耐え立つ胸を撫でゝ、無念の頭振りをふり、「いや〳〵自分は大事を思ひ立つ身である。その事を成ずして、今一時人一幼兒の故を以て私の仇を報ぜんとて、身を亡ぼし命を失ふ事愚かの至りである。大なる志有る者は、少しの怨みを堪へねばならぬ。」

と、自から思ひ宥めて、猛る心を制し、無念の齒を嚙んで時節の到るを待つてゐた。

祐親入道はそればかりではない、平家の嫌疑の身にかゝるを憚つて、序に兵衛佐をも果たさうと企んでゐた。すると祐親の次男の伊東十郎祐兼が窃に其事を頼朝に告げ、

「父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞ひ候ひし上、猶ほも惡行を企てんと仕る。心の及ぶ處制止仕れども、若し思ひの外の事もこそ出でき侍れ。立ち忍ばせたまへ。」と、注意した。兵衛ノ佐はそれを聞いて、驚き且つ喜び、

「嬉しくも申したり、是れ年來の芳心なり。入道に思ひ懸けられては、いづくにか逃るべき。身に誤なければ、自害をすべきにも非ず、只命に任せてこそはあらめ。」と答へて、頼朝が流罪の間影の形に伴ふ如く常に彼の身邊を離れなかつた從臣の野三刑部盛綱、藤九郎盛長に意を含めて、

「頼朝一人逃出でんと思ふなり。是れにて祐親法師に故なく命を失はれん事いひ甲斐なし。汝等かくてあらば、頼朝居らざること人知るべからず。」とて、大鹿毛といふ馬に乘り、鬼武といふ舍人ばかりを具して、夜半に伊東の館を逃れ出た。そして道すがらも、

「南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽ちに捨て給はずば、征夷將軍に至つて四海を守り、神祇を崇め奉るべし。それ猶ほ叶ふべからずば、伊豆一國が主として、祐親法師を召捕つて、この怨を報い侍るべし。いづれも宿運拙うして神恩に預るべからずば、本地は彌陀如來に御座します。速に命を召して、後世を救け給へ。」

と、心に祈誓を籠めた。これは源平盛衰記の著者が語るところであるが、その時の頼朝の心中は正にこんなものであつたらう。

これを讀んで私は密かに思つてゐた。榮枯浮沈の極端から極端に劇しかつた頼朝の一生涯の中で、恐らくこの祐親の女との悲痛なる戀愛ほど彼にとつて感情上の不幸慘苦は無かつたであらう。この事件は單なる婦人と愛兒に對する女性的な悲哀であるにしても、涙あるのが本來英雄の眞面目である。この悲痛なる事件はきつと頼朝の一生涯に大轉機となつてゐるに違ひないと。すると、ついこの程、偶然人から借りて幸田露伴氏の「頼朝」といふ小冊子を讀んでみると、頼朝に關しては隨分詳しく研究して居られるらしい同氏は、頼朝が以仁王の令旨を奉じて伊豆に兵を擧げるに至つた、最も有力なる彼の内部的動機（インターナル・モーチブ）を伊東祐親の冷薄慘忍なる措置に憤激したことにあると斷定してゐる。私はそれを讀んで、ひどく共鳴を感じたのであつた。

頼朝にしてみれば、つくゞ自分ほど不幸なる者は又と世にないとまで悲み慨いたであらう。父の義朝は累代の家人なる尾張の長田忠致父子の爲に殺されてゐる。今又自分は、愛する女との間に擧げた一子千鶴丸は慘殺され、愛人との仲はその父祐親の爲に割かれて、溫情も容赦もなく他の男に與へられた。その上自分も、祐親の二子祐淸の告ぐる所なかつたならば二十年前の父義朝と同じ運命に終つたかも知れなかつた。

四

頼朝の如き男性的の人間には、源氏の衰運を挽回し、天下に跳梁跋扈する所の平家を討伐して無念の死を遂げた父義朝の遺靈を慰むることが最も大事であつたに違ひない。そして無論後年志を得て鎌倉に幕府を開き、日本六十餘州の總追捕使となつて天下の兵馬の權を掌中に收めた成功の悦びは、僅かに祐親の娘との戀の滿足や、愛兒千鶴丸の膝下に嬉戲するを見て樂む喜びよりは遙に偉大なる滿足であつたことは疑ひを容れないのであるが、祐親の館に於ける悲痛なる感情の不幸は、或は平家を壇の浦に全滅した勝報の喜びを以てしても尙ほ償ふことが出來なかつたかも知れない。何となれば頼朝は喜怒を色に表はさない人間であるといはれてゐるにも係はらず、少くとも妻の政子よりは人間的情味が豊かであつた。（そのことは後にいふ。）それほどの感情の悲痛をば、凝乎と、陰忍したところに頼朝の英雄的な性格が遺憾なく表はれてゐるのである。前にも書いたとほり、源平盛衰記の筆者が、兵衞の佐此事どもを聞き給ひ、嗔る心も猛く、歎く心も深うして、祐親法師を討たんと思ふ心、千度び百度び進みけれども、身に大望を抱けることを思ふて、小さき私の怨を忘れたといつてゐる、そのとほりであつたらう。その憤りと悲みとには英雄も凡夫も區別はないのである。たゞその堪え難い悲痛を凝乎と自分で思ひ存めて、目前の仇を報ぜんが爲に愚かなる輕擧に出でゝ身を滅ぼすことをせず、他日一層大いなる手段によつて痛快に仇を報ずることを得た所に英雄と凡夫との區別があるのである。

五

北條時政の長女政子と通じたのは、祐親の女との悲戀の苦味を認か嘗めさせられて後幾許にもならぬ間のことであつた。が頼朝は實際その政子にどれほど戀してゐたものか解らない。勿論頼朝は妻政子の男まさりの氣象才幹には大いに信頼してゐたには違ひない。そして、それよりもまだ多く政子の父時政や弟義時などに信頼してゐたことは、今更事新しくいふ必要もない

明白なる事柄であつた。政子の門性的な氣質については、これも世に傳へてあまりに明白なることであるが、これについても、唯簡單な一事であるが、頼朝と政子との平素の氣性の明かに想像されて面白いことは、頼朝が富士野に狩した時のことであつた。日本外史の筆は簡潔に頼朝と政子との性情を書き分けてゐる。これは吾妻鏡に記されてゐることであらう。

頼朝嘗獵富士野。頼家甫十二。射中走鹿。頼朝大喜。使人報之政子。政子曰。彼將家胄子。獲一鹿何煩專使。頼朝愧之。

これを見ると、頼朝の如き偉ら物でも妻の政子には頭の上らなかつたことがあつた。そして他の事とは違ひ、頼朝は父の情として、可愛い頼家が始めて十二歳の年少で走る鹿を射中したことを、ひどく喜んだものと思はれる。喜びの餘り、特使を、富士の裾野から鎌倉の政子の所へ使はして、その事を知らして遣つた。容易に喜怒を色に表さぬ頼朝にしても、流石に、そこは父親の人情である。その悦びには上下貴賤の區別はない。頼朝の喜んださまが想察出來るのである。すると、女は別けてものこと、母親の政子は一層それを聞いて喜ぶであらうと思ひの外、わざ／＼獵場から特使が馳せ報じたにも係はらず、世の普通の女親ならば、「おや／＼さうかへ。まあそれは、大變な手柄だつたねえ。」といつて喜びさうなところを、彼女は使ひの者に特別、遠方をわざ／＼御苦勞であつたねえともいはずに、つんとして、

「何だね、それくらいの事に、仰山らしく、わざ／＼使りで知らして、彼れは將軍家の總領息子だ。獸狩を一つ獲つたくらゐ何でもありやしない。」といつて、特使を返へした。使者が獵場に歸つていつて具さに其事を告げると、頼朝は政子のいつたことに對して一寸恥しく思つた。政子といふ婦人は隨分の偏り者であつたことは此の一つだけでも想像出來る。頼朝の方が遙かに普通の人情を有つてゐた。

歷史上の婦人で政子くらい傑出した女もないが、又彼女くらゐ狷猜、酷薄、普通の人情を以て律することの出來ぬ女もない。彼女は今日いふ所の變態心理の持主であつた。或は極度のヒステリーと、そのヒステリーを實行する強い意思との不思議な調和の出來た女性であつたか。とにかく彼女は二人しかない頼家と實朝との兄弟の子を殺すことを敢てして悲む色もなかつた。彼女には自分の嫁した家とその血統の存續よりも自分の實家の方が遙かに大切であつた。この事は世間往々ある習ひであるが、それにしても自分の父や弟が、自分の產んだ子を殺すのを平氣で見てゐることが出來たのは、普通の人間の血の通つてゐる女性とも思はれない。殘忍を敢てして少しも悔み悲むこと

をしなかつた、歴史上最も殺伐慘酷なる鎌倉時代の氣風であつたから、多く怪むを要しないことかも知れぬが、自分の實の子が殺されるのを見てゐては、どんな偉い人間でも——況して女性であつてみれば、決して默つて居られない筈であるが、政子は平氣であつたらしい。一歩讓つて、それならば、あの際賴家も實朝も無き者にしてしまはなければ、どうあつても故右府の大業を永く維持することが出來なかつたので、大義親を滅する思ひで、覇業の確保を期す爲に不肖の兒等を除くことの萬止むべからざるを認め、時政義時等の所爲を默認したのであらうか。幾度考へてみても、政子といふ女性くらゐ性格の不可解な女性は他に類がない。

それならば、夫の賴朝に對して情愛が乏しいかといふに、なか〱さうでない。甚だしい嫉悍な婦人であつたこともいろいろの傳記に顯はれてゐるところである。

六

政子は嫉悍の女性であつたから、處もあらうに鎌倉殿の館の中でも、どうかすると時々は賴朝の胸倉を取つて、「あなたはね、あなたはねえ。」と、小突きまはすくらゐのことは、おつ始めたかも知れない。そして、そんな時には、きつと安達藤九郎盛長などが、兩方の中に分け入つて、「奧樣まあ〱お心を落着けて。」と、取留めたことであつたらう。と、こんなことも想像される。政子の嫉悍の猛烈であつたことは、たゞ單に口に出したり、素振りや顏色に見せて、賴朝にこつぴどく當つたゞけに止まらないであらう。きつと、館の中で、政子の方から手出しをして、將軍家ともある人の面目にも關はるやうなことを仕出したに相違あるまい。その都度藤九郎盛長などは近侍の婢どもから呼ばれて

「藤九郎さま、盛長殿。安達殿は何處にござります。はやうはやう。御前さまのお傍へ。御臺樣が又いつもの御氣色でござります。」といふ叫聲を聞き付けて、盛長は長い廊下を急いで、今、政子が嫉妬の相形凄じく右大臣賴朝の胸倉を取つて暴れ狂ふてゐる處へ驅付けて來る有樣も想像出來る。さうも思はれるが、又考へてみるところによると、政子は、前にもいつたとほり賴朝以上に喜怒を色に表はさなかつた、氣性の烈しい女性であつたから、假ひ賴朝が他の女と關係するやうなことがあつても、嫉妬の結果手出しをして端ない下等社會の男女のやうな取亂した行爲はなかつたとも思はれないこともないが、たゞ單に顏色を變へたり、少許口に出して嫉妬したくらいの、生優しいことでは、賴朝が、常に政子に對して遠慮してゐたといふこと

が不可解になつて來る。鎌倉幕府の創立には幾ら政子の內助の功があり、又北條父子の外助の功が多かつたとしても、頼朝は決して其等の人物の傀儡でゐる人間でもなかつたのだから、いはゞ自分の器量で拵へた身上である。他の女が二人や三人あつたとて、それくらゐのことで何も政子の手前を氣兼ねすることはないのである。又政子が少し喧しいことをいつたからとて、一とゝほりの優婉な調子で嫉妬するくらゐなら、彼女の妬悍の烈しかつたことが、いろ／＼の記錄に書かれて今日まで傳はつてゐる筈もないのである。故にきつと、政子の嫉妬といふものは、右大臣とか征夷大將軍とかいふ高貴の位にある者に似げもない下々の者同然の端ない亂行であつたに相違ない。頼朝は他の事とちがひ、流石にそればかりには辟易して每時政子に負けて、なるべく無事に々々々と堪忍袋の緒を締めてゐたものであつたらう。

七

ところが、此處に一つ頼朝の秘密の姦と政子の嫉妬とのいきさつについて吾妻鏡に記錄されてゐる表沙汰の出來事がある。吾妻鏡に依つて書かれたらしい山陽の日本外史の方が文章が活躍してゐるから先に引いてみる。

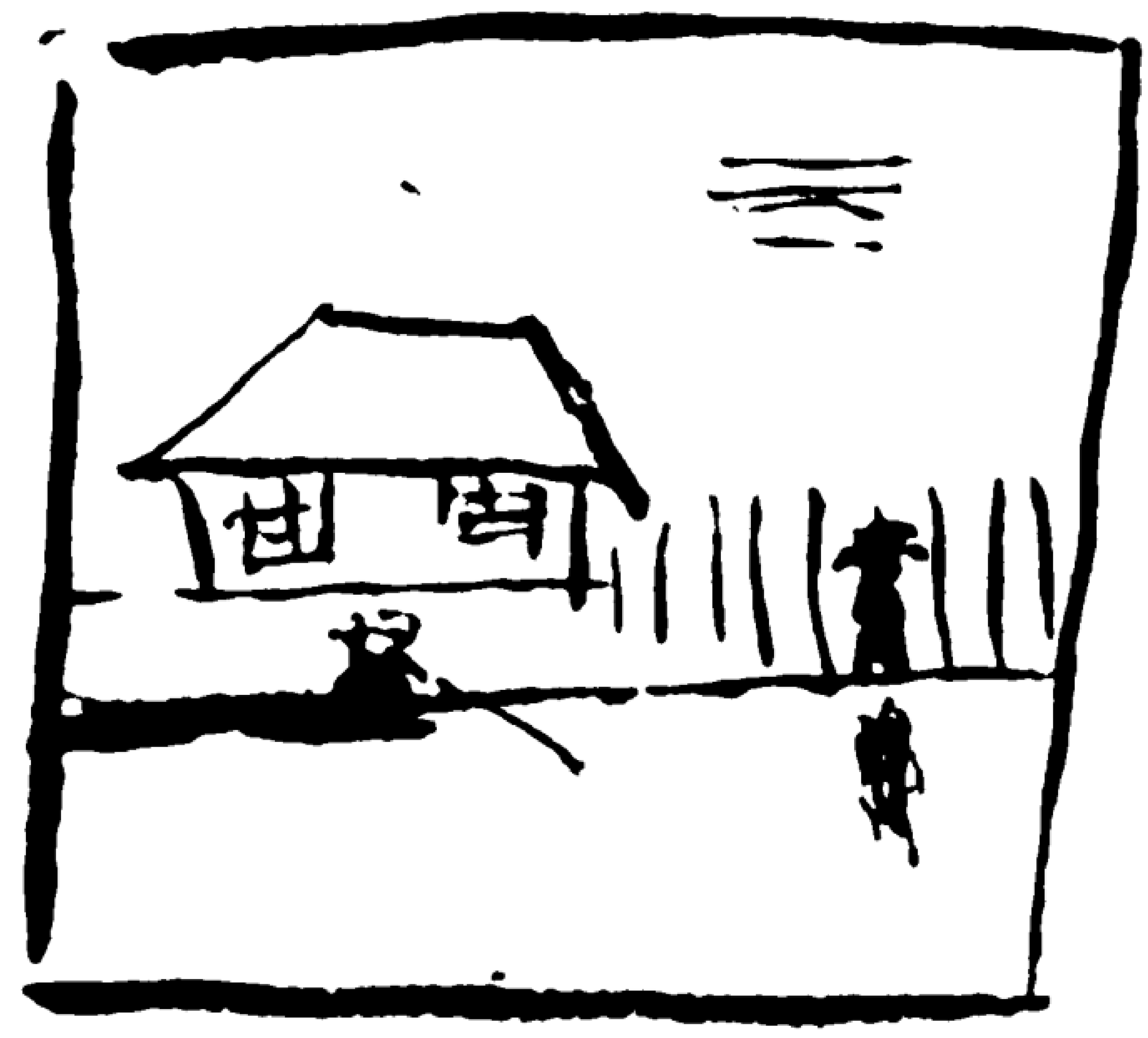
頼朝有嬖姫。託之伏見廣綱家。時政妻牧氏知之告政子。政子性妬悍。即使牧宗親毀廣綱宅驅逐其姫。姫走依大多和義久者。頼朝聞之託事往義久宅。召宗親罵之。親截其髻。時政聞而恥之。不告而歸其邑。

この事は政子が嫡子頼家を生んでから、まだやつと百日ほど經つた時分のことであつた。政子はその時二十六であつた。その嬖姫は名を龜前といつた。伏見廣綱といふは幕府の右筆で、頼朝の爲に公事の文書ばかりでなく、內證の手紙なども代筆した人間であつたらう。時政の妻牧氏といふのは後に有名な陰險な當時の鎌倉婦人の一人である所の所謂牧の方で、時政の後妻であつたから、政子には繼母であつた。この牧の方は又何うした考へであつたか、なにも、そんな事は、出產後漸く百日も經過しない、まだ十分產褥を離れない政子には、知つても默つてそつとして置けば可いのに、そこが牧の方らしい所である。政子の耳に入れたから堪らない。政子は忽ち嫉妬の炎を燃して早速牧の方の父である牧宗親を召んで、龜前の預けられてゐる伏見廣綱の家に押掛けて行つて、其邸宅を打壞はし嬖姫を追拂はしめた。姫は廣綱に扶けられて難を大多和義久の家に避けた。

こゝに頼朝にも政子にも嫉妬の經緯に通常人と異つて、互に

腹底の深いところがある。政子は繼母からその事を聞かされても決して、すぐ間拔けに頼朝に向つては、それを曖氣にも出さない。頼朝が初から自分に内證でそんな不埒な事をしてゐるのだから、知つてもそうつと默つて、頼朝の裏を搔いてやるつもりで、自分の方でも内證で夫の嬖姫を追拂はしめた。政子が腹の底に踏み應へのある、確り者であつたことは、此の一事だけでも明白である。そして、何喰はぬ知らん顔をして阿呆面の頼朝の顔を、腹立たしさと、お可笑しさとを嚙みしめて、じつと見てゐたことであつたらう。頼朝も又そのとほりである。もともと政子に隱してゐることであるから、こちらは一層のこと、そんなことを口に出しもせぬ。腹の中では隨分非道ひことをし居る。政子の亂暴にも困つたものだと思ひながら、明らさまに「お前そんなことをしては可けないぢやないか。」ともいはない。もし頼朝がそんなことを一と口でも口に出さうものなら、政子の方では必ず十口も言つて逆捻ぢを喰はしたであらう。それで頼朝は中一日を置いて、他事に託して館を出で大多和義久の宅に赴いて委しい事情を糺し、牧宗親を呼び寄せて、頭から怒り付け、立腹のあまり自から腰の一刀を拔いで宗親の髻を斷ち截つた。宗親こそ好い面の皮である。頼朝と政子との兩方に板挾みになつて、一方を立てれば一方が立たないことになる。それで頼朝は宗親に、そんなことをして當り付けても政子には何ともいひ得ないのである。尤も宗親自身の手落ちでもあるまいが、娘の牧の方が少しく不謹愼であつた落度を自然に父親が責任の一半を背負つた結果にもなつたのである。何となれば牧の方がそんなことを、ぺら〳〵と政子に饒舌りさへしなければいゝのに、牧の方のいつたことは益も實もない淺敢果な端ないことである。

是等の事柄は、格別新らしい發見でもなく、普通の書に記されて人口に膾炙してゐる事柄であるが、頼朝が一流人より屈起して平氏を討伐して父祖の仇を報し、次いで天下の亂を平定して、政權を掌握したといふ英雄偉人としての公けの事績に並行して、それを裏付けしてゐる彼の私生活の秘事は、表面の事績に一層の生命を吹込んでゐるのである。頼朝が祐親の館に於ける悲戀の苦味を嘗めて、それをぢつと堪え忍んだこと、政子の嫉妬の鋭鋒を腹の底に深く踏み堪えてゐたところ、さういふところを見るにつけても、倍々頼朝といふ人が、一流人の身から屈起して源氏の衰運を挽回し撥亂反正の覇業を大成した人物であつたかゞよく肯かれるのである。(一月十四日)



沼澤地方

萩原朔太郎

蛙どものむらがつてゐる
さびしい沼澤地方をめぐりあるいた。
日は空に寒く
どこでもぬかるみがじめじめした道につづいた。
わたしは獸(けだもの)のやうに靴をひきずり
あるひは悲しげなる部落をたづねて

だらしもなく　懶惰のおそろしい夢におぼれた。

ああ　浦！
もうぼくたちの別れをつげやう
あひびきの日の木小屋のほとりで
おまへは恐れにちぢまり　猫の子のやうにふるえてゐた。
あの灰色の空の下で
いつでも時計のやうに鳴つてゐる
浦！
ふしぎなさびしい心臓よ。
浦！　ふたたび去りてまた逢ふ時もないのに。



紙鳶揚

土岐善麿

朝風のふきあぐる空や雲遠くのぼりにのぼるわが紙鳶ひとつ

朝風の空高高しうら畠にはやくも子らが紙鳶あぐるこゑ

朝空にのぼり極まる紙鳶のかげ涯しもなしやこの寂しさは

朝風にひとすぢ遠くひかりつつ絲のたるみの片靡きすも

なかぞらの風にひた對ふ一點の紙鳶の張りこそ手につたひくれ

右に傾きひだりにかしぎのぼりつつ今はうごかぬわが紙鳶ひとつ

風ひたと地に落ちたりと思ふまやいよいよ澄めり紙鳶の高さは

おち葉林ポプラの樹すぐ立つやその眞うへなるゆふぐれの紙鳶

たそがれの冬菜の株の捨畠の枯葉かすかなり紙鳶おろすところ

たぐり來てはなせば紙鳶のおのづからしばしただよひ地におちにけり

飛びゆきし紙鳶のかたちを眼にとめて絲くりまとめ歸り來し子は

ひとり子はひとり遊ぶらしその庭にけふもあがれる手造りの紙鳶

時評

立憲政治に於ける二つの盲腸

——樞密院と貴族院——

長谷川如是閑

　利害相反する二つの集團の間に、權力と服從との關係が成立した時から政治が始まつたのである。即ち政治は、社會生活の關係を、互ひに利害の反對してゐる集團の間の力の壓迫によつて決定する樣式に基礎してゐる。云ひかへれば、生活を決定するものは、力を有する側の生存意志なのである。

　この樣式に於ては、支配する側の意志が絕對の決定力を持つのであつて、政治はこの意味の意志が支配する機構である。それは即ち一種の階級的生活意識の支配である。けれども政治の進化は、かやうな絕對的な意志の力を減殺する方向に進んでゐる。これは、さういふ階級的意識の支配は、社會生存の終極の方法ではないからである。政治が全社會の協同關係に依存するやうになるといふ事は、元來政治の發生が社會の二元的構成に基づいたものである所から、殆んど不可能であると見なければならないが、然し苟も社會が生存する爲めには、その有機的の關係を、或程度まで保存する組織に依らなければならないのであるから、壓迫關係は次第に、有機關係に地歩を讓る事になるのである。そこで、政治は絕對服從の關係から、協同の關係に進むのである。

　然し今言つた如く、苟くも、政治の機構が特殊の起源を有する爲に、いつまで經つても一方の意志が支配するといふ特徵が

保存される。立憲政治は、政治が特殊の階級の絶對支配から、總ての階級の協同支配に進む過程であると言はれるが、そこでもまた、その總ての階級と稱するものが、實は社會的に力を有する側を代表するものである。そこで更に、普通選擧といふやうな事が起つて、特殊の支配から一般のそれに進まうとするのであるが、政治の關係は、いかなる革命を經ても、その特徴を一朝一夕で失ふものではない。立憲政治の一般的性質も、實は名目的であつて、實質に於ては、社會的に支配してゐる階級的構造が、その一般的支配の機構の根抵に喰ひ入つて、矢張り社會的に壓迫的の力をもつてゐるものが政治の機構を左右してゐるのである。それは要するに政治といふものが、本來協同の組織ではなく壓迫の組織だからである。

この壓迫の關係を、機關の上に明確に殘存させてゐるいろいろの組織が、立憲政治の裡に存在する。それは明かに、或る階級的意志の優越を信ずる傳統的の意識の上に築かれた機關で、立憲政治の行はれた後に於ても、さういふ階級が殘存する限り、それがいろ／＼の機關の形で、その組織の間に、因襲的の作用を營んでゐるのである。卽ち立法に於ける貴族院、行政に於ける樞密院等の類がそれである。

立憲政治は、現實の社會生活を支配する法律の構成に種々なる階級の參加を要求する組織であつて、或る階級の階級意識が絶對に支配する事を否定するのであるが、元來、さういふ思想は、ずつと古代から社會的に意識されてをつたのである。國王――絶對の支配者――でさへも法律には服さねばならないといふ思想は、古代からの思想である。それは法が、社會一般の協同關係の約束であるといふ意識であつて、立法が、特種の階級の意志に依るべきものでないといふ信仰である。然るに、軍國々家の成立が終ひにこの信仰を破壞して軍國階級の絶對支配を建設したので、社會は更に、その本來の組織を取戻す爲めに、立法をこの特種階級の意志から引き離すために、立憲政治を持ち來したのである。立法を特種階級の手から、一般の協同のもとに持ち來したのは、要するに一種の復古である。而かも、この觀念は、既に成立した階級的支配を一擧にして全滅せしめる事はできない。數千年間一定の文明を造り出した階級組織は、觀念的にも亦、實際的にも、何らかの形で新らたな組織の裡に殘留するのである。立憲政治に於ける立法部が、貴族院をもつてゐるのはその關係である。貴族院は、衆議院の構成する意志に對して、その上に、裁可權をもつ優越意志の如く信じられてゐるのもつまり、舊組織の信仰に基づいたものである。それは支配する特種の階級の意志は、根本的に優越であるといふ信仰

である。

行政に於ける樞密院も、また同じ性質の機關である。支配が、軍閥階級の手から、一般市民の手に移るに及んで、所謂政黨政治が起つた。市民階級は、この政黨組織に依つて、軍閥階級を壓迫して、政治的優越を獲たのであるが、實際の政治は、支配する機關を占領する事によつて始めて完成されるのであるから、政黨は、政府を乘取るにあらざれば、全く存在の意義はない。そこで、行政の機關はやはり市民階級の手に移されるのであるが、それは全く政黨の力に依つたのであつて、傳統的の軍事的又は宗教的支配を市民的の支配で壓迫したのである。而も市民階級は一種の經濟的優越階級であつて、昔の所謂素町人である。之れは、傳統的の信仰、即ち貴族階級の階級意識に對してはむしろ否定的の態度をとつたものである。そこで市民政治に對しては、貴族政治は常に壓迫を感じる。行政機關が、政黨の手に移る事に對して、貴族は非政黨的の力を行政組織の上に保存せねばならぬ。そこで立法部に貴族院があるやうに、行政部に樞密院があるといふ事になる。

或る國に於ては、樞密院は全く御用機關として、盲腸のやうにたゞ形式的に殘つてゐるに過ぎないのであるが、それは、おのづから時代の進化がさうさせたのであつて、それには市民政治が、有力に働かねばならぬ。言ひ換れば、政黨が力強くならねばならぬ。さうなるまでは、樞密院は、行政部を牽制する特種階級の機關として有力に働く。我が樞密院が丁度その時期にある。貴族院も進化的には次第に、御用機關となる傾向をもつ事は無論であるが、日本の貴族院は、なほ有力に傳統的信仰に基づく潜勢力となつてゐる。

そこで、貴族院と樞密院とは、立憲政治に於ける二つの癌である。それは政治が絕對の支配から、協同の支配に赴く過程に於て、出來るだけ「絕對」を保存する方法である。故に立憲政治の上から言へば、この二つの機關を出來るだけ形式的のものにする事が、未來の要求であらねばならぬ。無論、學者や政治家が、どう考へてゐやうとも、實際の進化はさう進むのであるが、その途中に於て、階級的の努力が出來るだけこの二つを保存させやうとする。そこで、一般に進化をさまたげる形勢が成り立つ。平民が努力しなければならないのは、この障害を除き去る事である。

樞密院に對しては、今日一般の見解が既に定まつてゐる。また事實上、日本の政黨政治と雖も、もはや樞密院によつて有力に支配されるには餘りに進歩してゐる。政黨の有力者と、樞密院の人々との個人的關係から、いろ／＼の困難が生ずる事は、

現在あり得る事であるが、然しこの個人間關係によつて、大勢が左右されるやうな事は、近頃は殆んど皆無となつた。普通選擧をさまたげる事さへ、樞密院の力では不可能であると認められてゐる。樞密院自身も、さういふ形勢を認め得ない程總明を欠いてはゐない。そこでたゞ全く嚴正な批評的態度をとらうとしてゐる。實際また、一般の意向を樞密院が妨げるといふやうな事があつたならば、全く無用の混亂が起るに止まるのであつて、さういふ事を經驗するのも、一つの教訓ではあるが、樞密院自身もさういふ教訓を受けたくはないらしい。で例へば、一方で普選を批判すると同時に、他方では、過激思想取締法案に對しても、それが人民の言論集會の自由をさまたげる恐れはないかといふやうな事を政府に突込むといふ位の事はする。要するに樞密院は、次第に實勢力から退いて、形式的な機關になりつゝある。之れは政黨政治の機構がそれを餘儀なくせしめてゐるのである。

貴族院は稍それと形勢を異にしてゐる。貴族階級は、傳統的の力を失ひつゝあるに係らず、何處の貴族もさうである如く、市民的生活に喰ひ込んで、軍國的優越から、經濟的優越に轉じて行つて、傳統的の力を利用して、經濟階級の優越と結びつかうとする。即ち貴族自身が、一つの政黨的勢力を有力に形造るに至るのはその結果であるが、日本の貴族はまだそこまでは行かないで、經濟力よりは寧ろ傳統的の力に依頼してゐる。從つて經濟的優越を根柢とする大政黨を組織するに至らないのであるが、日本の立憲政治の成立が、特權階級の力に依つた歷史から、貴族階級も、その階級的特權に依頼して、しば〳〵貴族院をもつて政黨政治を壓迫した。だから彼らは、イギリスの貴族のやうに、政黨的勢力をもつてはゐないが、貴族院を提げて、之れに對抗したのである。丁度それはイギリスの市民階級が政權をとる間、同國の貴族が、上院によつて、市民政府を壓迫したのと似てゐる。この先きも恐らくイギリス風の過程をとつて、次第にその勢力を失なう事であらうが、然し、イギリスと異なる點は、貴族が保守黨のやうな大政黨をもつてゐない爲めに、云ひ換えれば、衆議院が全く貴族の權力外にある爲めに、イギリスの貴族が下院の政黨的勢力に依つて政府を乘取るといふ働きを、日本の貴族は働き出す事が出來ない。イギリスは、貴族が下院の政黨によつて、政府を乘取る事が出來るか、ら、上院は比較的廢物となる傾向が多い。即ち貴族は、市民の政黨と結んで下院の政黨に依る事が出來る。だからイギリスは事實、下院による一院制度に傾きつつある。之れに反して、日本の貴族は、政黨的勢力が無いから、どこまでも上院に立て籠

つて、市民政治に對抗せねばならぬ。日本の憲法は、貴族のこの目的に適するやうに貴族院を構成し、貴族は、その戰術をもつて今日まで進んできた。その結果、貴族院改革といふ事は、より多く貴族によつて反抗される傾きがある。政黨をもたない貴族は、貴族院を失つた日には、無力となる。イギリスの貴族のやうに、經濟的優越をもつて、市民階級と結びついて自己の階級的勢力を、下院の政黨に依つて代表せしむる程度迄に日本の貴族はまだ進んでゐない。それをするには、日本の貴族は余りに貧乏である。そこでどこまでも貴族院を有力にしてそれに閉じこもらうとする。

政黨は之れに對して、貴族階級を、政黨政治に同化せしむる手段をとる。即ち、その勢力を下院に移して、上院を無力にしやうとする。そこで貴族に下院の選擧權、被選擧權を與へて、貴族の階級的城廓を取り崩さうとする。之れはつまり、政黨が無意識に、二院制度を破壞する過程である。貴族院をそれに伴つて改革しようとするならば、自ら一院主義の傾向をとらねばならないのであるが、然し目下のところ、貴族院がまだ、政黨政治を牽制する組織的の力をもつてゐるので、政黨は貴族院を無力にする改革を主張する事はできない。そこで彼らは、曖昧な改革論を唱へざるを得ない。貴族院をよくする事は之を有力にする意味であるならば、それは自ら政治的大勢と矛盾する方法である。行政部が樞密院を有力にしやうと考える事があり得べからざる話であるならば、下院の政黨が上院を有力にしやうといふ考えもあり得べからざる話である。そのやうな、あり得べからざる話が、話されてゐるのも、つまり日本の貴族院が歴史的に、政黨政治を破壞する實力をもつた情勢である。

然し貴族院は到底改革によつて有力にされる事はむづかしい。今日ではその組織的の力がまだ、多少政黨に影響するので、政黨もやゝ貴族院に敬意を拂つてゐるが、しかしこの敬意は、信仰的にもまた現實政治の上でも頗る根柢のない敬意であつて、早晩失はれる事は明かである。政黨が信仰的に、貴族を尊敬しない事は、今日は殆んど極端に趨つてゐる。政治家または實業家に言はせると、貴族等は目前の利益を漁つてゐる貧乏人である。內閣組織の際に、政黨者が貴族を見縊る事の甚だしいのは、貴族院中の有力者が、政黨の內閣組織者に向つて、政黨者と雖もやり得ないやうな、陋劣卑屈な獵官運動に奔走するからである。政黨者は言つてゐる。いかに貴族を尊重しやうと思つても、あの淺間しい狀態を見せられると、義理にも尊敬は出來ないと。それは恐らく、貴族が組織的に政治の上に働き出す力を失つて、個人關係によつて、わづかにその惰性を保たう

とする傾向を暴露せしめてゐるのである。目下貴族がもつてゐる現實の政治的勢力は、さういふ個人的勢力にまで墮落してしまつたのである。それは即ち貴族の階級的勢力の失墜である。從つて、この階級から成立してゐる貴族院を有力ならしめやうとする運動は、空中に樓閣を築かうとするものに外ならない。

　されぱといつて、貴族院を、貴族と沒交渉な知識階級や、經濟的優越階級から成り立つ一種の優越な判斷力を有する機關とするといふならば、之れまた立憲政治の本來の要求と一致しない努力である。それは優越階級の支配を殘存せしむるものであつて、政黨政治の對抗的組織と相反する。政黨政治は、利害の對抗に基づく組織である。その双方の利害を超越する優越の機關などは、政黨政治の承認し得るものではない。貴族階級の政治を破壞したのもさういふ優越を否定したのである。それが更らに自らそんな優越のもとに服從するやうな組織を造り上げる氣遣ひはない。それを造りあげたところで、要するに政黨政治は更らにその機關を、政黨の奴隸にせねば承知しないのである。さうして出來た貴族院は畢竟衆議院の別働隊で、無用の二重機關に止まるのである。

　政黨政治の進行してゐる間は、政黨的對立關係の舞臺は、衆議院に集中されるのが當然で、貴族院は次第に形式的の機關に退化するに極まつてゐる。貴族院改革とは畢竟、この退化を促進する努力である。

所謂軍事教練問題に對する
政治教育的見地からの批判

大山郁夫

一

『政治教育』――それは、近年最も頻繁に繰返されて來た言葉の一つである。實際政治家たちも、それを盛に口にして來た。實際教育家たちも、そのお題目を唱へることには、決して後れを取らなかつた。それは實に、猫も杓子もそれを言はないことを恥とするやうに見ゆるほども、非常にポプユラーな言葉の一つになつて來てゐる。だが、大抵のポプユラーな言葉と同樣に、この『政治教育』といふ言葉もまた、最も多くの場合に於て、極めて無意味に使はれてゐるやうに聞かれる。試みに、二た言目には『政治教育』といはなければ承知が出來ないやうな種類の人々に向つて、彼等が一體それに依つて何を意味してゐるかを、問ひ詰めてみよ。彼等の多くは、段々と答辯に窮して、結局は『政治教育は政治教育だ！』といつたやうな捨てゼリフを吐いて逃げを打つに違ひはあるまい。――とさへ無難に言ふことが出來るほども、この言葉は一般に、極めて無意味に、そして不注意に用ひられてゐるのである。

實際上、『政治教育』といへば、それを聞いただけで、直ちにその意味の全部が掴めるやうに感じられるが、しかし少し立ち入つてその内容を檢べてゐると、それは段々と曖昧なものになつて來るのである。若しくは、少くともそれは、幾通りにも解釋が出來る言葉だといふことが、次第に解かつて來るのである。

即ち、まづ第一には、『政治教育』といふものは、一般の教育に對して、果たしてどういふ地位を占めてゐるものか、といふことが、問題になる。しかも、この問題を更らに突き詰めて行

くと、一般の教育以外に『政治教育』といふものが果たして特別に存してゐるか、といふことも、またその次の問題になる。それは、言葉を換へて言ふと、政治教育は一種の特殊教育と見做すべきものか、といふ問題である。

そこで若し、政治教育といふものが、一般の教育の内容の一つとして、その裡に包含されてゐるものだとすると、それは今日の學校教育に於て、實際上、相當の程度に行はれてゐるものと見られるか、といふ點が、またこの方面に於ての第一の問題とされたければならないのである。が、假りに、それが今日の學校教育に於て、まだ滿足と言ひ得られる程度に行はれてゐないにしても、今後教育上の當事者たちが、その點に幾分の注意を向けさへすれば、現在の教育制度の下に於ても、それが充分に行ひ得られるものと期待が出來るか、といふ點も、更らにその次の問題にされるべきものと見ることができるのである。

更らにまた、若し政治教育が、一般の教育以外にその存立の地位を占めてゐる一種の特殊教育だ、とするならば、それは一體どういふ性質のものかといふ問題の外に、それはまた、どういふ機關に依つて最も適當に與へられるものであつて、且つまた、如何なる種類の人々が、その方面に於ける最も適當な教育者として見做されるべきか、といつたやうな様々な問題が、必然的にそれに伴つて起るべき筈である。

が、かうした諸問題も、詰まるところは、政治教育とは何かといふ、その本質に關する主要問題に歸着しなければならないもの――若しくは、それから出發しなければならないもの――であることは、いふまでもないことである。ところが、この主要問題を抜きにして、多くの人々はてんでに、勝手に『政治教育！　政治教育！』と囀り交はしてゐるが、我々の觸目の常態ではないか！　だとすると、それが我々には、畢竟無意味な雜音としか聞えないのも、決して無理のないことだらうではないか！

二

しかし私は、ここでいきなり私の立場から、政治教育とは何かといふ本質問題に關して私の意見を提出するよりは、寧ろ、この言葉が最も多く繰り返されて來た場合を捉へて來て、それに絡まる様々の事情に一瞥を與へ、何故にそれがそれほども間斷なく叫ばれる必要があつたかを吟味して見たい。といふのは、さうすることが、この問題の中心點に近寄るための最短の距離だと、私には考へられるからである。

政黨政治家たちが、政治教育といふ言葉を最も盛に叫んだの

は、少くとも近年に於ては、普通選擧問題に關してであつた。殊に普通選擧を尙早として、それに反對した舊政友會——今では政友本黨がそのお株を奪つて……といふよりは、寧ろそれを閑却してゐる形であるが、それでも今では、戶主選擧權といふところまではにじり出してゐる——が、その反對理由の一つとして、民衆の政治教育の缺乏といふ點を算へ立てたことは、誰れもの記憶の上に新たなことである。もとより、政黨政治家たちが、かういふことを言ふのは、すべて皆政略的見地から出てゐるものであることは、明瞭なことである。その證據には、あの頃以來民衆の政治教育は、この言葉をどういふ意味に解釋しても、別に大して變はつて來てゐる譯でもなく、また、地方議會に關する選擧制度の改正の影響にしたところで、まだ際立つてどういふ風に顯はれて居るといふのでもなく、更らにまた、その他の一切の政治的事情にしても、あの頃に尙早であつた筈の普通選擧を、今では恰度その適期だと思はせるほどに變轉したと言へるほどのこともないのに、當時極力それに反對した政友會の人々が、現今では、外面上だけでも兎に角、それの熱心なる支持者の格に早變はりをしてゐるのである。無論これは、我々の立場から見れば、少しでも好ましい方に變つたのだから我々の側からは、別に文句を附けるほどのことはないが、しかし單に一遍の理窟としていへば、曾て彼等が、民衆の政治教育の缺乏といふ點を、その口實の少くとも一つとして、普通選擧に反對したのは、彼等の驚くべき短見に基いてゐたものか、若しくは、彼等が徹頭徹尾政略的見地から、さうしたことを言ひ立ててゐたものかの、二つの一つでなければならないものである。そのうちにも、それが彼等の短見から出た議論だつた、といふやうなことは、彼等が快よく承服し得る最後のものでもあらうし、また我々に於ても、必ずしもさうだとは信じないことであるから、結局は、それは彼等の政略的見地から出た出鱈目の託言だつた、といはなければならないことになるのである。

實際上、さういふのが、最も事實に近い見方であることは、今日の既成諸政黨の、他の殆んどすべての場合に於ける言動に徵しても、安全に主張し得られることである。で、かういふ譯であつて見れば、彼等がその慣用の『政治教育』といふ言葉に依つて、果たして何を意味して居るか、といつたやうなことを詮索しに掛るだけのことが、既に野暮の骨頂である。それは、私に於ても充分承知して居ることである。が、それにも拘らず、彼等が『政治教育』と言つてゐたのを、その言葉通りに受取つた上で、それから當然に導かれる結論を探ぐることは、單にそのことだけで興味があるばかりではなく、同時に普選實施後に

於ける政治教育の展開といふやうな重要問題に對して、或る程度の光りを得る所以にもなるのである。少くとも、私はさう考へる。

三

政黨政治家たちが、「政治教育」を口にするのは、如何なる點から見ても矛盾である。殊に彼等が、普通選擧への反對の口實の一つとして、得々として民衆の政治教育の缺乏を算へ立てることなどは、さうした矛盾中の最大矛盾である。たとへ名ばかりでも憲政が布かれてから既に約三十五年の歳月を經過して居る時代に於て、彼等が尙ほ民衆の政治教育の缺乏を云爲するのは、彼等が自らこの方面に於ける彼等自身の無爲無力、若しくは努力の缺乏乃至無効驗を自白するものでなくて何であらう！

實際上の問題として見て、我國の政黨政治家たちほど、教育上の根本問題に對して冷淡な態度を採つて來たものは、他に餘りに多くその類例がありさうにも見えないことである。從來、教育行政の首腦部をなす文相の地位が、「伴食大臣」の謂として見られて怪まれなかつたことは、何よりも殊に、彼等が敎育上の根本問題を餘りにも閑却して來た事實に、少からず基因して居るものである。もとより、歷代の文相が伴食大臣で通つたのは、決して政黨内閣に限つたことでなく、官僚内閣に於ても矢張り、大體その相場が狂はなかつたことは事實であるが、しかし官僚政治家たちには、少くとも彼等の仲間うちだけは、不言不語の裡にでも、相當に筋の立つた自己辯解の餘地がない譯ではなかつたのである。

といふのは、我國の現行の教育制度の基礎工事は、明治の初年に於て國民教育制度の方針が決定された頃から、國會開設時代までの約二十年間に於て、專ら官僚政治家たちの手に依つて企畫され、竣成されたものである。その間に亘つて、或る時代にはアメリカ式の教育主義が可なりに取り入れられたこともあれば、或る時代にはフランス流のそれが相當に加味されたこともあつたが、そのうち段々とドイツ流のそれが、最も多く模倣されるやうになつたものである。かういふ風に、明治時代に於ける我國の新教育制度の手本になつたものは、いづれも皆外國種のものばかりであつたが、それが結局、ドイツ種のものに自然と落着いて行つたのは、後進國の官僚が先進國の官僚を羨んだまでのことであつて、その間に別に不思議とすべき何物もないのである。

同樣の現象は、我國の陸軍の組織の進化の上にも、それから更にまた、我國の憲法制定の事業の進行の上にも見られたの

は、誰もが知つてゐる通りである。今日では外來思想への防遏呼ばはりの急先鋒となつて居る我國の官僚政治家たちも、曾ては所謂「採長補短」といふ重寶な口實の下に隱れてではあるが、西洋崇拜及び西洋模倣の點にかけては、單に一日の長となつたどころではなかつたのである。そして、その餘習の殘るところは遠く今日にまで及んでゐるのである。即ち今日に於ても、彼等に尙ほ依然として、何かといふと、西洋諸國の實例を、自分たちにだけ都合よく解釋して相手を屈伏させようと試みるのを常としてゐるのである。たとへば、彼等が東洋流の忍從的氣風を鼓吹しようと謀る際などには、彼等は先づ第一に、西洋の『識者』も、今日では段々と西洋流の物質萬能思想の弊害に眼ざめて來て、東洋流の精神的文明を憧憬するやうになつたといふやうな、穴だらけの淺薄な言説を、・臆面もなく持出すやうなことを憚らないのである。また、序ながら他の最新の一例を擧げると近來世間の重要問題の一となつてゐる例の軍事豫備教練計畫のやうなものに關してまでも、フランスやアメリカあたりで盛んにそれを行つてゐるから、我國でもそれに追隨して行かなければならない、といつたやうな、周圍の事情を全然無視したやうなことを、彼等は平氣で述べ立てゝゐるのである。かういふことは、直接には『老人の無恥』の現はれだとも言へなくはないが、しかし私に言はせると、その因つて來るところの、更に深いものがあるのである。即ちそれは、西洋模倣といふ、彼等の既往症の間歇的再發作でなければならないのである。

私は稍々傍徑へ深入りしかけたことを感じるが、この邊で私の議論を本筋の方へ引き戻すことにする。そこで前に少し觸れて置いた通りに、我國の現行の教育制度の基礎は、明治維新以來專ら官僚政治家たちの手に依つて築き上げられたものである。そして、それは、國會開設の當時までに、大體は竣工されてゐたものである。それは無論、官僚政治家たちの權勢維持のために都合よく國民精神を陶冶するやうに仕組まれて居たものである。が、自分達の榮達を國家の隆運と同一視することに習はされてゐたところの彼等官僚政治家たちは、その仕事の出來榮えに就いては、彼等は自己讃歎に陶醉する理由を持つてゐた。それ故に、彼等に取つては、その上の仕事は、單にその折々の必要に應じて、既成の基礎工事の上に於て、上層建築だけを、そこここと變改若しくは增減して行くことだけのことであつた。それは即ち、創建の事業であるよりは、寧ろ守成のそれであつた。從つて、そこには、別に際立つてすぐれた創造的才幹を必要としないのであつた。それは、彼等の間に於て、暗默の間へ了解されたことであらねばならなかつた。だとしてみれば、歴代の

官僚内閣に於て、卓越した政治的手腕の持主と見られたものが、自然とその他の方面に廻はされて、文相の椅子の上には、『伴食』格の人物が据ゑられる習慣が何時とはなしに醸成されたのも、決して理由のないことではなかつたのである。

　そこへ持つて來て、官僚政治家たちの向ふに立ち廻はつた政黨政治家たちは、教育の根本問題にかけては、初めから一向無頓着であつた。彼等は單に、この方面に於ける創造的活働に於て無力であつたばかりでなく、それに對する批判にかけても同樣に無能であつた。從つて彼等は、教育上の根本問題に關しては、官僚政治家たちの見解に追隨して行くより外はなかつた。それは恰度、假りに一例を他の方面に取ると、たとへば國防上の根本問題に關して、彼等が一切陸海軍人らの指金に動かされてゐるのと、同じやうに見えたものであつた。それ故に、官僚政治家たちには、益々文相の地位に伴食格以上の人物を必要としないといふ自信が持てたのである。彼等に取つては、それで充分間に合つたのである。そして、それ以上のことを註文するのが、寧ろ贅澤沙汰に見えだして來たのである。

四

けれども、政黨政治家たちの側から見れば、問題の焦點が、大に異つてゐなければならない筈であつた。少くとも、若し彼等が、『藩閥打破』だとか、『憲政濟美』だとかと言つたやうな、絶えず彼等の口にして居たやうなことを本心から希求してゐたものだとすると、彼等は彼等の矛盾に充ちた政治的活働以外に、教育の方面に於ても、それに相應するだけの新施設を試みるべき筈であつた。そして、そのためには、彼等はまづ第一に、官僚が創設した國民教育制度の上に、封建的道德觀念――それが大部分『國民化』された形にはなつてゐたが――が多分に維持されてゐたのを、徹底的に一掃して、その代りに、彼等の企圖した立憲政治の完成にふさはしいやうな市民的道德觀念を、そこに扶植することに努力すべきであつた。

　それからまた、知識的方面に於ても、立憲政治の實際上の運用を圓滑にするために役立つやうな種類の、殊に法制經濟等の各科目に關する教習を、現在見られる通りに、或ゐ狹く限られたる範圍内に於て殆んど有名無實的に行ふだけではなく、もつと普遍的に、もつと積極的に、そしてもつと有効に行ふことの上に、一歩位は前に踏み出すことを試みるべき筈であつた。もとより、彼等が不知不識の間に目指して居たものは、ブルジョア政治の確立といふことには相違なかつたが、それならそれで、彼等はその目的のために、今少し教育を利用して然るべき

筈ではなかつたか？　假りに彼等が『教育の利用』といふやうな、如何にも功利的な響きを持つ物の言ひ方を嫌つたにしても、――それを彼等が實際嫌つたものとするのは、彼等の日常の言動が功利的範圍以外に一歩も出ないことから見て、却つて甚だ訝かしな話だといはなければならないことだが、――物の言ひ方だけなら、如何樣にでも變へることが出來る。しかも、さういふことは、彼等に取つては、所謂お手前ものではなかつたか？殊に、藩閥官僚の徒が、その私的權勢の維持のために、國民教育制度の上に植ゑ附けておいたところの、封建的忍從精神の保存を主眼とする知識道徳をそこから一掃して、『憲政濟美』の基礎としての自由主義的精神や、各種の政治上の知識やの涵養を期する、と言つたやうな條項を表面に押し出しさへすれば、立派に彼等の名目が立つた譯ではなかつたか？。

が、實際上に於ては、政黨政治家たちは　兎も角從來に於ては、さうした方向へは、一歩も踏み出さうとはしなかつた。これは一つには、我國の既成諸政黨の成立の歴史に基因してゐることも、たしかに事實である。即ち、最近に於て、純粹の新興市民階級の中から、實業同志會といふ名乘りを擧げた一種の商工黨が產まれたまでは、我國の諸政黨は、本來が官僚の畑からの出身者たちに依つて組織されたものである。無論それは、歷史の進行のまにまに　次第々々に形態の變化を遂げつつ　今まては押しも押されもせぬブルジョアジーの政治的生存表現の機關にまで化成して來たことは、如何にも事實であるには相違ないが、しかしながら　彼等がその出發點に於て、持つてゐた一種の官僚的特質は　それに伴つて消滅し切らないで、今日でも尙ほ、彼等の生活意識の深い奧底に　保存されたままで殘つてゐるのである。しかもそれは今日に於ても尙ほ、屢ば機に觸れ時に臨んで、露骨にその顏を恥晒らしに出すことすらあるのである。さうした種類の現象を我々は今日では　特に憲政會や政友本黨の言動の上に於て、最も多く見ることが出來るのである。

我國の政黨政治家たちが、教育上の根本問題を比較的に輕視する傾向を持續して來たのは、一つには、かうした因緣から來たものであるに相異ない。即ち、今日の我國の諸政黨が、大體は發生學的に官僚の分身として見られることが出來るところから、それらの黨首たち及び黨員たちの大多數者の生活意識は　その根本に於て、官僚政治家たちのそれと、共通の分子を、甚だ多分に保有してゐるのである。從つて、彼等の教育上の根本問題に對する見解は、官僚政治家たちに依つて創設された國民教育制度の上に具體化されてゐるところのそれとは大差がないのである。從つて彼等は、今日に於ても、教育行政の根本方針

の上に、何等の創造的工夫を準備する必要を感じないのである。それ故に『護憲内閣』を表て看板にしてゐる現内閣に於ても、その文相の椅子の上には　官僚教育家の『活ける屍』としか我々の眼には映じない岡田文相が祭り上げられてゐると言つたやうな奇觀が、我々の眼前に展開されてゐるのである。それはしかし、縦し一般公衆には時代錯誤だと考へられることでもそれらが、政黨政治家たちに取つては、極めて當然なことであるには相違ないのである。

五

かういふ風に、我國の政黨政治家たちが、教育上の根本問題に對して比較的に冷淡な態度を示して來たのは、一面から見るときは、たしかに右に述べたやうな歴史的原因から出て來たものであるが、しかしまた、他の一面から見るときは、彼等が政治と教育との關係に對して、本來異常に盲目であつたところからも來てゐることもまた、誰れにでも容易に認め得られることである。或る形態に於ける政治が有效に行はれるためには、それに適合した社會的若しくは文化的環境が準備されてゐることを以て、その必須な前提條件とするものである。それは、官僚政治での場合であると、政黨政治の場合であるとに依つて、毫もその理を異にしはしないのである。そして、或る特殊の社會的若しくは文化的環境が準備されるためには、一般民衆への教育が最も重要な役割を演ずるものであることもまた、同樣に判り切つたことである。それは、『善惡の彼岸』にある嚴酷なる事實である。そして我々は、それを好むにもせよ、好まないにもせよ、その事實に對して有效に抵抗することが出來ないものである。

官僚政治家たちは、當初からそのコツをよく掴んでゐた。が、政黨政治家たちは、その點にかけては、驚くべき愚鈍さを示した。少くとも、結果から見れば、さうとしか言はれない。彼等は『憲政濟美』の標榜の下に、ブルジョアジーの政治的パラダイスを作ることを目指して、そのために相當の努力をして來た。けれども彼等は、たゞ一つのことを忘れて居た。それは、教育をその目的の方へ向けるといふ一事であつた。で、彼等は今日に於ても尚ほ、この怠慢の收穫を刈り取ることを餘儀なくされてゐるのである。

もとより彼等は、同樣の怠慢を、より少き程度に於てではあるが、他の樣々の方面でも重ねて來て居る。そのうち、差し詰め今、私の念頭に浮んでゐるのは、軍事上の方面に關するそれである。彼等は從來、國防問題の處理を舉げて、一に陸海軍人

らの手に委ねて來た。それは無論、彼等が資本階級への奉仕者として、曾ては帝國主義的領土擴張から流れ出た恩惠に浴してゐた——若しくは、浴してゐたと妄想してゐた——ことの結果だ、ともいへなくはなからう。ところが、現在の我國の政治經濟狀態の上に於て明かに見られる通りに、そこから流れ出るものと期待され得る『恩惠』も、その前途が段々と行詰まつたやうでもあり、且つまた、單に資本階級の利益を顧慮する立場だけから見ても、さういふ不確實な恩惠を頼むよりも、眼前必要な産業資金を捻出することが、更らに一層緊切な焦眉の急策とされるやうになつて來ては、我國の貧弱な財政からその財源を求める唯一の方策は、一般の國情から見て過大に膨脹して來てゐる軍備の上に、この際徹底的に一大斧鉞を加へることだけとなつてゐるのである。そして、さうしたことを斷行することは、現在の世界の大勢の國際平和への動き方の上から見ても、それからまた、我國の周圍の政情の現勢の上から見ても、決して我國の國防上の安全を脅威するものとは言へないのである。それにも拘らず、我國の政黨政治家たちは、年來國防問題を陸海軍人らの手に任か世切りにして來たことの結果として、この方面に於て彼等が當然なすべきことをすらなし得ない形で居るのである。

いふまでもなく、「國防」といふやうな、廣い國政上の問題に跨つてゐる問題は、それよりも更に狹義に解釋されなければならない「軍備」に關する問題とは異つて、專門の陸海軍人等に一任されるべきものではなくて　一般國民の現實の必要に從つて、それを解決する責任を取らなければならないものである。もとより官僚軍閥の徒が、常に欺瞞的口吻で述べてゐる通りに、『國防は國民的事業だ』といふやうこと も、それを正當に解釋する時には、たしかにその通りだと言へる。がしかし、さういふことは、國防は國民的事業だから、國民が自らその現實の必要に立脚してそれを討究しそれを處理すべきものだ、といふ意味に於てのみ、承認することが出來るものである。ところが、官僚軍閥の徒、及びその亞流が、同じことを言ふ時には、言葉は同じでも、その意味には天地の差があるのである。即ち彼等は、國防は國民的事業だから、國民はそれに關して陸海軍人らの言ひなり放題になるべきものだ、と言つたやうな、思ひ切り得手勝手な心持で、それを言ふのである。それを政黨政治家たちが、國民の名に於て抑制することが出來ないといふことは、彼等が初めから、官僚軍閥に依つて氣を呑まれてゐるからでなくて、何であらう！

六

かういふ譯であるから最近に於て、『護憲内閣』の文相が、まるで軍閥の手先とでもなつてかのやうに立案したところの、所謂軍事豫備教練計畫が、世間の一大問題となつてゐるにも拘らず政黨政治家たちは、殆んど皆申し合はせたやうに、それに對して不思議なほどの沈默を守つてゐるのである。その計畫の眼目は陸軍省に直屬の現役將校を、我國の中等以上の諸學校に配置して軍事的教練を學生たちの上に強課しやうとするものである。私は既に屢ば、それに對する評論を他の場所で發表しておいたから、それを茲で繰返さうとは思はない。しかしそれは、その根本に於ては、第一に、我國の教育界の乏しき獨立性を、更らにこの上一層脅威しやうとするものであり、第二に、教育の軍國主義的色彩を一層濃厚ならしめやうとするものであり、第三に、本來自由主義的であり創造的であるべき教育の本旨を蹂躙して、上官に對する絶對服從といふ軍隊的精神で、それを全然硬化せしめやうとして居るものである。それは少くとも軍隊内に於ては或は適當であるかも知らない一種の硬訓練を、それが最も場違錯誤である學校教育の範圍内へ引き入れやうとしてゐるものである。

それは言ふまでもなく、教育界に於て近來稀に見る一重大問題である。けれども、本來教育上の根本問題に關しては、寧ろ軍事問題に關してより以上に、門外漢的態度を持續して來た政黨政治家たちが、教育上の主義の立場からそれを批判しようとしないのは、或は當然のことだと言へるかも知れない。殊にこの問題の上に於ては、教育上の問題と軍事上の問題とが緊密に結び附いて居ることであるから、益々彼等がそれに近寄るのを恐れる理由がある、ともいへるかも知れない。かういふことは無論彼等の腑甲斐なさを見下げ果てた言ひ方だが、しかしそれも事實ならば、しかたがないと言ふより外はあるまい。

しかしながら、問題の軍事豫備教練計畫は、教育上の主義と言つたやうな根本問題を離れて、單に政黨政治家たちの赤裸々なまでの利害關係の立場から見ても、表面上に見えて居るだけの意味以上に深刻な意味を持つてゐるものである。その點を手短かに言ふと、それは、政治的勢力の分布關係の再移動を招來すべき可能性を持つてゐるものである。即ちそれは、軍閥の學校教育の少くとも一部占領を現實化する可能性を帶びてゐる點に於て、直接の政治的意味を多分に藏して居るものである。岡田文相は、當初は主として國防的見地からこの計畫の効能を説いて居たが、いつの間にか豹變して、少くとも文政審議會の前

では、主として德育の裨補といつたやうな立場からそれを理由づけて居た。しかし國防的見地から言ふと、この計畫は單に、陸軍だけを念頭に置いて、海軍を疎してゐる點に於て、著しく偏頗な性質を見せて居るばかりでなく、新兵器及び新戰術の急速に進歩して來てゐる今日に於ては、諸學校の兵式體操の教習の時間を利用して與へ得られるやうな軍事訓練は、恐らくは兒戯に類するものに終るであらうことの見込のあるものである。次にまた、現役陸軍將校の手に依る軍事訓練を以て、所謂德育の裨補の目的に供しようなどといふことは、我國の教育界の能力を徹底的に見縊びつた言ひ方だ、と言はれるばかりでなく、第一さうした考へ方は、餘りといへば時代錯誤味を極端に發揮したものでもある。で、如何に岡田文相が、官僚教育家の最後の遺物と見られ得る人物にしても、さうしたことを眞面目で述べてゐるものとは、我々には、どうしても受取れないのである。

だとしてみれば、岡田文相をして、該計畫を立案するに至らしめた眞の動機は それが誰れの發意から出たものであるにせよ、却て不言不語の裡に匿せられてあるに相違はあるまい。そして若し我々の見るところに間違ひがなければ、それは實に、軍閥の學校教育の一部占領を現實化しやうとする意圖から出たものに相違ないのである。が、これが事實上さうした意圖から出たものにもせよ、でないにもせよ、それの實施の結果は、略ぼ同じところに落ち着くべき傾向を示唆してゐるものである。即ちそれを防止する力のある事情が發生して來ない限り、軍閥の威令を青年學生たちの上に普遍的に行ふことに依つて、彼等の間に於て暗々裡に、少くとも對軍人的畏怖の感情を幾分なりとも植え付けて、尙淡よくば、現在漸次衰滅に瀕しつゝある軍國主義的精神の復活の機會を醸成することに導からうとしてゐるものである。そして、すべてのかうしたことの窮極は、他にそれを防止する力のある事情が發生して來ない限り、官僚軍閥の政權の頽勢の挽回のために好都合な社會的環境の復歸といふ一點に向つて合流する可能性の見えてゐるものである。そして、さうした社會的環境の復歸するだけづつ政黨政治家たちの、年來の努力の末に、やつとそれまでに贏ち得られたその現在の政治的地位が、それに伴れて一歩々々と、再び崩壞に赴く必然性のあることもまた、特に取り立てゝ言ふまでもないことであらねばならぬ。

七

政黨政治家たちが絶えず唱へてゐる『憲政濟美』といふ題目が、單に鬼の念佛にすぎないやうな種類のものだとすれば、我

々に於ても、今更ら別に文句はない。がしかし、彼等が目標にしてゐるものが、縦しブルジョアジーの政治的パラダイズの確立といふことにあるにもせよ、彼等がさうした殊勝げな題目を口にすることの裡に、幾分でも眞面目な要素が含まれてあるものとすれば、彼等は今少し緊張した注意を以て所謂軍事豫備教練計畫のやうな、教育界の近來の一重大問題を考察して見てはどうか？もとより彼等は、傳統的に教育上の根本問題などを閑却する習慣を養つて來たのだから、今俄にそれを破ることは、彼等に取つては、或は非常に困難な仕事であるかも知れない。しかしながら、彼等がたとへ無意味にもせよ、『政治教育！政治的教育！』と呼んで噪ぎ廻つた時期を待つてゐたものとすると、該計畫のやうに、官僚軍閥の政治的復活のために好都合な空氣を醸する危險性を充分に持つ案件に對して、右のやうな沈默を守つて居るのは、甚だしき矛盾でないとは言はれまい。それの成否は普選案や貴族院改革案やの成否と、無論反對の方面に沿うてでこそあれ、同等に深刻なる政治的意義を持つ可能性のあるものである。加藤内閣の閣僚たちが素直にそれを承認して居るやうな態度に出てゐるのは、所謂新兵器及び航空機の充實で出す入らずの姿に相殺されたところの、例の四師團減に依る名ばかりの軍備縮小を代償として、軍閥にそれを賣つた取引のためかも知れない。が、普選の實施や貴族院改革の斷行を絶叫しつつある與黨三派の人々までが獨りそれに向つては、底氣味のわるいほどの深い鎮靜を示してゐるのは、何といふ不合理であらう！しかも、かうした不合理は、彼等が鐵道延長問題とか、教育費國庫負擔増額問題とかいつたやうな、主として彼等の各自の地盤擁護に關係のある諸問題に對しては、眼角を鋭く立てつつ、執拗に啀み合つて、餘所眼には如何にも淺猿ましく見られるまでに猛り爭つて來たやうなことを、その背景の地位に置いて眺めるとき、一層顯著なものに見えて來たのである。彼等が教育上の根本問題に對して傳統的に無感覺なことに、我々には今更らのことのやうには思へない。また、彼等が曾て政治教育を云爲してゐたのは、つまり好い加減のものであつた。といふことが解つても、我々は毛頭幻滅を感じない。更らにまた、政治と教育との關係に對して、彼等が官僚政治家たちよりも遙かに無知だといふことも、我々には當然のことのやうに思へる。ただ彼等が彼等の自身の政治的勢力上の利害關係に就いても、苟くもその結果が眼前に現はれる種類のことでない限りは、驚くべき無關心の狀態で居られるといふことが、我々の眼には極度に不思議に見えるのである。我々がかうしたことを言ふ時には、我々は或は所謂消息通と稱する手合ひから、その

潤たあざ笑はれるであらうことを恐れる。けれども、さうした消息通から迂潤呼ばはりされることは、我々に取つては、一向苦痛にならないのである。

附記　私は初め、『當面の時局と普選の實施期を基點として豫想され得る政治教育の展開』を主題として、本文を書き始めた。けれども伊豆の伊東の一旅館で療養しつつ、尾籠な話だが、更らに烈しき下痢を得た後に、改造社からの催促に從つて運筆を揮つて居る私は、最早これ以上書き續ける氣力がなくなつた。そこで、この後の部分を次號に依ることにして、一と先づここで筆を擱き、從つて、本文の標題をも附け替へることにした。ただ、本文中にもかうした企畫の變更に伴れて書き替へなければならない文句が幾らかあることに氣は附いてゐるが、今はさうしてゐる餘裕がないから、それはそのままにしておいて、ここにその譯を記るして、讀者諸君の諒解を須つことにした。

植田壽藏著

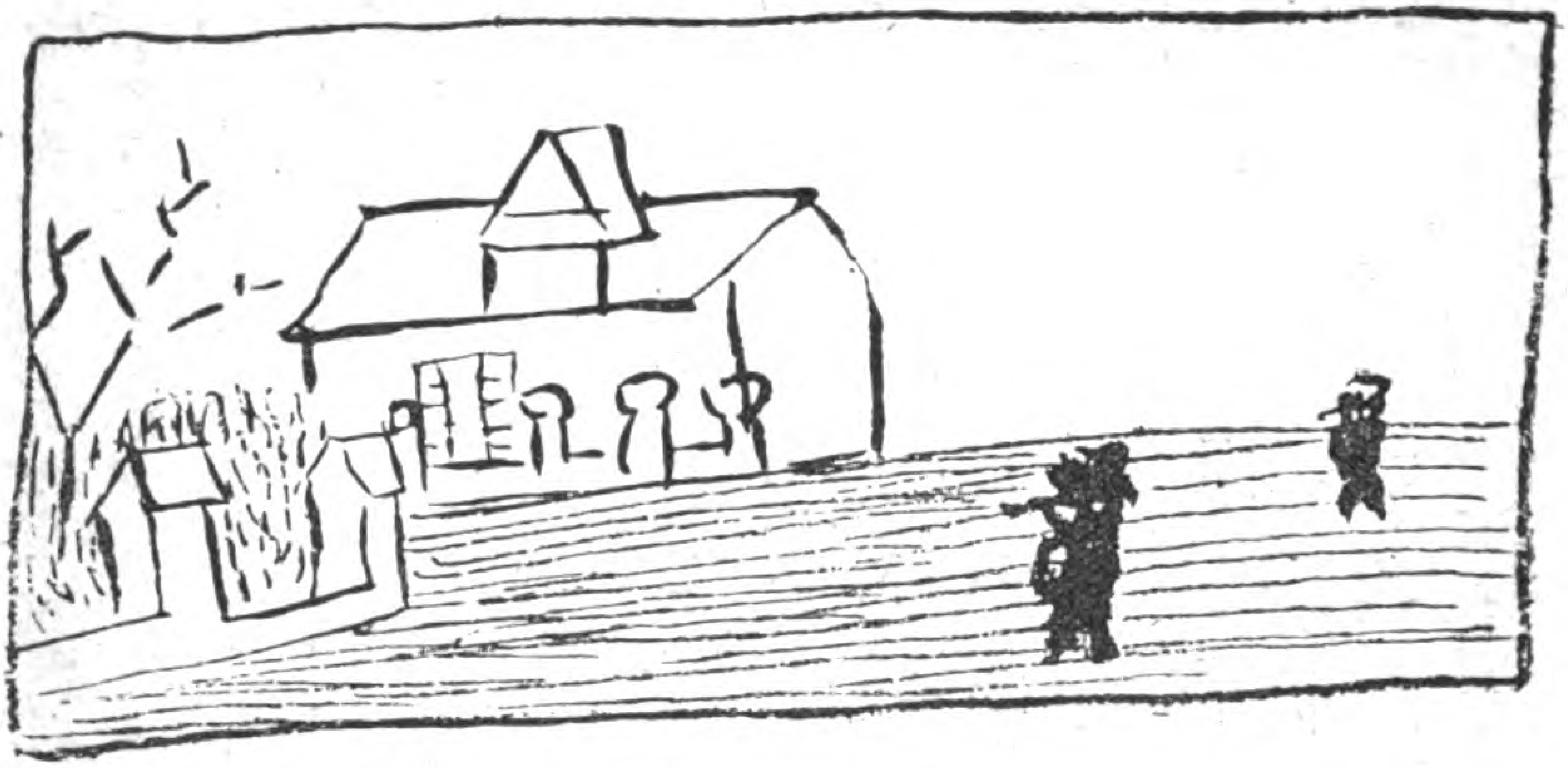
藝術哲學

菊判
上製
定價二圓七拾錢
郵送料貳拾壹錢

最新刊

この書の如く、世界に於て燦々たる光輝ある藝術國日本に向つて、深く要求せられた研究を、この著者の如き著者に依て公表し得ることは、本社の聊か悦びとする處である。憾むらくは、著者の固執する希望の故に、この書に就て、自ら價値を主張することを、本社は凡て差控えねばならない、唯だ眞に嚴肅なる新時代文化の建設者たり、支持者たらんとする諸君自ら、藝術の最も深き眞理に沈潜せられん爲に、(夫れは人類の輝ける義務の一つである)この書が一つの堅固なる階段として役立ち得ることは、著者と共に本社の深く希望する處である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社



劇場と饗宴

正宗白鳥

劇場

磯村夫妻は、十二月のはじめのある寒い日に、わざ〳〵大磯の自宅から上京して、築地のある劇場を見に行つた。そこには、磯村の書いた小脚本が、ある小さな劇團によつて演ぜられてゐた。

この脚本は前の月に、他の演藝場で、同じ劇團の人々によつてすでに試演されたのだが、意外に評判がよかつたゝめに、二たび舞臺に上されることになつたのであつた。

「これを機會に、毎月創作劇をやることにしました」と、ある夜、その劇團の首領である波川は、磯村を訪問した時に云つて、それに關した抱負を述べた。彼れは、數年來時々飜譯劇などを上演してゐたのだが、さして世に迎へられず、好劇

家の間にも問題にされてゐなかつた。いくつか存在してゐる新劇團のうちでも、彼れのひきいてゐる劇團は、ことに影の薄いものであつたが、偶然磯村の、一風變つた新脚本を上演したのが當つて、新時代の好劇家の筆によつて盛んに推賞されるやうになつた。

「日本の現代劇をやるのは、飜譯劇ばかりやつてゐるよりは意義のあることなんだが、しかし、毎月では出し物に困るでせう。今は雜誌の上では脚本全盛だが、いゝものはなさゝうぢやありませんか」と、磯村は、波川の計劃を危んで云つた。

「それは困るんです。……飜譯劇をやるにしてさへ、ある一つの時代や一つの國を限つたら、出し物に困るでせうから」

「多數の見物を惹きつけるやうな新作が續々出て來るといゝんですがね」

「あなたの物は續けてやりたいと思つてゐます。モスコーの藝術座がチエホツフのものをやつて基礎が固まつたやうに、わたしの方もあなたのものを續けたいんです。どし／＼書いて下さい」

「チエホツフのやうなえらい人の物なら、一人の物を續けてやるのもいゝでせうが……」

磯村はさういふ話によつて何の興奮をも感じなかつた。煽てに乘る氣はなかつた。ある雜誌の新年號のために、脚本の新作に筆を染めて、過半書き進んでゐた頃に、例の上演脚本の好評を耳目に觸れたので「ぢや當分脚本の方は止せばよかつた。こゝまで書き込んだ新年物を反古にする譯には行かないが……」と、彼れは、批評家などの眼の中に置かれなかつた今までとは違つて、執筆中の心の稍々濁つて來たのを感じた。それで二三日は筆を投じて、自分一人で勝手に雜藁をつくつてゐるといふ快い氣持から離れてゐた。

「僕は何を書くも同じことなんだから、脚本を書いたつていゝんですが。……」と云つて、磯村は、やう／＼書上げに

はゐたが、まだ雜誌編輯者の手へは渡さないでゐた新作の原稿を波川の前へ出して見せると、波川は直ぐに手に取つて、登場人名を見て、

「あ、それはわたしの座でやれさうだ」と云つて紙をめくつて讀みかけた。

「しかし芝居にはならんでせう」磯村は、原稿を相手の手から取返して、新作執筆の動機などをちよつと話して、「雜誌へ出てから讀んで下さい」

「しかし、雜誌へ發表されてからでは、外の座でやりたがるかも知れません」

波川は眞面目にさう氣遣つてゐたが、磯村はそれを豫期もしないし望んでもゐなかつた。そして、自分の前に坐つてゐる男が俳優であつて、自分が空想から拾出したある人物に扮して舞臺の上で生きて動いてゐたのかと思ふと、神秘不可思議な感じを起さゝれた。

「今度は是非拜見しませう」

磯村は、最初の上演の際には、差支えがあつて見に行けなかつたので、今度は、俳優に對する義理か自分に對する義理かで、努めて見に行からと決心した。自作上演についての感激や興味からではなかつた。

彼れの妻は、演劇に對する女らしい好奇心から、最初の上演を、初日に見たのであつたが、舞臺面が暗くつて汚らしくつて、不斷考へてゐる芝居といふものらしくなかつたのに失望してゐた。しかし、あとで世評を聞いて、そんなにいいものなら、も一度見直したいと思つてゐた。

で、夫妻は、開演時刻に遲れないやうに、蕎麥屋で手輕な夕餐を濟ませて、そこの出前持に劇場の在所を聞いて道を急いだが、行つて見ると、劇場の入口はひつそりして、今日初日が開くのか知らと疑はれるやうであつた。場の中はガ

ランとしてゐた。二三の觀客がところ〴〵にまばらに腰を掛けてゐるばかりであつた。あまりに空いてゐるために、夫妻は座席を擇ぶのに迷つた。暖房の設備がないので、冬の夜の寒さはゾク〴〵と身に染みた。定刻になつても見物はさして殖ゑなかつた。見物が來ないためか開演も遲れた。磯村は寒さ凌ぎに廊下をぶらついたが、知人には出會はなかつた。下足番は、人が來ないのに、「入らつしやい」などゝ叫んで、「から云つて景氣でもつけなきや寒くつてしやうがない」と笑ひ〳〵云つてゐた。案内掛の女は机の側で袖を擦合せて二人でヒソ〳〵話をしてゐた。

開演は待遠しかつた。磯村は、外の芝居だつたら斷念して歸るのだつたが、今夜見のがしたら、一生自作の上演を目睹する機會はなさゝうに思はれたので我慢してゐた。ふと見ると、劇場の前に洋食屋があつたので、そこへ出て行つて、ストーブにあたつてコーヒを飮んだが、その粗末な狹い洋食屋も離れがたく思はれた。

磯村は、波川はじめ一座の俳優に對しても氣の毒に感じた。磯村の著作はかつて賣れたためしがないので、いつも出版者に損をさせてゐたのだが、書物の賣行のよし惡しは、作者に直接見える譯でないからまだいゝ。芝居の當ると當らないとは、直ぐ目前に現はれるのだから、感じが痛切だ。

「こんな風で五日間續いたら、波川は餘程損をするだらう。おれも自分の脚本をはやらせてうんと上演料をせしめる望みは止めなきやならない」と、磯村は側にゐる妻に云つた。

「上演料どころではない。こちらからどうかしてやりたいくらゐですよ。………おれは作者だつていふ顏して自分の芝居を觀に來るのはいゝことぢやないんですね。」と、妻は肩身の狹い思ひをして、二度目の觀劇を後悔してゐた。

「お堂へ行をしに來てるやうだ。………せめて風邪をひかなければいゝが」

磯村は、所在なさに見物の人數を數へたり、寒さ凌ぎに手で手を摩擦したりした。二十四年前彼れが東京の芝居を見

はじめた頃には、歌舞伎座や春木座のやうな大劇場にでも、土間に四五組の客しか來てゐないのを見たことがあつたが、近年はこんなに見物席の淋しい芝居を見たことがなかつた。文學者仲間の評判なんかは客を呼ぶ力のないことに、彼れは思當つた。

ある一幕物が演ぜられて、長い幕間があつた後、やうやく磯村の目差して來た自作の芝居の幕が開いた。彼の空想が形を具へて前に現はれた。數十年來、歌舞伎劇は云ふまでもなく、新派劇でも飜譯劇でも、人並以上に觀て來て、大抵の芝居には興味を失つてゐる彼も、舞臺の方へ目を凝らし心を注いだ。寸毫も實演欲を心に持たないで、勝手氣儘に書き放したものを、兎に角芝居らしく演じてゐると、役者は役者だけに、相當に工夫をつけるものだと、ひとりで感心してゐたが、しかし、役者は役者、作者は作者で、本當は別々であるやうな氣がした。役者は原作を演生して、自から面白い芝居にしてゐるのであらうが、作者が作中の人物と一しよに持つてゐる氣持は、それが下品であらうとも殘忍であらうとも、醜惡であらうとも、他人がはたから如何ともしがたいものであるやうな氣がした。作者は自己の空想中の人物とゝもに、同じ氣持を持つて、墓の中まで生存の道を辿つて行くまでである。

夫妻はしよんぼりしてその劇場を出た。磯村は寒さと飢渴を感じてゐたので、何處か溫かい所で胃に障らないやうな夜食を採らうと思つて、銀座の方へ向つた。すでに夜が更けてゐたので、二三のカフエーへ寄つても、彼れの求める料理は調へられなくなつてゐた。止むを得ず、パザ〳〵したサンドウヰッチで胃の腑を滿たして、夫妻は、豫め部屋を定めて置いたMホテルへ行つた。そして直ぐに湯に入つて疲れを醫して眠りに就かうとしてゐると、そこへ、意外にも波川が訪ねて來た。磯村は自作の上演にいつまでも拘泥してゐるのはいやだつたが、熱心な波川に不快な顏を見せるのは濟まない氣がしたので、眠たい頭腦を引締めて、ベットの側に椅子を並べて相對した。

「駄目を押して頂かうと思つて……」と波川は重味のある口調で云つた。その語調は、今見て來た芝居の一人物の調子そのまゝであつた。舞臺では何かで顏を塗つてゐて病的に青白かつたのに、今見る顏は赭黒くつて丈夫さうなのだが、しかし、同じ顏で同じ目付だ。磯村は舞臺の人物その人に相對してゐるやうな氣持で、口ではあたり前の受答へをしながら、心の一方では、作中の人物がかういふ肉體に魂を宿して、生きてわが側に來たらどうであらうと空想を馳せてゐた。

「僕には實際の舞臺のことは全く解らないんです。生れてはじめて、自分の作つた芝居を見たんですから」と磯村は答へた。事實彼れには戲曲に關する專門的知識が缺けてゐたので、背景にも服裝にも科白にも、適切な注文を出すことが出來なかつた。それで、波川の意見にすべて同意するらしい返事をした。

「あの脚本は實演してそんなに効果が上るんですかね」と、磯村は、ふと相手の眞面目な話の腰を折るやうに云つた。

「わたしはあの役をやつてゐると非常に氣持がよろしい。」波川はさも氣乘りがしてゐるやうに云つた。

「さうですか」

磯村は、この俳優があの作中の人物の心を自分の心としてゐるのであらうかと思ふとともに、心の一方ではそんなことがあるかと否定した。「どうせお芝居だ。舞臺の人物はこの人の創作で、作中の人物はおれ一人のものだ。それでこの人の創作の方が見物にはよく理解されてよく共鳴されたのだ。おれの方の人物ぢや駄目なのだ」と、ひそかに思つてゐた。

「僕もあなた方のお蔭で、雜誌に出した時の惡評を取返した譯ですが、見物があんなに少くちや困りますね」と云ふと、

「いや、それははじめから覺悟してゐました。三十人くらひな見當をわたくしはつけてゐました」と波川は元氣よく答へたが磯村はそれも言葉通りに受取りかねた。そして、波川があの作中の人物の心を自分の心としてゐるのなら、そんな樂天的な希望のある答をする筈はないと磯村に思はれた。……今夜夜更けて扉を叩いて訪ねて來たのは、作中の

人物ではなくつてあたり前の俳優であつた。

「築地小劇場でも、この夏頃には、二三十人の見物しか來ない時がたび〳〵あつたさうです」波川はさう云つて、創作劇でも一年ばかり續けたら地盤が固まる事だらうといふ希望を洩らした。

「新らしいいゝ脚本が出るといゝですね」

磯村の他の脚本に對して、好意ある批評を下しなどして、暫くして波川は暇を告げた。

やがて湯殿から歸つて來た妻は、波川さんはお氣の毒だと繰返しながら寢仕度に取りかゝつてゐたが、ふと、

「わたし、さつきから考へて見て、あの芝居は大變面白いと思ひますよ。忠臣藏なんかよりや身に染みて考へられる」

「どうして？」磯村は意外に感じてそちらへ目を向けた。

「はじめて分つた。あの芝居に出て來た人はあなたですね。……わたし、あの淋しい電信柱の側で手を出して迷つてる女の氣持が今よく分るやうな氣がしますよ。自分の世が見えるやうですよ」

「そりや、どの見物よりもお前によく分つてるかも知れない」

磯村は微笑してさう云つたが、直ぐに話を外に轉じた。意外に電車の音が喧しくて眠りづらかつたので、彼れは、所在なく、讀みさしのコナンドイルを讀みつゞけた。

饗宴

磯村は、ある時に新聞記者として、またある時は文學士として、たび〳〵宴會に招待されたことはあつたが、何等の意味に於ても、彼れ一人のために催された饗宴に出席したことはなかつた。歡迎會送別會出版紀念會などいろ〳〵な名目の下に會合を催したがるのは、彼れの屬してゐる社會も他の社會と同じことなのだが、彼れはいつも、發企人として、あるひは會費持參の平の參會者として顏を出すだけであつた。

歳を取つた上に田舍に引込んでゐる彼れは、どういふ種類の宴會にも自から遠ざかり勝ちになつて、身邊ます〳〵落寞を感じるやうになつてゐた。

「かうしてゐちや時世におくれるでせうね。たまには會にでも行つてゐらつしやればいゝのに」と、妻の方で氣にして、何かの會合の通知でもあると、夫に勸めることもあつた。

「會もいゝが、何處へ行つても若い者が大勢來てゐて、おれなんか老人株にされるんだからいやだ」と磯村はよく云つてゐた。新聞記者時代にはどの會へ行つても、最も若い一人であつたことを、彼れはよく思出してゐた。

ところが、珍らしくも、彼れは今年、松の內のある夜、彼れに敬意を寄せてゐると云つてゐるある若い婦人に招かれて珍味を饗應せられることになつた。この婦人は、五六年前から、いく度も磯村に御馳走をしようとしてゐたのだつたが、彼れはいつもそれを避けてゐた。横濱のある支那料理に招待された時には、妻君同伴といふことで、日も場所も打合せが濟んでゐたのに、その日になつて、磯村の方でスツポカした。それで、料理の支度をしておそくまで待つてゐたと、あとで婦人が手紙で、失望を訴へて來たので、夫妻は非常に氣の毒な思ひをした。

帝國ホテルの演藝場で磯村の脚本が演ぜられた時、その初日を見て、翌日歸つて來た妻は、「今度は大變大谷さんのお世話になつた」と云つた。

演藝場で出會つた大谷愛子は、磯村の妻に親しみを寄せて、その翌日午餐の御馳走をしたり、土産物を買つて呉れたり、品川まで見送つて呉れたりしたのであつた。

「何とかして返禮しなきやいけないわね」

「二人でよく話があつたものだ。何を話してゐた？」

「あなたに認められたつてこと喜んでるんですよ。わたしには、書いた物の事なんか、なんにも分らないけれど、……あの人、わたしを間に立てゝあなたに近づかうと思つてるんですね」

「それは云ふまでもないさ。しかし、おれに手頼つたつて爲方がないんだが……」

磯村は元來、人の世話をすることを好まない男であつた。彼れの作風から云つても、性癖や言行から云つても、婦人の愛讀者や崇拜者を得べき筈のものではないのだが、大谷愛子には偶然に掛り合ひがついてゐた。それは、五六年前にある大新聞の懸賞募集小說の撰評を擔任された時に、數百篇の中から三篇を推拔するに當つて、愛子の作品を特にすぐれたものとして取つたのであつた。奔放な筆で艷もあつていゝ者だつた。

「へえ、あの女のが當りましたか。あの女ならわたしを訪問したことがありますよ。コケツチツシュな女です」と、撰者の一人であつたA氏が云つてゐたと、新聞記者があとで磯村に知らせた。

それを緣で、愛子からの手紙はいく度か磯村の許に送られた。それには、浮世の垢に染まない惱みも知らないやうな、明るい、人懷つこい、才氣のある、しかしお轉婆らしい文句が書かれてあつた。磯村は興味をもつて讀むには讀んだが、懸賞應募者といふものに平生價値を置いてゐなかつた彼れは、一度や二度、撰者の氣まぐれで當選されたのをいゝことにして一生の方針を定める青年を、新聞や雜誌の商業政策の犧牲者のやうに思つてゐたので、愛子がいゝ氣にな

つてゐるらしいのをもひそかに憐んでゐた。

その後、彼女が文學者仲間に名前を知られたり、ゴシツプの種を播いたりしてゐるのが、をり〳〵磯村の耳目に觸れた。しかし、彼れが彼女の容姿を直接に見たのは、ずつと後のことだつた。一二年前、ある音樂會で、ある人の紹介ではじめて挨拶だけしたのと、銀座通りで、A氏の所謂コケツチツシュな態度で、相手の顏を覗込むやうに首を傾げて、何か云つて、ある男子と並んで歩いてゐたのを傍觀したのと、直接に會つたのは二度だけであつたが、かういふ婦人が多くなつたら、日本の社交界も華やかになるのだらうと思はれた。

磯村は、自作の淋しい二度目の上演を見た翌日、Mホテルの自分の部屋で、はじめてしみ〴〵と彼女に會つた。彼女は愼ましやかな態度はしてゐたが、人好きのしない磯村に對してもさして憶してはゐなかつた。磯村はポツリ〳〵興の乘らない話をしながら、正面に相手の顏を見てゐたが、その顏は、懸賞應募當時の顏と同じ顏のやうには思はれなかつた。たとへ會はなかつたにしても、あの幾つかの手紙によつて想像されたやうな、明快な乙女らしさは見られなかつた。目は神經衰弱に罹つてゐた。

彼の女の最近の創作を原稿で讀んでゐた磯村は、懸賞應募の作品と比べて、一人の若い女の心の變遷をも肉體の變化をも跡づけられるやうであつた。

「あなたが以前書かれた物は油つぽい所があつたやうに思つてゐますが……」と、今の作品に對する非難を暗示した。

「あれは偶然思ひついて書きました」

「あの時はじめて小說を書いたんですか」

「さうであんす」

ぢや、あれが當選したから、女の身でありながら文筆の道に進む氣になつたのかと、磯村はふと自分の責任を感じたが、それを口には出さなかつた。

彼れの手許に預けられてゐる原稿は彼女の手に返された。

「この事件はもつと詳しく書いたらいゝかも知れませんね」

「さうで御座いませうか」

この原稿を發表することについて、何かと話を取りかはしたが、原稿に現はされてゐる彼女の最近の心の惱みについては、磯村は話を觸れなかつた。

「これから本郷座を見に行くことになつてゐますが、あなたも一しよに行きませんか」と、勸めると、彼女は直ちに同意した。

磯村夫妻は急いで仕度をして、愛子とゝもに本郷座へ出掛けた。場内は一杯であつた。

「あなたは忠臣藏は見たことはあるんでせう」と訊くと、

「いゝえ、今日はじめて……」

「忠臣藏をはじめて見るんですか」

磯村は意外に感じた。しかし、幕間に休憩室へ入つて、あたりの話を聞いてゐると、角帽を被つた學生などが、はじめて見たらしい忠臣藏の批評を喋々としてゐた。「おれは今年の夏故鄕の劇場で幸四郎の辨慶勸進帳をはじめて見た」とか、「僕は先日市村座の樂屋へ行つて菊五郎と話をして來た。彼れは藝術家だねえ」とか、得意になつて云つてゐた。忠臣藏や勸進帳が、いつまでも繰返される所以である。

ふと、食堂への雑沓した通路で、磯村はYといふ知人に出會つた。「お一人ですか」と訊くと「いゝえ、家族と……」とYは答へて行過ぎた。

「Y君夫婦には時々劇場の廊下で會つたことがあるが、子供がないから、夫婦連れで芝居でも觀に行くやうになるんだらう」と、磯村は自分が近年妻を作つて劇場や食物屋へよく出掛けることに思及んだ。そして、年を取つた、子供のない夫婦の芝居見物は、それを他人の身の上として傍觀すると、影が淋しいやうな氣がした。

一幕だけ見殘して外へ出て、自働車で愛子を芝の奥の方の彼女の家まで送届けてから、夫妻はホテルへ歸つた。妻は、愛子に對して、先日世話になつた返禮を濟まして肩が輕くなつたやうに思つてゐた。磯村は、長い間彼れに會ひたがつてゐた彼女の望みを、今日遂げさせたので、義務を果した氣持がした。

大磯歸宅後、彼女から感謝の手紙が來たり、サンタクロースの土人形などの入つたクリスマスの贈物が屆いたりした。

「大谷さんのお家はお金持なんですね。いゝ家へお嫁に行けるんだから、早く結婚したらいゝでせうに」

「あの人は我儘に育つたんだらう。自分のしたい事を勝手にするのもいゝけれど、今は大分弱つてるんだらうな」

「大變心配があると云つてゐましたよ」

夫妻は時々愛子のことを話題に上してゐた。一度愛子の方からわざ〳〵大磯へ訪ねて來たのに、磯村夫妻は戸を鎖して外出してゐたので、空しく彼女を歸へらせたが、物珍らしがる近所の人々は、斷髪洋裝の彼女の姿に目を集めて、あとで頻りに噂の種にした。別莊の人々を特種階級の人種として見上げるに馴れてゐる土地の者は、都會の青年文學者などが彼女を見るやうな目では彼女を見なかつた。「いゝ奥さん」と褒め立てゝゐた彼等の言葉には、少しの嘲りも含まれてゐなかつた。

磯村夫妻は、四五年振りで東京で越年することにして、大晦日の前の日に家へ出た。妻は宿へ着くと、直ぐに愛子に電話を掛けた。東京に來ても遊び相手のない妻は、せめて彼女をでも招いたら、淋しい正月にも多少の興味が添うだらうと思つたのであつた。餅も搗かず〆飾も調へず、年越の仕度をなにもしないのは、手數がかゝらなくていゝ譯だが、そのかはり、幼い頃から頭に染みてゐて、年ごとに興味になつてゐる大晦日らしい氣持ちも、正月らしい氣持もしなかつた。

宿の食堂の洋食はまづいから、銀座の年末の賑ひを見た次手に、風月の食堂で夕餐を食べることにしたが、そこである知人に出會つたので、その人と食卓を共にして仲間うちの消息など聞きながら、ゆつくり食事をした。食堂は不斷よりも賑つてゐた。食後暫く雜話を續けてゐるところへ、ふと、「磯村さん」と、女の聲で呼ばれたので、磯村は聲のした方を目を向けたが、その人は、本郷座で由良之助に扮した俳優の妻君であつた。

「××君と御一しよですか」

「えゝ」

「支那はどうでした」

「支那ですつかり身體をこわしちやつて。まだよくならないんですよ」

成ほど身體は衰へてゐるらしかつた。磯村は、若い頃面識のあつた彼女に、その後、五年目に一度くらゐ、芝居茶屋か劇場の廊下かで行逢ふことがあつたが、そのたびに女の年を取ることが明らかに感ぜられた。この俳優の妻君にも實子はないのであらうが、子供のない女の次第に年を取るのを見るのが、磯村には心淋しかつた。「この女も、御亭主にくつゝいて遠方へ旅行したり、年末に洋食を食べに來たりしてゐる」と、彼れは自分だけの身に引くらべて感じた。

ホテルでは、年末から正月にかけては客が極めて少くなつた。二三の外國人が一人ぼつちの元旦を迎へてゐた。大晦日に家を出て、わざ〳〵帝國ホテルに泊つて正月を迎へてゐた大谷愛子は、二日の日に、新たに書上げた原稿を持つて磯村の宿を訪ねて來たが、その時、夫妻を饗應する約束をした。何氣なく磯村が話してゐた料理に關する話を耳に留めてゐて、彼れを喜ばせるやうな饗應の場所を撰んだらしかつた。

夫妻は、三日の晩には、帝國ホテルへ彼女を訪ねて、その足で直ぐに大磯の家へ歸ることにして、宿屋の拂ひを濟ませ、汽車の切符をも買つてホテルへ行つたが、愛子は、

「麻布の興都庵が明日から料理をはじめるさうですから、座敷を開けさせて置きました」と、不意に云つた。

「それは困りましたねえ。取消せるでせう」と云つて磯村は一應斷つたが、かねて噂に聞いてゐる其家の普茶料理を食べて見たくもあつたし、愛子が多年彼れに對して抱いてゐた饗應慾を斥けるのも氣の毒だつたので、承知した。前後の様子や止切れ〳〵に交換した乏しい話から察して、彼女がわざ〳〵帝國ホテルに宿を取つたのは、半ばは家庭の煩累を離れて自由に遊びたいためだつたのであらうが、半ばは、磯村夫妻を充分に持成したいためだつたらしい。……彼女數日間の行動は、磯村との往來が表になつて、あの原稿に書いてあつたやうなことが裏になつてゐるやうに思はれないでもなかつた。

とに角、翌日、磯村は彼女を待合せて、三人連れで牛込の方へ出て、日暮れ頃から麻布へ向つた。

料理屋は、豫想に反して、數奇を凝らした家でもなかつた。時刻が早いためか他には客がないらしく、家の中は寂閑としてゐた。導かれた二階の一室は、壁に地袋の跟を留めてゐる、見るから冷たさうな部屋であつた。三人はめい〳〵小さな箱火鉢を側に置いて、厚ぼつたい座蒲團の上にちよこなんと坐つた。ちよこなんと坐つてゐたといふ言葉がこの

場合に最も適切であつた。

彼女は例の洋裝で、妻は着古した不斷着で、彼れも客衣らしくない服裝であつた。彼れは坐りすらいので、膝を合せたり胡座をかいたりした。

「先生は横におなんなればよろしいでせう」

「茶料理へ來て寢ころぶ譯にも行くまいな」

「洋服ではお寒いでせう」

「こんなものを下へ着て來ました。……見られると極り惡い」

三人の話は止切れ勝ちになつた。誰れかゞ努めて新たな話題を持出しても長くは續かなかつた。愛子はたび〳〵料理の催促に立つた。

やがて持込れて三人の前に据ゑられた黑塗のお膳の上には、赤い木盃が載せられてあつて冷酒が注がれた。

「あなたは酒が飲めますか」

「少しは頂けます」

「この黃ろい者は何だらう。カラスミらしいな。」

「父の故鄕は長崎ですの。カラスミは長崎の名物なんで御座いませう」

「あなたはコノワタを食べますか」

「えゝ。溫い御飯につけて食べるとおいしう御座いますわね」

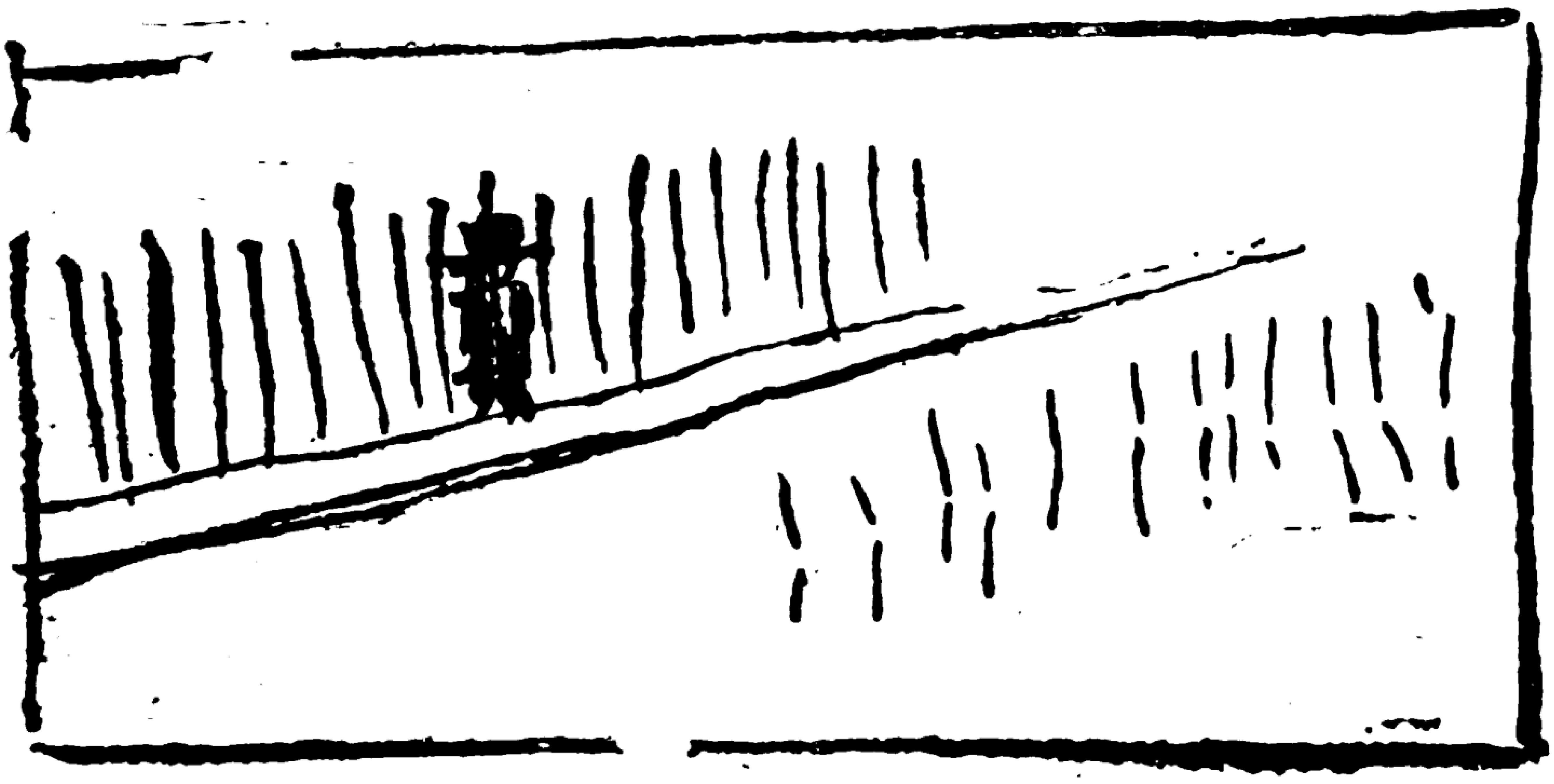
惣村は彼女の原稿の中に、海鼠腸(このわた)の味を比喩に使つてゐたことを思つて訊いたのであつた。カラスミと思はれた黃ろ

い料理は、玉子の味噌漬であることが女中の説明によつて解つたので、三人は笑つた。
「あなたはこの前旅行に出ると云つてゐたが、止めたんですか」
「えゝ。少し長く行つて見ようと思ひまして」
「あてがあるんですか」
「小笠原島へ行きたいと思つてゐました」
「不便なところぢやありませんか」
「月に一回くらゐしか船がかよはないやうですけど、さうして世間を離れてゐようと思ひまして。……」
「辛抱出來れば、それもいゝかも知れませんね」
「今は、小笠原よりも永平寺へ行きたいと思つてゐるんであんす。」
「禪ですか。……しかし永平寺は寒いでせう。あしこは五月頃がいゝ。……ホテルのあなたの部屋に蟄居してれば、永平寺も同じことぢやないか知ら」
スツポンの汁だの、汁掛飯だの、異つたものを、三人は手早く、さうして料理の味はひをも解しないで食べた。
「此方へは奥樣方がよく入らつしやいます。わたくしどもでは御酒を召上らない方に頂きたいんで御座います」と、女中はお愛想を云つた。
「さあ歸りませうか」
磯村は、シビレの切れた足をさすつて座を立つた。愛子は自動車で夫妻をホテルまで送屆けてから、何處へか去つた。夜はまだ早かつた。

特に彼れのために催されたといふ、磯村の生涯では空前の饗宴も、こんな風で、記錄すると、極めて飽氣なかつた。

「今日、宿屋に一人でゐた時分に退屈だつたから、實家へ長距離電話を掛けると、みんなが出て來て、あとで赤ん坊まで電話口へ連れて來ましたよ。さあ、萬歳をお云ひ〳〵と傍でせきたてると、赤ん坊は泣出すんです。蓄音機を聞かせやうかなんて云つてるうちに、時間が來て電話が切れちやつた」と、夜汽車の中で、妻は云つた。

「大晦日の晩に、若い文學者の巣になつてる牛込のカツフエーへ行つて夜を明したり、穴倉のやうなホテルの部屋で晝寢をしたり、夜中に湯に入りたりして、氣儘をしてゐても、あの人は本當に面白かないんだね。あの目には心の疲れが出てる。幸福の宿つてる目ぢやないね、」と、磯村は云つた



バカスカシ

葛西善藏

午後のまる半日を、自分等は金精峠道の密林の間や湯の湖畔を歩き廻つて、アヲジに似た、雀位ゐの大きさの小鳥を一羽、打ちとめたきりだつた。湖畔近くの熊笹の中の、一本聳え立つた栂の老木の下枝に止まつてゐたのを、勝爺さんが撃つたのだつた。頭を射抜かれて、ちぎれるやうになつて、血が流れてゐた。自分はポケットから鼻紙を出し、鳥をつゝんで、爺さんの背負つてる編んだ嚢のやうなものゝ中へ、入れてやつた。

十一月一日だつたが、三四日前に大吹雪があつて、路傍の熊笹の根方にまだ雪が殘つてゐたりして、底冷えの陽氣ながら、好く晴れた風の無い日だつた。自分は宿で早い晝飯をたべて、鐵砲を擔いでやつて來た爺さんと、自分も靴にゲートルを着けて、ポケットにキャラメルを入れたりして、出て來たのだつた。爺さんと云つてもまだ五十二三の、山で鍛へあげられた、小柄な引緊つた體格の、元氣な爺さんだつた。酒好きで、剽輕で、皮肉で、おもしろい爺さんだつた。自分は宿で獨りの晩

酌に退屈しては、よく爺さんの店に押かけて行つて、大きな爐に當りながら、爺さんと飲み合つて、山の話、熊の話、樹や草のことを爺さんに聽いた。帝大の理科や藥學科の學生たちが植物採集に來ると、この爺さんがいつも案内役だつた。そしていつか學生たちから「山勝敎授」と云ふ綽名を貰つてゐたほどの、中禪寺から湯本へかけての山や、草木の通人だつた。自分は金精峠へもこの爺さんの案内で登つた。「明日は檜にならうてんで、そこでアスナラウ……」斯う云つた調子で、翌檜の巨木を指しては、檜との見分けを敎へて呉れたりした。

昔の火繩銃を新式の裝置に直したのだと云ふ重い鐵砲を擔いで、ゴムの深靴をはいて、爺さんは先きに立つてのそり〳〵歩いた。遠くの方でカケスの聲がしたり、麓の樅の木に鶉の姿が見えたりしたが、そこは脊丈けほどの一面の熊笹で近寄れなかつたりして、自分の撃つて見る機會がなか〳〵來なかつた。笹藪の中で何かしらガサ〳〵音する度に爺さんは仔細らしく首をかしげたりしたが、兎の飛び出して來る氣配も、ついぞ感じられなかつた。

タマをこめて貰つて、今度は自分で先きに立つて、白根山麓の湖畔の道を半里ほど歩いて、湯瀧の上にまで出たが、湖水の縁をもぐつたり翔けたりしてゐる川烏のほかには、鳥らしい影も見られなかつた。

「隨分重い鐵砲ですね。反動も強さうだな。普通のにして、一體何番位ゐに當るの?」自分は肩や腕が痛くなつて、くたぶれて、鐵砲を爺さんに渡した。

「まあ二十二番と云ふんですがね、そりや反動たらちつともありませんや。昔の火繩銃を直した奴ですからな、重いことは重いが、反動はそりや少ないでがすよ。子供にだつて大丈夫でさあ……」

「さうかしら?……」と云つたが、何しろ爺さんは日清戰爭にも出てゐるんださうだからと、ケロリとした顏して云ふだけに、爺さんの話は疑はしい氣がされた。

よく鴨が下りる場所があると云ふので、自分はまた爺さんについて瀧壺にくだり、幅三間程の流れに沿ふて熊笹の中をガサ〳〵歩いた。鴨はゐなかつたが、水の澱んだ熊笹の根株のあたりなどに、例の素早い川烏がチ、と啼きながら水をもぐつたり翔けたりしてゐる。

「旦那々々……ゐますよ〳〵……そつと〳〵」

爺さんは聲をひそめて、自分を手招ぎする。が鐵砲を渡されて、自分が照準を定めようと身構へしてその方を視ると、もう鳥の影が見えないのだ。七八町の間を往つたり來たりして、幾度もそんなことを繰返したが、いつも同じだつた。

「今のは惜しかつたですな。あれはたしかに擊てたんだつたがなあ……」と、爺さんは如何にも殘念さうに呟く。

「ぢや今度見つかつたら、あなた擊つて下さいよ。僕はいゝから……。僕にはよく見えないんだもの……」

すつかり黃昏れかけたのに、爺さんはやはり歸らうと云はず、旦那そつと〳〵――を繰返しては、自分を引張り廻した。自分は十日前程に酒の飲み過ぎから血を吐いたりしてゐるので、內心運動の過激を惧れ、また夕方の冷氣も身に沁みて來てゐるのだが、何となく意固地な氣持から、默つてついて廻つた。「爺さん、やつてゐるな！」と、自分もだんだん氣づいて、腹の中で苦笑を感じてゐたのだつた。川烏は禁獵の鳥なので、爺さんは擊つ氣がないのだが、自分の腕を馬鹿にして、どうせ擊てつこはないと安心し切つて、旦那々々を繰返してゐるのだつた。

「禁獵の鳥なんでせう？」

「さうですけど、構ひませんとも……」

「たべてうまいかしら？」

「うまいと云ふわけには行きませんがね……」
「兎に角歸らうぢやありませんか。こんなに暗くなつちや、ほかの小鳥だつてみんなゐなくなりますよ。僕は何でもいゝから、一發だけ撃つて見たいんだから……」
爺さんを促して、また湖畔の路を歸つて來る時分には、すつかり暗くなつてゐた。無論小鳥一羽途中でも見かけなかつた。
「僕湖水へ一發撃つて見たいな」と、湖水の中頃にさしかゝつた時に、自分は云ひ出した。
「撃つてごらんなさい」と、爺さんはタマをこめて、自分に渡した。
「大丈夫かな？強く來ないかな？」
「大丈夫でがすとも。やつてごらんなされ……」
最初のタマが不發だつたので、自分は一層氣味わるくなつたが、思ひ切つて、湖水の上の闇に向つて、引金をひいた。へ、ドーンと云ふ音と共に、眼の前がパツと赤く燃え立つた。それが、白根、金精の岩肌に反響して、グワーンと強く長く音をひいた。何とも云へない痛快な感じだつた。
「成程、いゝもんですなあ！……」と、自分は半日の溜飲のさがつた氣持で、爺さんに云つた。
「どうです、反動なんかちつともないでがせうが？……」
「さうなんだらうね……」と自分は曖昧に云つたが、爺さん、十二番を二十二番と云ひくるめてゐるのだと、自分はまた腹の中で輕く苦笑された。
「たつたそれ一つかね？まだ鴨だとよかつたなあ……」暗い湖畔の路を歸つて來て、爺さんの店に寄ると、嚢から出し

た小鳥を見て、婆さんも呆れたやうな顔をして云つた。

「その代り大きにヒマを取つて來やした」爺さんは斯う云つて、軒さきで器用に毛をむしり、腹を割いた。

「二つに切つて、獵祝ひに一と切れづゝでも食はう」と、自分は云つた。

串にさして、大きな爐で、附燒きにされた。店の瓶詰めの酒を婆さんに燗をして貰つて、爺さんと自分とは爐邊で飲み始めた。口に入れるのも何となく氣がさすやうなカラ〳〵に燒けたその小さな半分を、自分は思ひ切つて口に入れたが、一寸ほろ苦いやうな味だつた。「うまい、うまい！」と自分は顏を顰めて大袈裟に云つたが、婆さんの言葉ではないが、せめて鳩位ゐの小鳥だつたらなあ！　とひどく呆氣ない氣持になつて、

「一體これは何と云ふ名の鳥？」と、ふと訊いて見ると、

「バカスカシ……」と、爺さんはニヤリと白い齒を見せて、言下に答へた。

「バカスカシか……ム……」と自分も繰返したが、またも一本參らされた氣がして、苦笑しながら首を振つた。

「それではまた忘れないうちに、ひとつ書き留めて置かうかな」自分はポケットから手帖を出して、テレた氣持を取繕ふ氣持も手傳つて　十一月一日、バカスカシ――と鉛筆で書きつけた。

「やつぱし、何と云つても爺さんの教授振りは鮮かなものだ」と、自分はいゝ加減醉つて外に出て、兎に角半日の遊びに滿足して、宿に歸つた。

半日の手間賃二圓、それから酒代――一羽のバカスカシも、なか〳〵馬鹿に出來ないものになつてゐた。がこれだけだと、別にバカスカシに文句のない譯なんだが、自分はその翌々日山をくだることになり、その朝、大した額ではないが、東京から日光局に振出された電報爲替券の紛失してゐることに氣がついて、ひどく狼狽したのだつ

た。いつも中禪寺局宛てに來るのだか、日光局宛てになつてゐたので、半月程もほつたらかしてあつたのだつた。湯瀧の下で川烏を追ひ廻した時、自分は蟇口に入れてるニッケルの時計を、ちよい〳〵出して見たのだか、その時に紛失したとしか、考へられないのだつた。拾はれたとしても電報爲替のことではあり、それに日が經つてゐないので、日光局で手續きをすれば大丈夫とは思つたが、何しろ發つ朝だつたので、狼狽もされ、氣持かわるくてならなかつた。駐在所は三四日前に引拂つてしまつたし、念のため番頭を爺さんのところへも訊きにやつたが、やはり見つからなかつた。

そんなことで、自分は爺さんの店で買つたシラクチと云ふ蔦の土瓶敷きや、白樺の栞や、石楠花やシラクチのステツキ、丁度手さげ提灯ほどの大きさの木の葉蜂とか云ふ蜂の巣――そんなやうなものをしこたま抱へこんで、宿から馬車に乘り、爺さんの店の前をも通つたが、婆さんだけ店先きに出て來て、別れの挨拶を交はした。爺さんも恐らく、何となくバカスカされた、不快な氣持で、遠退く馬車の音を爐邊で聞いてゐることかと思ふと、氣の毒な氣もされた。宿の人たちにしても、隨分氣持のわるいことに違ひなかつた。

「ひどく祟られたものだなあ……」と、ガタリ〳〵湖畔の路を揺られながら、早く斯うした氣持から遁れたく、顔馴染みの馬車屋に鞭を當てさせた。……

この冬こそはと、まる二た月の温泉入りの効能を頼りにして來た甲斐もなく、歸る早々、また持病の喘息や神經痛に惱まされた。例年のことゝて諦めてはゐるやうなものゝ、全神經が萎け切つて、仕事の氣分がちつとも動かないには、弱つて了ふ。氣分のいゝ日の午後、ひとりで本郷通りを散歩して、思はず、苦笑を洩らしたりすることがある。枯淡とか、俳味とか――さう云つた程度を通り越した、萎縮した、貧弱な自分の生活力に、自分ながら幾らか呆れ氣味の微笑さへ催されるのだつた。友人たちの誰も彼もが、新年の雜誌原稿五十枚のもの幾つ書いたとか、二百枚近いものを書き

あげたとか云ふ噂さが耳に入るにつけても、ヤケクソな業腹な氣持になり、晩酌が利き過ぎると、山から持ち歸つたゲートルを着け、貧しい蟇口を空にしては、そこら中を當もなくタクシーで乘り廻した。「タクシーにゲートルはをかしいね……」と、ある若い友人がひやかした。「俺の方はまだ遭難氣分なんだよ」と、自分も敗けずに云ひ返した。

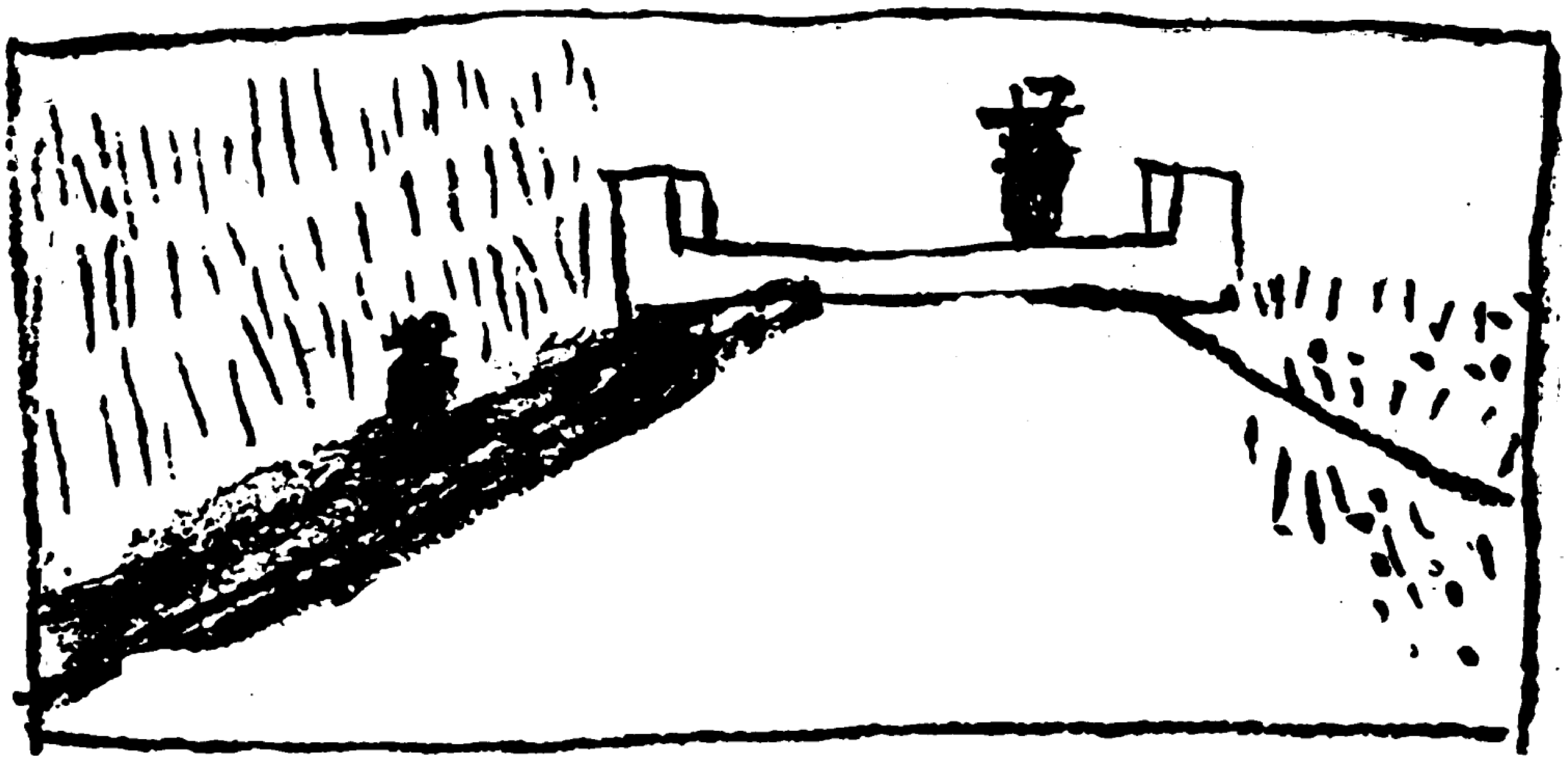
H社のY君が、夏前からの約束だからと云ふので、今度こそはと、毎日のやうに原稿の催促に來た。Y君とは今度は初めてだつたので、彼は自分のことを先生々々と云つた。十一月いつぱいが十二月五日になり、十日と延びても、自分には何一つ書くものが浮かんで來なかつた。ずつと藥を飲み續けて、大方萬年床にもぐり込んで日を送つてゐた。「先生、今日こそはどうしても書き出していたゞきませんと……」と、Y君は根氣よくニコ／＼した顏して毎日やつて來た。

十四日になつて、やうやく題だけ、バカスカシ――と、原稿紙に書きつけた。萬年床の中に机を入れて、蒲團につゝまれて、ぼんやりした頭腦でペンを執らうとして向つて見るのだが、それが、最初十枚位ゐには書けるだらうと思はれたのが、向つて見ると、精々三四枚か、二枚か、しまひには一枚にもならないやうに思はれて來て、どうにも筆がつけられなかつた。山で口に入れた時のホロ苦いやうな味までが、苦笑といつしよに浮んで來て、自分の氣持をさびしくした。「せめて鶫位ゐだとなあ！……」と、自分は持ちかけたペンを措いて、机を押出しては、蒲團の中にもぐり込むのだつた。

この節季に、二枚三枚のものを稼いで見たところで、どうなるものでもない――自分は斯うヤケに諦め出したのだが、Y君は相變らず「先生にも是非二枚でも三枚でもはいつていたゞかないと……」斯う云つて、ニコ／＼した顏して根氣よく續けて來た。そして、明日の夕方まで、明日の夕方までと、一日送りに送つて來たのだつたが、十八日の朝何氣なく新聞を見ると、Y君の方の雜誌の執筆者の豫告が出てゐるのだつた。前の日の夕方もY君が見えたのだが、やはり例の調子で、明日の夕方までと云ふ約束だつたのだつた。

「ではまた一杯、バカスカされたと云ふわけかな……」と、蒲團の中で、またもホロ苦いやうな失望感から、斯う呟いた。

――十三年十二月――



叔父

豊島與志雄

中野さんには、喜代子といふ美しい姪があつた。中野さんの末の妹の嫁入つた武井某の娘だつた。

中野さんと喜代子の母とは、母親が違ふせいもあつたし、年齢も可なり違つてゐたし、餘り仲がよくなかつた。その上、中野さんは富有で羽振のいゝ方だつたし、武井の方は零落した貧しい生活をしてゐたので、兩家の交航はごく疎遠なものだつた。それでもやはり、中野さんにとつては、喜代子が美しい姪たるを妨げなかつた。

喜代子は時々——といつても二ケ月に一度くらゐ——中野さんの家にやつて來た。

中野さんには大勢子供があつた、男の子や女の子が。そして皆、中野さんに似て不綺麗だつた。その中に交ると、喜代子は一段と美しく見えた。

中野さんは美しい喜代子を好きだつた。生れて一度も剃刀をあてたことのないや

うな、すつと一の字に引かれた眉、白い頬に浮出してる長い揉上の毛、眞黒な房々とした髮——無雜作に取上げて後頭部でくるくると束ねた、兩手に握りきれないほど多量な髮、どれもみな、處女眉、處女揉上、處女髮だつた。そして、それにふさはしい眼付と顏立。彼女を見ると中野さんはいつも、赤い粗らな髭の下の大きな口付を他愛なく弛めて、獨り嬉しさうににこにこしてゐた。

　そして不思議なことには、中野さんは一度も喜代子の結婚について考へたことがなかつた。喜代子を自分の子供の誰かに貰つてやらうとか、またはいゝところへ世話してやらうとか、そんなことはまるで忘れてしまつてゐた。喜代子はもう學校も卒業してゐるし、年も十九になつてゐたが、中野さんにとつては、いつも、そしていつまでも、無邪氣な處女だつた。

＊

　三月はじめの或る日曜日に、喜代子は菜の花を澤山持つてやつて來た。そして座敷の床の間の花瓶にそれを生けようとした。がどうもうまくゆかないらしく、しまひには變にぢれ出してしまつた。

　それが中野さんには面白かつた。が中野さんはもつともらしい口の利き方をした。

「菜の花だけを生けようつたつて無理だよ。何かしんになるものがなくちやあ……。」

「いゝんですわ。」と喜代子は不機嫌さうに答へた。「あたし菜の花の畑を表現してみるつもりなんだから。」

「表現はよかつたね。」

　だが中野さんの調子は、少しも皮肉ではなく嬉しさうだつた。

「えゝ、表現するのよ。」と喜代子は平然と云つてのけた。「眠くなつたらあたし、菜の花ばかり咲いてるところに行つてみるつもりなの。」

「そんなところがあつたかな、東京の近くに……。」

それきり喜代子は默り込んで、どうにか菜の花を生けてしまつた。

その室咲きの餘り匂はない菜の花を見い見い、中野さんは大きな紫檀の机に向つて、いゝ氣持で、調べ物の續きをやりだした。

喜代子は向ふの室で、小學校に通つてる末の子供達の相手になつて、「その試驗準備をみてやつてゐたが、暫くすると、勉强の方はそつちのけにして、皆できやつきやつと遊び初めた。年上の方の娘までそれに加つた。騒がしい笑ひ聲の間々に、喜代子の澄んだ朗かな聲が高く響いた。

中野さんは調べ物に氣がはいらなくなつて、日向の縁側に出て、ぼんやり庭の方を見てゐた。植込の落葉樹の芽がふくらんで、地面は濕氣を帶びて黑々としてゐた。

そこにひよつこり喜代子が出て來た。

「今日はばかに賑かだね。何か嬉しいことでもあるらしいね。」

「えゝ……。」

言葉尻を濁してから、喜代子はふいに眞面目な顏付になつた。二つも三つも年が上のやうになつた。

「あたし……叔母さまが生きてゐらつしやるとほんとにいゝんだけれど……。」

「えゝ、叔母さまが……。」

中野さんはびくりとして、喜代子の顔をみつめた。

「だけどいゝわ。本當はお話があるんですの。叱らないで下さいね。」

「何を云ふんだい、だしぬけに。叱りなんかしないから、話があるなら云つてごらん。」

「今ぢやないの。も少したつてから……。」

伏せてた顔をふいに擧げて、ぢいつと見入つてきたその眼が、黒水晶のやうに底光りしてゐた。中野さんはまたぴくりとして、一寸口を利きかねた。その間に、喜代子は默つて向ふへ行つてしまつた。

子供達はまた一しきりはしやぎ續けてゐた。それが次第に靜まつていつた。

「どうしたの、喜代子さん。いやな人ね、考へ込んでばかりゐて。」

云つてるのは年上の娘の靜子だつた。

その靜子が、後で中野さんにこんなことを云つた

「可笑しいわ、喜代子さんは。ふいに騷ぎだしたり、また默り込んだりして、眼に一杯涙をためてゐらしたの。どうなすつたんでせう。」

中野さんにも腑に落ちなかつた。黒水晶のやうな眼の光が、中野さんの頭の中に何度も浮んできた。

＊

五月から六月へかけて、中野さんは會社の用件で滿洲の方へ旅をした。その旅行中に、意外な事件がもち上つた。

喜代子には幾つも縁談がかゝつてゐた。それを喜代子は兩親から相談される度毎に、一言のもとにはねつけてゐた。

所がその春非常によささうなのが一つあつた。帝國大學の病院に助手をしてる醫學士で、家柄もいゝし人格も高いし、將來有望な才能だといふことだし、博士論文の種を研究中の由だつた。兩親は可なり氣乘りがした。喜代子はまだ結婚を急ぐほどの年齢でもなかつたけれど、一つ年下の妹があつた。それやこれやで、兩親もしまひには度々喜代子に承諾を勸めた。然し喜代子はいつもきつぱりはねつけた。するうちに、喜代子は突然家をぬけ出して、筒部といふ餘り有名でない詩人と同棲してしまつた、といふのである。喜代子はその男と以前から戀仲だつたらしく、後で考へてみれば、度々怪しい手紙が來たこともあるし、中野さんの家に行くと云つて出かけては、屢々外で逢つてゐたらしかつた。

滅多に顔を見せたことのない喜代子の母は、自分で中野さんの家にやつて來て、仕末に困つた相談をもちかけた。

「私達もうつかりしてゐました。ふだんあんなに無邪氣さうにしてゐたものですから、こんなことを仕出かさうとは、夢にも思はなかつたのですよ。」

「そりやあ誰だつて……。」と中野さんは答へた。

「一度家に戻つて來てくれるといゝんですが、家に歸るくらゐなら死んでしまうと云ふし、その男がまた、私達は生命がけで……だなんて云つてるさうですから、もし無理なことをして萬一のことでもあつたらと、それも心配になりますしね、どうしたものか困つてしまつたのですよ。それかつて、このまゝ放つておくわけにもゆきませんしね。世間の口もうるさいし、もし新聞にでも出るやうなことになつたら、愈々恥を世間に曝すやうなものですし……何かよい工夫はないものでせうか。」

中野さんはその話を初め聞いた時にも、別段驚きはしなかつた。驚かないどころか、何だか夢のやうなお伽噺でも聞いてる氣がした。それが自分でも一寸不思議な心地だつた。そして、黒水晶のやうな眼の光をまた思ひ出した。

「ぢやあその男と一緒になしたらいゝでせう。」と中野さんは落付いて云つた。

「それが、まだ血統も何も分りませんし、詩を書く人だといふきりで、下宿屋にごろごろしてゐるといふんですからね。」

「血統なんか調べたらすぐに分るでせう。それに、詩人なんてものは、今日は下宿屋に轉つてゐたつて、明日は天下に名を知られるやうになるかも分らないから。」

「へえ—、そんなものでせうか。」

「とにかく、その男と一緒になすのが一番よい策でせうね。」

「あなたがそんな考へだらうとは、思ひもつきませんでしたよ。ほんとにわたしは、途方にくれてぼんやりしてしまつて……。」

中野さんも實はぼんやりしてゐるのだつた。中野さんはどうかすると、ひどくぽかんとすることがあつた。そしてさういふ時、よく思ひ出す一事があつた。

まだ中野さんが十歳くらゐの時のことだつた。實母が死んで若い繼母が來てゐたが、その新らしい母に對して、彼は實母に對するのとは全く違つた氣持でなつかしんでゐた。喜代子の母が——二つばかりの赤ん坊だつたが——胸に抱かれて乳を飲んでるのが、妙に羨ましく妬ましかつた。そんな氣持から、或る時ひどい悪戯をした。若い母はいつも日本髪に結つてゐて、鼈甲だの珊瑚だの瑪瑙だの、その他いろんな美しい玉のついた、種々の髪の道具を持つてゐた。彼はそれをそつと盗み出して隠しておいた。母は大騒ぎを初めた。漸く髪の道具は袋戸棚の中から見付つたが、彼は素知らぬ顔をしてゐた。そして翌日またその悪戯をくり返した。そこで彼の仕業だといふことが分つた。母は亂れた髪のま

んまで、彼を人のゐないところへ呼んで、叱つたり歎いたりした。自分の産んだ子供と彼とを分け隔てしてはゐないのだの、彼をも心から可愛く思つてゐるのだの、何が不足で私をいぢめるだのと、眼に涙を一杯ためて說きかせた。聞いてるうちに彼は無性に悲しくなつて、母の膝に取縋つて泣き出した。それから、膝の上に抱き上げられて、泣きながら見上げた母の顏が、非常にやさしく美しく、神々しくさへも思へた。で彼はまた母の胸に顏を埋めて、震へながら泣き出した。

それを思ひ出す氣持が、喜代子のことゝ何の關係があるかは分らなかつた。いやそれは、喜代子のことなんかよりも、細君を亡くして多くの子供をかゝへながら、未だに後妻を迎へないでゐることの方に、より多く關係が深かつたかも知れない。がとにかく中野さんは、喜代子の母親を——その當時の赤ん坊を——前にして、ぼんやりそんな變なことを思ひ出しながら、晴れやかな美しい幻を見たのだつた。……あの美しい處女喜代子が生命をかけて戀してゐる。相手の男はそれにふさはしい美しい人である。今は下宿の陋室にくすぶつてゐるが、やがては二人の戀愛から……。

＊

喜代子の消息は、それきり中野さんの耳へは餘り達しなかつた。勿論喜代子はやつて來ないし、中野さんの方から武井家へ出かけてゆきもしなかつた。

夏の暑い盛りになると、例年の通り、中野さんは家族連れで常陸の海岸へ行つた。高等學校へ通つてる上の子は、友人と登山の旅に出かけたので、靜子と中學二年の子と小學校へ行つてる二人の娘と、女中を二人連れて行つた。

每日いゝ天氣が續いた。漁も豐富だつた。每年來るのではあるが、やはり海岸は爽快で物珍らしかつた。

そこへ、或る日、喜代子からの桃色の封筒が配達されてきた。

叔父さま。

何と申上げてよいか、たゞ心から感謝いたすより外はございませんの。私は叔父さまに叱られるのが、誰よりも何よりも恐ろしうございました。そして、こんどのことについて、叔父さまこそ一番ひどく御怒り遊ばすものと存じてをりましたのに……。あゝ、何と申上げたらよろしいでせう。叔父さまが一番よく私達のことを理解して下さいまして、そして眞先に私達に同情して下さいましたことを、後で知りました時、私はもう泣き出してしまひさうになりましたの。

叔父さまのお影で、私は凡てのことを許されました。父も母も許してくれました。そして私はもう公然と笹部と一緒に、自分の信ずる途を辿ることが出來るやうになりました。

今から思ひますと、私はあの時どうしてあんなことが出來たのか、自分でも恐ろしい氣がいたしますの。でも私は、私の心は、あゝするより外に致し方はなかつたのですもの。やはり信じて進むことは大きな力でございますわ。叔父さま、どうぞ私達を信じて下さいませ。私達が本當の途を進んでることを、信じて下さいませ。

私は今、晴れ晴れとした力強い心で、叔父さまに御禮申すことが出來る氣がいたしますの。

たゞそれだけ、それだけを申上げたくて、手紙を差上げることにいたしました。海からお歸へりになりました頃、笹部と一緒にお伺ひいたしましてもよろしうございませうか。笹部もどんなにか感謝いたしてをりますの。

叔父さまは私達にとつて、ほんとに力でございますの。お目にかゝつてからくはしく申し上げます。今は何も書け

ませんから、これきりにいたします。

御身體御大切になさいますやう祈り上げをります。

喜代子

御叔父上さま

中野さんには、初め手紙の内容がはつきり分らなかつたが、二度くり返して讀んでゆくうちに、うつとりとした微笑が頰に浮んできた。

それから中野さんは、手紙を片手に持つて、片手で薄い赤髭をひねりながら、靜子達がゐる室の方へ行つてみた。所が、靜子の鼻の低い平つたい顏を見ると、我に返つたやうに手紙を後ろに隱した。

「寢轉んでばかりゐないで、少し海へでも行つてきたらどうだ。」

「さつき行つたばつかりですもの。………あら、お父さま、どうかなすつたの。」

「ふーむ………」

中野さんは尤もらしく小首を傾げて、それから、自分の室へ戾つて來た。

遠く波の音が響いてゐて、外はぎらぎらした日の光だつた。

中野さんはもう一度手紙を讀み返して、返事を書いてやらうかと考へた。然しその文句が一つも頭に浮ばなかつた。

ふと氣がついて手紙を調べてみると、喜代子の住所は書いてなかつた。

「なるほど………」

中野さんは口を變な風に歪めて、微笑の眼付を空に据ゑた。

ごーつと、風の吹くやうな波音が、遠く一面に擴がつてゐた。

*

九月の末、まだひどく蒸し暑い日曜日の午後遅く、喜代子と笹部とが連れ立つて、中野さんの家へ不意に訪れて來た。中野さんは心待ちにはしてゐたものゝ、吃驚して立上りかけた。がすぐにその腰をまた下した。

「こゝに通してくれ」

女中が出ていつてから、中野さんは慌しく居住を直し、襟をつくろひ、頭のこわい毛を一寸撫でつけた。

喜代子と笹部とは幽靈のやうに――と中野さんは感じた。――足音も立てずに入つて來て、入口の敷居際に坐つた。

「初めてお目にかゝります。」低い聲で笹部は云つた。

「やあ……、こちらへ來給へ、さあ、ずつと。」

喜代子までがもぢもぢしてゐた。そして漸く座に就くと、喜代子は顔を伏せたまゝ云つた。

「今日……お邪魔ではございませんかしら。」

「なあに、丁度いゝところだつた。」

だが、さうして對座してみると、何にも話がなかつた。中野さんは文學方面の事は何にもしらなかつたし、文學者のことを異人種でもあるやうに漠然と空想してゐただけで、大して興味を持つてゐなかつた。笹部は實業方面のことには更に知識がなく、また興味も持つてゐなかつた。二人の間に持出された話題は皆な、二言三言で片がついてしまつた。喜代子までが變に取澄して默つてゐた。

すつかり調子が違つたな、と中野さんは思つた。そして喜代子から轉じて笹部の方へ向ける中野さんの眼は、沈默がちなうちに次第に鋭くなつてゐた。

中野さんは骨董品をでも鑑賞するやうな風に、いろんなことを見て取つた。——喜代子の顔に、ぽつりぽつりとごく僅か雀斑が見えてゐた。その今まで氣付かなかつた雀斑が、心の持ちやうによつて、彼女の表情を一層底深くなしたり淺薄になしたりした。が彼女はやはり、その長い揉上の毛をすつと刷いた眉毛とそれにふさはしい眼とで、美しさに變りはなかつた。——笹部は、一寸見たところごく整つた顔立だつた。がその顔立から、眼も鼻も口も平凡に恰好よく並んでゐながら、よく見てると一種の醜い感じが浮出してきた。どこか醜いといつて捉へどころのない、云はゞ、特徴のない凡俗さとでもいふやうな醜さだつた。それから、身體の割合に手首から先が妙に大きくて、手指も長すぎるやうだつた。いや手全體が長すぎるやうでもあつた。その手を彼は時々頭の方にあげて、薄い感じのする柔かな長い頭髪をかき上げた。

「若いうちは少しは冒險も面白いよ。まあいろいろなことをやつてゐるうちには、落付くところへ落付くだらうから。」と中野さんは云つた。

「いゝえそんな……。」と云ひかけて笹部はひどく眞面目な顔付をした。「眞劍な途を進んでゐるつもりでをります。」

「それもいゝ。」そして中野さんは話を外らした。「喜代子、お前から海の方へ手紙を貰つて私、返事を上げようとすると、處番地が書いてないだらう。なるほどなと思つたね。」

「なるほどつて……どうして。」

「どうしてゞもないが……やはり、なるほどさ……。」

そこで中野さんは口を噤つてしまつた。

風のない静かな午後が、いやに蒸し暑かつた。蟬の聲まで聞えてゐた。

「今日はゆつくりしていつていゝだらう。何か御馳走をしよう。」

「いゝえ、またゆつくり頂きますわ。」と喜代子は云つた。

それでも、二人はなかなか座を立たうとしなかつた。共通の話題は何にもないし、仕方なしに中野さんは、海のことを話しだした。地引網のこと、魚のこと、漁夫達のこと、子供達のこと……然し、話す方も聞く方も氣乘りしない調子だつた。

何だか變だな……と思つて中野さんは不意に立上つた。そして、女中達に云ひつけて早々に食事の仕度をさした。

二人は別に辭退もしないで飯台に向つた。

俊郎は大きな手先で不器用に杯を受けた。親指の先を緣にかけ、四本の指で杯の底を支へて、何杯もぐいぐいと飲んだ。いくら飲んでも平氣らしかつた。が中途でぴつたり杯を伏せてしまつた。

「もう御飯を頂きます。」

その御飯を彼は、よく使へないらしい箸先で慌しく口の中へ押しこんで、一寸形式だけ噛んですぐに呑み下した。行儀よく食べてる喜代子と並べてみると、俊郎の躾の悪さうな様子がひどく目立つた。それと共に、顔の醜い感じと手先の大きさとが更に目立つた。たゞ額のあたりと顎の先とが、妙に立派な形を具へてゐた。

中野さんは一人で杯を重ねながら、また海の話なんかを持ち出した。そして心では、俊郎の額と顎の先とだけは喜代子にふさはしいと考へてるうちに、ふと、俊郎と喜代子との間に同じ匂ひを感づいた。男女關係に通じてる者のみが知

る、漠然とした一種の匂ひ——雰囲気だつた。中野さんは眼瞼のたるんだ大きな眼を瞬いた。

「お前達は仲がいゝだらうね。」

喜代子がふいに頬を赤くした。

「いつまでも仲よくしなくちやいかんよ。」

馬鹿馬鹿しかつたが、變に腹が立つてゐた。

二人は食事が濟むと間もなく歸つていつた。徙部はぎごちないお辭儀をし、喜代子はひどく丁寧なお辭儀をした。

その時中野さんは、喜代子が子供達とは餘り口も利かず澄してゐたことを思ひ出した。初めての徙部が一緒だつたので、子供達と食事を共にはしなかつたのだけれど、二三度顔を出した靜子に對してさへ、喜代子は變に取澄した態度と言葉とを示した。

あゝなるものかな、と考へながら中野さんは二人の後を見送つた。

それから、中野さんは茶の間に引返してきて、家事萬端をみてくれる年取つた女中に尋ねた。

「どう思ふ。」

「え？」と女中は怪訝な眼付をした。

「あの男をさ。」

「立派な方ぢやございませんか。」

「ふむ、さうかな。すると……手の大きいのは玉に瑕といふわけか。」

「え？手の……。」女中はまた怪訝な眼付をした。

「はゝゝ、まあいゝさ。」

だが、中野さんはひどく不機嫌になつた。不機嫌を通り越して苛立たしい氣持にまでなつた。

「あんな奴が喜代子を……。」

獨語しながら、恐ろしい顔付で唇を嚙んだ。

十二月にはいつて急に寒くなつた。十日頃から、降りきれないでゐる陰鬱な空容が毎日續いた。

その或る日、中野さんに會社へ電話がかゝつてきた。笹部といふ名前を聞いて、中野さんは一寸思ひ出せなかつたが、それと分ると、急いで受話器を耳にあてた。相手は喜代子だつた。至急お願ひがあるが、今晩伺つてもよいかといふことだつた。よろしいと答へると、電話はすぐに切れた。

中野さんは眉をひそめた。用件の内容が更に見當つかなかつた。

夕方からぽつりぽつりと、雨交りの綿のやうなのが降り初めた。

その中を、喜代子は少し遲く八時半頃やつて來た。九月の時よりも、雀斑は少し多くなつたやうに見えたが、寒氣に觸れた頰の皮膚が澄んで、一層美しく見えた。

「叔父さまに、折入つてお願ひがあつて、參りましたの。」

その折入つてなどゝいふ言葉と、それにつれての物腰とが、中野さんの注意を惹いた。

「何だよ、話してごらん。」

「實はこんなことを、叔父さまにお願ひは出來ないんですけれど……。」

そして喜代子が途切れ途切れに云ひ出した願ひといふのは、二百圓借してほしいといふことだつた。——篠部と同棲してから二階をかりてる、そこの主人一家が、二十五日頃までに大阪へ引上げてしまう。所が二ヶ月分ばかり下宿料の借りが出來てるので、是非ともそれを拂はなければならないし、よそへ引移すのにもいろいろ費用がかゝるし、正月の仕度もしなければならない。どうしても二百圓ばかり足りないから、篠部が方々奔走したけれど、年末のことで思ふやうにならないのださうだつた。

「今度のお休みも休みに行けませんし、また篠部も、私達のことから國の家とは少し仲違ひになつてるものですから、ほんとに困つてしまひましたの。叔父さまに助けて頂くと、一生御恩に着ますわ。圖々しいお願ひですけれど、どうにもならなかつたんですもの。」

伏目になつてゐる喜代子の淋しい眉と頰の皮膚とを見ながら、敷島をふーつと吐き出した。

「ほんとか……。」

それから不意に、喜代子の派手な着物が眼についた。

「然し……お前の樣子を見ると、さほど困つてゐさうもないぢやないか。そんな……しやれた身裝をしてるところを見ると。」

「あら！」と云つて喜代子は同棲以前の通りの身振をした。「……だつて、これつきり着物はないんですもの。それに、始終出歩いてますから。」

「始終出歩いてるつて……。」

「え〻、あたし勉强を初めたんですの、フランス語の勉强を。毎週三度づ〻敎はりに行つてゐんですのに
「フランス語の勉强を初めたつて……そんなものを何にするのかね。」
「毎日用がないものですから、笹部にす〻められてやつてみましたの。……でも、フランス語を知つてゐなければ、本當によい詩は分らないんですもの。」
「フランス語を知つてゐなければよい詩が分らない……そんなものかな。まあ……屯に御感心だね。」
「ですから、あの……聞いて下さいますの。笹部もどんなに喜ぶでせう。」
「いや、さう一人ぎめにしたつて……少し考へなくちやあね。」
「だつて何にも考へることなんか……ほんとにあたし途困つてゐんですの。それが出來なければ、どうにもならないんですから。」
「ほんとうかね。」
「え〻。あたし叔父さまには、何にも隱してや……嘘を云つてやしませんわ。」
喜代子の美しい顏が引きしまつて、それから濫めた泣き顏になりさうなのを、中野さんは吃驚したやうに眺めた。
だが、笹部の奴、あの大きな手をして……。
中野さんはふいに眞面目な調子で云つた。
「場合によつては、わたしが引受けてやらんこともないが、一度笹部君と一緒に來てごらん。よく笹部君からも話を聞いてからのことにしよう。お前達のことについては、わたしにも或る種の責任があるやうに思へるんでね。」
「笹部と一緒に……そんなことを……。」

「遠慮することはないさ。……お前を信用しないといふのではないが、一寸笹部君にも逢つておきたいんでね。」
「だつて、叔父さまは、あたし一人ではいけないと仰言つるんですの。」
「さうぢやない。誤解しちやあ困るよ。餘りお前達が寄りつかないから、こんなことでも口實にしないとね。」
「ぢや聞いて下すつて。」
「まあそれからのことさ。明日(あす)の晩はどうだね。」
「えゝ。」
中野さんは改めて葉卷に火をつけて、ぱつぱつと吹かした。

＊

俺は改めてゆつくり彼奴の顔を見直してやらなければ……喜代子のために。
そんな風な考へ方をしながら、中野さんはいつもより長く晩酌の餉臺に向つてゐた。
前夜の雪が降り積つて、しいんとした寒い晩だつた。子供達はあちらの室で炬燵にもぐり込んでゐた。
笹部と喜代子とがやつて來た時、中野さんはまだ晩酌を續けてゐた。二人をもその席に通さした。
「こんどは大變相すみませんことをお願ひしまして……。」
別に悪びれた風もなくさう云つて、笹部は落付いて坐に就いた。
中野さんはもう少し醉が廻りかけてゐた。女中に何かつまみ物を云ひつけて、すぐに笹部へ杯をさした。
「寒いところを御苦勞でしたね。まあ一杯やつて溫つたらどうです。」

笹部はこの前と同じ手附で杯を受けて、ぐつと一息に干した。それから、よく利かない箸先で小さいものをつまんだ。

相變らず大きな手先だ。

そして中野さんは彼の顔をちろちろ見調べてみた。よく整つた顔立ではあつたが、やはり全體が鈍い感じだつた。精のなささうな皮膚に艶が褪せてゐた。

やはり俺の眼に誤りはない、とさう思ふ氣持が眼付に籠つていつた。と共に、笹部は、そして普代子までが、その視線の下に變に固くなつていつた。

共通に興味ある話題は一つも見付からなかつた。中野さんは沈默の中途でふと思ひ出したやうに尋ねた。

「君は一體、收入はどのくらゐあるですか。」

「殆んどありません。」と笹部ははつきり答へた。

「殆んどない……。」

「全く不定なんです。それに、詩を書いたり童話を書いたりしてゐますが、いくらにもなりません。」

「それぢやあ困るな。どこかへ勤めたらよいでせう。」

「うまく勤められさうにもありません。それで、これから小說を書いてみるつもりです。」

「ほゝう、小說なら金になるでせう。」

「それにしたつて、大したことはありません。まあ一生貧乏するつもりです。貧乏は初めから覺悟してゐて、平氣ですから。」

「それでもやはり、困るでせうがね。……喜代子、お前は平氣なのかね。」
「えゝ。どうしても食べられなくなつたら、あたし女中奉公でも女事務員にでもなるつもりですの。」
「それも今のうちはいゝが……。」
子供でも出來たら……と云ひかけて、中野さんはそれを呑みこんでしまつた。喜代子の顔に眞劍な氣脈が動いて、それが美しくぱつと輝いたやうな氣がしたのだつた。
中野さんは變に腹がたつて來た。
「まあ然し、何でも若いうちのことだ。」
そして眼瞼のたるんだ眼をぎよろりとさした。
「君は酒はいくらも飲めさうだが、杯の持ち方は酒飲みらしくないね。こんな風に持たなくちやまづいよ。」
三本の指をそへた人差指と親指とで、輕く杯を擧げてみせた。
「あ、さうですか。」
笹部は平氣で、示された通りの持ちやうを眞似た。その手先がやはり不均合に大きかつた。
「わたしは少し觀相の方を研究してみたことがあるが、君の相は……中以上のやうに思へる。まあしつかり勉強するんだね。」
最後の一句をとつてつけたやうに早口で云つて、中野さんははゝと笑つた。
それが不意に、一坐の空氣を一變さしてしまつた。笹部はちろりと中野さんの方を見て、それから執拗な眼付を卓に落した。喜代子はほーつとした赤味を頬に上せた。もう出來上つた一人前の女の顔付だつた。

「叔父さま、昨日お願ひしましたことは、どうでございませうか。」

「うむ、聞いてあげるよ。」

中野さんは云ひ捨てゝ立上つた。足元が少しふらついてゐた。それなどしんどしんと踏みしめて、奥の室から紙幣の束を持つてきた。

「これを持つてゆくがいゝ。入用なだけある筈だから。」

それを手に取つた喜代子の眼が、また黒水晶のやうに光つたやうだつた。

「有難う存じます。」と笹部は低く頭を下げた。

「なあに、禮には及ばないが……度々こんなことのないやうして貰ひたいね。」

中野さんはひどく不機嫌になつてゐた。笹部と喜代子とが歸つてゆく時、坐も立たなかつた。

何といふ奴だ。……またあの喜代子までが一緒になつて……。

それでも、ふつと……日の陰るやうな風に、眼頭が熱くなつてきた。それから便所に立つた。

ぞつとするやうな寒い晩だつた。

中野さんはまた改めて熱い銚子の前に坐つた。そしてうとうとゝ酔ひかけてゐるうちに、いつの間にか知らず知らずに醜く醜く……といつたやうな氣持で、大きな口をあちらこちらに歪めたり、眼瞼のたるんだ眼を[illegible]細めて、太い眉をぴくりぴくり顰めたりしてゐた。

誰を何を、愛していゝか憎んでいゝか、それがごつちやになつてゐた。

さらさらと雫が落ちるやうな氣配に、中野さんは我に返つた。そして次の間の方へ立つていつて、年上の女中に尋ね

た。

「あの男をどう思ふ。」

「さうでございますね……。」

女中は口先だけで答へながら、また怪訝さうに中野さんの顔を見た。

「やはり大きな手先だね。」

「でも……手先の大きいのはよいと申すではございませんか。」

「ふーむ……。」

うはべだけ尤もらしく首を傾げながら、中野さんは頭の底に、喜代子の黒水晶の眼の光を思ひ浮べて、なぜ伊部の顔に紙幣を投げつけてやらなかつたらうかと、そんなことを残念がつた。そしてまたひどく不機嫌に腹立たしくなつた。



六月の夜の事

宇野浩二

如何にも殘念なので、喜三郎は幾度同じ道を引返しかけたか知れなかつた。一間ばかり後戻りしたかと思ふと、すぐに思ひかへして又しばらく歩き出したり、すると今度は一町以上も勢よく引返したりするのだが、いつとなく勇氣がくぢけて、歩調がゆるくなるのだつた。多分偶然のことに違ひないのだが、何にしても、考へて見ると殘念な氣がして、彼は又勇氣を出して引返さうとすると、いや、だけど……と次第に足が重くなつて來て、二三度同じところで立止まつたのが、何町の何丁目に當るところか知らないが、角店の、敷島や朝日の積重ねと並べて、「何々サックあります」といふ立札の目に立つ煙草屋の前であつた。暗い町筋で、一と所、その煙草屋の明るい灯のついた硝子障子が、而もその煙草とサックの箱が並べてある部分だけ開かれてゐて、それがおとりといふのだらう。十七八のこつてりと白粉を塗つた、目の吊り上つた、狐のやうな顔の娘が番をしてゐる。娘は畫にかいたやうな奇麗な髮に結つて、いつ見ても講談本を讀んでゐるのだが、往來を通る人の足音にも

決して顏を上げてくれないのがこの場合喜三郎にはせめてもの安心だつた。――たゞ、顏を上げなくても、彼女はその店の前を通る人を確に注意してゐるやうには思はれた。講談本を讀んでゐることなどは體裁で、彼女はさうして本を讀んでゐる橫姿を、往來の人に見せつけてゐるとしか見えなかつた。

もつとも、この煙草屋なり煙草屋の娘なりと、喜三郎の現在の心のむしやくしやとは何の直接の關係はなかつたが、もう一度吉原へ引返さうかと思つて、躊躇したり、氣を引立てたりして、同じ道を行き歸りしてゐるうちに、偶然彼の障碍になつたこの煙草屋と、煙草屋の娘に彼はこだはらない譯に行かなかつたのだ。が、初のうち彼にとつて、この煙草屋のために、彼が道を引返さうとするのを邪魔されたやうに思はれて、一層心を苛立たせられてゐたのが、いつの間にか彼は自分のむしやくやする心持を直接その煙草屋の娘に向け出してゐた。すると、初めて一瞥した時には、唯いやにこて／＼と白粉を塗りたくつた、狐のやうな顏をした女だと思つてゐたのが、次第に魅力を持ち出して來た。

しかし又、畜生！　あの連中は今頃どこかの家に上つて、喜三の意氣地なし、とうとう逃げてしまやがつたと笑つてゐるか、それともうまく撒いてやつたと笑つてゐるか、どつちみち彼等は自分を笑ふことを酒の肴にして、銘々好きな女を傍に坐らして、愉快に遊んでゐるだらうと思ふと、堪らない氣がして來た。いくら俺が田舍者だからといつて、外吉にしろ、熊三にしろ、宗一なんかまだ徵兵前だ、みんな俺より年下でゐながら、東京の人間なんてものはどいつもこいつも早熟といふのか、生意氣といふのか、――チエツ！

それにしても、あいつ等が俺をまく筈はないが、と喜三郎が考へるのも無理はなかつた。何故といつて、彼がいつもより少し遲くなつて店を出て、電車の停留所に來た時に、外吉外三人の連中とばつたり出會つたのだつた。

「よを、帳面方、これからお歸りか、」と熊三が幾分酒が廻つてゐるらしい調子で呼びかけた。彼等が材木挽きの職人た

ちで、自分が帳面附けの、いはゞ番頭への候補者であるやうな役どころであることが、彼等とそんなに年が違はないことと、それに何よりも自分が田舍から半年と經たない前に出て來たといふことで、喜三郎にとつて却つて引け目に感じられるのであつた。無論、熊三が「帳面方」と彼を呼んだのは敬稱である筈がなかつた。

「どうだ、あんたと未だ一緒に附合つたことがないが、今晩これから一つやらうぢやないか？」と外吉が口を添えた。

「あゝ、だけど……」と喜三郎が體を固くして、やつとから返事をすると、

「うむ、喜三さんにはお上さんがあつたんだね、」と熊三がひやかすやうにいつた。「お上さんに叱られるかね、それとも早く歸つて顏を見たいといふ方かね？」

「そんなことはないよ……」といつたが、喜三郎は暗がりの中でも極りが惡いほど赤くなつた。

「さうさう、いつか俺も店に來た時お目にかゝつたが、どこか田舍の人にしては小意氣なお上さんだね、」と外吉が意味あり氣にいつた。

「そんなことどうでもいゝぢやないか、行かう、行かう、」と宗一が傍から口を狹んだ、

「いゝぢやないか、喜三さん、一ぺん位つき合つたつて罰も當りやしめえ、」と熊三は喜三郎の肩に手をかけて誘つた。

その時、電車が來たので、外の連中はじめ、喜三郎もうやむやのうちにそれに乘り込んでしまつたのである。

喜三郎は電車に乘り込んでからも、顏のほてつたのが直らない氣がした。だが、赤い顏は外の四人が酒のためにさうだつたので、喜三郎のも目に立たなかつたが、彼だけが際立つてしよげてゐるのが人々の注意を引いた。

「喜三郎さん、そんなに家のことが氣にかゝるのかい？」などと連の者からからかひ半分に聲をかけられても、

「いゝや、別に、」と答へるだけで、彼は相變らずしよげ切つてゐた。

「畜生、のろけ賃をよこせ！」とか、
「あ、汚ねえ奴、」とか、熊三や外吉の連中はいつの間にか喜三郎の存在を忘れたやうに、それどころか電車中を自分たちだけのもの丶やうに、遠慮のない高調子で冗談をしやべり合つてゐた。
「豚だよ、俺はあんな奴、俺はもうあんな大きな奴はこり〳〵だ。」二十歳の宗公までが、何のことだか、多分女のことらしい、そんな口をきいてゐた。

それ等の言葉はすぐ傍に腰かけてゐる喜三郎に一々妙な興奮を感じさせた。何よりも、みんなの中で彼だけが女房持であつたとはいふもの丶、彼が一番初心であるといふことが出來た。何故といつて、彼は女といへば自分の女房より知らなかつた。それどころか、もしかすると、否、多分、彼の女房は彼より外の男を何人か知つてゐるに違ひなかつた。今も、何を意味するのか分らなかつたが、小僧ツ子の宗一が「あんな大きな奴はごり〳〵だ、」といつた言葉が、喜三郎の胸を打つた。彼の女房は、そんなに小柄でもない彼と比べても、隨分大きな身體の女で、而も彼より一歳も年上だつたからだ。すると、さつき電車に乘る前に、外吉が「田舍の人にしては小意氣な上さんだね、」と意味あり氣にいつた言葉なども苦々しく思ひ出された。

「もうどこからとなしに、俺たちの關係が知れてゐるんぢやないかな、」と邪推が廻された。知れなくても、自然に分るのかも知れない、——岡の材木屋で彼が奉公してゐた時に、そこの女中をしてゐた今の女房と一緒になつたことを。彼にして見ても、彼女と夫婦になるまで、即ち岡の材木屋に勤めてゐた最後の三ケ月は、人並みに樂しい思ひをした、だが考へて見ると、それも後の一ケ月は喜びや樂みは七分で、何ともいへない重さを感じたことは明瞭だつた。益々それが表沙汰になつて、といふよりも彼女——お清がさうしたと見るのが本當だつた。そして二人で岡にゐにくゝなつて、

東京に出てから、――東京に出た半月ほどの間は何といふことなく夢中で日を暮してしまつたが、次第に彼は、心の底でお清が氣につき出したのだつた。

お清はもしかすると、あの國の材木屋の老主人とも怪しい關係があつたかも知れない。――もつとも、そのことは何も喜三郎は昨今になつて考へた譯ではなく、その家にゐて、彼がまだ彼女とそんな關係にならない先から知つてゐたことかも知れなかた。そんなことを疑ふことから、彼が彼女に對する好奇心が刺戟されたのだとさへいへるかも知れなかつた。

彼が初めて彼の村から三里ばかり離れたその町へ奉公に出たのは、彼の二十歳の時であつた。彼の十五六歳の時分までは、彼の父が生きてゐて、矢張り材木屋をしてゐたのだが、父の死と共に、それから間もなく彼の家は破産してしまつたのである。そんな風だつたから、彼は珍らしく初心な、晩熟な少年だつたに違ひない。それで、彼が奉公した先といふのは、一風變つた家であつた。主人といふのは六十幾歳になるのだが、至つて達者で、工場（製材工場）の一隅に住んでゐて、後繼である娘とその養子とは二三町離れたところに別居してゐた。奉公に行つた喜三郎はその工場の入口の帳場に當る部屋に寝起きしたのであるが、お清は即ちその工場に屬する女中だつたのだ。工場には、その外に四十歳あまりの女がゐた。喜三郎はそこへ行つたしばらくの間は、その女を老主人のお上さんだと思つてゐたが、お清とか、その外職人たちが彼女のことを大井さん大井さんと呼んでゐるので、妙に思つてゐたところが、それはお上さんには違ひないが、雇ひ妻のやうなものだつたのである。

この老主人といふのが不思議な男で、喜三郎がこの家へ奉公に來て第一に驚いたのは、この主人が並外れた信心家であることだつた。彼は朝起きると、どんな寒い時でも井戸場で水垢離をとつて、それから帳場に來て最先に日を拜むの

である。その間が大方五分間もかゝつた。それはまるで何かに疲れでもしたやうな恰好で、初めて見たものは吹き出さずにはゐられないやうなものだつたが、當人は元より大眞面目であつた。眞面目といふと、彼は一代にそれだけの材木屋の主人になつただけあつて、勤勉家で、几帳面で、一克なことはどんな者でも感心しないものはなかつた。服裝なども不斷綿服ではあつたが、いつの時でも仕立下ろしのやうにきちんとしてゐた。それに彼の習慣として、一ケ月に一度づゝ、その町から五里ばかり離れた或官幣大社へ參詣することになつてゐた。が、間もなく喜三郎を驚かしたことは、その參詣の歸りに必ずその神社のある町の遊廓に泊つて來ることであつた。時とすると二晩もそこで泊りつゞけることがあつて、そこから電話が掛けて來て、恰も商賣の用事か何かのやうにおほびらに、金何十圓と着換の荷物とを持つて來いと命ずることなどがあつた。

「本當にこゝのおやぢの助平つたらないんだよ、」と夜一通りの用事が濟むと、お淸はいつの間にか風呂に入つて、眞白に塗つた顏で喜三郎の居間兼寢間になつてゐる部屋にやつて來ては、こんなことをいつた。

「さうかね、」と喜三郎は心の中では全く同感とは思ふのだが、わざとそんな風に答へて、お淸の化粧水の匂になやまされながら、顏を赤くした。

「この頃ちよい〳〵私を引張るんだよ、好かんたらしいといつたら、そんなことをいふ時の顏は、思ひ出してもぞつとするよ。好きなんだね。あんな年をしてゝ。」

「さうかね。」

「今の大井さんね、をやぢさん近頃あの人に飽きて來たらしんだよ。」とお淸はつゞけた。「もつとも無理もないよ、もうかれこれ三年とかになるんださうだから。七年前にお上さんに死なれてから、大井さんで四人目だつていふんだが、大

抵の女は、女の方から逃げて歸るといふのに、大井さんだけはよく辛抱してるね、だから、たやおさんの方から飽きられたんだよ。大井さんなんてちつともいゝ女ちやありやしないよ、ね。」

「さうかね。」

「まあ、喜三ちやん、」とお清は喜三郎を眺めるやうにして、「こゝのをやおさんのやうでも困るけど、あんた見たいたものも困りもんだよ。」

そしてとうとう或晩のことだつた。――それから丁度一年たつのである、――彼女はそんな風な話をした後で、

「今夜はひどい蚊だね、」といつた、「二階ではもう一週間も前から蚊帳を吊つてるんだよ、一ト所で吊られちややれ切れないから、こゝへももう蚊帳の用意をして上げようね、」

「まだかまはないよ、」と喜三郎がいつた。だが、彼はその頃ではお清に蚊帳を吊つてもらふことに、何といふことなく胸の顫へるのを感じてゐた。

「いつから吊つたつて同じだよ、」とお清はいつて、蚊帳の用意にかゝつた。

「雷門で下りてさ、大丈夫だよ、殺しやしないよ、あれからふら〳〵とお前さんの家の方なら歩いて歸つたつていゝぢやないか、」と電車の中で喜三がいひ張つた。

「まあ、さう悶くしてないで、一晩ぐらゐつきあひなさいよ、」と外吉も加勢していつた。

もつとも、もうその時分には喜三郎は腹は定めてゐたのだが、唯行きがゝり上斷るやうな口ぶりになつてゐたのだつた。が、愈々彼等と行動を共にするといふことになると、彼には又いろ〳〵な不安が胸の中に湧いて來た。無論、家に

歸つてお淸と顏を合はした時のことも心配だつた。が、それは心配と共に痛快な氣も豫想されない譯ではなかつた。といつて、金のことも、大して懷に持つてはゐなかつたが、確に彼等の二人分以上はあるだらうが、それをすつかり散財することも惜しいとは思はなかつた。一番氣にかゝるのは、田舍者の自分が、さういふ賑かな所で酒を飲むのが初めてだといふことも、若しかすると、無論、若しかしなくても、――屹度その後で行くに違ひない吉原(思ふだけでも喜三郎の胸は動悸があるのだつた、)が自分に初めてだといふことも、彼等は知つてゐるに違ひない、知つてゐて、それで自分をからかつて、自分を飛んでもない目に合はしはしないか、といふ不安であつた。それに、彼には好きか嫌ひか、うまいものか、まづいものか、こんな風に自由な、放埒な氣持で酒を飲むといふことも初めての經驗に違ひなかつた。

兎に角、同勢五人で電車を雷門で下りた。仲店を通り拔けて、仁王門から斜めに觀音堂の境内を行くところで、いつそのこと吉原へ行くまで我慢しようといふものと、この邊で取敢ず一ぱいやらうといふものとに分れたが、結局千束町で通りがゝりの小料理屋に入つた。喜三郎はそこでみんなにすゝめられて、格別うまいとも思はなかつたが、いつとなく三杯五杯と猪口をあけた。まだ一度もそんな風に飲んだことがないので、醉ふといふことが恐しい氣がした。が、連の人たちは元から下地があつた上に、行先が行先なので次第に一層景氣づいて來た。會話もだん／＼際どい方のことばかりに傾いて來た。それ等を聞いてゐると、馴れない喜三郎は相槌打つ言葉さへ出なくて、唯にや／＼笑つてゐるばかりであつたが、見たところよりは、彼の氣持は誰よりもずつと興奮してゐた。彼はそれを友達に悟られまいとするのに、ひどく苦痛を感じた程であつた。

「俺はもうあんな大きな奴は厭だ厭だ、」と宗一は例の言葉を又始めてゐた。「そんなにお前がいふなら、お前にやるよ。」

「だつて、お前でなけれやいけないといつてたよ、」と彥さんと呼ばれてゐる男がはやし立てた。

「大きな奴、」といはれると、どんな時でも喜三郎は聞耳を立てた。そして、家にゐるお清のことを思ひ出した。が、今は彼女のことを思ひ出すと、すぐに、これから數時間後に彼の相手になるべき筈の、お清などではない、彼の空想の中では實に美しく思はれる女の姿が思ひ描かれた。

「もつとどうだ、もつと、死にやしないから大丈夫だよ、醉つ拂つたら介抱して送つて行つてやるよ、」と外吉が徳利を彼にさし向けながら叫んだ。

「飲むよ、飲むよ、私だつて……」と喜三郎も妙に嬉しくなつて、盃を取り上げながら叫んだ。

「さあ、ぼつ〳〵繰り込まうか、姉さん、勘定してくれ。」

「勘定は私にさしてくれ、」と喜三郎は中腰になつていつた。

「や、いゝよ、いゝよ。」

「これから後足りなくなつたら何時でも出させるから。」——

な、それから先のことなのである。喜三郎は自分ではそんなに醉つてゐたとは思はなかつた、何故といつて、自分も何となしに浮き浮きした氣持になつてゐることは感じたが、外の連中のやうに、往來の人に突當りさうになる程足がよろけたり、大きな聲で唄をうたつたりはしなかつた。自分もあんな風になれるものならなりたいものだと思つた。

「どうだ、喜三郎、酒を飲んで悪い氣はしないだらう、」などと二三間離れたところを歩いてゐた熊二が、用あり氣に彼の傍に近づいて來ていつたりした。

「うむ、面白いなあ、」其度、喜三郎はさういふ言葉の調子よりも、心の中はえたいの知れない興奮でもつと一ぱいになつてゐた。

するど、巡査に咎められはしないかと思はれるやうな、卑猥な唄をうたひつゞけてゐた宗一が、又喜三郎の傍にやつて來て、

「喜三さんは初めてなんだらう、」などと大人のやうな口をきいた。「僕の方でもこんな所へ行つたことはないのかい?」

喜三郎が答へてゐる暇もないうちに、宗一はすぐ傍を離れて、先のつゞきの唄をうたひ出した。そんな風で、見えない程先の方を歩いて行くものや、後れてふら／＼した足取で來るものやの、丁度中程と思はれる邊を、喜三郎もいつか聞き覺えの小唄を口の中でうたひながら歩いてゐたのだつた。歩きながら、彼の頭の中には、時々家に待つてゐるお清の顔や、さては又以前奉公してゐた、國の材木屋の老主人のことや、彼が一ケ月に一度神社に參詣する歸りに必ず泊つて來た家のことや、(一度喜三郎はそこへ主人の着物の着換へと金を持つて使ひに行つたことがあつた、)かと思ふと、年寄の癖に時々白粉などをつけてゐた大井さんの顔などが思ひ浮かんだ。が、それ等の顔は決して彼の今の行爲を攻めるものではなくて、彼の足を吉原へ吉原へとそゝのかすやうに思はれた。

ふと、彼は自分の頭の中の妄想や、口の中の小唄に夢中になつてゐたことから醒めた時、連の友達の姿を見失つたことに驚いた。小料理屋を出てからしばらくの間は、思ひ思ひに喜三郎に話しかけて來たり、唄をどなつたりしてゐたのが、次第に無性になつたのか、彼等はいつの間にか音無しくなつて歩き出したらしかつた。が、宗一の唄聲だけは、つひ今し方まで喜三郎はすぐ自分の傍に聞えてゐたと思つたのに、その宗一も、外吉も、熊三も、それから自分より遅れて歩いてゐた客の淺次郎も、誰の姿も見えなくなつた。無數の人間が、醉つた者も醉はない者も、ことごとく、喜三郎と同じ方角に波のやうに寄せて行くのだが、その中を半町ばかりも先の方に驅け出して見たり、又大急ぎで一町も後へ引返して見たりして、四人のうちの誰かをでも見出さうとしたが無駄に終つてしまつた。喜三郎は忽ち今迄の快よい醉

心地をすつかり閉ざされてしまつた。彼は遮二無二早足で歩き出した。その時も彼は吉原の雪の中で、彼等を捉へることが出來るだらうと希望してゐたのだつた。だから、彼は群集の多く行く方へ行く方へと息を切らしながら進んで行つた。

が、吉原へは難なく到着したが、喜三郎はその廓の中の廣さに目を見張らねばならなかつた。折角とゝで捉へようと望みをかけて來たのも、これでは求る途で探すよりも一層むつかしいと思つたが、彼はそれでも夢中で、足の向くまゝに、半分駈け足で廓の中をあちこちと歩き廻つた。が、さうして大方一時間近くも歩き廻つた末に、彼はとうとう斷念しなければならなかつた。

喜三郎はとある四辻のところで、がつかりして十分間以上立つてゐた。大勢の男たちが蟻のやうに彼の傍を通つて行つた。彼はそこで友達を見失つて、失望して歸る氣になる反對に、よし、俺だつて一人でこゝらの家に上れないことはないだらう、なアに、彼奴等に馬鹿にされてなるものかと思つた。實際はそんな風に見失つた友達に對する敵愾心以上に、彼の心の中では彼をそゝつかす氣持が興奮してゐたのだつた。そこで、彼は今度は先のやうに往來のまん中を急ぎ足に歩く代りに、家々の格子の近くを、外の人たちのやうにゆつくりと覗いて見ようと思ひ立つた。なアに、人のすることだ、二十歳の宗一だつてやることだ、俺にだつて、いくら田舍者にだつて、出來ないことはあるまいと、自分で自分の心を勵ました。

だが、不都合なことに、その時いつの間にかさつき迄の酒の醉が殆んど醒めてしまつてゐたので、折角四辻の暗がりで決心したことも、唐々の取りわけ明るい格子先に近づいて行くと、先づ目が眩んで、足が竦んで來るのだつた。とても一人で近づけないので、ともすると、彼は往來のまん中を歩いてゐる自分自身を見出さねばならなかつた。或時は勇

氣を出して、他人の後からその連のやうに裝つて格子に近づいて行つたりしたが、うつかりしてゐると、彼一人が殘されて、あわてゝそこを立去つて格子の中から笑聲で送られるやうなこともあつた。が、そんな風な目にあへばあふ程、彼は胸が痛くなる程その格子の中に魅力を感じねばならなかつた。彼は又いつの間にか格子の中よりも、その邊を歩いてゐる人々に注意して、見失つた友達を見出さうと骨折つてゐた。かと思ふと、又一所懸命に、何とかして具合よくあの格子の傍に近づいて、彼がもう幾人も見た人たちのやうに、それ等の家の一つの軒をくゞれないものかと、氣をあせらしながら行つたり來たりした。

彼は同じ町を何度行つたり來たりしたか自分で氣がつかなかつた。ふと或家の中から、「あの人もう何べん通るんだらう」といはれた聲を聞いたやうに思つたので、急にあわてゝ往來のまんなかに出た。そして、夢中で廓の外に出てしまつた時、思はずがつかりして溜息をついた。彼はとても一人では駄目だと思つた。が、熊三の連中は今頃もうどこかの家に上つて、あゝいふ女たちを傍に引きつけて、もう自分のことなど忘れて、樂しく飲んでゐるだらうと思ふと、どうしたつてこのまゝ歸つてしまふ氣になれなかつた。宗一は二言目には「あんな大きな奴、俺はこりごりだ。」といつてゐたが、大きくても小さくてもいゝ、どうかして上つて見たいものだと考へた。そして、彼は又ふらふらと廓の中へ戻つて行つた。

それから又一時間たつぷり犬のやうにうろうろと廓の中を歩き廻つたが、結局先のと同じ狀態をくり返して、今度は吐き出されるやうに、裏手の門から外へ出た。出てからも、彼は何度引返さうとして、反對の方へ歩き出しては止めたか知れなかつた。

彼は入谷にある自分の家の方へ、仕様がないので、歩いてゐたのである。無論東京に來て間もなくのことではあり、ましてそんな道は初めてであつた。そのくせ、妙に人に道を尋ねることなどが嫌ひな性分なので、唯無暗にこの邊と思ふ見當を歩いて行つた。實をいふと、彼はまだ自分の歩いてゐる道のことなど考へてゐなかつた。畜生！　今頃あいつ等は……と彼は口の中で繰り返して叫んだ。そして、どこをどう歩いて來たのか、どこの何町であるのか、暗い町筋を、例の煙草屋の前に來かゝつたのだつた。

時間は最早や十一時近かつたらう。六月の初めの、急に夏が來たやうな蒸し暑い晩だつた。行儀よく、氣取つて坐つてはゐるが、煙草屋の娘も隨分蒸し暑いに違ひないと思はれた。喜三郎は初めのうちはその娘の方がぢつと見てゐられなかつたが、三度目に後返りした時にはずつと大膽になつて、もうその時は吉原のことは半分忘れて、歩きながらわざと此方を見ないで本を讀んでゐる娘の顏をしげ／＼と眺めてゐるうちに、ふら／＼とその方へ歩いて行つた。たしなまないので、不斷買つたことがなかつたから、ふと足が縮んだが、思ひ切つて、

「敷島を一つ」といふと、

娘はその時初めて顏を上げた。喜三郎と眞正面に顏を見合はした。喜三郎は先程吉原の格子先に立つた時と同じやうな、目の眩むやうな感じに打たれて、忽ち手足がすくむやうな氣がした。だが、相手は何の雜作もなく「何々サツクあります」の立札の横に、うづ高く積み重ねてある中から敷島を一つとつて、喜三郎が臺の上に置いた五十錢銀貨を見ると、傍の箱の中から釣錢を出して、

「有難うございます、」といつた。田舍者の喜三郎には、それが何ともいへない歯切れのいゝ、美しい聲の響きなのだが、何か底に冷やりとするやうな他所々々しさが感じられた。が、その歯切れのいゝ言葉も、冷やりとする他所々々し

さも、彼の興奮した頭を冷やす代りに、益々苛々した混亂に陷し込んだ。

が、煙草と釣錢とを受取るのに何分間も要しなかつた。彼はその店を二三歩離れた時、又急に引きかへして、

「あの、これから入谷の方へ歸るのにはこゝへ行けばいゝんですか、」と聞いて見た。

「入谷?」と娘はちよつと目を見張つて、「えゝ、ですけど、隨分ありますよ、歩いてぢやあ。」

「有難う、」と喜三郎は何故ともなく赤くなつて、今度は一層あはてたやうにその店を離れた。

が、もう引返す譯には行かなかつた。それどころか、彼も亦引返さうとしなかつたばかりでなく、何者かの强い力で後から押されでもするやうに、急にすた／＼と歩き出した。彼の頭の中には、今の煙草屋の、こつてりと白粉を塗つた、物をいふ時に一本ちらりと光つて見える金齒の顏が、取り憑いたやうに一ぱいにはびこつてゐた。その顏の奧の方に吉原で見た景色や、そこで遊んでゐるに違ひない友達の空想の場面やが、二重寫しの繪のやうにちらついて見えた。

彼は身體中に汗をびつしよりかきながら、ものゝ二十分もの間、馬車馬のやうに歩いた。するど、見馴れた町へ來てゐるのに氣がついた。それは、彼が毎日店への行き歸りの電車の停留所へ行く道の、角店になつてゐる煎餅屋の大きな看板に依つてゞあつた。その煎餅屋の角を曲つて、三四町行つたところが、彼の住居であつた。が、愈々家に歸つて來たと思ふと、彼の足は急に重くなつた。彼はそこに待つてゐるお清のことが氣にかゝつて來ると共に、もう一度今歩いて來た道を引返したくなつた。何のためにこんなに急いで歩いて來たのだらうと自分で不思議に思はれた。これから引返しても、まだあの煙草屋の娘はあの通りに坐つてゐるだらうかと考へた。が、もはや十一時を過ぎてゐるので、そこらの往來は暗くて、人通りさへ殆どなくなつてゐた。考へて見ると、こゝからそんなに遠く離れてゐないところに、あんな煙草屋があつたり、あんな賑かな廓があつたりするといふことが夢のやうな氣がし

た。だけど、確にあるんだ。確にあるんだ。そして、熊三や、外吉や、宗一やの奴は今頃そこで……自分もあんな事にならなかつたら、今頃はどんな女と……さうだ。あの煙草屋の娘のやうな……考へると、喜三郎は突然わーツと勢一ぱいの聲を上げて呶鳴つて見たくなつて來た。しかし、彼の足はいつの間にか、貧民窟らしい、平家建の多い、細い路次の方に向つてゐた。

片側がセルロイド製品の、バラック建の工場になつてゐるので、喜三郎の家のある路次は歩きにくい程暗かつた。彼はその路次の入口のところで立小便をしながら、ふと又、畜生、彼奴等は今頃……とひとりでに口の中で呟いた。が、頭の中では、彼等の姿でなく今し方見た煙草屋の娘の姿が毒々しい畫のやうに浮かんでゐた。彼は立小便の終りに、ぶる／＼と身顫ひしながら、思はず力のこもつた聲で、畜生！と呼んだ。すると、その瞬間、どういふ譯だか、去年園にゐた時、お清に蚊帳を吊つてもらつた晩のことをまざ／＼と思ひ出された。——その晩、初めて彼は女を知つたのだつた。

彼はそこから十間あまりの道を、急に何かの不思議な力が身體の内に燃えるやうな感じを覺えながら、一散に自分の家の方へ急いだ。バラック工場の塀の脇に、一トところ埃か何か積み上げたところへ、暗い道だので、蹴つ掛つて、危く倒れさうになつたことさへ夢中だつた。家はその長家の一番奥の隅だつた。彼はその家の前に立つた時、妙に胸が動悸するのを覺えた。それは道を急いだためではなく、それよりかさつき吉原の格子の前や、煙草屋の娘の前で感じたのと同じ感じだつた。この家に住むやうになつてから、未だ日はたゝないが、それにしてもこんなに強く、こんな妙な氣持で、而も閉ざゝれた戸の前に立つたことは初めてだつた。彼は夢中でその戸に手をかけた。

戸が何の抵抗もなく開いたのが、開いてから氣がついたのだが、おや、戸締りがしてなかつたんだな、と氣がつい

た。それで家の中からお清の氣配のしないのが變だと思ふ前に、二間しかない家の中の、赤々とした電燈の下の樣子が先に目に入つた。煎餅蒲團の上に、同じやうな薄つぺらな掛蒲團をかけてゐるのだが、それは紙屑のやうに丸められて足もとに蹴ちらかしてあるのみならず、寢間着の帶まで、どうしたのか、蛇のやうに蒲團の外にはみ出してゐた。――主人公の、大きなお清の寢像はいはなくても想像がつくだらう。

喜三郎の頭はいきなりくら〳〵とした。お清の寢像の惡いのをこの時彼が初めて知つた譯ではなかつたが、その瞬間、彼はそれをお清と思はなかつたのだらうか、といつて、無論、外の女と思ふ筈もないのであるが……。ぷーんと一疋、そこに突つ立つてゐる彼の顏の傍に、蚊の鳴く聲がした。何と思つたのか、その瞬間、彼はすぐ頭の上に輝いてゐる電燈のネヂをひねつた。と、忽ち室内は暗闇になつて、代りに他所の明りが方々の隙間から彼方此方に射しては來たが、何にしても眞暗だつた。××××××。×××××××××××××××××。その時初めて彼女は目を醒まして、何か一聲立てようとした、が、素早く喜三郎××××××××。……××××、××××××××××××××。……

それから十分と經たなかつた後、喜三郎はどうして火を消した自分の家から、泥棒のやうに逃げて出たか、まるで夢中であつた、それでも、よく下駄をはくことを忘れないで逃げて來たものだと思つた。彼は例の四角の煎餅屋の前まで來た時、やつと立止まつて考へた。つまり、無論××××とは氣がつかなかつたに違ひない、それにしても彼女と一緒になつてから丁度一年になるが、今夜のやうに彼女が可憐に思へたことは初めてだつた、彼はお清が自分の×××××、×××××××といふことを思ひ出すと、自然に微笑まれて來るやうな氣がした。さうだ、俺はこのまゝ何喰

はぬ顔をして、友達に誘はれて吉原へ――いや、吉原はいけない、飲みに行つたといつて言へばいゝのだ。が、俺はそれでいゝとして、お清は、――お清はどんな顔をして俺を迎へるだらう？　もしお清は××××といふことを知らないで、どこからか忍び込んだ×××××ために、あんな目にあはされたのだと思つてゐるのだつたら、お清は俺の顔を見たらどうするだらう、何といふだらう？……と考へると、彼は急に何ともいへない苦い氣がして來た。

――いふだらうか、本當のことを、それとも隱してしまふだらうか？

あの時、俺はお清を夢中で、力づくで何しながら、幾度と×××××かと思ひながら、さうしてしまへばつまらないやうな氣がしたり、又急にそんなことをしたら彼女を吃驚させもし、腹立ちもさせるだらうなどと考へたのだが……それにしても、暗がりでよくは分らなかつたが、後でお清は泣いてゐたやうに思はれたが……すると、彼は又自然と微笑まれて來た。

だが、これから俺が歸つて行つたら、彼女はどうするだらう。何といふだらう。と思ふと、喜三郎は急に何者かに心を冷やされるやうな氣がした。

彼は又いつの間にか歩いてゐたと見えて、見知らぬ町へ來てゐたので、あわてゝ元の煎餅屋のある四辻の方へ歸つて行つた。すると、ふとお清がどうしてゐるかといふことが氣になつて來たので、急ぎ足で自分の家の方へ歸つて行つた。その僅な道の間も、彼の足は早くなつたり又遲くなつたりした。その時、彼は初めて取返しのつかぬことをしたと思ひ出した。



結婚

廣津和郎

『僕は歸る』

『まあ、いいぢやないか。よそで飯を食つて行つては、細君に惡いかい？』

『いいや、何でも僕は歸る』

自分は小田切の顏を見た。小田切は眞青な顏をしてゐた。

『一體どうしたんだい？青い顏をして？――それよりも、久しぶりで一杯やらうぢやないか。君の新婚後、一緒に飲むのはほんたうに久しぶりだからな。今も云つた通り、一つ君の好きな牛肉のスキ燒きで……』

『ああ……』と小田切は眉をしかめて、泣き出しさうな顏をした。『僕は歸る』

立上つて、部屋の隅にあつた外套と帽子とを摑んで、玄關の方へ出て行つた。

『ほんたうにどうしたんだい？ 何でも氣を惡くしたんだい？』と自分も立上つて、彼の後から玄關まで送つて行つた。

『いや、別に氣を惡くしたわけぢやないが、併しどうしても僕は歸る』

それ以上は、もう止めようもなかつた。

自分は小田切を送り出すと、自分の部屋に歸つて來て、何といふ事なく溜息を一つした。それから考へた。一體何でそんなに彼は氣を惡くしたのだらう?――自分はその日彼が來てから、彼が歸るまでの事を、一つ一つ精密に思ひ返して見た。けれども、彼が氣を惡くしさうな事は、一つも考へ出せなかつた。

その日、小田切がたづねて來たのは、三ケ月振りだつた。彼は丁度三ケ月前に結婚した。その後初めて自分をたづねて來たわけなのである。

ひよつとすると、自分は結婚生活について、少し詳しく根掘り葉掘り訊き過ぎたかなと考へた。我々獨身者の友人間で、一番先に結婚したのは小田切だつた。だから、我々に取つて、小田切は我々に解らない世界に眞先に飛び込んで行つた先驅者だつたのだ。それで少々自分は、我々に解らない世界の事を、詳しく訊き過ぎた嫌ひがなくもない。――だが、併しそんな事を少し詳しく訊き過ぎたといふ事が、彼の顏を眞靑にさせる程、彼の氣を惡くするといふ事は考へられない。いや、それどころではない。彼はそれ等の自分の問に對して、寧ろ、嬉しげにさへ、說明してくれてゐたではないか。

それからだんだん夕方になつたので、自分が飯の事をいひ出した。――小田切は牛肉のスキ燒が大好物だつた。自分はそれをいひ出した。牛肉のスキ燒といふ奴は、近頃のやうに寒い時には持つて來いだ。自分も大好きだ。それで牛肉のスキ燒で一杯やらうと云ひ出した。この思ひつきは自分には愉快だつた。自分も小田切も酒がそれ程强い方ではない。けれども、牛肉をつつきながら、一緒に飲み合ふといふのは、この數年來の我々の習慣だつた。――だから、それ

を云ひ出したといふ事は自然の話だし、小田切も屹度贊成するに違ひないと思つてゐた。

ところが、その途端に彼が、

『歸る』と云ひ出したのだ。

どう考へて見ても、自分には解らなかつた。が、解らないままに、自分も少し氣を惡くして來た。何といふ事なくむしやくしやして來た。腹立たしくなつて來た。久しぶりで愉快に飲まうと思つたのに、その相手に素氣なく逃げ出されたので、一寸後の氣持の始末のつかなくなつた恰好でもあつたのだ。

その晩、仕方がなしに自分は外に出て、他の友人を誘ひ出して、それから方々飲み歩いた。少々醉ひ過ぎた。何でも自分は醉ひながら、その友人に小田切の事を訴へてゐたやうな記憶もある『彼奴は莫迦野郎だ！』こんな風に小田切を罵倒してゐたやうな記憶もある。『結婚なんかすると、あんなに莫迦野郎になるものか』といふやうな事を繰返し叫んでゐたやうな記憶もある。『まあ、いいや、いいや、小田切の事なんかどうでもいいぢやないか。我々は愉快に飲まうや』と自分よりも酒の強い、ほんたうに酒好きのその友人が、にやりにやりしながら、自分を慰めてゐたやうな記憶もある。

結局、すつかり醉ひつぶれた自分は、その友人にタクシで、うちの門口まで送りとどけて貰つた。

それから前後不覺に自分は眠つた。

眼が覺めたのは、晝頃だつた。少し頭がぼんやりしてゐた。自分は寢床の中で新聞を讀む癖があるので、仰向けになつたまま、手をのばして、枕許の新聞を取つて、それを擴げようとすると、その新聞の上に載せてあつたらしい封狀が、ばさりと自分の顏の上に落ちた。

それを取り上げて見た。小田切からの手紙だつた。——自分は急いで封を切つた。

こんな事が書いてあつた。

昨日は失敬した。君は隨分氣を惡くした事と思ふ。僕もあんな風にして、突然立上る氣ではなかつたのだが、併し僕の神經があんな風に、へんになつて行つてしまつたのだ。

ゆるしてくれ給へ。

僕の性質の中にある內氣が、君に云つてしまへばいい事を、あの時、ふと云へないで、あべこべに自分の心の中に陰氣に浸み込んで行つたのだ。——と云つただけでは君には、何の事だか解るまい。そこで僕は此處に少し說明しよう。

『結婚は男女相互の誤解より成立つ』といふ言葉を、僕は獨身時分に何かの本で讀んだことがある。

僕は妻と結婚した最初『あなたは何がお好きですか？』と妻から訊かれた。

そこで『牛肉のスキ燒』と答へたのだ。——君も知つてゐる牛肉のスキ燒、我々が最も愛好してゐる牛肉のスキ燒。

妻はそれを片時も忘れまいと云ふやうな表情をして、『牛肉のスキ燒、牛肉のスキ燒』と口の中で、まるで暗記物でもするやうに呟いた。『まあ、うれしいわ。あたしのお父さんも牛肉のスキ燒が何より好物よ。あなたとお父さんとは、屹度性質も似てゐることよ。——屹度あたしを可愛がつて下さるわ』

『…………』

これからといふものは、君、毎晩毎晩、僕の食膳には牛肉のスキ燒が上ることになつた。そこで僕は非常によろこんだ。僕の食慾は進み、僕の健康は增進した。

けれども、君、三ケ月の間、毎晩、毎晩、牛肉とネギと燒豆腐と醬油と砂糖とから成立つてゐるあの鍋が、君を待つてゐると想像してくれ給へ。いかに好物でも、君はそれに飽きるだらう。『又スキ燒か』と僕は心の中で呟くやうになつた。鼻について來たのだ。

無論、『さう毎晩々々、スキ燒では飽きるから、何とか考へて見てくれ』と僕が云へばいいのだが、併し僕はついそれを云ひそびれてしまつた。といふのは、妻が牛肉とネギと燒豆腐と砂糖と醬油とを鍋に入れる時、あたりにいそいそとしてゐるのだ。——良人の味覺について、少しの疑も抱いてゐない樣子なのだ。『良人の好物』を頼りに信じ切つてゐる樣子なのだ。

そこで、僕はその妻の樣子に對して、つい抗議を申し込む餘地を見出せなくなつてしまつた。そればかりではない。僕はその毎晩の牛肉のスキ燒を、飽きた樣子をけぶりにも見せないどころか、『うまい、うまい』とかう云はずにゐられないのだ。さういふのが、無邪氣な、物事を信じて疑はない、いそいそとしてゐる妻に對する禮儀のやうな氣がするのだ。

そこで事態は益々惡い事になつて行つた。たうとう近頃では、僕は晩飯が苦痛になつて來た。牛肉とネギと燒豆腐と醬油と砂糖とから成立つてゐるあの味が、僕の胸にむしずを走らせた。それでも僕はそれを食べなければならない。何故かといふと、『あなた、御氣分でも惡くつて？ 大好きなスキ燒が召上れないやうでは』と妻に云はれるのを恐れるからだ。僕は湯氣の立つてゐるあの鍋を、蹴飛ばしてやりたい程腹が立つてゐる。妻に對してではない。自分に對してだ。こんな風にこじれて行つても、物事を正常に戻す勇氣がなく、あべこべに陰氣にだんだん心の底に沈み込んで行く自分の内氣に對してだ。——それだのに、あ

なた、今日の味加減はどう？』と妻から訊かれると、『結構、結構』と僕の呪はれたる口は、態とらしく言葉さへ上ずつてゐる。

君、『結婚は男女相互の誤解より成立つ』といふ言葉は、僕は確に眞理だと思ふ。

僕には今となつては、その誤解をどう打破しようもない。僕が牛肉のスキ燒を疾つくの昔に飽きてしまつてゐたの、だ、結婚後、一週間ばかりで、既に鼻についてしまつてゐたのだといふ事を今更知つたら、善良な妻はどんなに悲觀するだらう。『あたし、どうしたらいいでせう、三ケ月の間、あなたにお嫌なものを食べさせてゐたとは、あたしどうしたらいいでせう？』――恐らく妻は泣き出すだらう。おお、それを思ふと、今更どうしてその誤解を解くことが出來よう。

此處まで說明したら、我友よ、君は昨日の僕の態度を理解してくれるだらうと思ふ。『牛肉のスキ燒で一杯』から君が云つた時、僕は呪ひの言葉を浴びせられたやうな氣がした。『牛肉のスキ燒』――如何にそれを僕が恐れるか、その言葉だけで、僕の全身が如何に戰慄するか、君は理解してくれるだらうと思ふ。

どうか誤解のないやうに。そして昨日の僕の態度をゆるしてくれ給へ。ではさやうなら。

二伸。因に云つて置く。これは妻のために辯じて置くのだが、妻は『牛肉のスキ燒』が料理の中で一番手のかからない料理だから　それだから無精をし每晚そればかりを僕にすすめるのでは斷じてない。――僕の妻は女學校を出てから、割烹女學校に一年も通つてゐた事があるなかなかの料理通だ。この事を誤解のないやうに。　（終）

編輯だより

□更に揚言するまでもなく、我等は常に總ての社會現象を絕對に公正の立場より嚴肅に批判し、民衆の希求する最高理想の殿堂建設に、孜々として全身心の努力を盡して來た。□今や、「改造」が東洋最大の權威ある高級雜誌として世界的に占めつゝある地位は、我達の酬ひられてゐる最大の證だ。併し我等の努力は將來更に力強く懸命に續けられる。然り「改造」の價値は現在にあるのではない。遠く彼方に燦として輝いてゐるのだ。

□帝大に於て勞働法の講座を擔當し、斯學の唯一の權威たる末弘博士がその蘊蓄を傾倒せる堂々二百五十枚の「勞働組合法論」の寄稿を得たことは、非常の快事だ。又議會開會期に際しての長谷川、大山兩氏の時事問題批判と、堀江博士が現時財界の危機の根本原因を探究指摘して大警告を與へられた大論文は必讀玩味すべきだ。

□駐日以來我社と特に親交ある詩人大使クローデル氏は愈々二月下旬歸國されることになつた。我等は日佛親交の爲め、殊に日佛文化の爲め多大の貢獻された此の良大使を惜む。大使が特に本誌の爲めに、その最近の快作「峨眉山上の老翁」の詩のうち四篇を寄稿されたことを感謝する。

□平田博士の「成吉斯汗」は非常に讀者から歡迎されて居るが、或る筆者の都合で本月號に連載することの出來なかつたのを、讀者各位に御詫びします。三月號には必ず掲載して頂くことになつてゐます。

□第五十議會の幕は開いた。毎年依然として壯士芝居以上の興味も感銘もない。樞府の廢止、貴族院の改革は素より希求して止まない處だが、其れにも增して衆議院議員の質の改造は一層の急務だ。然らざれば議會は永久に日比谷座であり、猿芝居であり、國民嘲笑の場所だ。現時の社會思潮に理解ある識見卓拔なる人格者を一人でも多く議會に送れ！　この意味で我等は普選實施後の政界に多くの期待を持つものだ。

□「本社員」と稱する中村俊吉なるものが、京、阪、神地方に於て、「改造」の講讀豫約を勸誘し、銀行會社等よりその代金を詐取しつゝある由であるが、本社では未だ嘗つて社員を派し直接購讀を勸誘したことなどはありません。讀者諸子の御注意を願ひます。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	郵稅不用（大號共）
壹ケ年	拾壹圓廿錢	郵稅不用（大號共）

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の節は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正十四年一月廿日印刷納本
大正十四年二月一日發行
（價八拾錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　平田貫一郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

賀川豊彦著

死線を越えて 下卷 壁の聲きく時

我家庭になくてはならぬ一夫一婦聖愛の小說

愛の感激であり、靈の生活であり、人格主義を體驗づけた本書が、此の不景氣の空に唯だ一書、飛ぶやうな賣行きを示すはそれは當然の事である。凡百の讀みものの總てが淫蕩を對象として書かれたるに拘らず、本書は實に一夫一婦家庭道德の純愛を基調とし、三角戀愛を排し、陰慘なる修羅場－貧民窟！誘惑多きゴロツキの群－－にも感激の生活を徹底せしめた大男子の凱歌である。殊に彼が死を誓つて勞働爭議の陣頭に立ち、震災救護の最前線に立つた勇氣ある涙ぐましい血の記録を讀むものは、唯一人として首を上げ得ない。特に彼が唯物主義の弟の爲に捧げた熱烈な唯神主義は讀者の心臟を強く鼓動させではおかない。眞に人格主義の勝利に共鳴する人々、純聖愛の一生に強く生きんとする若き人々の爲に本書を捧ぐる。

四六判 上製 定價貳圓八拾錢 送料貳拾壹錢

（上卷）死線を越えて 二百八十四頁 定價參圓 送料貳拾壹錢

（中卷）太陽を射るもの [illegible]頁 定價貳圓八拾錢 送料貳拾壹錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二一番

忽五版

矢田挿雲著
淸水次郎長

◆水島爾保布裝幀 ◆四六版六百余頁箱入美本——定價二円八十錢 送料二十錢

矢田挿雲が「日本一の名文」で、淸水の次郎長といふ「日本一の男」の生涯を描いたものだ。面白いか面白くないか、報知新聞の讀者に聞いてくれ。本当にタンカの切れる、血の出るやうな小說、人間らしい人間—男の中の男—を描いた小說で、維新といふ大きな芝居の楽屋を書いてゐる。神田伯山の「次郎長」には血と骨とあるが、挿雲の「次郎長」には、その上更に肉と皮がある。世の所謂「文藝講談」と一緒にしてもらい度くない。

東京丸の内
報知新聞社出版部
振替東京四二〇六五番

細田民樹著（最新刊）

或兵卒の記録

定價一圓五十錢
送料十九錢

本書を初年兵歸休兵諸君に贈る！

文壇の一奇材たる著者が一兵卒として軍隊に入り、其の二年間の苦しき、そして面白い生活を精微の筆もて描く。或る有力なる一將校は此の書を讀むでこれ程軍隊生活を如實に細寫したものは他に絶えて無いと嘆賞し、嘗て其の一部は米國及び歐洲で日本軍隊生活の眞相として譯出された事もある。軍事教育問題で賛否兩說囂々たる今日、何人も先づ本書に依りて軍隊の内情を知る必要がある。又將に入營せんとする新兵諸君と在營現役兵諸君へ此上なき好伴侶であり歸休の在鄉軍人諸君には興味多き思出草であらう。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

改造社重版書

書名	著者	體裁	定價	送料
民衆の苦悶	英人カイヨー著 龜井貫一郎譯	四六判並製	定價一圓三十錢	送料十三錢
社會運動と勞銀制度	法學博士 福田德三著	四六判上製	定價二圓五十錢	送料十七錢
體驗宗教の研究	佐藤繁彦著	四六判上製	定價二圓	送料十七錢
幻の部屋	北村壽夫著	四六判上製	定價二圓六十錢	送料十五錢
犬・猫・人間	長谷川如是閑著	四六判並製	定價一圓八十錢	送料十三錢
筆の向くまゝ	武者小路實篤著	四六判並製	定價一圓十錢	送料十一錢
苦悶の象徵	文學博士 厨川白村著	四六判上製	定價一圓八十錢	送料十七錢
近代の戀愛觀	文學博士 厨川白村著	四六判上製	定價二圓五十錢	送料十七錢
テニス	熊谷一彌著	四六判上製	定價二圓三十錢	送料十九錢
超克	倉田百三著	四六判上製	定價二圓二十錢	送料十七錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

改造社重版書

- 慶大教授 小泉信三著 **價値論と社會主義** 菊判上製 定價參圓 送料貳拾壹錢
- 片山潜著 **自傳** 四六判上製 定價壹圓八拾錢 送料五錢
- 帝大教授 宮本英雄著 **婚姻の基調** 四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料五錢
- 板垣鷹穂著 **新カント派の歴史哲學** 四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料五錢
- 文學博士 朝永三十郎著 **カントの平和論** 四六判上製 定價壹圓五拾錢 送料五錢
- 文學博士 桑田芳藏著 **ヴントの民族心理學** 四六判上製 定價參圓五拾錢 送料廿壹錢
- 大杉榮著 **自叙傳** 四六判上製 定價貳圓 送料拾五錢
- 村松梢風著 **近世名匠列傳** 四六判上製 定價貳圓參拾錢 送料拾七錢
- 野口源三郎著 **オリンピアへの旅** 四六判上製 定價貳圓五拾錢 送料拾七錢
- 堺利彦著 **野外劇の一幕** 四六判並製 定價壹圓五拾錢 送料拾參錢

發行所 東京市芝愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三

法學博士 河田嗣郎著（十一版）

農村問題と對策

定價 貳圓　送料十七錢

國民は何人も先づ本書を一讀下さい

――今や農村は死滅せんとす――然り、古き慣習に捉はれたる農村は當然死滅すべきである――外には對米問題で戰ふも「非」退くも「非」の沈痛の悲歌を聞き、内には七千萬の農民は内外の經濟界の一大劇變と共に塗炭の淵に陷沒せんとす。我議會は此問題で上辷りの「農民御機嫌取り案」を抱いて何等の具體成案なし。我經濟界の權威にして、農村問題の研究者たる河田氏は我農村、及農民の前途を心痛するのあまり此一著を公にす。讀者の必讀を要望す。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

阿部次郎著

學藝論鈔

（改訂版）

定價貳圓貳拾錢
送料十七錢

學徒の必讀書

歐洲思想界乃至文壇の大家十數氏の深き思索の諸論文に對し、特に著者が愛着を感じて愛誦、玩味する數十篇を飜譯し、抄錄したる文壇の一貴重品。本書を一讀するによりて西歐思想界の壓搾されたる各藝術を味ふことの出來ると共に、我文壇の第一人者たる阿部氏の芳香比びなき深き趣味にも涵ることの出來る近來の一快著。學徒、藝術家の味讀に俟つ。

阿部次郎著

北郊雜記

（十六版）

定價壹圓九拾錢
送料十五錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社


香味に於て、品質に於て、効果に於て、
世界的超越を誇り得るものは、
吾ライオン煉歯磨ばかりで御座います。
煉歯磨
ねりはみがき
LION
TOOTH PASTE
TOKYO
MADE IN JAPAN

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十四年二月一日發行（毎月一回一日）
大正十四年一月廿日印刷納本　第七卷　第二號　二月號　定價金八拾錢

株式會社秀英舍印刷